魔法少女リリカルなのは　UnlimitedStrikers

kyonsi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　ＵｎｌｉｍｉｔｅｄＳｔｒｉｋｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ５１６７Ｓ

【作者名】
ｋｙｏｎｓｉ

【あらすじ】
皆を守るために、俺達は名声を失った。一人は執務官になれるほどの力があるのに、一人は教導官になれるほどの力があるのに、一人は騎士になれた筈なのに。皆を守った代償としてはありえない物を支払った。そして、時は流れ、全く違う２つの部隊の全く違う２つの命令から、物語は始まる。

番外編　酒バトン（前書き）

はい、詳細は活動報告を見ていただけると幸いです。
一応ルール確認。

ルール

・とりあえず、楽しむ事。それが絶対条件です。

・最低でも1人。最大人数は好きな様にして下さい。飲ませてみたいオリキャラが居ない場合は、飲ませてみたい原作キャラでも出して下さい。

・飲ませるお酒は、好きなお酒でも可。ネタでオリジナルの酒を作るのも問題ありませんが、その場合は面白おかしくして下さいw但し強制ではないので、好きにどうぞ。

・飲ませるキャラが未成年の場合、ジュースとでも称して飲ませてやって下さい。逆にもうすぐ酒が飲めると言う年の場合、好きな酒でも飲ませてやって下さいw

・これはお酒を飲ませて、その人がどの様な反応をするのか見る為の物です。万が一飲んだ人が暴れてザンバーを振り回したり砲撃を打ち込んだりしそうになった場合は大変危険ですので、すぐに避難を。そしてどの様な結果になろうとも、自己責任ですのでご注意下さいw

・作者さん同士のオリキャラでコラボするのも構いませんが、その場合はちゃんと許可をとってからにして下さい。

・バトンを送る人は１０人までお願いします。

うちの子ら８人全員出しますｗ
それでは！

番外編　酒バトン

――――響・優夜・煌の場合――――

「いきなりで申し訳ないが、お前ら飲みたい酒はあるか？」

響・優夜・煌「日本酒」「シャンパン」「ワイン」

響・優夜・煌「……」

響・優夜・煌「はぁ！？」

響「馬鹿っ！お前ら日本人なんだし、日本酒飲むべきだろうここは！」

優夜「アホか！普段飲めないものが飲めるだろう？だったら高いシャンパンがいいだろうがっ！」

煌「日本酒はともかくとして、シャンパンなんてそんなに美味しくねぇだろうが！熟成されたワインが飲めるいいチャンスだろうが！」

響「バカ言え、普段飲めないもん云々より、日本人なら日本酒だって！」

優夜「普段飲めないものを飲めるんだから、ドンペリとかさぁ！」

煌「熟成されたワインのほうが！」

――――１０分後

「……ほれ」

響・優夜・煌「ｏｒｚ」

「じゃあ、俺は行くからとりあえず楽しめよー」

響・優夜・煌「……ビール二箱か」

優夜「ちゃんと纏めるべきだったな」

響「言うな」

煌「ちくしょー！！もう自棄だこのやろう、とりあえず、もらったんだ！とりあえず！」

優夜「そうだな」

響「じゃあ」

響・優夜・煌「乾杯！！」

――――数時間後

響「……大丈夫か？」

優夜「あっはっはっは、ばっかでぇ、何がだよ、あっはっはっはっは、やっべー楽しー、あっはっはっはっは」

響「いや、お前がだよ、煌、生きてるか？」

煌「んー、あー、うん？おぉ？ひーと、ゆうの顔がぐにゃぐにゃなのはどうしてだろう？」

響「わぉ、二人とも大丈夫か？」

優夜・煌「ぁ？」

響「いや、なんでもない、三人で均等に分けて全部飲んでこれか…次から気をつけよう」

響（つーか、二人って酔うと、変わるもんだなぁ、優夜は素の状態に近いし、煌はなんかガキの頃に戻ったし……）

結果、優夜は笑い上戸に、煌は静かになりました。
ちなみに響は、何も変わらないという面白くもなんとも無い結果にｗ
そして、次は。

響「……あ！俺らに酒くれたってことは、まさか！」

優夜「響どうした？顔が面白いことになってんぞー、あっはっはっは」

響「うるせー酔っ払い、ちょっと行ってくる！」

優夜「夜這いかー？頑張れよー？」

響「違うわ！」

――少しさかのぼって、響達が酒を飲み始めた頃の女性陣はというと。

――奏・震離・瑞希・雪奈達の場合――

雪奈「飲むんだったらシャンパンかな？」

奏「私はそれでいいかな、瑞希と震離は？」

瑞希「初めてだし……基本的には何でもいいかな」

震離「私もー」

雪奈「そういうわけでシャンパンをお願いします」

「はいはい了解、あっちと比べて素早く済んだな」

震離「ん、何が？」

「いえいえ、こちらの話です、それでは」

奏「ありがとー、って４本て」

震離「一人一本だねぇ」

瑞希「……初めてなのにね」

雪奈「まぁ、適当に酔ったら止めればいいよ、じゃあ開けて、グラスに注いで……」

奏「それでは」

奏・震離・瑞希・雪奈「かんぱ～い！」

――――数分後

雪奈（ほんのり顔が赤くなってる）「あ、これ美味しーね？」

奏「あはは、雪奈、顔赤くなってるよ？」

雪奈（ほんのり顔が赤くなってる）「え、嘘」

奏「瑞希大丈夫？」

瑞希「……んー、ん」

奏「それは大丈夫って事でいい？」

瑞希「んー」

奏「頷いてるし……大丈夫ってことでいいのかな、震離も大丈夫」

震離「え、あ、ううん、大丈夫、うん、平気だよ」

奏「そう、じゃあ皆まだ飲むの？」

震離・雪奈「うん」

瑞希「んー」

奏「……大丈夫かな？」

――――数時間後

瑞希「……すぅ」

奏「だからねって、聞いてるの瑞希、雪奈！」

雪奈（ほんのり顔が赤くなってる）「……え、あぁ、うん、大丈夫よー、うん」

奏「ほんとなんで、あの人は何時も何時もって、何で震離は静かに泣いてるの！？」

震離（泣）「え、ううん、なんで……も……ない、うぇぇ」

奏「ていうか、本当にさ、普段の合図は良く気づくくせに、私からのアプローチには全然気づかないんだよ！？」

雪奈「……（もう寝たい）そうだねー」

結果、瑞希は即効でよって寝てしまい、雪奈は陽気になりましたが、後半の奏の絡み酒に巻き込まれました。
ちなみに震離は、泣き上戸＋ちょっと素の状態に。
そして、最後は。

響「おーい、大丈夫かって……何この状況？」

雪奈「……あ、響じゃーん、どったの？」

響「いや、酒もらえて、もしかしたらこっちも変な状況になってんじゃないかと思って様子を……」

雪奈「……あぁ、そしたら」

響「うん？」

雪奈「後ろの人に気をつけてねー」

響「は？」

奏「響だー」

響「うぉおお！？え、何！？急に抱きつくなよ！？って、聞いてるのか奏！？」

奏「あははは、相変わらず細いなー、何でダイエットしてる私よりも細いのー？」

響「ちょ、ヘルプ雪奈！」

雪奈「……すぅ」

響「ちくしょう！？あ！震離！」

震離（泣）「……ぐす、ひっく、何？」

響「何で泣いてんの！？」

奏「あははは、響お酒くさーい」

響「人のこと言えねぇよ!?ちっ、震離一応流の様子見てきてくれ!一応涙拭いてけよって、うぉおおおお!?奏さん落ち着いてぇえええええ!?」

震離（泣）「……了解、行ってきます、ぐすっ」

響「おぉ、ぉおおおおお、奏さん!?」

奏「あはははは」

そして、最後の人は。

――――さかのぼって、男性陣女性陣が飲み始めた頃。

――――流の場合――――

流「……コーラ?」

「うん、貰い過ぎたので御裾分けということで持ってきました」

流「……はぁ、それが何で自分に?」

「貰い過ぎて皆に配ってるんです、だから貰ってください」

流「……はぁ、了解です、そういう事なら」

「ありがとうございます、それでは、失礼します」

流「多い……、まぁ一本位飲んでもいいかな」

一口飲んでみる。

流「……やっぱり炭酸が強い……けど」

もう一口飲んでみる。

流「……うん、なんか美味しいなぁ」

それから数分後。

流「……ちょっと、熱くなってきた……もう一本飲もう」

――――数時間後

震離「……やっと、涙跡がなくなった、お邪魔するよ、流？」

流「……」

震離「……流？」

流「……ぁ、震離お姉ちゃんだー」

震離「……え！？ちょ、え！？」

流「……どーしたんですかー？」

震離「え、ちょっと、待ってね！？」

震離（あ、ありのまま今起こったことを（ｒｙ　とにかく流がおか

しい！そして、可愛い！ていうか、酔いが覚めた、何で泣いてたんだろ？）

流「……どうしたんですかー？」

震離「え、ううん、大丈夫だよ、ていうか流なに飲んでるの？」

流「……あー、いつだっけ、さっき貰ったコーラですよー」

震離「え、あー、何本目？（……お酒なんだろうなぁ）」

流「……わかりませーん」

震離「……わぉ、出来上がってるなぁ」

流「……あふぅ」

震離「……大丈夫？」

流「……えぇ、大丈……夫……」

震離「ありゃ、座ったまま寝ちゃった……よし」

静かに寝ている流を横にし、そのまま。

震離「……膝枕なんてしてみたり、こうしてみると普通に可愛いんだけどなぁ、けど」

ニコニコ笑いながら、眠る流を自身の膝に寝かせる。

ただ、その時の震離の顔は終始笑顔だったが、その内心は。

震離（名前で呼んばれたぁあああああああ、しかもお姉ちゃんって……やったあああああああ）

ととにかく舞い上がっていた。

そして、次の日。

なのは「はい、これから訓練をって、あれ！？」

響「……俺以外の三人と、事務の煌、優夜、瑞希、雪奈の四人は二日酔いで自室で倒れてます」

と文字通り、隊舎の奏と響の部屋からは5人くらいのうめき声と、流と震離に至っては。

流「……すぅ」

震離「……足が」

流はお酒の影響で熟睡し、震離に至っては、ずっと膝枕しているせいで既に足がしびれていた。

そして……

流「ん……」

震離「っっっっっっっ～～～～～～」

と流が動くたびに、震離の足に電気が走り、そのせいで震離が悶え

るというのが延々続いており、響が様子見にくるまで、ずっとそのままであった。

その後、はやてから減給を言い渡されたらしいが、本当かどうかは不明である。

番外編　酒バトン（後書き）

はい、以上なんですが……、まず一言、多分皆様方も思っていると思うことです。
「バトンじゃなくね？」、はい、そのとおりです。ほんと申し訳ありません。

おかしいなー、初めは一人頭3行かそこらで、多く見積もっても30行で済むもんだと思ってたのになー。

はい、本当にすいません。これを書いてる暇があったら本編書けよと本気で思われていたら、本気ですいません！
でも、楽しかったですよ！自分ってか友人が考えたバトンだけど！

でも、本音を言えば、酒ネタはもともと考えてあって、オリキャラ全員が仲良くなった？ときにやろうと思っていました。多分本編でそのうちやると思いますがｗ　勿論これとは違うものです。

さて、本編かくより長かったｗ

一万ＰＶ記念小説・前編！（前書き）

先日皆様方のお陰で私の書いている小説、「魔法少女リリカルなのは　Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ Ｓｔｒｉｋｅｒｓ」、略して「なのはＵＳ」が一万ＰＶを超え、三万ＰＶに達しておりました！はい、そして、元は一万二万ＰＶ記念だったんですが、書いてて思った以上にかかりそうだったために、今回は一万ＰＶの方を使って作品を、短編を書きました。ですが、前編とか言いつつ、前半はちょっと暗いですｗ

それでは、楽しんで頂けると幸いです！

一万ＰＶ記念小説・前編！

――ｓｉｄｅ奏――

「ありがとう、――」

「……こっちも、ありがとう」

「……ッ！」

落ち着いて私……っ！

たまたまだよ、たまたま……うん、響だって男の人だもん、好きな人の子の一人や二人いるよ。

それに普通にかっこいいんだもん、女の子から声をかけられてもおかしく無い、むしろ告白されててもおかしくないんだ。だけど、だけど！

「それじゃ、また後で」

「……うん、わかった」

こっちに来る！そう思うよりも、考えるよりも先に体が動いて、響と女の子から逃げるようにそこから離れて、隊舎の外に出てたんだ。

はぁ……私、何やってんだろう……？

そう思って見上げた空は明るくて、青くて、見慣れているはずなのに、妙に切なかった。

――――数分前

「そういえば、なんだかんだで響の誕生日祝ってないな」

「ん、そうだっけ？」

普段あんまり合わない煌と食事を取ってる。珍しくはやてさんが、前線追加組と、事務組に休みをくれたんだけど、休みって聞いた瞬間、響は雪奈とどっかに行ったし、優夜は瑞希とフラっと居なくなったし、震離は流を連れて外に出て行ったし……

「んー、あいつももう日本の法律上結婚しても問題ない歳になったからな……何かしら祝ったほうがいいだろ」

「……煌？何で私を見ながら話すのかな？」

「ん、今話してるからだよ、気になさんな」

目の前でニコニコ笑いながら話す彼を見てると、今考えた気持ちがなんかどうでもよくなってきた。

誕生日か……そういえば。

「そういえば、今普通に夏休みくらいの日なんだよねー」

「そうだなー、俺らが普通に高校に行ってたら普通に休みだったな」

そのとおりなんだけど、まぁ、そこまで休みがほしいとか思う訳で

もないから、正直どうでもいいかな。管理局員になるって決めてから、休みなんてあんまり無いって思ってたしね。
だけど、本当に思う。

「……不思議な縁だよね」

「……まぁ、奏ちゃんらも、俺らも魔法の事知ったのは本当に偶然だからなぁ」

本当にそうだ。今から１０年ほど前のあの日、頭の中に小さな声で響いた、「助けて」って、だけど、どこにいるかも分からないし、それよりも先に私は頭の中で響いたその声が凄く怖くて、お父さんとお母さんに泣きながら話したんだよね……。
同じくらいに、瑞希も雪奈も頭の中で声が響くって泣いてたみたいだし。
うん、今思い出してもすっごく恥ずかしいな……。

「奏ちゃん、顔赤いけど……風邪でもひいた？」

「ん、なんでもないよ、ちょっと、昔の事思い出してただけだよ」

「そっか」

うー……あの時事を思い出すと凄く恥ずかしい、というか何で、響も優夜も煌も震離もあの時の声を気のせいで済ませられたんだろう？私たちは本気でびっくりしてたのに。
というか、びっくりしてから数カ月後にシグナムさんと戦ってるから逆にすごいんだよね……ん？そういえば。

「そういえばさ、響がさ、魔力を奪われて対策したのは分かるけど、

優夜と煌は何で？」

「ん、あぁ、俺らも襲われる可能性があったから魔力コントロールの練習したんだよ、一応ほら、統夜さんは元管理局員で、じーちゃん管理局関係だったし、響の母さんはなんか魔力コントロールがうまかったからな」

「ふーん」

そういえばそうだ、優夜も煌も魔法と出会おうと思えば出会えたんだ、うちのお父さんも、母さんと出会ってから管理局やめて、雪奈の両親も雪奈が出来てから地球に戻ったって言ってたし……案外、探したら管理局関係の人ってたくさんいるかもね、私達が知らないだけで。

「まぁ、自分で選んで道だ、今更どうこう言ったところでなんか変わる訳じゃないからな」

「そうだね」

「さて、ちょっと野暮用でちょっと行くわ」

「え、一人じゃ寂しいから一緒にいてよ？」

「……あー」

なんとも微妙そうな顔で、こっちを見てくる煌。
半分冗談で言ったのにそんな顔されたら、なんか物悲しくなってくるじゃん。

「……奏ちゃんのことだから、まぁ冗談なんだろうけども……あんまり男にそういう事言っちゃいかんよ？」

「ん、わかってるけど、冗談て分かってたら冗談で返して欲しかったな？」

そう言い返してみると、煌の目が点になった。良し勝った！

まぁ、何の意味も無いけどね～。

「くっくっく、そりゃ俺が悪かったさ、それじゃな」

「あいあい、またね」

椅子にかけてたジャケットとトレイを片付けてから食堂を後にしていった。

私が来た時にはたくさんいた人も、もうほとんどいなくなってる。

さすがに普通に平日だもん、今頃ティアナ達は外で訓練して、他の面々も仕事してるんだろうな。

うん、暇だし。

「……私も動こうかな」

そう考えながらトレイを片付けて食堂を後にする。

ふむ、服はまだいいかな、ほとんどあるし、基本的には制服だからね。

だけど、一人で外に出るのも悪くないけども……さすがに一人じゃ面白くないし。

「……困ったなぁ」

我ながら本当にノープランだ。
はやてさんも前もって伝えてくれてたら、何か考えてたけど、いきなりだったもん……
「たまには休みなさい」って。まぁ人のこと言えない気もしないけども……
まぁ、適当にブラブラするのも悪くないか、な？
ってあれは……。

「ひびｋ……ッ！」

慌てて口を押さえて、廊下の影に身を隠した。
いやだって、なんか知らない女の人と歩いてるんだもん。正直思った。というより見える。
なんか、なんか、なんか。
すっごく、甘い雰囲気で……その、アレ同士に見えた……。

「そういえばさ、今日はありがとう？」

「ううん、気にしないで」

廊下の先で二人の会話が聞こえてくる。よく見知った声と、あんまり知らない声だ。
あれ、もしかして今日の雪奈と外の行くって言うのは……カモフラージュ？

「あ、あと、これ、さ」

「……何？」

なんか響が内ポケットに手を突っ込んで何かを取り出して……って！

響が取り出したのは小さなジュエリーボックス、その中に、小さなピアス。
小さなピアスってだけでどんな装飾が付いてるのかは分からないけど、遠くから見ても分かるくらい綺麗な赤い宝石を使ってるのだけは分かった。

「これ、誕生日プレゼントだ」

「……ありがとう、響？」

はにかんだような笑顔を見せながら、そのジュエリーボックスを目の前の女の子にあげてた。
貰った女の子も、こちらからは表情は分からないけど、その声の高鳴りから喜んでいるのが目に浮かぶ。

「ありがとう、――――？」

「……こっちも、ありがとう」

そう言って顔を響が顔を近づけた瞬間、目を思いっきり瞑った。
同時に私の中で何かが駆け巡る。落ち着いて私……っ！
そう考えてるうちに、響とその子の行為は終わったらしく。

「それじゃ、また後で」

「……うん、わかった」

「――――ッ！」

こっちに来るそう思った瞬間、私は全力で駆けていった。

その足音に響達も気づいたらしく。「誰!?」とか叫んでいたけど、私には気にする余裕がなくてそのまま隊舎の外に出ていった。

外のベンチに座って、空を見上げる。

見上げた空は明るくて、青くて、見慣れているはずなのに、妙に切なかったけど、それ以上に何か私の中から抜けていって、切なくて、苦しくて……涙が出てきた……。

一万ＰＶ記念小説・前編！（後書き）

はい、ちょっと本編じゃあんまり目立たない人をメインに据えて書いてみました！
ただ、後半部分も書いているんですが、できるだけネタバレせずに話を仕上げたいと思っていますので、ちょっと時間がかかりそうです！

こう言うのは苦手ですｗおかしいなー初めはギャグだったのになーｗ

それでは、次回も読んで頂けると幸いです！

一万ＰＶ記念小説・後編

アレからどれくらい立ったんだろう？多分、空に漂う雲がかなり流れて言ったから結構時間が立ったと思うけど、正直わかんない。というか、今は何も考えたくもない。だって、こんなにも心が切なくて、苦しくて、辛いのは初めてだったから――――

なんて、思っていたら。

「あれ、よぅ。奏ちゃん、数分ぶり……って、え、何どうしたの！？」

「え、あ、煌……ぅぅん、何でも……ない」

「いや、何でもないって顔じゃないだろ……どうしたんだよ一体？」

「ぅぅん、何でもない……何でも無いよ。本当に」

涙をぬぐって、出来るだけ笑って見せる。あんまり涙は流してないから涙の跡は付いてないはず。
だから大丈夫だと思ったその時。煌の腕が私の顔に伸びていって。
そこから……。

「あっはっはっは、何年の付き合いだと思ってんだよ？」

「ぁぅ、いひゃい、いひゃいよ！？」

「あっはっはっは」

笑いながら私の顔を両方から掴んで上下左右に動かしてる。正直痛いし、眼の前で笑ってる煌が凄く輝いてる。だけど、凄く痛いんだけど！？

「こぅ、こうってば！」

「あっはっはっは」

しばらく体感で数分くらい経った頃位に、ようやく煌の手が私から離れた。うん、顔がすごく痛い。

思わず離れた瞬間自分の手で顔を覆ったけど、それでも痛い。だから、だから一言言わせてね。

「何するの！？」

「あっはっはっは」

「笑い事じゃないよ！」

目の前でケラケラ笑ってる煌が正直憎い。これで嫁にいけなかったら。月の無い夜に……！

「いやだって、昔から、奏ちゃんが、空見上げながら泣くとかなんかあった時だけだもんよ。バレバレだって」

「え、あ、いや。そんなことないし！」

「大方響とケンカしたとかそういう事だろ？」

「え、あ……」

「？」

煌の口から、響の名前が出た瞬間。正直気まずい気持ちになった。うん、だって……さ。ついさっきまで、響が他の人と一緒にいた所を見たんだもん。正直、ね……。

「……ま、言いたくないって言うんなら深くは聞かないさ。だけど、さ」

「……」

「辛くなったら、瑞希なり、雪奈さんなり、震離ちゃんにいいなよ？」

「……うん」

「よっしゃ。ちょっと待っててな。飲みもん買ってくるからさ」

「え、いや、別に」

「とりあえずお茶でも買ってくるよー」

私の返事なんか聞かないで、走って離れる煌。正直こういう時の煌の気遣いは凄くありがたい。

多分、原因はわかってないけど、私が響関係で何かあったって言うのはバレたと思う。

だけど、だけど。本当に私は酷い人だよ、ね。本当に――

空を見上げながらそう思う。それから少し経ってから。

「……奏？今時間ある？」

「ん、あ、響……」

今一番会いたくない人がそこにいました。だけど、無下にするのも悪いし、そんなことしたらさっきの煌の時みたいに、感づかれるから、出来るだけ普通に接しよう。

「……どうしたの？」

「ん、いや。奏こそ、どうしたんだ？」

「……別になんでもないよ。響こそどうしたの？」

「……そっか、じゃあ聞くけど。いいか？」

響が改まって、私の顔を見ながらそういった瞬間、心がズキリと痛くなった。同時にさっきの画面が頭の中で再生される。さっきの知らない女の人との甘い雰囲気の時を。

「……うん、いいよ」

「うん、それじゃあ言うよ。面倒だから単刀直入に聞くってか、言う」

「……うん」

同意の言葉を言うけど、それでも私の心はざわつくばかりだ。いや、違う。この先の言葉を聞きたくないんだ。だって、そうでしょう。

響って言う人は、大切な事とか、友人と思ってる人にちゃんと話す人だ。だから、聞きたくない。多分この人が言おうとしてることは、さっきの女の人との事だと思う。それも大切な事を。だけど、聞きたくない。聞きたくない……ッ！

そんなことを考えてると同時に、響が言葉をいうその時が凄く長く感じた。体感で数分立ったんじゃないかって思ったときに。やっと、響の口が動いて、思わず思いっきり目を閉じた。

「ごめんなさい！」

「……え？」

思いっきり閉じた目を開けて、響の顔を見ようとするけど、そこには誰もいなくて、視線を少し下げると頭をおもいっきり下げた響がそこにいた。うん。落ち着こう。少し落ち着こう天雅奏。

「さっきのアレ。見てたのは奏だろう？だから、ごめん。アレ雪奈なんだ！」

「え、あ、え……？いやだって髪の色……あの子と、髪の色違ったよ……あの子青色っぽくて、響の前にいた人金髪ぽかったじゃん……」

「それは、市販されてる変装ツールを使用しただけなんよ！」

「……声、知らない、人だった」

「それも、市販されてる変装ツールの一つなんだ！」

「……キス、してた」

「キス！？接吻！？してないしてない！ダメだし食らってたんだよ！」

「……なんかあげてたじゃない」

「あれは練習用の奴！」

「……ぅ」

「う？」

「……うぅううぅうそぉぉおおだぁぁぁあああああ！！！！！！」

「え、ちょ、奏！？奏さん！？」

響の静止の声を聞かないで、一気に走りだす。というか泣いてる顔を見せたくなくて。

いや、響が本当のこと言ってるのは分かったよ。だって、響の後方で雪奈が変装を解きながら、手を合わせてごめんって謝ってたし。

だけど、だけど。一番きついのは、そうとも知らず一人で変な方向に突っ走った自分が一番恥ずかしくて、正直なハナシ。響に合わせる顔がない。

「ちょ、まっ、奏！！」

「付いてこないでよぉおおおお！！！！！！」

顔がものすごく熱い。多分今頃ものすごく真っ赤なんだろうな。だから響に合わせる顔がない……って、早い！？

「もう、来ないでよ！」

「え、や、だって。誤解だって！」

「違うけど、違うよ～～～！！！」

「え！？どういう事！」

もうやだ。いろんな意味で……だけど、いろんな意味で、さっきと違って心は軽いし、痛くもない。

本当に最低な事なんだろうけど、それでも嬉しかったんだ。響が私にちゃんと話してくれて、さっきのアレが誤解だって分かって。だから、凄く嬉しいんだ。

だけど――

「もう来ないでよ！」

「ここで逃がしたらずっと誤解するだろう！！」

「しないから、絶対に！」

兎にも角にも、まずはこの人から逃げないと。いろいろ考えられない。

あぁ、本当。私って、本当にこの人のことが――

――ｓｉｄｅ　ｖｏｉｃｅＯｎｌｙ――

「お待たせお茶を……って、雪奈さん。奏ちゃん知らない？」

「ん～今頃。響と追いかけっこしてんじゃない？」

「そっか。お茶あげるよ」

「ん、ありがと。でもこれ奏用でしょ？」

「いやいや、奏ちゃん、もういらないみたいだし、俺が持ってても冷めるだけだしね。それで？」

「ん、あぁ。今日は響から一つ相談されてね」

「相談？」

「ん、今度誕生日が来たら言うんだって」

「へぇ。何を？」

「フフ、言わせないでよ。でも、ま、指輪って言ったら、分かるでしょう？」

「へぇ、なるほど……それで、か」

「うん、それで本番で変なミスしたくないからって、練習したいってね」

「それを見られて、あぁなったか」

「そう。でも響も悪いよ？何だって廊下で練習だもん。バレるって」

「そりゃ、アイツも悪いな。でも何で廊下？」

「え、一発で決めたいから適度に緊張感をーって」

「……あの馬鹿……でも、まぁ――」

「うん、本当に――」

「「めでたい事だよ」」

「かーーーなーーーでーーーー！！！！！」

「こないでっていってるでしょぉおおおお！！！！ばかぁあああああ！！！！」

「って、どこまで行くのあの二人は！」

「あっはっはっは。本当にあいつらは、騒がしいったらありゃしない。本当に」

一万ＰＶ記念小説・後編（後書き）

はい、不完全燃焼だろう！！このやろう！って言われても言い返せません。ごめんなさい！ただ、こう言うのに憧れてたんです。ただ、難しくて何処で終えていいのか分からなくなった結果。こうなったんです！

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　始まりを。

――ｓｉｄｅ響――

――――――――――――――――――――――――――――――

「ご、ごめんなさぁぁぁあぁあいぃぃいいぃぃいい！！！！」

うん、今日の天気は凄くいいのに、どうして俺はこんな馬鹿なことをしたんだろうな。

「ハハハ、いやいや。構わんよ」

「いやいやいやいや、本当にすいません。俺友達居なくて友達できないかなぁーなんて思ってここまで来たんですけどこんな粗相をしてしまってすいませんガラスまで割ってしまってすいません弁償しろというのならちゃんと家の住所も言いますし母さんにもいいますので！」

「……良くワンブレスで言い切れたねぇ」

「ハァ……ハァ……って母さんに教えられて」

「ハハハ、そうか。まぁ、いいさ。うちのガラスを割って反省の気持ちは十分感じ取れた。むしろ君は今はどれくらいなんだい？」

……どれくらい？何が？

「……あぁ、ゴメンね。君の年はいくつで、ついにで名前を教えてくれないか？」

「あぁ、そういう事なんですか！俺の名前は……」

って、言いながら地面にしゃがんで、最近母さんから教えてもらった俺の漢字を書く。でも名前だけで苗字は書けなんだ。難しくてねぇ。……よし。

「名前は響！苗字はひおう！年は七夕生まれの５歳！そして、町外れの化け物屋敷に在住？しています！」

「へぇ、響君か。じゃあ次は俺の番だねぇ。ここまで言われたら俺も言わなきゃな。俺は叶望震樹（かなみしんき）。２７歳で、この家と道場の主だ……って、いまさらなんだが響君はまだ５歳なのに自分の名前を漢字で書けるんだねぇ」

「母さんに教わったんだ。凄いだろう！」

思いっきり胸を張る。どうだこの野郎と言わんばかりに。

「うん、凄いな……そう言えば友達がどうのて言ってたねぇ。どうしたんだい？」

「……うん、俺、家に母さんしか居なくて、町外れの家に居るせいで、公園とかに遊びに行くと化け物屋敷の子だーって皆逃げるんだ。でも、俺、気にしてないよ！」

「へぇ、なんでまた？」

「うん、友達って作るもんじゃなくて、出来るもんだって母さんに言われてるから！」

――――――――――――――――――――――――――――――

「って、当時の俺馬鹿で、周りの人にかなり迷惑かけてましたね～」

あっはっはっ、って自分で笑いながら昔話を話してるわけなんだけどさ。正直自分の口からは乾いた笑い声しかでてこない。いやぁ、幼少期の頃の俺って、本当に馬鹿でねぇ。

「ふぅん。響も結構やんちゃやったんやねぇ」

「えぇまぁ。というか隊長方？」

「ん？」「……」

一応左から順にはやてさん。フェイトさんの順ね。

「なんで俺バインドで縛られてるんですか？」

そして、今現在の俺は、隊長室に居て、なんか知らんけど椅子に縛られてるんんだよね。別にMでもないから純粋に嫌だわ。

まぁ、それは置いといて、だ。なんでこうなってるかというとさ。なんかはやてさんに呼び出されて、仕事を手伝ってたわけなんだけどもさ。主に隊長がやるようなのやつを。まぁ、いいや。それを手伝ってる時に、フェイトさんも合流して、三人で仕事を片してたんだけどさ。いきなりはやてさんがね。「そう言えば響たちって何時から一緒にいるの？」って聞いてきたもんで、それに答えてたんだ。

今までね。ちなみにバインドで縛られてんのは知らん。

「逃したらアカンと思ってね！」

「じゃあ自分で縛ってくださいよ。まぁ、いいか。別に乙女ってわけでもないんで過去話言っても俺は傷つかないですしねー。他の面々は知らんけど」

実際その通りで。俺はともかくとして、他の面々気にしてるってか一部黒歴史って言ってるしね。

「でもまぁ。そしたらはやてさん達の昔話も聞きますけど。いいですか？」

「「えー」」

「……えー？なんで俺だけ言わにゃならんの？」

「だって、アルトやルキノ達は煌達の昔話知ってるんよ？私らも知りたい」

「えー」

わー、ザ・理不尽ってこういう事を言うんだなーって今本気で思った。まぁいいか。こういう事には慣れてるしね。でも粘ろう。全力で。というか、アイツらなに話したんだろうか？個人的にソッチの方が気にな……、だからか！最近、エリキャロに、お兄ちゃんって……ううん、何でもないみたいな視線を送られたのは！

「……別に言ってもいいですけど」

「けど？」

「……めんどうだ、いいや」

「なんでやねん！」

目の前でフェイトさんが軽くこけて、はやてさんから突っ込まれる。だって面倒になったんだもん。仕方ない。どうせ交換条件を言っても聞かないだろうしね！

「とりあえず。続きを～」

「りょうーかーい」

「ふぅん。そうなんだ」

俺の前でしゃがんで、顎に手を当てて考えてるおっちゃん……もとい、しんきさん。漢字でなんて書くか分かんないし、なんて書いてるのか分かんないだろうしね。

「よし、響くん？」

「ん？」

「響くんのボールさ、まだ家の中で、奥の部屋にあるんだ。取ってもいいよ」

「ありがとう！あ、でも弁償しない……と……」

実際その通りだ。うち母さん働いてるのかどうか分かんないから、お金があるか分からない。でも、ガラス割ったの俺だし、どうしよう……。

「別にガラスくらい、いいさ。ほら、取りに行っておいで」

「……でも」

「子供は遠慮するもんじゃないよ。ほら」

「ふほうしんにゅうってやつに」

「……ならないから」

「……本当？」

「うん、本当だから、ねぇ？」

「じゃあ、取ってくる！」

って、家の扉を開けてくれたから、中に入ったんだ。

「待ったぁ！」

「……今度は何ですかはやてさん？」

「まるっきり不審者やん！」

「突っ込んじゃ駄目です！」

本気で！いやまぁ、言動聞いてりゃ不審者っぽいけど。本当にいい人よ！そして、強い人だしね。

ある意味究極に至った人だしねー。斬撃飛ばせるし、魔力無しだと勝てる気がしない。

「でも、名前を聞く限りだと、震離のお父さんだよね？」

「えぇ、そうですよ」

「やっぱり震離と似てるね」

って、フェイトさんが笑いながら言うから、そうですねって返すけど。正直に言うと。この時はまだそうでもないんだよなぁ。まぁ、それはこれから話すとして。

「とりあえず質問とかってあります？」

「私は特に無いなぁ。フェイトちゃんは？」

「私も無いよ」

「了解です」

……まぁ、どうでもいいんだけども、バインドといてくれねぇかな。やりにくいんだ全く。

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　始まりを。（後書き）

前々から外伝やるよーと言っていたので、とりあえず一話相当の物を書いてみました。ただ、まだ精神的には落ち着いていないので、うまく話が書けなくて……駄文を晒しになっております。

まさか曲をランダムで聞いていて、「ｙｏｕ」が流れたときには涙腺が崩壊して話を書くどころの問題じゃなくなってしまって……。

さて、何時も以上にこれは亀更新になると思いますが、楽しんでいただけると幸いです。一応子供してんですが、全部ひらがなにしたら面倒ですし、読みにくいので所々漢字を混ぜたり、ひらがなで書いたりしたり出来るだけ子どもっぽい（笑）を表現しております。

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　最初の出会いを。

――ｓｉｄｅ響――

「おじゃましま～……す？」

家の中に入れてもらえたから、中に入った瞬間、一つ思う。この家おかしいって。いやさ、家の壁の至る所になんか紙貼ってんだもん。そして、いろんな数字とか、よく分かんない英語見たいなやつとか、漢字とかいろいろ書いてあるけど、全く分かんない。まぁ、いいや。

「でも、何処に行ったんだ？」

一応、クツを脱いで玄関に上がって家の奥に進む。だけど、行けども行けども紙は途切れない。むしろどんどん増えてる。何だろうこれ？

「……お、お父さん……ボール……え？」

「え？」

部屋の曲がり角を曲がった瞬間、ボールを抱えた長い波がかった？金髪で、真っ白い肌で、白いワンピースを着た女の子がそこに立ってた。目元は髪の毛で隠れてるから分かんないけどね。

「あ、俺」

「え、あ、え、あ、ハイ、これ！」

「あ、ありがとう！俺」

「じゃあ！」

「え、ちょ！」

ボールを俺に押し付けたと同時に、振り返って走った。けど。

「へぷっ！」

「うわ、痛そ……大丈夫？」

ビタンって音が聞こえそうなくらい、盛大にコケた。しかも顔から行ったっぽいから、うん、すっごく痛そう。

「大丈夫、立てる？」

「……ぅぇ」

一応手を伸ばして、この子の手を取って立たせる。家の中が綺麗だから埃とかは付いてない。だけど、顔から水が流れてるから……うん、多分ってか確実に泣いてる。

「……本当にごめんなさい」

「……うん」

小さく呟きながら首を縦に振る。けど、これからどうしよう……。

――――――――――――――――――――――――――――――

「ってな感じでしたね……よく考えたら不審者じゃん俺」

ヤバイ、昔のこととは言えかなり恥ずかしい。いやまぁ、俺のほうが悪いけどさ。

本当に今思ったら不審者以外の何者でもないな……。

「……ねぇ響？」

「何ですか？」

「その女の子ってもしかして、もしかする？」

「えぇ、もしかしてもしなくても、震離ですよ」

「「……」」

一応本当のこと話してみたんだけども。二人とも固まった。いやまぁ、わからんでもないけどね。

震離って元々、大人しくて静かな子だったし。というかここ数年まで引っ込み思案な子だったしな。

「……嘘やろ？」

「……なんで過去話で嘘つかなくちゃいけないんですか。色々あるんですよあいつの場合」

「じゃあ、それは置いといて。震離の家に張ってあった紙って何だったの？」

「あぁ、その紙、古文の解読したものだったり、何かの数式を解読したやつとか。まぁ、その筋の人達にとっちゃすごく貴重な物だったみたいですよ」

「へ、へぇ……」

「あと、アイツの普段が自由なんでわかりづらいと思いますけど。一応アイツ世間一般で言う「天才」ですよ。５歳までの段階で大学を飛び級で卒業した上に、関数演算とか暗算でやるくらいの」

「「え、えぇ！？」」

おーおーおー。真面目に驚いてるよー。いやまぁ、分からなくもないけど。だって当時震離がそっちの話した時、俺全然分かんなかったもんよ。そう言えばアイツがミッド式の……魔法に出会った時は凄かったなぁ。普段あんまりテンション上げないアイツが凄く楽しそうにしてたなぁ。

［すごく綺麗な数式だね！何これ何これ何これ！］

って、凄く楽しそうに魔法の開発に力入れてたなぁ。俺らの中じゃ一番最後に魔法に出会ったはずなのに、一番最初に魔法を自分で組み立てられるようになってたし。おかしいよなー。なんで相手の魔法を解読して、打ち消せるんだよ……おかしいだろ。

いやまぁ俺は関係ないけどさ。砲撃撃たないし、そういう関係のものやらないし。奏達がやられて悔しそうだったなー。まぁ、とりあ

えず。

「……バインド解いてくれます？」

「それとこれとは話は別や」

「……へーい、とりあえず続きを話しますねー」

―――――――――――――――――――――――――――――

「えっと、まぁ。その……怪我とか無い？」

「……無い」

そうは言っても、ワンピースの裾をギュッと！握ってるところを見ると、凄く痛かったんだろうなぁ。そもそも、俺のせいだしね。うん。

「……本当にごめんなさい」

「……うん」

「「……」」

い、いかん。空気が腐ってる……あ、違う。まぁ、とにかく空気が不味い。これは不味い。

「……そうだ、ねぇ？」

「……グスッ、何？」

駄目だ、泣いてる。駄目だもうダメだ。外にはこの子の父親がいるから、見られたら殺られる。でも！諦めちゃ駄目だ！

「名前なんて言うんだ？」

「……は？」

……駄目っぽい。髪の毛で隠れてる目がさ、一瞬だけ見えたんだけどさ。死ぬほど怖かった。いや諦めるな！

「いや、名前は……」

「……そうじゃなくて、人に名前を聞く時は、自分から言うものだよ」

「え、そうなの。じゃあ、俺の名前はひおう響って言うんだ。苗字の方は漢字がわからんから説明できないけど」

「……そう、なんだ。私の名前は震離。叶望震離」

「へぇ、しんりかぁ。よろしくな！」

「え、あ、う、うん」

なんかおどおどしてるな。この子。でもなんか可愛いなー。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「はぁあああ！？」

「え、どうしたの！？」

「え、あ、いや、何でもないですよ！」

うわ、うわ、うわ！俺、そうか、そうだった。初めて震離を見た時うん、本気で可愛いと思ったんだ。うわ、うわ、うわ！やっべ、恥ずかしい！やべぇ、拘束されてなかったら、本気で逃げてた。うぉぉおおおぉぉおぉ！！！！！死ねる。これは死ねる！恥ずい！

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　最初の出会いを。（後書き）

響はまだ子供ということで、漢字を全て扱えるわけではありません。そして、震離のスペックを出してみましたｗ　普段の状態になるまで後数年掛かるなぁｗ

一応、桜庭というオリジナルの地名でやっている話ですが、この時期には7人全員が桜庭に揃っているわけではありません。ただ、響と震離はここでであっていますが、奏、優夜、煌の三人は別の場所に。瑞希と雪奈は出会っております。まぁ、それはおいおいやるとして……。

それでは、今回はこれで失礼します。

一応質問ですが、子供ｖｅｒのキャラ紹介等も書いたほうがよろしいでしょうか？　何か一言コメントを残していただけると幸いです。

それでは！

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　一つ目の事件を。

――ｓｉｄｅ響――

あー、恥ずかしい事を色々思い出して、顔が熱いったらありゃしない。いやでも。子供の頃だし色々ノーカンだ。ノーカン。うん、そんな事は無かった！

「それで、そのあとはどうなったん？」

「あぁ、そのあとはまぁ仲良くなって結構な頻度で遊びに行ったんですよ。そしたら、少し震離の所が面倒な事になってるのを知ってしまって……」

「え、そうなの？」

「えぇ、それがですね――」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「しーんーりー、遊ぼー……ぜ？」

「……ヒック、エグ、グス」

「どうしたの！？」

いつものように、震離の所に遊びに来たらなんか縁側の下で、凄く泣いている。そりゃ何時もはおどおどしてて、おとなしい女の子だけど、今日みたいに泣いてるのは正直なところ初めてだ。最近は笑

った顔しか見てなかったしね。

「……か……母さんが……ね。わ……私と……一緒に……外国に……戻ろうって……」

「え？そ、それで？」

「わ……私……行きたく……無いって言ってる……のに、無理矢理……にでも……連れていこう……とする……から……」

「え、あ……でも、お母さんなんだろ？」

「違う！あんな人……母さんでも何でもない！私のこと化物……って、言ったり。生まれてこなければよかったのにとか言う人だもん……ッ！」

「え、あ、え……？」

正直なところ、俺には母さんしか居ないから、よく分からなかった。なんで母さんが自分の子供にそんな事言うのかって事も。だけど、震離がその人の事を嫌ってるっていうのがよく分かったんだ。と言うか、今日は何処かおかしいんだ。何時もは居る震離のお父さん（震樹さん）も居ないし。俺がきた時以外は外に出ないっていってた震離が外に出てるし。

「……とりあえずここから出よう。女の子がこんな所にいたらいけない」

「……うん」

何とかして、震離を縁側の外へと連れ出したけど。案の定白いワンピースは所々埃で汚れてるし、長い髪も汚れている。一応女の子が汚れた格好してるのは不味いかなと思って、震離の背中とかについた埃を落としてると。急に震離が俺の右腕を強く抱いて、俺の背中に隠れるように移動した。

なんだろうと思って首だけ振り返ると、紺色のスーツを着た女の人がそこに立ってた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「……もしかしてそれが」

「そう、震離を産んだ母親。叶望……じゃないな。新宮離菜（しんぐうりな）って人」

「でも、なんでその人は震離を？」

「一応、震樹さんとその人は離婚してて、震離を引きとったのは言わずとも震樹さんです。そして、あの人は震離を化け物呼ばわりして離れたんですよ。と言っても、学者らしくて、小さい頃から震離に勉強を教えていたらどんどん覚えて、最終的にはその人ですら追い抜いた震離に嫉妬とか色々したみたいなんです。それで化物って言ったり、生まれてこなければ、とか言ったわけです」

当時のことを思い出しながら話してるんだけど。正直腹立つどころの問題じゃない。むしろどんどん怒りが溜まってくる。胸糞悪いったりゃありゃしない。

実際、震離も、そんな事言われるまでは普通に接してたらしいしな。

母さんに褒められたいから。

その一心で勉強して、難しいことも一生懸命覚えて、自分の母に披露した結果。化物とか言われたらそりゃあ報われない。俺なんかじゃわからんが、当時の震離のショックもかなり大きかったんだろうな。現に、それまではそれなりに元気な子だったのに、その一見のせいで引きこもったって言ってたし。

震樹さんも、それを知ってたけど、どうして良いのか分からなくて、大事に大事に、これ以上傷つけないようしたせいで、皮肉にも引きこもりに拍車を掛けちゃったらしいしな。

「あ、一応震離と震樹さんって普通に仲良いですからね。言わなくてもわかると思いますけど。一応」

「あ、うん、了解や」

「それで？その後どうなったの？」

「えっと、その後は……」

「震離。やっと見つけた……君が見つけてくれたの？ありがとうね坊や」

人良さそうな笑みを浮かべながら近づいてくるけど。なんか、なんか。目が怖い。何だろう。こう、気持ち悪いっていうか。あぁ、悪い人ってこういう感じなんだろうなっていうの。

一歩一歩こっちに近づく度に、震離の抱く力がどんどん強くなってきた。実際、力いっぱい目を閉じて、震えてるしね。

……この人か？震離の母さんで、震離が嫌ってるっぽい人は？まぁ、とりあえず。

「響」

「え？」

「緋凰響って言うんだ。坊やじゃない。あんたは？」

「……あ、あぁ。私の名前は叶望離菜。震離のお母さんなの」

ニコニコしながら自分の名前を言ったけど。相変わらず目が怖い。むしろなんか焦ってる感じだ。でも、なんなのかは分からないけどね！

「……震離？行きましょう？こんな国にいては貴女はだめになるの。お母さんと一緒に外国で沢山お勉強しましょう？震離はお勉強大好きだもんね」

なんて言いながらこっちに近づく度に震離の震えが大きくなる。多分震離のこの人に渡したら正解なんだろうけど、なんだけど。それ多分いけないことだろうなぁ。あの人に震離渡したら二度と会えそうにないし。折角出来た友達だもん。いなくなられたら本当に寂しいし。

よし、決めた。

「おいで震離？」

一歩近づいたと同時に、こっちも一歩下がる。急に下がったもんだから、震離の体勢が崩れかけるけど、なんとか支える。と言うか一歩下がったら、あの人の目が変わっちゃったよ。

「どういうつもり？」

「……いやー。どういうつもりも何もー、おばさんさ。震離のお母さん？」

「そうだと言ったでしょう？」

「いやー、おばさん、それ嘘でしょ？それが本当だったら震離がこんなに怖がるなんてこと無いはずだし」

思ってることをそのまま口に出してたら、どんどんあの人の目が釣り上がってくる。顔も半笑いだから余計に怖い。昨日見た、テレビから出てくる女の人なんかよりももっと怖い。

「響君って言ったかしら？これは私と震離の問題なの。君は口を挟まないでくれるかな？」

「えー、口を挟まなかったら震離を誘拐するんでしょう？」

「そんな事無いわよ」

「テレビで言ってたよ。誘拐する人はみんなそんな事言うって」

なんて感じで、話をしてたら、どんどんあの人から笑いが無くなっ

てきた。目が釣り上がってるし、笑みは消えるし死ぬほど怖い。なんて思ったら。あの人が一歩大きく踏み込んだから、下がろうと思った瞬間。左の頬に強い衝撃が来て、震離と一緒に倒れこんだ。

「子供は黙って大人の言うことを聞いていればいいの」

「ひ、響!?」

「……え、あぁ、うん？大丈夫よー」

あの人がなんか言っている間に、ビンタされたということを認識する。正直すっごく左頬が痛い。しかもグラグラしてた歯まで抜けたし。そのせいで、口の中が血の味で一杯になった。

……あ、抜けた歯が少し虫歯気味になってたから、もう歯医者に行かなくてすみそうだったから。少し嬉しかった。

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　一つ目の事件を。（後書き）

震離は自分を捨てた母の事は大嫌いで、未だに引きずってます。その一部が本編でもたまに現れておりますよ。例として、二十二話に一部入ってますしね。

そして、響も、この時の件と、震離の話を聞いて最低な人という認識をしています。

さて、次回かその次くらいのＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙで、響と震離の出会いは一旦区切ります。その次には……。

それでは、今回はこれで失礼します。次回も読んでいただけると幸いです！

ＡｆｔｅｒＳｔｏｒｙ　酒は飲んでも飲まれちゃ駄目だよ？

――ｓｉｄｅ震離――

晩ご飯を一人寂しく食べてたら、目の前に響が黙って座って、ラーメンを食べてる。私よりも後に食べたくせに、即効で食べ終わる。

そして、いきなり。

「とりあえず、あんまり聞きたかないけど。流（アイツ）とは何処まで行ったんだ震離？」

……うん、開口一番戯けんなってこういう事なんだろうなとか思いつつ。ふっくらと炊き上がった白米を口に入れる。うん、ほんのり甘くておいしい。そして、卵焼きも口に入れる。塩がきいててこれまたうまい。最後は口に入ったご飯等を飲み込みつつ、味噌汁を口に含んで飲む。やっぱり美味しい。

さて、と。

「何が？」

「現実逃避して戯けんな」

……ちぇ、バレてた。一旦ご飯を食べる手を止めて、お茶を口に含んで目の前に座る響の顔を見る。まだ、完全に傷が癒えてないから頭に包帯を巻いて、呆れたような顔でこっちを見てる。大体の意味は分かるけど、正直なところあんまり分かりたくない。だから……

「……何が？」

「……何処まで関係が進んだんだ？」

……案の定、一番分かりたくないものだった。いやまぁ別に恥ずかしいことはシテナイヨ？

だって、私自身どうして良いのか分かってないんだもん。どうしようもない。というかさ。

「……なんで、そんな事聞くのさ？」

「一応流を宜しくって、頼まれてるから」

「……それなら私も頼まれた」

「じゃあ聞くけど、なんで最近流は俺に、震離さんは～って、聞いてくるんだよ？しかも元気のない顔で」

……なんですと！？と、顔には出さないけど、私のうちじゃ大パニックだ。だってさ、最近流と良く一緒にいるけどそんな顔しなかったよ！？だって、いっつも笑ってるんだもん！……やばい、本当に分かんない。

「……」

正直、流に負担をかけてると思ったら、なんて言えばいいのかわからなくて、小さく首を横に振る。

「そっか、ただまぁ。正直なところ今お前が悪いってな感じで言ったけど、正確には誤りでな」

「……うん」

「どうも、あいつの様子がおかしかったのは、昨日までの事だったんだ」

「……うん」

「ただ、そんときうちの八神部隊長さんが、ミスってお酒を飲ませたらしくてな」

「うん……って、え？」

「そのときは問題なかったんだが、その後俺と会って、ポロリとそういったんだよ、震離さんは～って」

……少し待って、落ち着け私。え、要するにだ。

「お酒飲んで、本音が出ちゃったと？」

「おそらくは、で続きだけど、震離さんに負担かけてるんじゃないかって泣きながら話してきた」

泣き顔の流か……可愛い――じゃないでしょう私！

「何がどうして、そうなってんの！？」

「知らん。だからこうして聞きに来たんだろう？」

「それなら最初の関係～はいらないでしょう？」

「いるよ。さっきの続きだが、アイツ、私なんかと居て……って言

ったときにはまずいって本気で思ったもんよ」

……それは……まずいね。でも私は流と一緒にいるだけで本気でうれしいし楽しいんだけどな。
いや、そう思わせた段階で……。

「でも、酔った勢いって事も……って、ごめん。そんなつもりはなかったんだ」

「……ぅえ？」

……気が付けば涙が出てた。最近色々あったからなぁ、ゆりかご戦とか、ゆりかご戦とか、いろいろあったけどさ。

「ぅぅ、でも、酔った勢いって言ってもそういう時って本音が出てくることのほうが多いよ？」

「……分かんないぞ？でもま、俺も意地が悪かった。ごめん」

「いいよ別に、でも、一応流にあってくるよ。幸い私は明日休みだし、今から家帰れば、流に会えるっしょ？」

「そうだな。昼に家に戻ったらしいから今なら普通にいるな」

「いるなって言っても、一応あの家って私達の家でもあるんだよ？居なかったら逆に……」

居なかったらその時は全力で探しまわるよ？真面目に。だって、行方不明とかだったら嫌だもん。でも流黙ってたら普通に可愛いから誘拐とか……ありそう。

「ま、お前が帰るってんなら、これを渡そうじゃないか」

「ん？」

そう言って響が足元から取り出したのは、少し大きめのバスケット。

何これ？

「はやてさんと、なのはさん特製ジュースとお菓子、後サンドイッチだとさ、後レシピ」

「なんでまた？」

「流が教えてくれーって頼んだらしい、詳しくは知らん」

へぇ、なるほど……って、響……これって要するに。自分で持っていくのが嫌だったからじゃ……。いや、違う。これは私に気を使ってくれたのか、な？それだったらお言葉に甘えようかな。

「了解、それじゃあ私が持って行くよ。奏や皆に宜しく～」

「あいあい、じゃな」

軽く手を振ってからトレイを持って片付ける響。それを見て思い出す。

私まだ食べかけだったということに。

慌てて、ご飯を食べるけども、すでに冷めていて、美味しさが半減してた。でもお米って冷めても美味しいからすごいよね！

そして、何だかんだで家に帰り着いて、今家の前にたってるんだけど、立ってるんだけどちょっと聞いてッ！

我が家ってさ、響達と一緒に住んでるってか、一緒に買った家なんだけどさ。四階建てでね。一階がリビングとかお風呂で、二階から五部屋あってトイレも各階ついてて、各人の部屋が有るんだけどさ……だけどさ！

「電気が全部消えてるってどういう事ぉおおぉおおお……」

そりゃ、今の時間考えたらアウトだよ。１２時回ってるし。そりゃ流も寝るよ。療養中だもん。仕方ないけど。折角話そうと思ってた矢先にこれだからちょっと傷ついた。

まぁ、いいや。でも一応数時間前に帰るよーって伝えて、お酒でも飲もうって言ってあったけどさ。未成年だけど気にしないでね。でもまぁ……。

いろいろ私の理性がヤバイんだよね。

多分見たら即抱きつくと思う。今日寂しい思いをさせてるってな感じの話聞いたからね。しかも、数日あってないせいで流分が足りてないから、私が私を止め切れないし。でも夜中に抱きついたら、明日休みだっていうのに話すらしてもらえない気がするし、だから、耐えろ私！耐えるのよ叶望震離！

……でも、まぁ、お風呂……めんどうだ、シャワー浴びて、さっさと寝よう。うんそうしよう。

そして、何だかんだでシャワーから出てきたんだけど……。うん。

「……逆に目が冴えた……」

私の馬鹿っ。……仕方ない、少しお酒を飲めば多分眠れる。それにお酒飲もって伝えてたけど、流寝ちゃったから、一人酒だね。とりあえず、お酒はあるから、冷蔵庫に何か入ってないかなぁ……って。

「ど、どんだけ出来た嫁なんだろう……。日本酒にお饅頭なんて、私向きすぎる……」

お酒におつまみ付きって……しかもメモ付きだし……何なに？

「お仕事お疲れ様です。先日貰ったものと、店員さんに勧められて買った品ですが、どうぞ。本当は震離さんに何か作ってあげたかったのですが、材料がなくて……ごめんなさい。そして先に寝ますね。おやすみなさい」

いえいえこちらこそ。その心遣いだけで……。あ、涙出てきた。まだ17なのに私ってば……。そう言えば今日はなかなか綺麗な夜空だったし、縁側で食べようかな。

そして、縁側に移動してきて、クッションとか敷いて、座りやすくして。隣に流セットを置いて……。まずはお酒を一口。

「うん、美味しい」

正直私自身お酒には強くない、でも美味しいとわかってからはちょくちょく飲んでるけどね。地球と違ってミッドの法律じゃ16から飲酒可能だもん。だからある程度は飲めるし、少しくらい、いいか

なと思ってる。日本の法律的には、本当はいけないけどね。

あぁ、夜風が気持ちいい。酒って言っても、こんなに酔うもんなのかな……って。

「２０度……って」

そりゃ、一瞬で酔うわけだよ。まぁいいか明日休みだし。まぁいか。

そんな事を考えながら、お饅頭を食べて、一口二口とお酒を口に入れる。普段は聞けない虫の音色や、風の音が心地よい。

体が火照っているせいで余計に気持ちよく感じる。

でも、さ、さっきの響の言葉が頭の中にずっと残ってるんだよね。

「震離さんに負担かけてるんじゃないかって泣きながら話してきた」って。

……そんな事無いんだけどなぁ。でも、裏を返せば……

――愛情が足りない？

いや、そんな事無いはず。それじゃあなんで？

――恋人っぽくない？

いやいや、そもそも私と流はそんな関係じゃないはず。むしろ私からの一方通行だし。

――それじゃあなんで流はそんな事言ったの？

……愛情が足りないから？

――私なんかと居て……のその先は？

……やっぱり愛情が足りない？足りてない？

あれ、なんか矛盾してきたよ？

いやでも、落ち着け私、少し頭の中が霧がかかって来たけどまだいける。まだ行けるはず。

いや、でも、そうか。そうだよね。

「うん、だったら愛情表現すればいいじゃなーい♪」

……この時の私を、後の私はこう語る。

――酒の勢いって死ぬほど怖いって。

――ｓｉｄｅ流――

うん、機動六課に異動してきてから、突拍子なことにはもう慣れた。

本音を言うと少しは成長したものだと思う。

だけど、だけど。今の状況は何だろう？

「……な、何でしょうか、震離さん……？」

「……フフ」

私に覆いかぶさった姿勢のまま、震離さんは、妖しい瞳で笑みを浮べている。

ただ、それも別にいいですよ。この際無視します。ただ、ただ。

「……どうして私はバインドで縛られているんですか？」

「……フフ」

どうも先ほどから、私が声を掛けても笑い声し帰ってこない。というか、お酒の匂いから察するに、ものすごく酔っているな。というか、バインドで縛った段階でおかしいとは思ってるけど。まぁ、とにかく。

「とにかく、バインドを解除してもらえませんか？」

「……ヤダ♪」

……今ほど震離さんが何を考えているのか分からない。まずこのバインド自体おかしいくらい強力ですしね。一応解除できるかしてみたんですけど、普通に外そうと思えば、余裕で１０分位掛かりますし、解除作業なんて入ったら震離さんは直ぐまた直すでしょうし。

それに……なんで、私を縛ったのだろう？

「……あの、本当にどうしました？」

目の前にいる貴女に問いかける。だけど、お酒の入っている状態で

すし、多分答えてくれないでしょうね。あぁ、こういう事になるならもう少し粘って起きておけば良かった。

「……流さ」

「……はい？」

「……別に弱音とかさ、吐いたっていいんだよ。流も私も人なんだし。一人で何でも出来るわけ無いし」

少し涙を溜めて、微笑を浮かべながら私に声を掛けてくれる。多分、普段の私だったら、凄く嬉しがっているんだろう。だけど、今は正直違う。理由は単純で、この前間違えてお酒を飲まされた時に、響さんに言っちゃった事が震離さんに、漏れた事が本当に不味い。

別に響さんは、笑って気にするなと言って下さったけど、正直に言いますね。本当は何を言ったのかすら覚えていないんです。私はよく知らないのですが、お酒の席で相手の方が笑いながら気にするなとか言う時って、かなり粗相をした時をさすとか何とか、言ってたような……。

「流さ、最近……無理してるよね？」

「ッ！？」

その言葉はまるで、弾丸のように私の胸を撃ちぬいた。否定はできないけど……直接言われるとやっぱショックです……。

「……その、申し訳ないです」

「……ほら、今だって、昔みたいな口調だし。……私さ、流に無理させてるのかな？」

「い、いえ……そんな事……」

困惑しながら、よく見ると、先ほどまで涙が溜まっていた瞳はすでに決壊していて、涙として流れている。

本音を言えば、本当に困った。正直手詰まりです。

私が事の発端としても、結果的に震離さんを泣かせてしまった。

正直、自分の事が嫌いになりそうなくらいだ。だけど、そんな事よりも、最初に震離さんの誤解を解かないと。……震離さんに、泣いて欲しくないですしね。

「……本当にごめんなさい。私のせいで……その……」

「私の事……嫌いになったの……？」

「え、な！？」

私が震離さんを嫌いになる！？そんな訳がない。

というより、あるわけなんてない！

なんて思っている間に、気がつくと私は無意識に大声で。

「そんな訳ない！私は貴女が好きです！！だから泣かないください！！」

と叫んでいた。……今が深夜だって事も忘れて。

しかし時すでに遅し。

無意識とはいえとんでもない事を叫んでしまったことに気づき、思

わず俯いてしまった。
……顔が熱い。
このあと、この人に何を言われるのか凄く分からなくて、とても怖い。
正直拒絶なんてされそうだし。もし嫌いなんていわれたら……。
しかし、震離さんから返ってきた言葉は予想と大きく違っていた。

「ふふ……流～顔が真っ赤だよ」

「……へっ？」

震離さんは笑っている。
てっきり拒絶されるか引かれるかと思っていたもんだから思わず拍子抜けしてしまった。

「……震離さん、嫌じゃないんですか？」

「何が？」

「いえ、その……私の体のこと知ってます、よね？」

「ん？あぁ、知ってるよ」

目の前のこの人は相変わらず、微笑を浮かべながら答える。
と言うか、何処か楽しんでいるような感じでもある。

「え、あ、その……私の好きは……友人、親族、親友としてじゃなくて……え、あ、その……」

「なぁに？」

震離さんは余裕めいた笑みを浮かべながら私に続きを促す。

…ダメだ。その先を言う勇気が出てこない。言おうと思う度に、顔が熱くなって、この場から逃げ出したい。だけど、現在の状況はバインドで縛られて、私の上に震離さんが跨ってるので逃げることすらできない。

「その……まぁ……」

「…恋人として？」

「え、あ、うぁ……ぁぅぅ」

「フフッ」

な、なんで震離さんが続き知ってるんですか！？って、言おうと思ったけどいえずじまいで……。

しかも何、その「してやったり」みたいな笑いは……。

「え、にゃ、な、なん、で……！？」

「やっぱり……流が私を意識してるのバレバレだったから……」

「あの、し、震離さん、それは、本当ですか……？」

「うん」

思わぬ事態に片言めいたガチガチな喋りになった私を尻目に、震離さんはペロッと舌を出しながら笑っていた。その姿はまるで悪戯好

きな小悪魔といったところか。
私は恥ずかしくなってまた俯いてしまった。

「何だ……分かってたんですね……」

「うん……ねえ、流」

「うぅ…なんですか……震離さん？」

「顔、上げてくれる？」

「いいですけど何を……んっ」

顔を上げた瞬間、唇に柔らかい感触がした。
目の前には一面震離さんの顔。
アレ？もしかして私…キスされてるんですか！？

思考がそこまでたどり着いた時にはもう唇は離されていたが……全身がかぁっと熱くなる。

「い、い、い、今っ……！？」

「私も流が好き……。今までは私の独りよがりで、勝手に恋人って言ってたけど。今のはその証明……」

「えぇっ！？う、うそ……？」

うろたえる私とは対照的に震離さんは悪戯じみた笑顔で答える。

「うん、本当だよ……流、大好き」

「そ、そうですか……あ、ありがとうございます……」

私が今の状況をちゃんと理解していない間に、震離さんは自らの服をゆっくりと脱ぎ始めた。

……って。

「え、あ、ちょ。震離さん!?」

「ん？だって、私と流は恋人同士でしょ？」

「え、あ、その」

「だからね！」

「え、あ、震離……んむっ！」

私が言い切るよりも先に、震離さんからの情熱的なキスによって封じられる。

正直に思う。私はどうなるんですか!?

――――――――――――――――

「……うぅ……朝？」

枕元で目覚ましの音が聞こえてくる。もう朝だ。何時もはこんなにしっかりと起きるはずがないのに、今日はしっかりと起きれたことに少し驚きがある。

なんか震離さんと声を大きくしては言えないような事をしたような

記憶があるんだけど……あれは夢だったのか？

「そ、そうだよね……私が、震離さんとキスしたりあんなにも、恥ずかしい事したなんて夢に決まってますよね。うん」

とりあえずあれは夢という事にして、早く着替えなければ。そして、煌さん達に預けたギル達を回収しないと。それにしても生々しい夢だったと思いつつ、着替えを取ろうとベッドから起き上がった時。

「裸！？それに震離さん！？……え……？」

そこには深夜、私にアンナ事やコンナ事をした綺麗な顔した小悪魔が寝息を立てていた。

おまけに2人とも裸だ。そしてお互いの身体には赤い斑点がポチポチと。

ああ神様……は居ない、聖王さま……はまだ幼すぎる。とりあえず、私の信じる神様、どうやらあれは夢じゃなかったようです……。

夢じゃない事の嬉しさと、アンナ事をしたのが現実だった恥ずかしさが交差して私はそのまま固まってしまった。

そして、しばらくした後、眠っていた小悪魔が目を覚まし、私たちは第二ラウンドへと突入してしまった……

楽しそうな笑みを浮かべた小悪魔が可愛いと思いつつ、今のこの関係を素直に喜んでいいのかと内心思ったりしたのはないしょである。

ただ、それでも私の気持ちを伝えることが来たのは本当に、本当に嬉しかったのは確かなことです。

ＡｆｔｅｒＳｔｏｒｙ　酒は飲んでも飲まれちゃ駄目だよ？　（後書き）

一ヶ月は離れすぎだと思い。新しく一部書きなおして、前編後編を連結致しました。

Ａｆｔｅｒと名の通り、ＪＳ事件以降のお話ですので、なるべくネタバレ等を控えさせて頂きました。本編が終わった時にこの話を見るとより一層面白くなるかと思います！

ノクターンは、これに色々追加したやつをその内上げるかと思いますので、楽しみに……（ドン引きしないでくださいね？）していただけると幸いです。

それでは、失礼します。ｋｙｏｎｓｉでした！

プロローグ　2つの始まり（前書き）

九割型リリカルなのはじゃない！と言うことが予想されますが、それでもいいよって方のみ進んでくださいね！

プロローグ　2つの始まり

「は、異動？」

時空管理局本局第６武装隊の隊員である緋凰響空曹（ひおうひびき）は、目の前に座る隊長の言葉を聞き、突然の異動通告に呆気に取られる。

「あぁ、そうだ」

呆気に取られる響の顔を見ながら、苦笑を浮かべるこの部隊の隊長であるティレット・ラートゥスは返事をした。

「……理由はなんですか」

唐突に言われたティレットの言葉に、訳が分からず響は聞き返す。しかし、その様子はため息混じりの返事であるため、半分は諦めているようにも見えた。

「この前、レリックを運んでいた列車が襲われたのは知ってるな？」

「はぁ……ってか、その事調べて教えたの俺ですし」

実はつい最近、「機動六課」と呼ばれる新設の部隊が発足し、その部隊の前線メンバーで、列車を止めるという事をした。
ここまで聞けば、普通の部隊でもやってることであるが、ただ、この六課っていう部隊の前線メンバーは、たったの四名だけで列車を止めた上に、その内の二人はまだ子供であったために、個人的に響

が調べ、ティレットに教えたということである。最も「地球」から出てきた響にとっては自分よりも年下の子どもが前線に出ているということが珍しいから、という理由で調べていたのだ。

「……まぁ、そこは普通に返事しておいてくれよ……こっちが傷つく」

「はい、それで次はどうしたんです？」

そっけなく返事をする響の素振りに、軽い溜息を吐きながら話を続ける。

「あぁ、それで、その事態を収拾を行った、新設部隊の機動六課があるじゃないか？」

「……えぇ、ありますね」

「お前はそこに異動だ」

「え、嫌ですよ」

話し続けるティレットの言葉を聞き、即座に切り落とす。
その素早い反応にティレットは呆けてしまったが、すぐに我に帰りごまかすようにコホンとせきをする。

「……即答で、しかも、はっきり物を言うなよ」

「え、嫌に決まってんじゃないですか、何で俺ひとりでそんな問題がありそうな場所に行かなくちゃならんのですか！」

最初は静かに反論していたが、語長が強くなる。
それに呼応するように、ティレットの声もまた大きくなって来た。

「何いってんだ！お前一人じゃあないぞ！ちゃんと奏（かなで）と震離（しんり）も一緒だ！」

「もっと嫌ですよ！あいつらにまでリミッターが掛かるじゃないですか！大体そんなところに異動なんて、なんか理由があるんでしょう！？それを教えてくださいよ？」

「……言わなきゃダメか？」

と、子供のように、困った顔をして言う。

「いい年の大人がぶりっ子ぶらないでください、気持ち悪いですから」

またしても即座に切り落とされ、心なしかへこんでいるようにも見えるが、それすらも無視されたティレットはすぐに真面目な顔に戻し話を続ける。

「とりあえず、理由は簡単だ。機動六課が何かに対して警戒しているから、ちょっと行ってきてくれよって話だよ」

「何かって何です？」

「さぁ、それは分からんけど……優夜から話しってかメールは見たか？」

「いいえ、ここに来る前に届いたのでまだ見てないです」

「そうか、だったらいま見てみろ」

と響の前にモニタを展開する。

「……へぇ」

「気づいたか、なかなか面白いことが書かれているだろう？」

響が真剣な表情でモニタの字を読んでいく。

途中まで読んだところで、腕を組み、不敵な笑みを浮かべてティレットは言う。

「……機動六課の設立には、三提督も関わってるんだ、とさ」

「それは、なかなか、面白い事が書かれてますね、あ、もしかして俺とあと二人が移動して行って、機動六課の失敗とか報告すりゃいいんですか？」

「……え、違うよ」

ニュアンス的に「何いってんのお前？」という感じに返すティレットの言葉に、思わず首をひねり、言葉を返す。

「は？　じゃあ、何ですか？」

「……三提督が極秘裏にとは言え、認めて地上に六課ができた。おそらくなんかヤバイことが起こるから六課は出来たんだよ。きっとな」

「たしかに、新部隊としては隊長陣のランクがおかしいですし、わざわざ有名人を引っ張ってくることも無いでしょうしね」

響自身、ティレットがなにを言いたいのかわからず、眉をひそめながら話を聞く。

「個人的には、お前らもそこに行って欲しいんだよ。地上（あそこ）に本局（俺ら）が関わるとレジアス中将が、怖いからな」

「確かに。レジアス中将は本局を嫌ってますからね……」

響の口からうんざりするような、ため息が漏れる。

別に本局のことそこまで嫌わなくてもいいのに、何でそこまで嫌うのか理由がいまいちわからない。

「異動って形なら、別に文句言われないだろうし、ある意味左……じゃない」

「……隊長。今なんて言いかけましたか？」

「まぁ、気にするなよ。それよか早く奏を連れて行って来い。六課の方には、もう話は通してあるから」

ジト目でにらむ響の視線を、浴びながらティレットは視線を逸らすが、何を言ってもムダと判断したのか小さくため息を吐く。

その様子を見たティレットは腕を胸の前で組んで、同時にハァと溜息をつき、口を開く。

「……響。一応、お前と奏、その親友である震離はうちの部隊にとっちゃすごく大切な、エースの一角だ。

その三人を六課に送るということは、さっき話した何か「やばい」事が本当に起こりそうだから送るんだからな。
正直、俺はお前の器が空曹程度のものじゃないと踏んでいる。……今回の件、物にして、もっと高みに行け。」

先程までに、砕けたような雰囲気ではなく、真剣な声で話すティレット。

「……隊長……前にも言ったと思いますが、俺は親友を見捨てて生き延びた屑ですよ、買い被らないでください。ソレに――」

扉をあけ、背を向けながら話を続け、そして――

「――ここにいるそれだけで十分高みなんですから」

そのまま、扉を潜り、ティレットから逃げるように足早に、隊長室を後にした――――

――――――――――――――――

時空管理局・特殊鎮圧部隊

それは、管理局の闇。
表だって行動することができないこと……また、管理局が直接、関わることができないことをする部隊。
つまり、裏の仕事。
その部隊の隊長室に、二人の人物がいた。
それは一人の老婆と一人の女の子のような顔立ちをした少年が、そこで会話をしていた。

「……自分が異動、ですか？」

あからさまに不機嫌そうな声で目の前に座る人物に声を掛け、目の前の人物もまた、その声に答える。

「……ええ。そうよ」

「……一応聞いても良いですか？何故、今になって異動など……返答しだいによっては断りますけど」

少し前にさかのぼる。

単独任務から戻り、報告書を作成し、報告を終えた後、休憩しようと思った矢先、老婆……いや、隊長に異動を言い渡された。

ここは時空管理局特殊鎮圧部隊・隊長室である。

「……先日、レリックを輸送中だった列車が、ガジェットに襲われたというのは、知っているわね？」

「はい。確か、その事態の収拾を行ったのは、新設部隊の……機動六課でしたか？」

「そう。そして、ガジェットの……新型である？型の残骸調査を行ったところ、興味深いものが二つ、発見されたの」

「……なんですか？」

「一つは、その動力源となっていたもの……ジュエル・シードよ」

「ジュエル・シード？　確かＰＴ事件のロスト・ロギア……管理局で保管されているはずですが？」

ため息混じりに話す隊長の言葉をただ、静かに耳にし、率直な疑問を投げかける。
しかし、隊長はため息を交えながら、言葉を口にする。

「そう。管理局内部による、ロスト・ロギアの不正持ち出しも考えられるけど……もう一つの発見と繋がるとなると、厄介なことになるかもしれない」

「もう一つのは……いったい何なんですか？」

「そのガジェットの制作者の名前がわかったの。その名は……ジェイル・スカリエッティ。」

話しながら手元のパネルを操作し、少年の前にガジェットの内部の写真を写したものを少年に見せながら話を勧める。

「……ジェイル・スカリエッティ？　あぁ……あの［プロジェクトF］の元を作った人この部隊のターゲットの一人だったと思いますが？」

「そう、スカリエッティが動きが確認されたのと同時に、うちに子達にも、ナンバーズたちと遭遇したって言うのが出てきたの」

「ナンバーズ？」

「彼らが動き出した以上、管理局に何かしら手を回すと思うの……だから、あなたは異動になったの。ナンバーズについては、この資料を確認しなさい」

再び手元のパネルを操作し、少年の前にモニターを展開する。
そこには、青いスーツを身につけた銀髪の少女のような人物が映し出され、ソレを少年は見ながら、なぜ自分が異動になったのかを聞く。

「……どういう意味ですか？」

「異動先は……管理局機動六課だから」

ニコリと笑みを浮かべながら、移動先を告げる老婆の……いや、隊長の言葉に、目の前の少年は一瞬固まったものの、直ぐに落ち着きを取り戻し、隊長の顔を見るが、その顔は少しだけ呆れてるようでもあった。

「あぁ……そうですか……どうせ断れないんですよね？」

「えぇ、そうよ」

「……しかし、この部隊の名前を出すわけに行かないでしょう、その場合はどうしたらいいのですか？」

「あぁ……あなたは武装隊出身、空曹、そして魔力ランクは総合ＡＡＡ、能力リミッターでＡランクまで下げるから」

「部隊名以外変わってないと思いますけど……」

「えぇ……あと名前もそのままね」

「わかりました……もし、武装隊のことを知っている人間にあった時はどういえばいいんですか？」

「大丈夫よ、地上の武装隊にもあなたの名前が登録されていて、任務でほかの世界に行ってたって事になっているから」

「……了解、では、六課での任務は？」

「六課でのあなたの任務は、ジェイル・スカリエッティの拘束ね、前もって話して置くと、六課には『プロジェクトF』の遺産……フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官に、エリオ・モンディアルの二名が居るから、ある意味、最もスカリエッティが狙う部隊だと思うからね」

「なるほど（……フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官）」

たしか……PT事件、闇の書事件に深く関わったという、例の天才訓練校を出た人たちとそんなに変わらないのに、すでに執務官として前線を駆け抜け、本局戦技教導隊のエースの親友……って、なにかで見た気がするけど……なんだっけ？

もっとも、プロジェクトFに関係していると言うことについては、知っている部隊などほとんどいないだろうし……

「あなたの異動はもう決定事項なの……早く準備して行きなさい」

「……了解。風鈴流（ふうりんながれ）、機動六課に出向します」

敬礼し、机に置かれた資料を手に、隊長室のドアノブに手を掛け、静かに隊長に話しかける。

「隊長……私を武装隊に登録してたってことは……いつか私を外に出すつもりだったのですか……？」

隊長からは見えないが、今の少年――――いや、流の顔はどことなく、寂しそうな目をし、視線を落としている。

「……ただの保険よ、あなたが気にすることでではないわ」

「そうですか……私が行けば部隊の人たちは死ぬかも知れませんよ……？」

「だれも死なないわ……二度も起こることではないもの」

「……わかりませんよ……私が行けば、また、あのときのようになりかねませんよ？」

「大丈夫よ……」

「そうだといいですけどね……」

吐き捨てるかのようにつぶやき、流は部隊長室を出て行った。

プロローグ　2つの始まり（後書き）

こんな感じです。これで少しでも楽しんでもらえれば幸いです！

第一話　異動と命令（前書き）

時間がかかってしまい、申し訳ありません！
やっと、なのは達を出せたけど・・・たったの数行で申し訳ないです。

第一話　異動と命令

機動六課の食堂にて、四人の男女が食事をとりながら話をしていた。食堂ではモニタからニュースが流れているが、現在は政治経済の時間のようで、管理局の予算について放送されていた。ちなみに内容は一部局員の給料カットに関することだ。その内容に四人の表情が若干沈み、重苦しい雰囲気が立ち込める。

「あ、そういや、今日だっけか、あいつらが来るのは？」

少しだけ草臥れた茶色い陸士部隊の制服に身を包み、テーブルの上に山盛りに盛られた、ベーコンや卵焼き、サラダを食べながら、煌（こう）は何の前触れもなく突然口を開き、食事を取りながら四人の前にモニタを展開し、今日来る予定の響達のデータを表示させた。

「え、あぁ。少し調べて、ティレットさんに情報を送った直後だったからビックリしたよ、まったく」

食事の手を止め、モニタを見ながら煌の質問に返事をする少年、優夜（ゆうや）はため息を混じりに言葉を返す。だが、その様子とは反対にその顔はどことなく嬉しそうであり、再び食事の手を進めた。

「そうだね～。二つ返事で「三人とも送る！待ってろ！」って帰ってきたときは思わず笑っちゃったもん。それにしても、久しぶりに皆が同じ職場に揃うんだねぇ～」

優夜の向かい側に座る少女が、苦笑いを浮かべながら相づちを打つが、少女の雪奈（せつな）の雰囲気は嬉しそうで、楽しそうである。

「そうだね、だけど八神部隊長は六課の監視だと思ってるかも。この部隊がいろんな所から睨まれてるって感じてるみたいだし、事実査察が結構くるし」

煌の向かい側に座り、ため息混じりに話す瑞希（みずき）の表情は、査察官が来たときのことを思い出したのか、どことなく疲れたような表情である。しかし、今は食事の時だからと、暗いことを考えるのをやめ、煌達三人の会話に加わる。

四人はそれぞれ静かに食事を取りながら会話をしているものの、その様子はどことなく嬉しそうで、事実、雪奈に至っては終始笑顔のままである。だが、その表情はすぐに暗くなった。

「……だけど、私たち、もしかすると給料が」

雪奈の言葉に、先程のニュースの内容を思い出したのかその場で食事を取る四人の表情が一気に暗くなった。

が、すぐに。

「……言うな……ていうか早くご飯を食べろよ、今日も忙しいんだからさ」

「……はぁい」

腕を胸の前で組み、深いため息を吐く雪奈に軽い注意を促す。そういう優夜も気難しい顔をしながら食事の手を動かした。

「だけど、ティレットさんが響達を送ったのは純粋な善意？だとして、四人目はどうなの？」

逸早く食事を採り終えた瑞希が、口元を吹きながら一つの疑問を投

げかける。

「さぁ、地上からの異動みたいだけど、ここ最近まで数年間、別の世界で仕事をしてたらしいよ。詳しい事は知らんけどな」

瑞希の疑問に優夜が答えるが、先程の暗い雰囲気が無くなり一瞬だけ、目付きが鋭くなったが、すぐに小さくため息を吐き、響達が此処に来ることとなった原因である、自身の調べた情報と、「四人目に関する」情報を言うのをやめ、そのまま食事の手を進めた。

他の三人も何か考えたのか一瞬だけ手が止まったものの、それぞれがまた手を動かし始めた。すると、隣で食べていた煌が食事を採り終えたのか、展開したモニタを閉じその場で立ち上がった。

「さてと、瑞希、俺らは仕事に戻るか」

「ん、そうだね」

と瑞希も立ち上がりトレイを持って席を離れる。そして、二三歩進んだ後に何かを思い出したのか、小さく「あっ」とつぶやき、煌が振り向いた。

「っと、聞き忘れるところだった、優夜、雪奈さん、夕方暇か？」

突然の煌の言葉に少し首を傾げながら、この後のスケジュールを思い返し、微妙な表情を浮かべながらゆっくりと首を横に振る。

「悪い、正直まだ他の面々が仕事に慣れてないせいで、まだ時間がかかるんだ」

「ごめんね、煌、瑞希」

ため息を吐きながら話す優夜と、顔の前で手を合わせながら謝る雪奈。

「そっか、一応要件はちょっと組み手をしないかって話だったんだよ、最近俺もお前も業務が忙しくて体を動かしてないからな」

「なるほど、だけど悪いな、また今度にしてくれ」

「うん、また今度ね、さ、仕事に戻ろう？」

優夜の断りの返事に、瑞希が軽く手を振りながら言った。優夜も雪奈も軽く手を振ってそれに応え、食堂を後にしようとする煌と瑞希の二人を見送る。そして、残った二人もまた、ひと通り食事を採り終え、その場を後にした。

――――――――――――――

――機動六課・部隊長室――

「はやて、今日例の子達が来るんだって？」

「そうなんよ。まったく、突然でビックリしたわぁ。」

「そうだね。それも、本局の子達3人はともかく、もう一人の方が地上部隊からっていうのも、なんか怪しいし。」

「大方、機動六課の監視やないかな。それでなくとも、うちは多くの人に睨まれとるからなぁ。」

機動六課の隊長室にて、部隊長の八神はやてとライトニング分隊隊長のフェイト・Ｔ・ハラオウン、そして、スターズ分隊隊長の高町なのはは話していた。

話題は、今日来るという人員。そう、響達の事である。

三人の目の前には、四つのモニターが展開されており、その四つの画面の全てにそれぞれの情報が描き出されていた。

本局第６武装隊所属、緋凰響空曹。空戦Ａ－で、能力リミッター無し。

同じく、天雅奏空曹。総合ＡＡＡ＋で、部隊保有制限により、能力リミッターでＡランク。

同じく、叶望震離一等空士、空戦ＡＡ＋であり、制限によりＡランク。

地上第１２武装隊所属、風鈴流空曹。総合ＡＡＡで、制限によりＡランク。

べつに、本局や地上の空曹、一等空士というのは別に珍しい訳ではない。ただ、この時期に別々の二つの部隊が同時に送り出したということが珍しいのだ。

特に、機動六課の様な新設部隊に送ってくるとなると、その実態はだいたい、内部調査などであろう。と、３人は考えていた。

「四人とも結構なエリートやね。とりあえず、分けときたいんやけど、響って子は、小隊指揮の経験があるみたいやし、この子はライトニングの方でええかな？」

「そうだね。私も、いつもいられるわけでは無いし、シグナムも、聖王教会との間で忙しそうだから、いざというときには、この子に任せてみようかな、って思ってる」

「……うん、私もそれには賛成だけど、それより先に、どの程度実力持ってるか判断してからじゃないとね」

「そうだね（そうやね）」

と、他の三人よりも先に響だけが、ライトニング分隊所属が決定したが、当の本人はまだ知る由もない。

――――――――――――――

――ｓｉｄｅ響――

「ん～、鼻がむずむずするな……くそ、くしゃみが出そうで出ない」

真新しい隊舎の前で鼻を擦りながら、荷物を下ろして隊舎を眺める。

前の隊舎というより、ほんの１週間前までいた、本局の寮が妙に古

く見える。
ただ、正直今はそんなことどうでもいい。
もう六課の前だし、さっさと個々の部隊長である八神はやて隊長に挨拶をして、この後のスケジュールや、自分の役割、部屋の割り振りと、荷物を片付けたい。片付けたいんだけど。

「何で、あいついないんだ？」

「さぁ、私はちゃーんと、時間教えたし、万が一に備えて、朝電話入れて今日異動だって確認したし」

「……そうか」

正直くしゃみが出そうで出ないから少しイライラする。加えて、震離が何でか遅れてることもあって、あいつの心配半分、この後、挨拶したら怒られるんだろうという気持ちが半分ずつある。
まぁ、あいつがちゃんとした理由で遅れたんなら、少しはマシになるんだろうけど。
それでも、正直異動初日から遅刻は嫌だし、失礼だ。なにより面倒だしな。
だけど、本当……

「おっそいなー」

「ん、そうだね……なんかに巻き込まれたのかな？」

「さぁ、それだったら念話なり連絡いれるだろう、だけど、まだ来てないし、だけど」

って言いかけたところで奏の持ってるデバイスのアラームが鳴り、小さな声で「やっときたよ」と奏が応答した。
俺は話半分も聞かずに、ボーッとしてる。奏が話ししてるし、まぁ大丈夫だろうと思ってそのまま、空を見上げる。

あぁ、妙に綺麗だなぁ……優夜が余計な情報送らなきゃ異動しなくてすんだんだけどなぁ。
あ、だけど、久しぶりに7人も揃うしなぁ、なかなかいつもの面子が揃わないから正直嬉しいんだよなぁ……
だけど、クラｎ……

「はぁ!?」

思考の海で漂っていた俺の意識を一瞬で引っ張り出された。
隣で怒りながら話す奏をみる。まだ若いのに、そう眉間にシワを寄せるなよーって言ったら火に油を注ぐ様なものだから言わないで、普通に声をかける。

「どったの?そんな大声上げて?」

「え、あ、ちょっと震離待って。響と変わるから、はい」

「説明なしかよ……まぁ、いいけど……はい、変わったぞ」

明らかに面倒そうな様子の奏から、奏のデバイスを受け取り震離と話す。

(あ、もしもし……響?)

「おぉ、どうした?」

妙に他所他所しいな。何時もなら「もしもしー！響ー？」とか言ってるんだが、今回に限っちゃどうも他人行儀だ。なんかあったなこりゃ。

（あのさ、ついさっきレイから連絡があってね）

「あぁ」

（……上から一言来たってね）

……なるほど、それでお前が遅れたのか。

「そうか、それでお前はどこに居るんだ？」

（ついさっきまで、呼び出されて正式に、ね）

「そっか、その命令はあいつらにも？」

（うん、ただあの四人から内部の事が全く無いらしいから、多分、それで）

……前線に異動の俺らに、か……。なるほど、あいつのやりそうな事だ全く。

だけど、あいつらのことだ問題が起こっても上手く誤魔化してんだろうな。

「そうか、それで？お前は今どこにいるんだ？」

（ん、レールウェイの駅で、後二駅くらい）

「おおよそ３０分くらいだな、まぁ一応気をつけてくれ」

（あいよ、それじゃね）

そのまま通信をきり、奏にデバイスを返す。

「はぁ、命令出すなら直接私たちに言えばいいのに」

ため息を吐きながら文句をいう奏。

まぁ、奏の気持ちも分からなくもないし、それに……

「そう言うなよ、あの人はあの人で上に行くことに躍起になってるんだ、誰かを蹴落とす事にな」

「でも、あいつは……」

あんまり好きじゃない奴の顔を思い浮かべたんだろうな、奏の顔が暗くなる。

まぁ、六課の不祥事を報告しろって言うのは、スパイをやってこいって事だからなぁ。

それでも……

「まぁ、その場その場で判断してけばいいだろ？」

「そうだけど……」

「……大丈夫だ、なんかあったらどうにかするさ」

「……わかった」

奏が納得してくれたことだし、さて。

「震離が来るまで待ちますか」

「うん」

後は震離が来たら、八神部隊長に挨拶だ。さすがに俺と奏だけ先に挨拶するのはまずいからなぁ。

とりあえず、震離を待ってる途中に、茶髪の子供が六課の中に入っていったんだけど、あれが六課のＦＷメンバーか？

途中俺らと目があって、向こうから頭下げてきたし……多分

「六課のＦＷの子かなぁ？」

「……いや、知らんけど……やっぱりここの世界って」

「うん」

「……子どもでも前に出て戦うから凄いよなぁ」

「そうだよねぇ」

と奏と話しながら、しみじみ思う。

地球とは違うことはよく分かるけど、さすがにどうも自分よりも年下の子が前に出て戦ってるって言うのは、ちょっとどころか、かなり抵抗がある。まぁ、俺らに抵抗があっても、本人が戦うって言ったら、俺らに止める権利は無いんだけど。

「……それにしても」

「遅いな震離は？って言いたいの響？」

「ん？……さぁな」

隣でしてやったりって顔してる奏を見て、こちらも知らないふりをする。

……別に言いたいことを先に言われて悔しいとか、そんな事じゃない。……本当に。

第一話　異動と命令（後書き）

やはり、キャラ紹介とか書いたほうが良いでしょうか？
そして、相変わらず自分の文才が無くて、申し訳ないです。

キャラクター紹介（前書き）

直接、キャラ設定を書いてくださいと、メッセージボックスに来たのでここに載せます。分かりにくくてごめんなさい！

キャラクター紹介

前線組

緋凰　響　（ひおう　ひびき）

性別／男
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局武装隊・空曹
機動六課での役職／前線フォワード部隊「ライトニング分隊」　フロントアタッカー・センターガード・フロントバック
魔法術式／近代ベルカ式
魔導士ランク／空戦Ａ－
魔力光／黒
利き腕／両方（主に左）
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
誕生日／７月７日
イメージＣＶ／萩原聖人さん

性格は基本的には開放的で知らない人とでもある程度話せるが、何をするにも「面倒」とかなんとか口にしている。しかし、なんだかんだで目の前にいる困った人を男女、親交の有無を問わず自らの危険も顧みずに助けようとする性格の持ち主である。
そのため、よくケガをしているものの、咄嗟の判断能力や理解力は優れていてるため普通の人ならば死ぬであろう事故でも、被害をなるべく小さくする。
唯一の悩みがあるとすれば、相手がどんな事情を抱え込んでるかも

考えずに助けるため、さらなる厄介ごとに巻き込まれる事である。

身長は高くフォワード陣の中では一番高いが、事務員の煌より低い。
男としては髪の毛が長く、いつも後ろで縛り、髪の成長が早いことを気にしている。
その性質のため、髪を切るのをめんどくさがり、奏か震離のどちらかが、注意をしたときくらいにようやく髪を切る。
その時は一気に短くなるため、イメチェンと取られることが多い。
髪を切るときは奏が切っているとの事だが、これも髪を切るのをめんどくさがるのも理由でもあるが、一番の理由は別にあるが、詳細は不明。
あまりおしゃれ等をする気がないと思われるが、意外にも服のセンスは高い。

趣味は釣りや散歩とかで少し爺くさい・・・。
バリアジャケットは管理局の支給した一般局員のものであり、デバイスのみ二刀の刀に変更している。
カートリッジシステムは搭載されていない。

戦闘スタイルは二刀による接近戦・中距離戦ができるが、基本的に接近戦しかしない。
そして、抜刀術も使えるが、本人曰く苦手だからという事で使用することはないが……
今現在使用している刀の耐久度が低い過ぎるため、二本とも使用不可となった場合体術で対応する事もあるが、本人曰く侍っぽくないから好きじゃないとの事。
指揮官としても有能で、六課に来る前にいた武装隊では、奏と震離の三名しかいないにも関わらず、誰一人かけることなく、任務を遂行させており、かなり評価されているが、他の二人が優秀だからと言って、その功績を否定している。魔道士ランクが低い主な理由は、

魔力の保有量から来ている。

容姿は黒髪を後ろで束ね、ポニーテールのような状態になっており、束ねていない時でも腰まであるため、後ろ姿と、髪を解いた時の姿はもっぱら大和撫子とからかわれる。

天雅　奏　（あまがみ　かなで）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局武装隊・空曹
機動六課での役職／前線フォワード部隊「ライトニング分隊」　センターガード・フルバック・ウィングバック
魔法術式／ミッド式
魔導士ランク／総合ＡＡＡ
魔力光／白
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
利き腕／左
魔力変換／光
誕生日／８月１５日
イメージＣＶ／浅川悠さん

人好きのする人物で、実直かつ純粋であり、人の悪いところを鋭く指摘をするなど、人を見る目は鋭い。しかし、あまり口には出さず、心に留めることが多いかわりに、幼少期からの親友である、震離、瑞希、雪奈に対してははっきり言う。見知った相手だからという事でもあるため、三人ともちゃんと理解しているため、関係はとてもいい。物事に対し肯定的なためか、基本的に自由に動く流や、突っ

込んでゆく震離の援護をしたり、響のサポートに回ったりする。
どういうわけか、髪を切るのが得意で、震離の髪を綺麗にそろえたりすることが出来るほか、鏡を見ながら自分の髪を整えることも出来る。

戦闘スタイルは中距離・遠距離戦のどちらともやるが、主に砲撃系が得意であり、その派生など様々な術式を会得している。護身術と、小太刀二刀を幼少期の頃に学んでおり、一応は接近戦もできるが、前衛が三人もいた事から、なかなか活用されることはなかった。
自身が魔力資質を持っていることは知っているが、基本的に使い方がわからずに大して気にもしていないためあまり使用されていない。

バリアジャケットは管理局の支給した一般局員のものであり、デバイスのみ、二丁のライフルに変更されている。カートリッジシステム搭載で二丁とも6発ずつ。

胸は大きい方なのだが着痩せするタイプで、スリムな体型だが、体重を気にしており、食事には人一倍気を使っている。
容姿は腰まで届くロングヘアで薄い金髪であり、響と同じサラサラのストレートである。

風鈴　流　（ふうりん　ながれ）

性別／男
年齢／１４
役職・階級／時空管理局特殊鎮圧部隊・空曹
機動六課での役職／前線フォワード部隊「スターズ分隊」　フロントアタッカー・ガードウィング
魔法術式／ベルカ＆ミッドハイブリット

魔導士ランク／総合ＡＡＡ
魔力光／赤黒
利き腕／両方（主に右）
出身地／本出身地は不明
誕生日／２月１４日
使用デバイス／ギルガメッシュ・アークジャベリン
イメージＣＶ／民安ともえさん

普段はあまり人とあまり関わらないため基本的に一人でいることが多い。
戦闘になると普通に話し、受け答えもはっきり言うが、普段はあまり話そうとしないため、暗いイメージをもたれるが根は優しいし、自分のことを知っている人間とは普通に話す。
戦闘では近・中・遠とオールラウンダーであり、剣・銃・体・魔術を用いて戦闘するが、基本的には武器を使っての戦闘が多く、体術はあまり活用しない。
理由は、体自体小さいため有効打を決めにくいとのことだが、体術もそれなりに極めているため、武器なしでも強いが、
本人は習ったことが無く、体が覚えているらしいとのことだが詳細は不明。

男なのに女っぽい名前にさらに女顔、さらに右目が真紅、左目が蒼という事にコンプレックスを持っている。
その上身長もはやてよりも頭一個分小さく、髪の毛を少し立てているので少し男っぽく見えるが風呂とかに入ると髪の毛が濡れ、より一層女性に思われる。
特殊鎮圧部隊で何かあったらしくあまり人とかかわろうとしない。
昔の記憶がないが、本人は気にしていない様子。

趣味は料理と家事であり、料理の腕に関しては非常に上手く、食べた人全員からまた食べたいという感想を出されている。
ちなみに8人のなかで今のところ誰ともからみがない人
バリアジャケットは全身真っ黒の服装でその上に黒いコートを着ている。

デバイス設定

ギルガメッシュ　愛称は［ギル］
流が持つ大剣型のデバイス
待機状態はブレスレット
カートリッジシステムを搭載していない。
起動時は自分の身長とあまり変わらないほどの長さであり、魔力を込めて剣を振れば魔力刃を打ち出せる。
性格は忠実で戦闘中に流を励ましてくれる。流相手には話してくれるものの、それ以外の人相手には基本的にあまり話そうとしない。

アークジャベリン　愛称は［アーク］
流が持つランチャー型のデバイス
待機状態は小さく十字架が彫られた指輪である。
ギルガメッシュとは違いカートリッジシステムを搭載している。
起動時は自分の身長よりも少し小さいくらいだがそれでも大きい
カートリッジは6発だが、ガトリングの弾のように連なったカートリッジを使える事も可能。
ランチャー型のため実弾の連射はあまり効かないがそれでもかなりの威力を持っている
性格かなり人見知りだが流が相手の場合は結構喋り、デバイスが相手だとそれなりに会話をする。

叶望　震離　（かなみ　しんり）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局武装隊・一等空士
機動六課での役職／前線フォワード部隊「スターズ分隊」　ガードウィング・フロントアタッカー・フロントバック
魔法術式／ミッド＆ベルカハイブリット
魔導士ランク／空戦ＡＡ＋
魔力光／黄色
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
利き腕／右
魔力変換／雷
誕生日／２月２９日
イメージＣＶ／榊原ゆいさん

明るく気さくな性格で、知らない人とでもすぐに友達みたいになることが出来るが、それはキャラ作りというより、自身がいじめられないようにするためであり、本当の性格は、人見知りをすると言うか人付き合いが苦手な方である。事実前書の性格で拒絶なんてされようものなら、本気で戸惑う。
そうした実の姿を外では微塵も出さない点から、自身が大層な演技派である事は自覚している。

幼き頃に、剣道を習っていたが、剣道は途中でやめて以降、秘術と言われる剣術を父から学んでおり、一応父を倒してから管理局に入っているため、実力は高い。
他の人達と違い、自分のことはあまり話さないが、相手の話は喜ん

で聞いてくれる。方向さえ間違わなければ、会話で盛り上がる事も十分可能である。

戦闘スタイルは接近戦・中距離戦のどちらともやり、突撃することが多い。
気に入った魔法を見たりすれば、すぐに覚えて自己流のアレンジを加えるため、周りからは天才と呼ばれている。得意なものはなく、ほとんどのことができる。魔力光は黄色。

バリアジャケットは管理局の支給した一般局員のものであり、デバイスだけカートリッジシステム内蔵の杖に変更している。カートリッジは４発。
戦闘スタイルは、杖に巨大な魔力刃を展開させた上での接近戦や、杖を用いて、自身の魔法の操作もこなすため、様々な状況に対応出来る。

容姿は肩に触れるくらいのミディアムヘアの金髪であり、胸は他の三人に比べると一番小さい事から多少のコンプレックスを抱いている。ちなみにいくら食べても太らない体質だが、別にたくさん食べてるというわけではない。

事務組

楠舞　煌　（なんぶ　こう）

性別／男
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局事務員・一等空士
機動六課での役職／事務員

出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
利き腕／右
誕生日／２月２０日
イメージＣＶ／神奈延年さん

性格は、陽気で話し好きな楽天家。男女関係なく誰とでも親しく接し、場を盛り上げるのがとても上手い。一緒にいると非常に楽しいため、同じ事務員やロングアーチの面々からは慕われている、しかし、その騒がしさ故によく怒られているが、楽天家である故なのか怒られたって気にしない。

いつも一緒にいる優夜と響とは違い常に明るいが、その言語の端々には年不相応な言葉遣いと考え、そして女性の扱いを心得ており、他の二人が「大人ぶっている」とすれば、煌は自然に「大人びている」ため、何時でも余裕を持って行動している。しかし、傍から見ればそんな余裕は微塵も感じられない。
瑞希と付き合ってるような様子が多いが、本人は「そうだったらいいのにな」と笑っていうだけで真相は不明。ちなみに瑞希との付き合いは長くずっと同じ部隊に居る。

馬鹿っぽく見られることが多いが、事務の仕事、後輩への教え方等々、なかなか優秀な人物である。

優夜と同じ「槍術」を習っていたが、習っていたのは体運びだけなため、ほぼ独学といっていいほどの棒術を会得しており、ちゃんと習っている優夜とも対等に渡り合える。一応、立場的にまずい為、あまり模擬戦闘はしていない。

容姿はツンツンした短めの髪だが、本人曰く天然。赤っぽい髪をし

ている。

海藍　瑞希　（うらん　みずき）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局事務員・一等空士
機動六課での役職／事務員
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
利き腕／左
誕生日／１２月２２日
イメージＣＶ／花澤香菜さん

子供っぽさを持ち合わせながらも常にクールで冷静沈着だが、強いリーダーシップには従順。天然ボケな面も持ち合わせ、面倒見がいいのだがだが、おせっかいを焼くこともしばしばある。カワイイとかキレイとか、褒められるのが苦手。
普段から、そっけない態度をとり、愛想が悪いため、冷たい人、もしくは暗い人と思われることが多いため、このことを雪奈や震離がよくネタにして、からかわれている。
最初の方は、ロングアーチの面々や事務員からは、よく思われていなかったが、次第に改善されて、今では普通に仲が良い。煌と付き合ってるような様子が多いが、本人はその話になると顔を赤くし誤魔化す。ちなみに煌との付き合いは長くずっと同じ部隊に居る。

他の面々と比べると、常識人故に苦労人。掃除が得意なものの、料理はあまり得意ではない。
剣道や体術、薙刀術を一時期習っていたため、それなりに強いが、本人曰く護身術として学んでいたため、ある程度覚えてやめている。

一応、立場的にまずい為、あまり模擬戦闘はしていない。
容姿は肩まで届く白っぽい金髪のショートヘアだが、本人曰く生まれつき。胸は大きくなければ小さくなく俗にいう美乳で形がいいため、いつも雪奈に羨ましがられている。

有栖　優夜　（ありす　ゆうや）

性別／男
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局事務員・一等空士
機動六課での役職／ロングアーチ
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
利き腕／両方（主に右）
誕生日／３月２０日
イメージＣＶ／保志　総一朗さん

煌や、響達のことを常に気遣いつつも自分のことは自分で解決する芯の強さを備えている、束縛されることを好しとせず、ふらふらとどこかに行ってしまうことが多い自由人であるが、なにかと貧乏くじを引かされることも多い。響や煌の二人と比べるとおとなしい印象であり、どことなく落ち着いた雰囲気を出している。
男の中では比較的常識人であるが意外に悪ノリすることが多いため、ある意味煌よりも問題児である。
雪奈と付き合ってるような様子が多いが、本人は上手くはぐらかしている。ちなみに雪奈との付き合いは長くずっと同じ部隊に居る。
実家の槍術の継承者であるため、腕は高く。響たちとも渡り合えるが、立場的にまずい為、あまり模擬戦闘はしていない。

ロングアーチに所属しているが、基本的には事務員よりというより、ほぼ事務員でロングアーチとしては補欠のような扱いである。だが、仕事は優秀である上に、様々な情報網を持っている。事実、何となく六課の事を調べて、口の堅いティレットと響に報告したが、話のネタ的な意味で送ったために、響達を寄越せとかそんなことは微塵も考えていなかった。
ロングアーチの面々や事務員の面々とは普通に仲が良い。

容姿は、ぼさぼさの白髪だが、染めているわけではなく母親譲りとの事。

高麗　雪奈　（こうらい　せつな）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局事務員・一等空士
機動六課での役職／ロングアーチ
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本、「桜庭」出身。
利き腕／右
誕生日／８月１日
イメージＣＶ／伊藤かな恵さん

かなりの天然でボーッとしていることが多いが、その中身は、冷静で、何手も先を見通して居ながら多くを語らず、裏が全く読めない性格の上に、つかみ所がなく飄々とした態度を取っているが故に、天然と称されてしまっている。
響とは逆の強いリーダーシップで引っ張るタイプではなく、にこやかに全体を見守る包容力のある人柄。

故に、煌や優夜に指示を出せる人物ということもあって、響からは、何かと頼りにされている。更には策略家の面もある。ロングアーチの面々や事務員の面々とは普通に仲が良い。
優夜と付き合ってるような様子が多いが、本人は適当に流している。ちなみに優夜との付き合いは長くずっと同じ部隊に居る。

ロングアーチに所属しているが、基本的には事務員よりというより、ほぼ事務員でロングアーチとしては補欠のような扱いである。だが、仕事は優秀である上に、仕事が非常に早く、他の人のサポートに回ることもある。

護身術を習っているが、あくまで護身程度に留めているために、素の実力は低く、今でも瑞希や、優夜等から体運び等を教えられている。

容姿は、青いセミロングヘアにヘアピンをつけ、伊達メガネを掛けているが、これは本人曰くカモフラージュだが、あまり意味を成していない。胸は他の三人に比べると大きく、同世代の中でもトップクラスだが本人は小さくなってほしいなと願っている。

キャラクター紹介（後書き）

こんな感じです。これで少しでも楽しんでもらえれば幸いです！

第二話　「お願い」と言う名の。（前書き）

すいません！まず、今回短い事と、開始早々リリカルなのはじゃないです……不味い。これは不味い。己の文才の無さに、絶望しか感じられません。本当にごめんなさい！

第二話　「お願い」と言う名の。

――ｓｉｄｅ震離――

「無理は言ってはいないさ、ただ六課に移動したのなら少し不祥事を、ね？」

「……」

本音を言えば、声を大にして言いたい「ふざけるな！」ってね、だけど。

「勿論、無理なら構わないよ、ただ、そのときは、ね？」

「……はい」

私が……いや、私たちが断れないことを知ってて言ってるから、余計にたちが悪い。

だけど、命令だと不味いからお願いするような感じで言ってるのが、余計に腹が立つ。

「いやぁ、優夜君や、煌君達も六課に異動しているんだけど、なかなか起きないらしくてね、それでどうしたものか？なぁんて、考えてる最中に君たち三人も六課に異動って連絡が来たときは、正直驚いたんだ」

「……」

「これは神が……いや、聖王陛下が私に上に行きなさいという、導きだと思えて仕方ないんだ」

何が、導きなんだろう？

ただ、他人を蹴落してでしか上がれないくせに。他人の粗を見つけることしか出来ないくせに。

こいつに比べたら、響は……

「震離君？聞いてるのかい？」

「……はい。ただ、私たちが六課に言って情報を送るということになると、あまり表立ったことは出来ないと思います」

「ほぅ、それはどうしてだい？」

「……八神はやて二等陸佐は感の鋭い人物と伺っております。それに自身が他の要人に睨まれているということを自覚して、新たに部隊を立てたのならば、おそらくこういうことには鋭いかと」

「……ふむ、たしかにねぇ」

そう言って顎に手を当てて考え始めた。正直見ててムカツクんだけど、それでも顔には出さない。顔に出して変な不信感とかもたれたら、後々絶対になんかしてくるだろうし。

それよりも、私自身驚いてるのは、八神はやてさんの事はあまり知らないから、響の言ってたことの受け売りをそのまま喋ったんだけど、案外覚えてるものだね。

けど……これで、「やらなくていい」なーんて、言われたら万々歳なんだけど、な。

「うん、よし、決めた。既に向こうに言った四人のデータと共に、定期的に送ってくれ」

「……はい。具体的にはどのペースで？」

「うん、二ヶ月に一回の、年６回だ。ただし、緊急の情報とかはすぐに送ること？まぁ、これは既に向こういる４人にも連絡を入れてることなんだけどね」

年６回で、緊急時の通信のみ、か……まぁ、これくらいなら問題ないな。

はぁ、響と奏になんて言おうかな。従ってくれるけど多分、本音じゃ納得しないだろうし。

あぁ～あ、せっかくの半分以上が同じ部隊に揃うと思った矢先にこれだ。正直嫌になる。

「了解です。では、そろそろ失礼いたします」

「うん、では、よろしくね？そして……」

「……」

「私の「お願い」を聞いてくれて本当にありがとう。別に無理はしなくてもいいんだよ？」

「いえ、無理はしてませんよ。ただ、「好き」でやってるだけですから。では、さすがにそろそろ遅刻しそうなので、これで失礼します」

「はい。それではお願いしますね？」

「……」

敬礼をして、さっさと部屋から出る。一秒でもあいつの顔を見たくなかったから、少しでも早く。

廊下に置いといた荷物を持って、すぐに響達に連絡を入れて、それで駅に行って、急がないと。

――――――――――――――――――――

――ｓｉｄｅ響――

「なるほど、「お願い」ねぇ」

「うん、そう、それでコッチに来るのに遅れた」

「まぁ、そりゃ仕方ないさ、ご苦労様、スマンなそんな役割させて？」

目の前でブスッとしてる震離に労いの言葉かけるけど、正直それでも不満たらたらだ。

まぁ、無理も無いか。本当なら俺が行って、話聞かなきゃならんのにな。

「別にいいよ。ただ、響とか、奏が行ったらもっと無理な事言われ

てたかも知んないし」

「そんなこと無いって、言ってあげたいけど。正直否定仕切れないね。ってか本当にごめんね？」

ブスッとそっぽを向く震離の頭に、奏が手を伸ばして金色の髪をくしゃ、と撫でた。

「え、ちょ、奏！？」

「ほらほら、いい子いい子ー」

ニコニコ笑いながら、震離の頭を撫でてる。ってか、奏もまんざらじゃねぇな。久しぶりに見たわ、こんなにニコニコ笑ってるところ。まぁ、最近任務続きだったもんな……。というか、震離よ。

「いやいや言ってる割には、嫌そうに見えないんだが？俺の気のせいか？」

「え、あ、違っ！」

「フフフ、いい子いい子ー」

「ちょ、もう！」

二人のじゃれ合いを見てて、自然に口から小さくため息が漏れるけど、疲れとかそういうものではない。

まぁ、たまにはこんな日も悪くはないな。さて、と。

「いい加減戯れてないで、そろそろ挨拶にっ！？」

頭にガツンと入り体を突き抜ける衝撃。

「……何やってんだよ、お前らは？」

殺気も気配も何も感じなかったから、気付かなかったし。意識の外から打ち込まれたからすごく痛い。

頭を押さえて膝をついてたら、なんか話が進んだ。

「あ、煌じゃん。久しぶり」

「おぉ、お二方も前見た時よりも一段と綺麗になったじゃん」

「褒めても何も出ないよ？それより、そんなこと瑞希に聞かれたら不味いんじゃない？」

「その点はご心配なく。居ないから言ってるだけだし」

震離と奏が煌と会話してる時に、頭抑えながら顔を上げると。そこには腹がたつほど笑顔の煌が立ってた。その手には自分の背丈くらいの棒を持って。というか。

「お前なぁ俺だったらいい物の、俺とか優夜以外の人を、後ろから襲ったら間違いなくその人はブチ切れるぞ？」

「あっはっはっは、一応事務員として、六課の玄関前に変な三人組が居るって言われて来てるからな。一応対策兼どうせお前らだろうなって予測を立ててここに来たんだ。お前じゃなかったら打ち込まねぇよ」

煌のこの言葉に、思わず苦笑いを浮かべる。裏を返せば……まぁ、ありがたい事を言ってるんだが、それでも痛いもんは痛い。

「……質悪いな」

「ほっとけ」

ケラケラと笑う煌を見て、怒る気力が一気に削がれる。多分普通の人だったら間違いなくブチ切れてんだろうけど、付き合いが長いからか、怒る気すら沸かない。まぁ、それ以前に怒っても聞かねぇから疲れるだけだしな。俺が。

「で、これからお前らどうするんだ？」

「ここの部隊長に挨拶に行くんだよ。さっきまで震離を待ってたしな」

「あー、もしかして、もしかする？」

軽いため息を吐きながら話す煌の言葉に、俺の後ろで震離と奏が深い溜息を吐いた。

まぁ、これで言いたいことはだいたい伝わったろ。

「……まぁ、あとで話すよ」

「そっか、挨拶に行くってんなら案内してやろうか？」

「あぁ、頼むよ」

「あぁ、任せろ」

そう言って、俺は地面においてた荷物を手にとって、煌のあとに付いて機動六課へと足を向ける。
そして、急に煌が立ち止まって。

「その前に一応受付で手続きしてからな」

「はーい」

震離が返事をしたときに、思わずめんどくさいと思ったのは内緒だ。

第二話　「お願い」と言う名の。（後書き）

次回こそは！次回こそははやてさんが出ます！上手く行けばＦＷ陣ともう一人の異動の人も会話に参加します！　はい、ごめんなさい。だけど、次回は少し長めになるかと思いますが、その時は「しかたない、読んでやるかー」位の感じで読んでください。

第三話　とりあえず移動と挨拶を（前書き）

やっとリリカルなのはのキャラクターが出せた！
ごめんなさい！自分の文才がなさすぎて、出すまで時間がかかってしまって！それでも、楽しんで頂けると幸いです！
相変わらず、文才無くて申し訳ないです

そして、約一週間ぶりの更新で申し訳ないです。もっとスピードを上げなければ！

第三話　とりあえず移動と挨拶を

――ｓｉｄｅ煌――

「……なぁ、煌よ？」

「あんだよ？」

受付でひと通り手続きをやらせた後、響達三人をはやてさんの所に連れて行く途中に隣を歩く響に声を掛けられた。というか響よ？

「……お前、道行く人をいちいち見てたら失礼だと思うんだが？」

「少し気になったから見てただけだ。というか、人の視線を追うなよ」

まぁ、いい加減気づくよなぁ、後ろの二人は普通に会話してるから気づいてないけど。
やっぱりお前は気づくか、この部隊の異常さに。

「まぁ、はやてさんや他の隊長にあって話を聞けなかったら、俺らに聞け、今説明すんの面倒だ」

「……了解」

ため息吐きながら返事をする響を見て、思わず苦笑いを浮かべる。

まぁ、普通に気づくし、明らかに面倒だって事が分かるから仕方がない。
でもさ。

「案外楽しいもんだと思うぜ？」

「……そうか？というか俺らの部隊編成が気になるんだけどな」

「何で？」

……珍しい事をって、まぁ響自体指揮官としては有能だし、一応震離ちゃんと奏ちゃんの二人を指揮してたから、この先の編成が気になるのか。まぁ、普通に考えて基本的には変動しないと思うけどな。

「いや、さ、この前のレールウェイの事件さ、少し気になったから調べたんだが」

「あぁ」

「……確実に一人余るだろ？」

「……はぁ？」

一人余るって……あぁ、なるほど。響たちは知らないんだな。
まぁ、とりあえず教えとくか。別に響と奏ちゃんの二人は驚いても顔には出さないけど。震離ちゃんは……すっげぇ驚くだろうし。それに簡単に伝えとかなきゃならんしな。

「……響」

「なんだ、改まって？」

「今回の異動さ、一つ「不安要素」が出来た」

「……」

その言葉に反応したのか、ついさっきまで、後ろで話しをしていた二人も俺の話に耳を向けた。

特に響に関しては、一瞬だけ目が据わったけど、すぐに戻した。多分、予想はしてたみたいだけど、本当にしてくるとか思ってなかったんだろう。実際優夜も本気で驚いてたし。

「まぁ、細かい事は後で話すけど、とりあえずその子は、地上からの異動で総合ＡＡＡのエリートだよ」

「……その子ってことは年下か？」

「さっすが、響。その通りだ」

俺の言葉だけで、そこまで読むかね。それに別のことも感づいたらしいし、やっぱり感が鋭いよ全く。

「それで、その子は「あいつ」の回し者か？」

「さぁ、正直わからん、優夜も俺も調べてるんだが如何せん、納得の出来る部分が多すぎてな、逆にさ」

「……分からないのか」

「……あぁ」

実際、その子の事をいくら調べても、尻尾が掴めなくて正直白旗揚げそうなくらいだ。まぁ、これ以上調べようと思ったら調べられる、ただでさえ危ないこの部隊を俺らのせいで危険に晒したら元も子もない。……最初は軽い気持ちで来たのにな。まぁ、それでも。

「……その子は悪い子じゃないかもな」

「何で？」

「お前らに会う前にその子と会って目を見たけど、多分すごくいい奴だと思うしな」

「……そっか」

「あれ？」

一応ボケを込めて言ったのに、響が妙に納得して笑ってる……いや、そこは「適当だろ！」とか、なんとか言うべき所だろう！？なんか、怖いじゃねぇか！

「気にすんなよ、でそろそろ着くんじゃないのか？」

「え、あぁ、もうすぐそこだな」

とりあえず、気をとりなおして三人を部隊長室前に連れて行く。その途中も、響が「やっぱり、お前らしいな」って呟いてたから、なんか気恥ずかしくなってきた。

くそぅ、普段なら余裕を持って勝ってるのに、なんか負けた気がしてならん。

「とりあえず、適当に挨拶してこいよ」

「あぁ、悪いな案内させて」

「気にすんなよ、一応こう言うのも事務員の仕事の内だ」

響の前で笑って見せるけど、申し訳ないと思ってるのか、どうも暗い雰囲気だけど。
すぐに何時もの顔に戻して口を開いた。

「そっか、優夜達に宜しく言っといてくれ」

「あい、わかったよ」

そう言って、ついさっきまで来た道を戻る。俺が角を曲がる頃には、三人とも「失礼します」って言いながら中に入っていった。
今頃、「四人目」と合ってる頃か。というかあの子、……どっちなんだろうか、ガキの頃の響と優夜を見てるみたいで、妙に懐かしかったな。それに――――おっと」

途中から声に出てて、自分でも驚く。まぁ、話した感じ少し硬すぎるんだよな～、俺よりも階級上なのに敬語使って話してたし、まぁ、しばらく退屈せずに済みそうだなって、あ。

「いかん、震離ちゃんに、伝ーえーてーなーいーけーどー……、まぁ、大丈夫だろう年上だし子供じゃないだろうし」

まぁ、その時は響なり奏なり、どっちかがフォローするだろうしな。
さて、さっさと仕事終わらせて、優夜達の手伝いして、夜はあいつ

んとこに突撃かますか……麻雀もって。そうだな、負けた奴は……
どれぐらい関係が進んだのか言わせるか、ね。

――――――――――

少し前に時間は遡る。響達が外で煌と再開し、はやてのいる部隊長
室に向かうときに時間はさかのぼり、そして。

――ｓｉｄｅはやて――

「ようこそ。私が機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長。
八神はやてです」

「風鈴流空曹であります。ただ今をもちまして、機動六課へ出向と
なります。宜しくお願いします」

ふむ、この子が地上から異動してきた子なんや……見た限りじゃ、
監視者っぽくあらへん。
ほんなら、他の三人が監視者なんかな？だけど、本局からやし、第
一監視って「誰が」するんやろうか？
んー、まぁ今決め付けることじゃないし……それよりも流の……

「八神部隊長？どうかされましたか？」

「ん、あぁ、何でもあらへんよ。それより流は……その……」

「……？」

「……女の子なん？」

「……はい？八神部隊長自分は「男」ですよ」

「へ……？あ、あぁ……ゴ、ゴメンな？流？」

瞬間、空気が変わったというより、空気が凍った。
事実流が返事をしたとき、先程まで無表情に近かった顔が笑みに変わったからだ。
勿論、その目は笑っておらず、どちらかと言えばショックを受けているように見えた。
そして、肝心のはやてはというと。

「あは、ははは」

「……」

あかん、失敗した。もしかすると監視者かもしれん子なのに、失敗した。
こう言うことははじめが肝心なのに、これがきっかけで私に対して不信感を持って、あることないことを報告されたら……
いや、まだ、挽回出来るかもしれん！

「八神部隊長？」

「え、あ、どうしたん？」

「いえ、自分はこの後どの小隊に入ればよろしいのでしょうか？」

「へ、あぁ、それはやね」

そっか、流はまだ知らんないんやね。自分以外にも後3人異動してくる子が居ることを。

まぁ、自分が異動するのに他の人のことまで調べられる余裕はないし、仕方ない事や。

「流の他に……」

「失礼します」

「お？」

噂をしたらなんとやら、もう来たんやね。

さっき煌から連絡来たとおりやね、「すぐに連れてくる」って言ったし。

それでも、これからいろんな意味で大変になりそうやねー。

それに明日は別次元の世界にロスト・ロギア回収にいかんといかんし。まぁ、場所が場所やからすごい楽しみなんやけどね。

第三話　とりあえず移動と挨拶を（後書き）

自分で言うのもあれですが……取り返しの付かないことをｗ
個人的にロストロギア回収の件は大好きです。ドラマＣＤも持ってますしねｗ
ただ、一つ問題があるのは前線組に所属している４人は確実に参加するとして、事務組の４人はどうするか悩んでおります。
と言っても、まだ時間があるのでゆっくりやっていきます。それでは。

第四話　地雷を踏んで、へこたれそう（前書き）

最初に言います。多分ってか、今後も含めれば一番短いです。

深夜テンションで書き上げたものなので、誤字脱字があるかと……しかも、すごく短くて次回の頭に持ってこようとも考えたんですが、多分戦闘パートが難しそうで確実に書くのに時間が掛かる可能性が高いので、キリの良いところで出しておきます。

相変わらず文才がないですが……そして、何よりも短すぎますが……本当にごめんなさい。

第四話　地雷を踏んで、へこたれそう

――ｓｉｄｅ震離――

「そっか、優夜達に宜しく言っといてくれ」

「あい、わかったよ」

そう言って煌は来た道を戻っていった。
別に事務員だし、中まで案内してくれたらいいのに、そしたら紹介とかいろいろ省け……ないか。
それよりも、私が一番気にしてるのが「四人目」の性格とかどんな容姿とか教えてくれても良かったのに。

「とりあえず、中に入って挨拶だけど……一応確認だ、大丈夫か？」

「私は問題ないよ。震離は？」

「ん、多分大丈夫」

「了解、それじゃあ、失礼します」

とりあえず本当のことを言っとく。まぁ、何時もの調子で話ししたら問題ないかな。
だけど、新しい子と仲良く慣れたらいいなぁ。
そんなことを考えてたら、響が扉をノックして、扉を開ける。
そして、まず最初に目に飛び込んできたのは。

「初めまして、私が機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長。八神はやてです」

机に座って、優しそうに笑みを浮かべてる女の人――――ううん、八神はやてさんと、その前に立っている茶髪の子がいた。八神はやてさんは、良くメディアに顔を出してる有名人だから、顔はよく知ってるけど、実際見るとなんか感動する。実際優しそうだしね。もう一人の子は――――

「震離、挨拶」

「へ？」

そう言われて、隣の奏や少し前に立つ響を見ると敬礼して立ってる。ということは――――あっ！

「え、あ、えっと、本局第６武装隊から、い、異動してきました、叶望震離一等空ひひぇす！」

「……噛んでる」

隣にいる奏に指摘されて、顔が熱くなってくるのを感じる。正直な話。穴があったら隠れたい！穴がなかったら掘ってでも隠れたい！そんな気持ち。

「あはは、別にそんなに緊張せんでもええのに」

「……申し訳ありません、八神部隊長」

「あはは、別に堅苦しく呼ばなくてもええよ、私のことは「はやて」でええで？その代わり私も名前で呼ぶし」

「……はい、はやてさん」

まだ顔の熱が引かなくて、はやてさんの顔を見れない。正直久しぶりだこんなに恥ずかしい思いをしたのは。

奏はまだ苦笑いを浮かべてるのはまぁ、仕方ないけど……前で「ざまぁ」みたいな顔してる響を見るとすごく腹がたつ！というかムカつく。

「……挨拶が遅れました、自分は本日付けで機動六課に異動になりました風鈴流空曹です」

「流か……こちらこそ、宜しく」

「はい、こちらこそ宜しくお願いします」

深々と頭を下げる流を見て、ようやく熱の下がった顔を上げて流の顔を見る。

それで気づく。鮮やかな蒼い瞳と明るい紅の瞳を。正直蒼い目とかは見たことあるから、珍しくもないけど、紅い瞳は見たことないから正直すごく綺麗だ。

「……あの叶望一等空士？どうかされましたか？」

「え、あ、ごめん、流の眼の色が綺麗だったから、ごめんね？」

「……はぁ」

しまった、一瞬だけど暗い顔させちゃった。地雷を踏んだかな？いや、まだ踏みかけただけ、まだ挽回できる！よし、私のせいで一瞬だけだけど、悪くなっちゃった空気を変えよう！

「え、あぁ、そうだ、流？」

「はい」

「私のことは震離でいいよ、同じ女の子同士だし！」

「…ぁ」

ん、はやてさんから小さく声が聞こえたけど……気のせいかな？何はともあれ、これで空気が変わればいいかな！だって流だって、私が声を掛けてから笑顔になったし！もーまんたい！

「叶望一等空士？」

「ん、やだなぁ、私のことは名前で……」

「申し訳ありません、自分は「男」です」

「……え〝っ！？」

今はっきり空気が割れた音が聞こえた、ビシィ！って、え、何、私地雷踏んで、連鎖爆発させた？

え、え、えーーー！

お、お、落ち着け私！まだ、まだ、まだなんか手が！ほら、誰かが言ってたし、ラケット持って「諦めんなよ！！」って！

「あ、えっと、そうや、ＦＷメンバーにまだ挨拶してへんよね？」

「え、あぁ、はい、まだしてませんよ、なぁ奏？」

「え、えぇ、まぁ、直接こちらに挨拶に来たので、まだですね」

「そ、そか、じゃあ私が案内するから四人とも付いておいでー」

そう言って、はやてさんが上着を羽織って外に出て行った。その後を流も追って行ったけど。

さっきと打って変わって、挨拶をした時みたいに無表情だったのが印象的だ。

それよりも。

「……お前、何やってんだよ！？」

「……わかんない」

「……さすがにフォローしきれないよ」

「うん、ごめん」

ツーって、両目から温かいものが。あ、涙でた。

第四話　地雷を踏んで、へこたれそう（後書き）

……多分、オリキャラ８人の内、一番使いやすい子なので楽です。
そしてなにより書いてて楽しいｗ特に流との絡みが楽しいですｗ

ごめんなさい、自己満足です！本当にごめんなさい！
そして、短くてごめんなさい！その代わり戦闘パートは気合を入れるので！

そして、学校から帰ってきたら、訂正するかもしれません！

第五話　重い空気とＦＷ陣との出会い。（前書き）

基本的には、響視点で話を進めていきます。
それで視点変更の時は「ｓｉｄｅ――」といった具合で変更していきますのでよろしくお願いします！
そして、相変わらずの駄文ですが、楽しんで頂けると幸いです！

第五話　重い空気とＦＷ陣との出会い。

あれから数分。震離が見事に失敗してから数分経過したんだけども。
現在の状況はというと。

「……」

「……」

「……」

うん、言わなくても分かるくらい皆静かだ。
俺の少し前を歩く流は流でずっと無表情だし、後ろを歩く震離は軽く泣いてるし。それを奏が慰めてて、はやてさんは、気まずそうにチラチラと視線だけこちらに向けてるし。
簡単にまとめたらカオスな状態だ。
まぁ、流の性別に関しては初見じゃ分からなくて、言葉遣いとかで適当に聞けばいいやと思ってた俺にも非はあるけど、まさかここまで冷えた空気になるなんて誰が予測したか。

「そ、そうや！」

気まずいこの空気に耐え切れなくなったのか、はやてさんが振り返って声を掛けてきた。

「グスッ、どうかしましたか？」

「いきなりで悪いんやけど、明日は別次元の世界にロスト・ロギア

回収にいかんといかんのよ。場所も場所やから、一緒に来て貰えるか？」

「はい、構いませんが、場所はどこになるんですか？」

「フフフ、実はな？第９７管理外世界なんや」

「おぉ！」

「えっ？ほんとなんですか？」

第９７管理外世界って、早い話が……

「久しぶりに地球にいける！」

「震離、静かに」

後ろで奏が震離に注意してるけど、様子を見るからにあまり聞いてないなこりゃ。

それにしても地球か、前に戻ったの三年前の盆の時か。去年とその前は行けなかったしな……。

……そっか、もう二年たったんだ。

「……緋凰空曹、どうかしましたか？」

視線を下に落とすと、流がコッチを見ていた。相変わらずの無表情だ。

……苗字と階級だと呼びにくくないのかね？一応注意を促してみるかね。

「なんでもないさ、それよか流よ？」

「はい、なんでしょうか？」

相変わらずの仏頂面に、隣にいた奏が苦笑いを浮かべてる。
まぁ、後ろで舞い上がってる震離みたいに、「なんでしょうか？」なんて笑顔で言われたら逆に怖いがな。
また地雷でも踏んだのかなって思うし。ま、それよりも。

「……俺らの事、名前で呼べとは言わないけど、せめて苗字で呼んでくれないか？」

「……いえ、しかし」

「これから同じ部隊で働くんだ。遠慮も無しで行こうぜ」

……これで、少しは砕けてくれると有難いんだけどな。
俺の言葉に少し困惑した表情を一瞬だけ見せた後、すぐに何時もの顔に戻して、俺の方を向く。
んー、やっぱりまだまだ難しそうだなぁ。

「……はい、善処します」

「了解。そうしてくれると有難いよ」

小さく頷いた後、すぐに前を向いて、足を進めて行った。
……やべ、昔の震離を見てるみたいだな、あの頃のあいつは本当に。

「あ、流、私も苗字で」

「黙れ震離」

後ろで舞い上がったままのテンションで話す震離を、さっさと切り落とす。

「ひどっ！？」

「……調子に乗ると直ぐそうなるから」

「奏も酷くない！？」

いや、どっちも悪くない。お前さっきの事もう忘れたか。
それでさっきまで、空気が重くなってたんだろうが。

「あはは、ほら四人とももうすぐやから付いてきてなー」

「了解です」

そう言ってはやてさんの後に続いて、俺らも後を付いていく。
だけど、前線メンバーと会うって事は勿論あれをしなきゃならない。

「……メンドくせぇ」

「……どうかされましたか？」

「なんでもないよ」

隣で歩く流に聞かれたかと思って、一瞬焦るけど。
まぁ、聞かれてても良いかね。だって、この後の挨拶の後必ずと言っていいほどやるんだろうし、模擬戦を。

……あぁ、面倒だ。流は知らんが、奏と震離は俺と同じくらいのランクに設定されてるから、余計に頑張らないといけないんだろうなぁ。

……あぁ、面倒だ。

そんなこと思ってるうちに、なんか目の前で、シミュレータを起動している戦技教導隊の制服を着込んだ女性と訓練服を着た四人がいた。まぁ四人の方はＦＷ陣だろう、この前調べたときに画像に乗ってたし、それで、もう一人の方は有名すぎる人だから、俺でも名前を知っている。というか、それ以前に。

「おーい、なのはちゃーん」

「あ、はやてちゃん」

互いに呼び合ってるお陰で間違えそうにないや。
それで、はやてさんが俺らのことを高町なのはさんに話してるうちに、コッチはコッチで。
ＦＷ組の方に向かう。ちなみに流も連れてきた。こういう時に挨拶してるほうが楽だからな。

「よっ、君らが六課のＦＷ陣？」

「はい、そうですけど、貴方達は？」

近づいていって声を掛けると、オレンジの髪を２つに下げた子が返事をしてくれた。
というか、青い髪の子はまぁ年的に妥当だとして、後の二人の赤い髪と桃色の髪の子が流よりも小さい事に内心驚いてたのは内緒だ。

「今日からここに異動になったんだ、ちなみに俺の名前は緋凰響、年は１７だ。宜しくな」

ちなみに階級を抜いたのはわざとだ。オレンジの子と青い子はともかく、ちびっ子二人に、なんか敬語を使わせたくないからな。というか正直嫌だ。……まぁ、後でバレるけど、その前に少しでも仲良くなってりゃ後々接しやすいしな。

「あ、こちらこそ宜しくお願いします。私はティアナ・ランスターで、年は１６歳です」

「こちらこそ宜しくお願いします。私は天雅奏で、年は響と同じ、あと基本的に敬語じゃなくてもいいよ、これから一緒にやっていくんだしね」

そう言ってティアナに笑いかける奏。正直さすがだと思う。俺が言わなくてもちゃんとわかってくれてるから、本当に助かる。階級云々の話だとどうしても硬くなるだろうし、特にちびっ子二人が。

「えと、エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「同じくキャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

二人の挨拶に思わずコケそうになる。となりで奏は苦笑いを浮かべてるし、震離は姿が見えんし。

というか、俺と奏とティアナの会話を聞いてなかったのかな？

……まぁいい、そっちがその手ならばコッチはこの手だ！

「えと、宜しくな、モンディアルとルシエ？」

「……響」

できるだけ笑顔で受け答える俺の姿を見て、後ろで苦笑いを浮かべるティアナ。
奏に至ってはジト目で俺を見てる。ええぃ！そんな目で見るな、俺だってなんか、ねぇ？って状態なんだから！

「あの、できたら名前で呼んでもらえますか」

「あたしも、できれば名前で」

うん、予想通りの反応だ。やっぱり、コミュニケーションに飢えてるんだろうな、やっぱり。
俺がこれ位の頃って優夜と煌と震離とで、裏山駆け巡ったり、道場で試合したり……うん。
まぁ、年上ぶってみるのも悪くはないな。

「うん、タメ語で話したら名前で呼ぶよ」

そう言って少し間ができる。ちなみに後ろからの視線が一つから二つに増えて正直つらくなってきた。

「そんなこと出来ません」

とエリオが答えると、キャロも同じなようで首を縦に振る。
うん、絶対にタメ語で呼ばせて見せる！

「……燃えるとこ間違ってるよー」

言うな奏。

――――数分後。

数分の割には結構いろいろあったけど、結局タメ語で話させた。頑張った俺！

敬語は周囲に壁作るからね。こんな頃から壁だらけの場所じゃいろんな意味で良くない。

……一人論外が後ろで待機してるけどね。

「じ、じゃあ…ひ、響」

「響……さん」

うん、やっぱり何処でも男女の差って出るもんだな。エリオはともかく、キャロの方が話しにくそうだ。

慣れれば問題ないけど、それまでは、まぁ、キャロの方は奏や震離達に任せといて。

「うん、改めて宜しくなエリオ、キャロ」

名前を呼ばれたのが嬉しいらしく顔を見合わせて笑ってる。なんだろう、なんか逆に心配になってきたのは気のせいか？まぁ、いいや。というか。

「……もう一人の青い子は？」

「え、スバルはここに……って、あれ？」

とさっきまでスバルって言う子がいたであろう場所をティアナが見る。
なるほど、あの子はスバルって言うのか、なんて、考えながら辺りを見渡すと。

「マジで！スバルとティアナって、主席で通ったんだ！」

「うん、って言うか震離も次席なんだしすごいよ！」

……問題ないな。そう思って視線をティアナに持ってくと、目があった。
うん、考えてることは同じでした。

第五話　重い空気とＦＷ陣との出会い。（後書き）

ここまで呼んでいただき、ありがとうございます！
朝方のテンションなので、誤字脱字等があるかもしれません。毎度毎度ごめんなさい！

そして、何時になったら模擬戦に入るんだよ？と思ってる方がいたら、本当にごめんなさい！次回こそ、次回こそ模擬戦です！ただし相手は人数×５のガジェット群ですけど！

第六話　模擬戦用意（前書き）

はい、駆け足で描いたせいでかなり雑かもしれません……本当に申し訳ありません。そして、模擬戦やるよって言いつつまだやってないという……本当に申し訳ありません！

第六話　模擬戦用意

……うん、なんて言えばいいんだろう。波長が合うんだろうな。なにか別なものが

……多分ね

と念話も何もしていないのに、ほぼ初対面のティアナとアイコンタクトだけで意思疎通が出来ました。

ちなみに奏は奏で、苦笑いを浮かべてるし、流はエリオとキャロに名前と階級とランクを言ってたけど。同じようにタメ口で良いみたいなこと言ってた。

代わりに自分もできるだけ頑張るって「意訳」するとそんな事言ってた。

まぁ、それよりも。

はやてさんとの話も終わったのか、なのはさんがコッチを見てたから奏と流を呼んでなのはさんの元に足を運ぶ。やっぱり怒ってるかな？

「高町隊長、挨拶が遅れてしまい申し訳ありません」

「あ、ううん、別にいいよ」

笑いながら許してくれた。うん、階級云々気にしないタイプの人で何よりだ。

たまにいるからなあ、挨拶に来なかったらふて腐れる奴とか……っと、そんなことよりも。

「ありがとうございます、自分は本日付けで、本局第６武装隊から、

異動してきました、緋凰響空曹です」

「同じく天雅奏空曹です」

「自分は風鈴流空曹です」

「え、えぇ！？」

後ろで三人くらいが驚いてるのは放っといて。ひと通り挨拶を済ませる。ちなみに震離は未だにスバルとの話と夢中らしく、コッチに気づいてすら居ない。ていうかなんか、モニタ展開してスバルになんか教えてるし。

まぁ、いいか。一応後で恥かくのあいつだし。

「うん、こちらこそよろしくね、それで早速なんだけど」

「はい、なんでしょうか？」

あー、この流れだと、分隊発表か、模擬戦だよなぁ……誰とやるんだろうか？

個人的には、奏と震離と流の三人の現在の実力知りたいから、ガジェット辺りがいいんだけど。

まぁ、その時は言えばいいか。

「響はライトニング分隊で、他の三人はこれからの模擬戦で決めるからね」

……はい？

「……失礼ですが高町隊長？」

「うん、何かな?あ、私のことも「なのは」でいいよ」

……それは後でもいいんですけども、それよりも。

「……なぜに俺だけ既に確定してるんですか?」

「うん、それは、はやてちゃんから」

「それは、ライトニング分隊で、2人の新人指導をしてもらうって言うのが一つと、ライトニングの隊長のフェイトちゃんは執務官の仕事が忙しくて何時も居られるわけやあらへんし、副隊長のシグナムかて、あんまり居られるわけやないからね、それで小隊指揮の経験のある響をライトニングに配備しとくって訳や」

「……はぁ、了解です」

……すっごく長い説明ありがとうございます。というかそれなら四人しか居ないんだし、一つの小隊にまとめればいいのに。なんて思ったけど口には出さない。

だって、後ろでエリオとキャロが喜んでるんだもん。目なんかキラキラしてたし。そんな時に否定的なこと言いたくないし。

「何時もと変わらないんじゃないの?」

「……うっせ」

隣でニコニコ笑う奏が、若干疎ましく思ってしまった。だってねぇ?早い話が上二人居ない事多いから、ライトニング任せた、って言ってるようなもんだぜ?いろいろ大変だから正直面倒だけど、まぁ、

エリオとキャロが喜んでるし、まぁいいか。

「それで、響達四人にはこれからガジェットと模擬戦してもらいます」

「あー、了解です」

「それで数は何体くらいですか？」

「うーん、そうだね」

奏の質問に少し考えるなのはさん。まぁ、少なければ楽だから少ないほうがいいんだけどね。勿論弱いヤツを。

「うーん、響達四人の事を考えて、動作レベルA、攻撃精度Bで20体なんだけど、いけるかな？」

……わぁ、メンドくせぇ数も多けりゃレベルもなかなかだ。

だけど、まぁ。

「大丈夫です」

「そう、じゃあ準備してくれるかな？」

「了解」

と俺と奏と流で返事をする。

まぁ、ガジェットごときに遅れはとらんだろう。だけど最初のうちは少し個人戦してもらうけどね。

さぁ、頑張ろうかね。

ちなみに、震離は俺と奏が呼ぶまでスバルとの話で全く気づいてなかった。
それで、挨拶は終わったって伝えたら、敬礼しながら頭下げてなのはさんに謝ってた。

――――――

さて、廃ビルの中で四人で集まる。ちなみに制服のままで異動してきた。
なんか明日出張だから今日は軽めの練習で終わる予定らしい。それで、終わるところで俺らがやってきたから模擬戦やってから終わるとのこと。
さて、今廃ビルの中で集まってるのは、勿論情報交換のためだ。俺は二人のこと知ってるから問題ないが、流の為だし、ランク知ってたら作戦も立てやすいしね。ただ五分しかないから少し急ぎ足だけどね。

「それで、作戦の前に、各々前の部隊のポジションと、リミット付きなら、元のランクと現在のランクを報告、はい奏から」

「はい、私は基本的に、フルバックかセンターガードで元のランクは総合ＡＡＡ、今はＡに落としてる」

「あい、了解、次、流」

「はい、自分はフロントアタッカーかガードウィングをやっていました、自分も元のランクは総合ＡＡＡで今はＡです」

「はい、次、震離」

「ん、私も流と同じで、ランクは空戦ＡＡ＋で、今はＡだよ」

「あいわかった。後俺はフロントアタッカーかセンターガード、ランクは空戦Ａ一でリミット無しだ」

っと、これで全員のポジション現在のランクを確認できたけど……うん、被ってないけど、正直めんどうだな。それにもしかすると…確認とっとこう。

「とりあえず、ランクは分かったけど俺はともかく他の三人はどんぐらい落ちたのか自覚はあるか？」

「あんまない」

「……うーん、私も今のところはあまり無いかな」

「自分もです」

あー、なるほどなるほど、俺もリミットついてたら、まだなんか分かったかもしれんけど、ランク低いから付けられること無いしなぁ。……だけど、更にまずいな。仕方ない。

「とりあえず最初は全員ってか三人は自由に動け」

「え？いいの？頑張るよ私？」

「おぉ頑張れよ震離、ただし一度エンカウントして、逃がしたらそこまで、その後俺ん所に集合な」

「はぁ？」

説明した側から、隣で震離が首を傾げる。……お前頭いいのに変なところで鈍いよなぁ。

まぁ、いいさ。

「話はそんだけ、とりあえず三人は必ずガジェットとエンカウントしろよ？それで逃がした場合は深追い禁止、逆に追撃してくるんなら飛んで撤退、以上」

と俺の説明と同時に目の前にモニタが展開し、なのはさんの顔が映る。

我ながらドンピシャだったから、なんとなく嬉しい。

「そろそろ始めるけど……って、奏と震離どうしたの？」

「あぁ、いえ大丈夫です」

「私も大丈夫ですよー」

なのはさんの質問に二人揃って苦笑いを浮かべる。まあ、俺の指示のせいでこうなったんだしなぁ。

それで、相変わらず流は無表情だ。まぁ、まだ初日だし時間を掛けて距離を詰めるか。

それよりも先に。

「うん、じゃあ、始めようか」

「了解です」

と俺を含めた四人の声が重なる。
さっきまでの雰囲気とは違って、全員仕事モードだ。

「……あまり緊張しないで、何時も通りに。ね？」

「はい！」

「それじゃあ……初め！」

「セットアップ！」

同時に全員バリアジャケットを装着するためにデバイスを起動した。
さぁて、頑張って行ってみようか！

第六話　模擬戦用意（後書き）

さて、次回こそ模擬戦でちゃんと戦闘を書きます。
無駄に引っ張ってすいません！ちゃんと面白いと感じてもらっているのかすごく不安です。

ちなみにキャラ紹介の響達四人のポジションを修正しましたが、詳しい説明は次回します！

第七話　模擬戦開始（ＦｉｒｓｔＲｏｕｎｄ）（前書き）

矢張り戦闘は難しいです。そして相変わらずの駄文で、またなのは達が出てきませんが、少しでも楽しんで頂けると幸いです！
こちらも少し急ぎ足で書いたので誤字脱字があるかもしれません！
相変わらず確認が甘くて申し訳ありません！

第七話　模擬戦開始（ＦｉｒｓｔＲｏｕｎｄ）

――ｓｉｄｅ響――

「セットアップ！」

その場にいた全員がデバイスを展開し、バリアジャケットを身につける。

うん。相変わらずの管理局カスタムだ。バリアジャケットと云えども、二年くらい使ってるとどことなくくたびれてるように見えるのは俺だけなのだろうか？

「さて、さっき説明したとおり……って、流のはインテリジェントか？」

「はい、二機とも一応インテリジェントデバイスに分類されます」

「わぁ、剣とライフルかー、かっこいいなー」

身の丈ほどの杖を手にした震離が呟く。

うん、やっぱり個人用のデバイスっていいよなぁ、としみじみ思うが、そう考えると、やっぱり思ってしまう

「俺にはいらないな」って。

「まぁ、とりあえず各々勝手に行って来い、それでやばいと感じたらすぐに退くこと、いいな？」

「了解」

俺の言葉に三人が返事をしてくれる。ただ、流は真面目だからいいけど。
後の二人の顔が若干笑ってるのを見ると、少し恥ずかしいと思ってしまう。だって、前の部隊じゃ適当に指示してただけだしな、間違ってもこんなふうに指示は出してなかったし。
そんなことを考えてるうちに、三人ともさっさと飛んでいった。

「さて、と」

ゆっくりと歩きながら外に向かう。まぁ、序盤は俺は動かないしね。とりあえず、外に出て、上空に上がりながら、３つモニタを展開して３人の様子を伺う。まぁお手並み拝見と行きますか。

――ｓｉｄｅ震離――

「了解」

そう言って、私はすぐに外に向かって飛んで、ビルの間を低空飛行する。
今回の相手はガジェットⅠ型が２０機だから、一人５機の割り当てだけど、あまり気にしなくてもいいかな？
飛びながら私の中の魔力の流れを感じてみるけど、今のところ違和感はないかな。うん。ただ、さっきの響の指示は正直よくわからない。
だって、何時もなら適当にあしらっとこう、とかしか言わないのに今日はどっちかっていうと消極的だ。

「まぁ、それでも従うからいいんだけどねー」

「叶望一等空士、どうかされましたか？」

「あ、ううん、大丈夫だよ」

私の隣を飛ぶ流が声を掛けてきた。うん、正直さっきの事があるから正直かなり気まずい。

やっぱり――

「ガジェットの小隊が3つに分かれましたので、自分はその内の一つを追いますね」

「へ、え？」

「了解、気をつけてね？私たちは二つ分まとまった方にいくから」

「了解」

私が口篭ってる間に隣にいる奏が代わりに返事をしてくれた。

返事をしてからすぐに流は私とは違う方向に飛んでいった。その顔はずっと無表情だったから、やっぱり、嫌われちゃったかな？まぁ、地雷二つも踏んだから仕方ない……よね。

はぁ、これからどうしよう？

（震離？）

あれ？奏だ、どうしたんだろう隣にいるのに念話なんて。

（はい、どうかしたの？）

（うん、あと、後でちゃんと謝ればいいと思うよ？）

（え！？な、何のことかな！？）

奏の急な言葉に思わず焦りを見せる。だってねぇ？幾ら何でもタイミングが良すぎるんだもん。

（流の事考えてたんでしょ？後で謝ったら許してくれるんじゃない？）

（べ、別にそんな……）

（ほらほら、準備しないとそろそろ遭遇するよ？それじゃあ準備するよ）

うー……見破られてた。なんか顔が熱くなってきて思わず顔を伏せてしまう。

あ、いけない、もうすぐで遭遇するんだ、よそ見なんてしてらんない！首を横になんでも振って邪念を飛ばして、よし！

「さて、と！」

私が居るのは廃ビルの交差点の少し前。モニタを展開してガジェットの動きを見てみると、後１０秒くらいで遭遇しそうだ。……１０秒もあるんだ、だったら。

「カートリッジ、フルロード！」

［ＹＥＳ，ＳＩＲ！］

自分の持つ杖からこれ以上無いくらい無機質な声が聞こえたと同時に、杖の先端が動いて薬莢が４つ飛び出る。
同時に自分の中で魔力が増えたのを感じた、よし。

「雷神剣展開！」

杖を天に掲げて、杖を媒体に大きな魔力刃を展開する、同時に周囲に小さな魔力刃も展開しておく。
さらに！

「雷神剣、豪雷絶槍陣！」

杖を――ううん、大きな剣の鋒を前に向けて、小さな剣達も少しずつ前にだして構える。
まぁ、ガジェットごときに使うのは勿体無い気もするけど、響からＯＫ出たから、久しぶりに本気で撃ってみる。
ガジェットとエンカウントするまで……後４秒、３、２、１、今！

「雷神剣・豪雷絶槍陣・激槍！」

そう叫んだと同時に、私の杖に展開していた魔力刃と、周囲に展開していた小さな魔力刃達を発射した。
大きな魔力刃が螺旋を描きながら飛んで、その大きな魔力刃を中心に小さな魔力刃達も巻き込まれるて、どんどん大きくなってく、そして最終的には大きな砲撃みたいなって、交差点から飛び出したガジェットの小隊目がけて飛んでく。ただ。

（……小っっっさ！？）

って本気で思った。うん、だって、何時もの半分有るか無いかくらいの大きさだよ！？一応私の遠距離系じゃ一番威力あるんだよ！？なんて、考えてるうちにガジェットの小隊に着弾し煙を上げた。一応ＡＭＦついてるけど、瞬時に展開されてもいいように結構魔力を練って撃ったから……いったかな？

そんなこと考えながら煙の上がる先を見てた瞬間、煙の中で光が５つ……って！

「危なっ！？」

体を大きく捻ってガジェットのレーザーを回避した。撃ってきたレーザーは５つ、つまり。

「たったの３機だけ、ね！」

予備のカートリッジを取り出して、杖にセットしリロードして、そこから！

「もう一回！」

カートリッジをロードして！

「震離撤退するよ」

「はぁ！？何で！？」

いきなり私の真ん前に奏が割り込んできた。

でいきなり撤退って、私は別に。

「いいから、撤退、さっきの響の指示忘れたの？」

「さっきって……うん、了解」

そう言われてさっきの響の言葉を思い出す。
別にまだ逃がしたわけじゃないんだけどな……まぁ、何かあるんだろうから従っとく。

「ちぇっ、もうちょいで勝てそうだったのに」

「ボヤかないボヤかない」

小さく愚痴をこぼしながら、空へと上がり響の元へと向かう。
ただ空まで上がる途中にガジェットがレーザーを撃ち込んできたけど、問題ない。
そんなこんなで上空で待機する響を見つけてとりあえず、杖を振りかぶって――

「3機しか落とせなかったぁ～～～～！」

「はぁ！？知ってるよ見てたんだし、てか、何だよ急に！？」

「全部落とせなかったんだよ」

思い切り振り下ろすけど、響の刀に受け止められた。
うん、惜しい。そんなこと考えて、不意に目に入ったモニタを見るとちょうど流が戦闘を始めようとしてるところだった。

――――――――

時間を少しさかのぼり、そして――――

――ｓｉｄｅ流――

「了解」

そう言って私を含めた三人が外に出て、飛んだ。
ガジェットⅠ型が相手だから、全員低空飛行で飛んでいく、勿論いつエンカウントしてもいいように。
飛びながら私の持つデバイス二機に念話を飛ばす。

（調子はどう、アーク？）

（あ、マスター、私は問題なくて大丈夫で、何時でも行けますよー）

念話内とはいえ、緊張感のない声で返事をしてくれて、思わず頬が緩みそうになる。
相変わらず良い意味でデバイスらしくない。だけどそこがアークのいい所かな。
ちなみにアークは私の左手にある大きなライフルで、性格はこのとおり陽気でいい子なんだけど、欠点があるとしたら、私以外の人相手にはあまり話をしないで、メンテナンスも私以外の人からは受けようともしない。
まぁ、私が出来るから問題ないし、私がお願いしたら嫌そうなふりしながら受けてくれるし。

（ギルは？）

（はっ、自分も問題ありません。ですがマスター？）

（何？）

（リミッターのせいで何時もの出力が大幅に落ちてるようです、ガジェットと言えども、気をつけて）

（そう、ありがとう）

移動している間ずっとチェックしててくれたんだ。やっぱり何時もギルには助けられてるなぁ本当に。

ただ、ギルもアークと同じで私以外の人とはあまり話そうともしない。ただ、二機ともデバイス間の交流には結構参加して話ししてるらしいけどね。

とにかく、いつもよりも出力が落ちてるのならば、少し考えて動かないと……

「……いんだけどねー」

隣で小さく叶望一等空士が呟いた。なんだろうか？

「叶望一等空士、どうかされましたか？」

「あ、ううん、大丈夫だよ」

小さく苦笑いを浮かべながら返事をしてくれた。だけど、何かあっても私には関係ない。

そんなことを考えてると。

（マスター、ガジェットが４つに分かれました）

（うん、ありがとうねギル）

念話を聞いて、方向を確認する。少し遠くのほうを相手してみるか。

「ガジェットの小隊が3つに分かれましたので、自分はその内の一つを追いますね」

「へ、え？」

「了解、気をつけてね？私たちは二つ分まとまった方にいくから」

「了解」

天雅空曹の言葉に返事をしてから、すぐに方向転換して、ガジェットの元へと向かう。

そういえば……模擬戦前の作戦説明の時に緋凰空曹が言ってたな……。

「エンカウントして、逃がしたら深追い禁止、追撃してきたら撤退って……」

正直よくわからない。自由にしていいなら最初から自由にしてくれたらこちらも動きやすいのに。

だけど、まぁ「命令」だし従うから問題ない。

「アーク、チャージスタート」

［Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．］

アークに魔力を送り込み、砲撃のチャージを開始しておく、まだ高速飛翔しているからエンカウントまで後1分。
その状態で移動していたら、背後から大きな魔力反応を感じて思わず反応してしまった。

「何？」

［……この魔力反応は不明ですが、位置的には叶望一等空士かと思われます］

「そう、ありがとう、ギル」

［ちなみにチャージは完了しましたので、何時でも撃てます］

「了解」

再び飛翔してガジェットのもとへと向かう。ちょっとタイムラグがあったけど、あっちもこちらを補足して近づいてきてるし、問題ないかな。後３０秒、だったら、足を止めて。迎え撃つ！

「バレル展開、散弾！」

［Ｙｅｓ，ｓｉｒ．Ｂａｒｒｅｌｏｐｅｎ．Ｍｏｄｅ，Ｓｈｏｔ］

そう言ってアークを構えて、その前に私くらいの大きさの魔法陣を展開させる。だけど、その魔法陣はミッドでもベルカでもない、独自の物だ。まぁ、多分後々説明を求められるんだろうな。それは後でもいいし今は。ガジェットに集中だ。後１０秒だし。
まっすぐ見通しのいい大通りのような所からガジェットがまっすぐこちらに向かってくる。後5秒、４、３、２、１。

「カタストロフィ、発射！」

アークから砲撃を撃ち出す、反動でちょっと後ろに下がる、同時に目の前の展開していたバレルに当たりそして。

［Ａｖａｌａｎｃｈｅ・Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ！］

赤黒い砲撃がバレルを通して散弾状にかわり、ガジェットへと降り注ぎ、爆発を起こした。

さらに。

「カートリッジ、ロード！」

［Ｒｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！］

「ありがとアーク、いくぞギル！」

［Ｙｅｓ，　ｓｉｒ．］

カートリッジで増大した魔力をギルに預けて、そのまま振りかぶって！

「フェンリル！」

［Ｆｅｎｒｉｒ！］

赤黒い魔力がギルより放射されて、大きな波のように煙の中に居るガジェット目がけて放ち、当たったと同時に大きな爆発と煙が上がった。

（……ダメか、前はアヴァランチだけでもＡＭＦを抜いていけたんだけどね）

（えぇ、ですがリミッターのせいですし、仕方ありません）

（そうですよ、ちなみに残存ガジェットは１機だけですよ？追撃しないですか？）

（うん、このまま緋凰空曹の元へと戻るよ）

そのまま逃げるガジェットをほっといて、空に上がる。
そして、遠目で緋凰空曹を見つけてそちらに向かって再び飛翔する。
……叶望一等空士は３機落としたみたいだけど、残り１４機、どうするんだろう？
そんなことを考えながら、緋凰空曹を含めた三人と合流した。

第七話　模擬戦開始（ＦｉｒｓｔＲｏｕｎｄ）（後書き）

早くデレさせたいなー、正直書いてて何かなーと思ってしまいますｗ
さて、次回はちゃんとした指揮の元で倒す予定ですが、どうしようかｗと思ってます。

それでは、また次回もよろしくお願いします！

第八話　模擬戦終了！（前書き）

はい、投稿したもんだと思って油断しておりました！
本当に申し訳ありません！
挙句の果てにはデータまでぶっ飛んで最初からやり直しという悲惨な状態にwその為、誤字脱字等があるかもしれません……本当に申し訳ありません！

さて、愚痴はここまでにしておいて、楽しんでいただければ幸いです！

第八話　模擬戦終了！

――ｓｉｄｅ響――

なんか分からないけど、急に震離が斬りかかってきて、それを受け止めながら展開していたモニタを覗く。
そして、流とガジェットの戦闘を観察して思う。

「……ただの武装隊じゃねーな」

「え、何？聞こえない」

「なんでもない、というかいい加減杖を下ろせよ！」

「ちぇー」

納得いかないみたいな顔をしながら杖を下ろす震離。
ていうか、俺のほうが納得いかないからな？分かってんだろうけども。
それよりも、今の問題は流だ。
別に砲撃は構わない、人によって差があるんだし、それが得意なのかもしれない。
剣に魔力を通して、剣戟を飛ばすのも構わない。それが得意なのかもしれないし。
ただ。
今の戦い方は納得いかない。
意思のあるデバイスを持っているからかもしれない、ガジェットに

対する反応が少しだけ違うのは。
たしかに流はガジェットとの戦闘経験があるんだろう。武装隊にいたみたいだし、現に本局の武装隊にいた俺らもガジェットとは何度か戦闘をしたし。

ただ、今の戦いからは明らかに、一人で戦ってた奴の動きだ。普通の武装隊じゃ一人で戦うことは滅多にない、それこそ皆が全滅した時とか、模擬戦の時とかだけで、基本的には複数の人数と共に行動して、作戦を遂行させるんもんだ。
だからこそ、頭に浮かぶ現状の結果は。

（……ただの武装局員じゃない。それに、スタンド・プレーを得意としている）

認めたくないけどこうなってしまう、だからか？煌や優夜が流の事を、いや、「風鈴流」の事を不安要素と言ったのは。

あぁ……だけど、やだなぁ、これから仲間になる子を疑うのは。

そんなことを考えながらモニタを消して、空を見上げる。ただただ空を見る。

「響」

なにも考えないようにした直後に隣に奏が来ていて、その顔は微笑んでた。さっきまでは少し離れた所で、俺と震離の攻防を見ていたのに。だけど。

「ありがと、何でもないさ」

「うん」

こういう時本当に助かるなぁ、本当。
いっつも助けられてるんだよなぁ……。
そんなことを考えているうちに、向こうから流が戻ってきた。うん、これはまた後で考えよう。今は。

「さて、皆揃ったところで、これからの事を言うからちゃんと聞けよ？」

――ｓｉｄｅ煌――

「作戦会議か……瑞希はどう見る？」

「やっぱり辛そうだね～、響はともかく他の三人……いや、二人がリミッターに戸惑ってるように見えるかな」

「奏ちゃんは途中で気づいて、この後に備えてるみたいだけど」

事務の仕事をしながら、今現在訓練場で行われてる模擬戦の様子を雪奈と二人で見ている。
まぁ、ぶっちゃけると仕事も徐々に終わりつつあるから、余裕で見てても大丈夫なんだけど。

「……俺らＦＷ組と話したこと無いしなぁ」

「まぁ、そうだねぇ、接点ないし、仕方ないよ」

実際そうなんだよな、俺達や、優夜達の四人は案外こっちの仕事が

忙しくて、ＦＷ組とあったこともなければ、食事を一緒になったこともない。そんぐらい時間が咬み合わない、咬み合わないはずなのに。

「何でロングアーチの面々は、ＦＷ組と仲いいんだ？」

「さぁ、やっぱり波長があってんじゃないの？その割には優夜も雪奈もあったことがないって言ってたけどね」

まぁ、いいや。響達が来たんだし、これからは会う機会もあるだろう。

さて、これをこうして、あれをこうすれば……

「良し終わった」

「さすがに仕事が早いね、この後は……って言うまでもないか」

「あぁ、先に行ってるよ、瑞希も頑張れよ？」

「うん、もうちょいだから先に行っててよ」

「そっか、じゃあ先に行くなー」

椅子に引っ掛けた制服の上着をもって、とりあえずロングアーチへと足を運ぶ。

今朝飯を食ってるときに、今日は忙しいとか言ってたし、それに今晩はあいつと久しぶりに……

「今日こそ、勝つ」

つっても麻雀だけど、今度こそ、勝ってやる、そしてどこまで奏ちゃんと関係が進んだのか聞き出そう。
まぁ、負ければこっちも聞かれるんだろうが……胸をはって言えるし問題ないか。
それに……って。

「お？作戦タイム終了か、さてさて、どう動くかね、あいつらは？」

モニタを展開しながら足を進めて、模擬戦の進行を見る。
ただ、途中で何度も人とぶつかりそうになったけど……

――ｓｉｄｅ響――

「響ー、幾ら何でもそれはざっくりしすぎじゃないのー」

「……ばかだな震離？今日は俺らの顔見せみたいなもんなんだ、初めはこんなもんだ」

「えー、それにあたしいつもよりちょっと後ろじゃん」

「お前は……流や奏はすぐにリミットのかかってる状態に気づいてその上で動いてたのに対して、お前何時もの感覚で動いて魔力使いすぎたんだろうが」

「……うっ」

実際そうだ、他の二人ってか流はリミットが掛かってる状態だけど、先程の攻撃で何時もと変わらない割合で魔力が減ったて報告してき

たことに対して、震離は何時もと変わらない攻撃を……ってか、余裕ぶっこいて攻撃したら何時もの割合どころか、現在の魔力の半分以上も使ったんだ。
だけど、まぁ。

「……お前を少し後ろにやるのは、リミットに慣れてもらうためだよ、慣れたら俺とポジション交代だ」

「マジで？了ー解、それにちょうど遠距離で試したいと思ったのもあるし」

「危ないことはほどほどにね？」

「大丈夫、危なくないから」

目の間で終始笑顔の震離に軽い注意を促す奏を見て、毎回思うんだが、本当双子みたいだよなぁ。
実際この前も買い物に付き合わされたとき、ナンパで双子？とか聞かれてたしな。
まぁ、それはさておき。

「さて、そろそろ動くが、一応確認な？」

「はい！」

確認入れようとしたら、流も含めて三人が返事してきた。流は真面目だとして、他二人が笑ってるところ見ると、分かっててやってんな……こう言うのは苦手なんだけどなぁ、本当に。

「とりあえず、俺がフロントアタック、震離がフロントバック、流

がガードウィング、奏がウィングバックで、基本的には俺が前に出て、流が遊撃、震離は俺が取りこぼしたのを倒して、奏が援護、じゃあいこうか？」

「了解っ！」

そう言って、四人揃って、上空から地上まで降りて低空飛行を開始した。

まぁ、時間掛かりすぎてる気がしない事もないが、まぁ、様子見だったし仕方がない。

そうこうしてるうちに、先程のガジェット達の反応をキャッチしたから、とりあえずその場で一時停止して、とりあえず一言。

「さっき言ったとおりだ、とりあえず楽にして、落ち着いてやろう！」

「了解、じゃあ、私と流で弾幕張る用意しとくよ？流、用意はいい？」

「えぇ、何時でも」

そう言って奏も自身のデバイスである二丁のライフルを構える。

ただ、流のライフルが槍みたいな突撃型に対して、奏のやつは、狙撃用ライフルみたいな細いタイプのものだ。

ただまぁ、こうしてみると同じ「ライフル」つっても、様々なやつがあるもんだ。

「さて、ガジェットは……7機の小隊か、だとすると残りは……回りこんでくるかな、あっちも既に補足してるだろうしな……一応全員バックアタックされるかもだから気を付けろよ？」

「了解、そろそろ目視出来る距離に来るよ？」

「あぁ、じゃあ行くか震離？」

「了解！って言っても、面倒だから響がやってよー、あたしはここで待機しておいて、６機の方を相手するから」

「長ぇな、まぁいいさ、なら任せたよ、さて……」

震離と適当に冗談言い合ってる内にガジェットを目視で捉えて、こちらも身構える。

めんどくさいから纏めてきてもらっても構わないんだけどね、全く、面倒だな。

「緋凰響、推して参る」

刀を二本とも抜いて構えた瞬間。

足に魔力を送り込み、そこからガジェット目がけて「跳んだ」。

目視できる距離だって言っても結構な距離があった、だけど俺には関係ない。

ガジェットの群れが反応するよりも先に、前の二機とすれ違う瞬間に刀を「通して」、ガジェットの群れの背後を取ったと同時に刀を下におろして、そこから。

「爆龍……っ！」

瞬間的に魔力を刀に送り込んで、そのまま刀を振りあげて巨大な月型斬撃を二つ放ち、目の前にいたガジェットを更に二機落とす、そして、もう一度足に魔力を送り込み、自分で放った斬撃に追いつい

て。

「砕波！」

その斬撃目がけて刀を斬撃二つに叩きつけた瞬間、空へと上がり、斬撃が弾けた時の衝撃を回避する。
そして、その衝撃の余波で残ったガジェット群を一掃した。まぁ、空に上がったのは、あのままゼロ距離で当たったら痛いからだ。
まぁ、それよりも。

「うわ、言ったら本当にやったよ」

「まぁ、基本的には響ずっとあのランクでガジェットと戦闘してきたからね、問題無いんじゃない？それよりも、震離に流？後ろから６機の反応をつかんだから迎撃用意してね？」

「了解」

……震離以外見てすらねぇ。なんだよ、久しぶりに頑張ってみたのになぁ。
って、あ。

「またヒビが入った……」

自分の持ってた刀にヒビが入ってるのを見つけて軽いため息を吐く。やっぱりこっちの世界で作るとどうも錬度が低いからかすぐにヒビが入る。インテリジェントでも無いから自動修正なんてしてくれないから後で自分でメンテしなきゃいけない。

「……はぁ、面倒だ」

また軽いため息を吐きながら刀を鞘に収める。いっつもこうだ、少し本気で踏み込んだらすぐにヒビ、それで本気で切り込めば簡単にへし折れて、軽い時でも刃こぼれだ。
地球の刀の一番しょぼいやつでも、刃こぼれすらしないのに、やっぱり見よう見まねで作らせるとやっぱりもろいもんだ。

なんて、刀を見ながら考えてたら、あの三人適当にガジェット６機を蹴散らせてやがった。
しかも遠距離から。……やっぱり。

「……射撃使えるのっていいなぁ」

切に思うけど、俺自身使えないからどうすることも出来ない。まぁいいか。
と何回目か分からないため息を吐いた瞬間、目の前になのはさんの顔が出てきたときには本気で焦った。

とりあえず、今日の模擬戦は終了だ。これが終わったら……部屋の整理か。めんどうだなぁ全く。

第八話　模擬戦終了！（後書き）

さてさて、データがぶっ飛んで書きなおしたんですが、軽く首をひねるくらいちょっと違うんじゃね？と思ってしまいますｗ

さて、次回は久しぶりになのはさんたちが出てきます！

それでは、楽しみにして頂けると幸いです！

第九話　模擬戦を終えて、とりあえず話を（前書き）

少し、遅れてる分を取り返すために本気を出す！
遅すぎると思われるかもですが……

それでは、楽しんで頂けると幸いです。

第九話　模擬戦を終えて、とりあえず話を

「ひ、響さんすごい！」

「あはは、ありがと、あとさん付けじゃなくていいよって言ったじゃん」

「あ、ごめん」

「気にするなよ、次から気をつければ……あ？」

「ん？どうかした？」

「あ、あぁ、大丈夫だエリオ」

エリオ達からタメ語で話されてるのを黒い服きた金髪の人からジト目で見られてるけど。

多分、ってか絶対に気のせいだと思い込む。だって、あの人執務官だろう？一応俺の上官だろう？

まぁ、やましいことは……一つあるが、まぁいいか。それよか。

「はーい、皆注目！」

「はいっ！」

なのはさんの集合合図に皆の声が揃う。

まぁ、とりあえず俺以外の三人の配属とポジションの説明、基本的なチーム構成を聞かないとね。

「今響達四人の模擬戦をやって、私とはやてちゃん、そしてフェイトちゃんの三人で話あった結果を発表します」

「はい！」

奏達三人の声が揃う。まぁこれからどこに配属か決まるから少し楽しみなんだろうな。

とは言っても前線組は俺らを含めて8人、隊長を含めても12人か。

はやてさんも含めて13人……あれ、はやてさんって固有戦力持ちだから……まだいくのか？……考えるのが面倒になってきたから、なのはさんの話をきく。

「まずスターズには、震離と流、コールサインは震離が5で、流が6ね？ここまでで質問は？」

「問題ありません」

「私も大丈夫です！」

まぁ、妥当だな、普通に奏がこっちか。

それでこの金髪の方が……

「挨拶が遅れてごめんね？私がライトニングの隊長のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンで、執務官をやっています、皆よろしくね？」

「宜しくお願いします！」

ここでもまた四人揃って挨拶しておく、とりあえず。

「自分は」

「うん、響だよね？宜しくね」

「え、あぁ、はい、こちらこそ」

普通に挨拶しようと思って、階級とか名前とか言おうとしたら、先に言われた。
正直先に言われるなんて思ってもなかったから、なんか、少し……

「あー、珍しいなー照れてる」

「……ぅ」

震離うるさい。と口には出せずそのまま飲み込む。
と、とにかくだ。

「えと、ハラオウン執務官？一つ質問があるんですが……」

「何かな？あと私のことは「フェイト」でいいよ？」

……隊長陣がここまでフレンドリーだとは正直思わなかった。
なんだろう、ここまで来ると逆に怖くなってくるな。まぁ、そんなことより。

「えと、自分と奏のコールサインはなんでしょうか？」

「あぁ、それはね、響が5で、奏でが6になるんだけど。響には私やシグナムが居ないときの指揮をやって欲しいの」

……ほら来た。予想通り過ぎて俺の心は泣いてるよ、せっかく異動したから指揮とかしなくて済むかなーなんて思ってたんだけどな、まぁ。

「それは構いませんが、それはライトニングで動く時ですよね？」

「うん、基本的にはそうなるかな」

やっぱり、まぁ妥当だろう。基本的にはスバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人でずっとチーム組んできたんだ。いきなり俺らが入ったら多分ってか確実に合わなくなるしな。

まぁ、エリオ達にはティアナっていう優秀な指揮官が居るんだ。基本的には大丈夫だろう。

「そうですか、ありがとうございます」

「ううん、気にしないで」

なんて言ってるけど、とにかく頭を下げとく。ちなみに理由は一つ。さっき、なんか俺のことジト目で睨んでたし、なんか睨まれるような事した覚えが無いからとにかく俺の評価をあげとく。既にマイナスにいってそうだけどね！

あ、そうだ。

「はやてさん、俺らの部屋割りってどうなってます？」

「うん、あぁ、寮に言ったら名前を書いた紙を貼ってるからそれを見てな？そこに荷物も置いてるから」

「了解です」

あぁ、荷崩しかー、めんどくせー、たまにはマンションに戻って部屋の換気しないと……それは大丈夫か。
まぁ、なんとかなるし、いい加減雑念捨ててなのはさんの話に集中しないと。
なんか、フェイトさんの視線がどんどん強くなってきてるし……俺本当になんかしたかな!?覚えがないから困るんだけど!?

「っと、話は以上ね、それじゃあ午前の訓練はこれまで。明日は出張任務だから、今日の午後の訓練はお休みね。しっかりクールダウンして、明日のために疲れを残さないように」

「はい！ありがとうございました！」

皆の声が揃って、頭をさげる。
……前半部分聞いてねぇ。まぁ、大丈夫だろう多分きっと！

「さて、エリオとキャロ、クールダウンにいくか？」

「はい」

うん、素直に返事してくれてありがとう、何時もだと震離が適当にふざけるから、スゲェ楽だ！
それで足を進めてる間に、その震離はというと。

「それじゃあ、クールダウンして朝食にしよっか」

「わは～震離に流～？これからよろしくねー」

「こちらこそ宜しくー」

「どうも」

「ちょっと、スバルに震離。そんなこと言ってないでクールダウンに行くわよ？もう皆行ってるんだから」

「ふぇ！？ちょ、ちょっとティア！キャロにエリオも私をおいてかないで～！」

……まぁ、いいか。最初のうちはそんなもんだろ。
ていうか、さっきからエリオとキャロと話ししてるだけで、フェイトさんの視線が殺気にランク上がったんだけど、どういう事！？

「ホの字？」

「え、奏？どうした？」

「冗談冗談、冗談に決まってるじゃない、ねぇ？」

「……目が笑ってないように見えるのは気のせい……？」

「……気のせいだよ、きっとね？」

……殺気の視線が二つに増えました。
なんだ今日は？厄日かなんかか？

第九話　模擬戦を終えて、とりあえず話を（後書き）

さてさて、少し本気を出してから回った気がしてなりませんｗ
くそぅ、短すぎて本当に申し訳ありません、くそう、これは小説じゃなくて作文じゃね？とか言われても仕方が無いきがしてなりません……

それでは、ｋｙｏｎｓｉでした！

第十話　……何時からって、ねぇ？（前書き）

少しばかり本気を出してみました、遅すぎるとか言われると思いますけどね！？
それでは、今回はフェイトさんと響オンリー……？なんか響の脳内の方じゃいっぱいいるんですけどねｗ

それでは楽しみんでいただけると幸いです！

第十話　……何時からって、ねぇ？

……よし、決めた！

「さて、と、飯食う前に俺は先に部屋の片付けしてきますねー」

「あ、僕も手伝うよ」

「はは、サンキュ、けどいいよ、前の部隊の資料とかいろいろあるだろうからそれの整理もしないといけないしね」

せっかくのエリオの申し出を断る。正直申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

だって、こうやって話をしてるだけでも、どんどん殺気のレベルが上がってるんだもん。

隣と後ろの視線がもう、見ただけで人殺せるだろう？その割には会話してる時には戻して普通にしてるし。

というか、そのギャップが死にたくなるほど怖いんだよ！？

「それでは、飯食うまでには合流するので、先に失礼しますねー……ん？」

軽い駆け足で、皆の前に出て適当に挨拶して気づく。

流はどこに？視線を動かして周りを見ても、どこにも居ない。まあ、先に帰ったってことでいいのか？

まぁ、それよりも。

「それじゃあ」

振り返って寮のある方向に向かい、途中の角を曲がった瞬間。

「よしっ！」

全力疾走。それこそ短距離でも走るのかお前は？と言われても仕方ないくらい本気で足を腕を上げて走る。
なぜなら。振り切ったと思った殺気まがいの視線をまだ感じるから。
まぁ、基本として、いきなり立ち止まって、振り返る。
既にここは室内。隠れる場所はあまりないが……さっきまで閉まっていた窓が開いている。
……まぁ仕方ない。とにかくゆっくり歩いて角を曲がると、後ろからパンプスのカツカツした音で付いてきているのを確認。正直本気で怖ぇよ。
もう一つ角を曲がった瞬間、もう一度全力で走る。そして相変わらずパンプスの音が頻度を上げて近づいてくる。曲がり角を曲がると急停止。待つこと少し、走りこんできた金髪の隊長。

「あ、あれ、響？偶然だね？」

「……マジかよ」

まさか、こんなに律儀に引っかかるとは……正直すごくびっくりしてる。

――――――――――

とりあえず、屋上に行く途中、自販機に立ち寄って飲み物二つ買っておく。
途中で緑茶とか入ってるのを見て思わず買いそうになったけど、とりあえず二本コーヒーを買って、フェイトさんに渡しとく。

で、屋上について誰もいないのをかくにんしたあと、フェイト隊長をベンチに座らせて、俺は立ったままコーヒーを一口含む。うん、喉乾いてたから正直落ち着く、さて。

「……俺なんか失礼なことでもしましたか？」

「えと、その前にいつから気が付いていたの？」

……え？

う、嘘ぉおおおおおお！？

と顔にも声にも出さないで心のなかで絶叫する。うん、今の俺頑張ったと思うよ多分きっと。

おかしいな、俺が記憶してる限りじゃ執務官試験てスゲェ難しいと記憶してんだけど？

それで、この隊長二つ名まであるほど優秀な方だよね？何なのかめんどくさくて調べてないけども！

「あー、なんかエリオやキャロと話ししてる途中からですね」

「さっ最初からなんだ……」

……管理局ぅううう！？誰だよこの人合格させたの！？

明らかにミスだろう！？まぁ、優秀だから合格させてんだろうけども。

「その、エリオとキャロの事なんだけど」

「……はぁ」

――数分後

「えーと、要約すると、自分よりも俺のほうが二人が懐いてる様で何でなのか聞きたかったと、そういうわけですね？」

「そっそうなんだよ！！」

……何でこんな短いこと聞き出すために数分掛けたんだ俺？一応数分つってもコーヒーがぬるくなるまで掛かるってどういうこっちゃ？だけど、頑張った俺、超頑張った俺！俺の中の全米が拍手喝采してるよきっと！

……まぁ、そんなことよりも。

「というか、何でさっさと聞かないんですか？聞いてくれたらすぐにでも答えましたのに？」

「その、どう聞いたらいいか分からなかったし響とはあんまり話した事無かったから」

「……そりゃ初日で、いきなり睨んでくる人間と積極的に話したいですか？」

「はぅっ！！」

うわぁ、なんか俯いて暗い影まで出来だ。

なんか頭ん中に煌が出てきて、「そういう時は優しく抱きしめるんだぜ？」って言ってるけど徹底的に無視だ。

なんか、慌ててるけど無視だ、絶対実行しないからな！？

「んー……俺もまだあまり話してないのでなんとも言えないですけど、あの二人普通にフェイトさんになついてるように見えるんですけどね」

普通にフェイトさんの姿見かけりゃニコニコって、終始笑顔だし、多分天地がひっくり返ってもあの反応だと絶対に悪く言いそうにない……って、なるほど。だからか。

「エリオもキャロもいい子だよ、だけどこんな所に来ても弱音も言ってくれないし……でも、何だか固い所があるから」

わーい、震離の親父さん見たいな反応じゃん。というか子離れしない親との会話になってきた。

まぁ、多分褒められたいってか、立派になったね？とか言ってもらいたい二人と甘えて欲しい親みたいな感じか？か

「……やっぱり、私じゃ……」

「……ぅぉ」

なんか、うつむきながら泣いてんじゃないかって思うくらい肩が震えてる。

不味いこのタイプ一回ショック受けると、落ちるとこまでショック受けるタイプだ。じゃなきゃほぼ初対面の俺相手にこんなとこまで言わないだろう。ていうか、なんか小さくて聞こえないけど、自分で自分を追い込んじゃ不味いだろう。それ以前にこんなトコロ誰かに見られたら……はっ！？

さっき閉めたはずの、屋上の扉がパタンってしまった……終わった……えぇい、こうなりゃヤケだ！

「フェイト隊長は今年で何年目でしょうか？」

「……やっぱり……うん？入った時？確か９歳だったかな」

……マジ？十年てかなりの先輩じゃーん。

それで今更悩むんかい、なんか子育てし始めた人みたいだな……父親側の。

「その時の隊長はやたらと頑張ろうとしませんでした？」

「……うん、した……」

「多分今のエリオ達はそんな感じなんですよ、フェイト隊長の力に少しでもなりたいって、少しでも支えてあげたいって、きっと、だから隊長の前では少しでも一人前に見て欲しくて背伸びするんだと思いますけどね」

「私はもっと自分の好きなことして欲しいんだけど……」

「それがエリオとキャロのやりたいことなんですよ、フェイト隊長だって、大好きな人の役に立ちたいってすごく頑張ったことはありませんか？」

「……」

コクンって無言で傾くけど、なんかさっきに比べて一気に影がこゆくなったぞ！？どういうこっちゃ！？と、とにかくだ！

「つまり、今はあの二人をゆっくりと見守るべきですよ、いざとなればフェイト隊長がフォローすればいいんですし」

……おぉ、我ながら結構綺麗にまとまった。だいたい子供の頃ってある程度好きにさせるもんだ。
やめなさいっつってもやめないのが大概だしな。

「うん、そうか、そうかも、ありがとうね響？」

「はぁ……」

わー、初めて悪意ゼロの笑顔見た気がする。どういうわけか俺の周りって何か変なの多いし。
なんか変なのって考えた瞬間、頭ん中に涙目の奏が写ったのは気のせいだ、絶対そうだ！
だから、頭ん中で、ヨヨヨって泣くなよ！？

「どうしたの響？」

「……いえ、なんか変な電波が……」

「え？」

「……なんでもないです」

とにかく、これでもう睨まれる心配はない。多分もう無い筈だ！
……まぁ、このために時間割いたし、飯でも食いに行こう。噂が広まってなければいいなぁ……
だけど。

「……無いんだろうなぁ、やっぱり」

「どうしたの？」

「いえ、こっちの話です」

奏と震離の目が変わらなかったらいいけどな……はぁ、面倒だ。
そんなこと考えながら、残ったコーヒーを飲み干す。うん、ぬるくてまずかった。

第十話　……何時からって、ねぇ？（後書き）

多分今まである意味一番はっちゃけましたｗ

うん、あとは副隊長もとい、ヴォルケンズだー、頑張らないとー

うん、頑張ろういろいろと！

第十一話　荷崩しは面倒です。（前書き）

はい、多分今日みたいになんか変なテンションで話を書いたのはおそらく初めてです……ただ、短いもん3話も書くなら纏めて出せよなんて言われそうで死ぬほど怖いですが……そして、相変わらずなのはたちの出番が……本当にごめんなさい！

そして、あとがきの方にアンケートを募集しております、よかったら参加して頂けると幸いです！

第十一話　荷崩しは面倒です。

あれから数分。とりあえずまぁ、屋上から室内に戻って食堂前に差し掛かる。
まぁ、その途中もエリオは、キャロはってずっと話が絶えなかった。そんだけ好きなんだなぁと改めて思うし、あの二人がすごくいい子に育ってるのもうなずけた。ただ、フェイトさんが過保護すぎる気がすると思ったのは内緒だけど。

「そうだ、これから俺は飯を食べに行くんですけど、フェイト隊長はどうしますか？」

「え、あぁ私はこれから外回りなんだ、明日は出張だから、今のうちにやれることはやっておこうと思ってね」

「はぁ、そうですか……それでは、先に失礼して食堂に行きますね」

「うん、それじゃあ」

頭を下げてとりあえず見送る。うん、俺は執務官になりたくないからあんまり知らないけど、執務官ってかなり大変で、かなり努力しないと慣れない役職だというのは知ってる。実際、昔目指してたやつ知ってたしね。
まぁ、今は今で楽しくやってるみたいだからまぁ、いいか。とりあえず中にはいって、奏達を……え？

「……何このパスタの山は？」

「え、あぁ、おかえり響？」

「あぁ、今戻ったよーってか、なんだこれ？」

目の前にどこのエベレストだよって思うぐらいに山盛りにされたパスタの山がある。

……俺も結構食うほうかなって少し前まで思ってたけど、訂正する。

うん、こんだけ食うやつってどんな奴だよ。

「……響、それエリオと、スバル用だって」

「……へー……え？」

山の反対側に歩いて誰が食べてるのか確認しに行く。そこにいたのは勿論。

「あ、響おかえり」

「あー、どったの響？」

「おー、ただいま」

普通に飯を食べてるエリオとスバル。そこに何でかしらんけど普通に溶け込んでる震離の姿が。

お前、これ見て何も驚かんのかよ？

「ん、どったの響？私の顔になんか付いてる？」

「……うん、ケチャップが付いてんぞ」

「え、嘘！？」

そう言って顔を拭いてケチャップを拭きとる震離。正直今のはついでなんだけどな～、まぁ。
こんだけ食べるのは多分、多分成長期だからだ、きっとそうだよ！

「現実逃避は行けないよ、響？それよか食べないの？」

「……うん、なんか見てるだけで腹が膨れた気がしたからいいや」

「……うん、だろうね」

まぁ、それでも奏がパンをくれたからそれを食べる。
なんか、食いかけだった気がするのは気のせいか？

「……ちぎりながら食べてたからだよ」

「そうか、あと人の考え読むなよ、なんか気恥ずい」

「照れない照れない」

隣で笑う奏を見て思わず……いや、多分気の迷いだ。多分絶対そうだ！

「何それひどいね？」

「うっせ」

まぁ、奏に勝てないって分かったからとりあえずさっさと飯を食い終わろう。
そして、部屋に行ってこんどこそ部屋の整理をしよう！

あ、だけどその前に連絡いれとくか……。

「なのはさんとはやてさん？」

「ん、何かな？」

「どないした？」

一つ離れたテーブル一緒に食べてるなのはさんとはやてさんに声をかける。

まぁ、確認のために聞きたいことが一つあるだけなんだけどね。

「失礼ですが、スターズとライトニングの副隊長二人はどこに居らっしゃるんですか？とりあえず挨拶だけでもしておきたいんですけども」

「あぁ、シグナムとヴィータは多分外回り中やったと思うよ、だから夕方くらいに戻ってくると思うから……医務室に行ってな？」

「はぁ、了解です」

と確認し終えてとりあえず分かったからいいんだけど……何で医務室なんだろう？

まぁ、いいか。

「奏？」

「ん、はいはい、流と震離には私が伝えとくよ、早く部屋に行って整理したら？」

「あぁ、ありがと、それじゃ、夕方にな？」

「はいはい」

手を軽くひらひらと振ってる奏に、手を振って返事をしながらもう一回食堂を後にする。

本当に、言わなくてもある程度伝わるから本当に助かるなぁ。本当。

さて。

「部屋に行って片すかね、今晩絶対煌と優夜が来るだろうし」

絶対来るな、麻雀とかいろいろ持って！

その為には部屋を少しでも片付けないと、人なんて呼べん。

まぁ、ルームメイトが居ない事で話進めてるけど、いたらどうしようかな。

「……付いてから考えるか」

とりあえず、さっさと寮に向かって……ん、あれ？なんか引っかかる……なんか大事なことを放置してるような……してないような……。まぁ。

「……忘れるくらい微妙なことだし、まぁいいか」

とりあえず今は部屋の掃除だ。

さて、忙しくなるぞーーー！

――――――

で、部屋の前に［緋凰響］ってミッド語で書かれた紙がはられてる部屋の前についた。
うん、紙をめくっても他に名前が無いのを確認してとりあえず部屋に入る。
で一言。

「……一人暮らしとしては申し分ないくらい広いな」

実際そう思ったとおりだ。ベットは上と下の二つずつあって、机も二つある。
小さいシャワールームとか、簡単なキッチンもあるし……うん。俺の荷物が入ったダンボールも複数ある。
何となく不安になって、もう一度外に出て、俺以外に人が居ないかを確認する。
うん、やっぱりなにも書いてない。

「……やっぱ不安だなぁ」

そう思って、とりあえず二段ベットの上側を覗くけど、今まで使われた形跡なんて全くない。
それどころか新品そのものだ。まぁ、上は使わないで、下しか使わないからあまり関係ないけどな。
ふむ、俺でこうだとすると……

「……あとで、流の所にも足を運んでみるかね」

多分あっちも二人部屋を一人で使ってんだろう。後で様子見に行ってみるかね。
さて、とにかく。

「……どれに何を入れたのか覚えてねぇな……」

ポツリ呟きながらとりあえず適当に段ボールを開けてそこから適当に片付けをする。

うん、すっごくだるい。

で、気がつくと窓の外が夕焼けの光で包まれて、大声を上げたのは内緒だ。

第十一話　荷崩しは面倒です。（後書き）

まぁ、ついこの前２万ＰＶ突破したので、早い話が何か記念小説なるものを、書こうかと思うんですが、どういうのを書いて良いのか分かりません！
というわけでどんなのを書くのかとりあえず発表しますが、その内で一番投票数の多かった物語を書きます！
それでは、以下のやつのうち一つ選んでくださいね！

１　響＆奏　ある日奏は、響が見知らぬ女の人と話しているのを発見した、それだけならまだしも、その女の人と響は急に顔を接近させていたのを目撃して……

２　流＆震離　ある日六課のＦＷでロストロギアの回収に向かったが、帰ってきた震離が流のことをなぜか隠そうとしていた……

３　上の二つはどうでもいい、とりあえずヴィヴィオがいて、その段階でのロストロギア関連の事件を書け。
ちなみに、ヴィヴィオと震離の反応は。

「……お姉ちゃんになった……」

「……やだ、可愛い……抱っこさせてぇぇえええええ！！！！」

個人的に好きなネタのうちの一つです。ただ、こう言うのは嫌いな人は多分ダメだと思います……ちなみに作者もとい自分はけんぷファーが大好きです！

さて、話が脱線しましたが、この内容は次回の小説のあとがきにも書いて募集を掛けてみますが……正直１０票集まったらいいほうだと思っておりますｗ

さてさて、話が長くなってしまいましたが、細かいコメント抜きでも構いません、それこそ番号だけでもかまいませんので、アンケートに答えて頂けると幸いです！それでは、ｋｙｏｎｓｉでした！

……よく考えると、震離のキャラがｗ
ってか、だいたい誰がこうなってんのか予測付きそうで怖いなぁｗ
すいません、調子に乗りました、ごめんなさい！
それでは、投票して頂けると有難いです！

第十二話　本日二度目の挨拶とすごくいい笑顔と。（前書き）

……少し遅れてしまって申し訳ありませんでした！
すいません、課題等が重なってしまって、少し更新が遅れてしまいました。ちなみに前回のアンケートは引き続き募集しているので気軽に参加してもらって構いませんよ！

それでは、少しでも楽しんで頂けると幸いです！

第十二話　本日二度目の挨拶とすごくいい笑顔と。

「悪い、遅れた」

「おっそいよー！」

既に医務室前に集まってた三人に声をかける。

うん、俺が集まろうとか言ってて遅れたから俺が悪いのは当然だが、震離よ、だからといって。

「……危ないから室内で杖を振り回すなよ」

「うわ、すごく静かに注意された……」

「……一応医務室前で、副隊長陣が集まってるんだぜ？粗相のないようにしないと」

「え、でもなのはさん達見てるとそんな感じはないような……」

「上がいい人だからって、その副隊長陣もいい人とは限らないだろうが」

実際その可能性もあるからなぁ、たまに隊長よりも自分のほうが凄いはずって、部隊の中でふんぞり返ってる馬鹿がいるからな。まぁ、この部隊じゃ無いと思いたい。まだ出来てからそんなに経ってないから無いとは思うけども。

「うん、それでも私達の上司にあたる人達だからちゃんとしてね？」

「はーい」

「……初めからそうしてくれよ」

くそぅ、何で俺が言うと反発して、奏が言うと素直に聞くんだよお前は？

あ、それよりも一つ気になったことがあるんだった。

「そうだ、流？」

「はい、なんでしょうか？」

「流んとこの部屋は誰か人いたか？」

「……いえ、二人部屋ですが、自分の所には居ませんでした」

なるほど、流のところにも同居人は居ないのか。まぁ部屋の場所はそのうち聞くとして。

何でそこは驚いてるんだよ？

「流一人なの？」

「はい、そうですが」

「……あれ、私達相部屋だったよね？」

「うん、そうだけど男子とは違うんじゃない、この部隊男の人あんまり見なかったし」

「……だからかな？」

首を傾げながら話す震離の疑問に俺が答えるよりも先に奏が答えてくれた。
多分、俺が言ったらまた反発するだろうし、それどころか文句言って来そうだし。
……だけど、流でさえも一人なのか、そうするとエリオもやっぱり一人なんだろうか？

「まぁ、後で聞いてみるかね」

「ん、何を？」

「ん？あぁ、何でもない、さ、行こう」

「え、ちょっと！？」

後ろで抗議する震離をほっといて、医務室の扉を軽く3回叩き、返事を待つ。
その間に震離も落ち着きを取り戻したのか、少し緊張した面持ちでそこで立ってる。
……何時もそうだったら、普通にかっこいいと思うんだけどなー。
なんて、考えていると。

「どうぞ」

「失礼します」

声を聞いた印象は、落ち着いた感じの声だな。なんて、思いながら扉を開けて。
医務室へと足を踏み出す。それに続いて、後ろにいる三人も続く。

相変わらず奏と流は落ち着いてるのに対して、震離は少し緊張してるみたいだ。
で、医務室の中には、声の主かもしれない落ち着いた感じの白衣を来た女性と、前の部隊で変に有名だった小さな上司こと、ヴィータさんと、ピンクのポニーテールの女性がそこにいた。
はて、この人、どっかであったような……？まぁ、とりあえず。

「何か御用ですか？」

「いえ、こちらにライトニング、スターズ両分隊の副隊長がいらっしゃると聞いて、挨拶に来たんですがどの方なんでしょうか？」

一応確認を取っておく、白衣着てるからって医務官じゃないかもしれないしね。

「あぁ、それならば私とヴィータが両分隊の副隊長だ、私の名はシグナム、階級は二等空尉だ」

「あたしがスターズ分隊の副隊長のヴィータだ、階級は三等空尉だ」

「そして私が医務を中心に担当してるシャマルと言います。何か怪我などしたら私に所へ来てくださいね？」

「よろしくお願いします！」

こっちから挨拶しようと思っていたが、先に挨拶されたから、とにかく敬礼しながら挨拶を返す。
まぁ、立ち位置的には俺からだな。

「本日付けで、こちらに」

「あぁ、大丈夫よもうはやてちゃんから聞いてるから、右から順に響君に奏さん、流君に震離ちゃんでしょう？」

「え、あぁ、はい、そうです」

挨拶しようとしたのに途中で遮られた。

というか既に連絡入ってるって、一応は挨拶くらいさせてくれても良かったんじゃないか？

まぁ、いいか。

「えと、一応自分達がどの分隊に所属かは？」

「あぁ、それはわかんねーな」

「わかりました、自分と奏がライトニングで、コールサインが自分が5で、奏が6です、そして、震離と流がスターズに所属でコールサインが震離が5で流が6です、これからよろしくお願いします！」

そこまで伝えてからもう一度敬礼をする。

というか、さっきから俺しか喋ってねぇ。隣に居る奏に視線を移すと、目があって。

……ごめんね？

……気にすんな。

と1秒もしない内に互いの考えが分かった。まぁいいけどね、何時もこんな役だし！

まぁ、それよりも……。

「あのシグナム副隊長？自分の体に何か付いてますでしょうか？」

さっきからジロジロと人の体を見てるシグナム副隊長に声をかける。

……はっ、なんかシミでも付いてんのか！？クリーニングに出した分まだ戻ってきてないから。

今ある手持ちの奴着てるけど、若干よれてるからな……まさか、それか！？

「いや、お前は……いや、緋凰は何かやっていたのか？」

「……はい？」

「さっきからあまり重心があまりぶれないのでな」

「……あぁ、なるほど。小さい頃から一応剣術学んでたんで、今は出来る範囲でしかやってませんけど」

「ほぅ？」

……あれ？なんかシグナム副隊長の目が輝きはじめましたよ？何でシャマル先生とヴィータ副隊長はそんな憐れそうな目をしてるんですか？これから売られていく牛でも見るような目で俺を見てるんですか？

「え、響さー、一応は私よりも剣術はともかくとして、接近戦は私よりも遙かに強いじゃん」

え、何言ってんの震離よ？何時も最前線で突っ込んでいくお前よりかは弱いよ？そして、シグナム副隊長？何でそんなに嬉しそうに笑

ってるんですか？そして、何でヴィータ副隊長達は離れて言ってるんですか？

「……そんなことないよ」

「えー、今日だって普通に一人でガジェットを刀で斬ってたじゃん」

「ほう？」

……いかん、目の輝きのランクが上がって、鋭い眼光でこちらを見ている。

「……いや、お前も接近戦出来るじゃん」

「あたし杖だもん、それで剣持って純粋な接近戦してるの響だけじゃん」

もうやめて！？シグナム副隊長がすごくいい笑顔になってきてんだけど！？

絶対この人普段はこんなに笑顔になること無いタイプだよな！？

「なるほど、だったら――」

この提案の直後、頑張ったけど、結局無意味になりました。

ちなみに震離は少しでも話しておきたかったから口を挟んだらしく、悪気が無いのは分かるけど。

それでも、敢えて言おう。

なんてことしてくれたんだと。

第十二話　本日二度目の挨拶とすごくいい笑顔と。（後書き）

基本的に毎日書いてるわけじゃなく、時間があるときに一気に書いて、それが平均2千～3千字で小説を投稿しているのですが……やはり、小出しじゃなくて少しでも貯めて、1万字くらいで投稿したほうがいいのでしょうか？

さて、話が脱線しましたが、次回は既に予測しやすいと思います。勿論あれですwそして、少し響の別の意味での本気を出させます、伏線もちらっと出してみましたしw

それでは、次回も楽しみにして頂けると幸いです！

第十三話　緋鳳響の【本気】（前書き）

個人的に全力と本気は全く違う意味だと考えています。
まぁ、そのとおりなんですけどねｗ

さてさて、楽しんで頂けると幸いです。

第十三話　緋凰響の【本気】

――ｓｉｄｅ響――

「まず一言、一言だけ言いたいんですが、良いでしょうか？」

「あぁ、構わない」

「なぜこうなった？」

うん、まずその一言に尽きる。
なぜかというと、今いるこの場所が、訓練スペース……というか森のど真ん中で、バリアジャケットを纏って、尚且つ目の前で剣を構えた副隊長と相対してるんだろうか？

「ふっ、それはお前が受けたからだろう？」

「……そりゃ言いましたよ、時間が出来た時でいいですよ、と」

「あぁ、だから時間が空いてたからな、だからだ」

ごもっともです、だって、初日からいきなりハードでは無いけど、やり過ぎでしょうに。
だから、いろいろ言ってみたけど全部そっちに持って行かれたしなぁ……
だけど、どうもなぁ……

「……どうした？」

「……本当にどこかで会ったことはないですか？」

「いや、覚えはないな、第一覚えがあるなら私から言っている」

ですよねー、と心のなかで叫ぶ。

正直もう、ここまで来たのなら後には引けないしな。ここまで用意されてんのに逃げたとか言われたくないしなー。でもなー。

「では行くぞ、我はヴォルケンリッターが将シグナム」

……考え事をしているうちに向こうは既に用意が終わったっぽい。

剣を構えたし……。

ん、ヴォルケンリッター……？それで、シグナム……、烈火の将……、闇の……あ。

そこまで考えて思い出した。

――――――――

――ｓｉｄｅ奏――

「響、やる気無さそー」

まぁ、無理やり連れて行かれたしねー、しかもドナドナ歌いながらだったから妙にかわいそうに見えたし。

その上、見学は自由ってこと聞いた瞬間、流は戻っていったし……

それよりも。

「本当にここ使用しても大丈夫なんですか？」

「あぁ、大丈夫だ。なのはにはシグナムのせいだっつったら、納得してたしな」

「えぇー」

「まぁ、なのはとフェイトも来るっていってたし、もうすぐじゃないか？」

それでいいんですか？と、口に出せなかった。うん。

まぁ、響だし、あんまりやる気ないみたいだからなー。

「ヴィータ副隊長は何分くらいで終わると思いますかー？」

「……震離ー勝ち目無いかもしれないからってそれは酷い」

「……え？」

無自覚かー、まぁ、いつものことだからもう気にしない。

ひどすぎる場合は注意するけどね。

まぁ、私も気になってることだからまぁ、いいよね。

「いや、わからないな、あたしは昼の模擬戦見てないし、なのはから聞いただけだからな……って、そろそろ始まるっぽいぞ」

「あ、ほんとだ」

視線を響とシグナムさんの映るモニタに戻す。

相変わらずのやる気のない顔だなーなんて思ってみてたら、急に響

の顔が変わった。
うん、それこそ、文字通り人が変わったって言ってもおかしくないくらいで、久しぶりに見た。
――――――あんなにギラギラした目の響は。
だからかな、いろんな意味でやばいって思ったのは。
――――――――
――ｓｉｄｅ――
「緋凰響、推して参る」
「来い……っ！」
腰を落として、一気に重心を低くして、響はシグナムの予想もできない速さで間合いの内側まで肉薄し、掌打を放つ。
「くっ！？」
しかし……掌打は勢いをなくしシグナムの腹部に手を添えるだけ。
いぶかしげに見るシグナムだが、次の瞬間考えもしなかった体が砕けそうな衝撃に襲われ膝をつく。
その間に、刀を抜き構える。その構えは普段の響とは違う右の一刀流の構え。
「がふうっ！ごほっごほっ！」
「はは、【あの時】の倍以上の威力だ！」

響は更にシグナムの顎を蹴り上げるが、シグナムは無理矢理後ろに下がり回避するも、それを許さず更に追撃する。デバイスを――自身の相棒であるレヴァンティンを抜き迎撃するも、とっさに放った斬撃故に力が込められておらず、斬り込まれる。

「Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ」

完全に回避不可と判断したのか、咄嗟にレヴァンティンが障壁を生み出し、響の斬撃を防ぐ。
だが。

「甘い！」

紫のオーラをまとうシグナムに、響は自身のとっておきの一つの技を放つ。

「翔舞激閃！」

開いてる左の拳は障壁をも、甲冑をも打ち抜きシグナムの腹部に突き刺さり、そのまま木々をなぎ倒しながら吹き飛ばされた。

「ぐぅぅっ！ごはっ！ごほっ！」

「ちっ、障壁越しで斬っただけでもうヒビが入りやがった。もって後数撃か」

シグナムは膝を付き、苦しみながら響の実力に舌を巻いた。
それもそうだろう、響達と合う前になのはより話を聞いた限りでは、指揮の取れる人物とだけ聞いており、肝心の実力はなのはの中では

今のランクの少し上程度と認識されていたからだ。
だが、現実は。

「……面白いっ！」

シグナムは立ち上がろうとするが、がくがくと膝が震え、なかなか立ち上がれない。
しかしシグナムは気合で立ち上がり、そのまま剣を構え自身の今の状態を笑った。

（慢心か油断か……どちらもだな。私も腑抜けたものだな）

自分の状態に不利を感じるが騎士のプライドがそれを認めようとしない。

（目の前にいるのは一人の戦士。油断など最初からできない相手だった。ならもう油断はしない！）

［Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ］

「緋凰、お前は強い。だからこそ……全力で行くぞ！」

「……なんだ、まだ思い出せないか」

シグナムの剣に炎が纏わりつき、響は改めて構えを直すが、その構える刀は既に罅が入り、もう一本の刀でさえも昼の戦闘で、たったあれだけの戦闘でひびが入り、こちらも後数撃しか持たない状態であった。
だが、それすらも関係ないと言わんばかりに、二本の刀を抜き、構える。

此処からがシグナムの全力と響の本気の舞いの始まりだった。

第十三話　緋鳳響の［本気］（後書き）

視点変更が難しいです。
そして、この前の模擬戦とは打って変わってちょっと本気で書いてみました。つってもたかが知れてるんですけどねｗ

さて、まだ初日なのにイベントがたくさんあります。
作中の時間では次の日には出張ですしねｗ

それでは、今回はここまでにしておきます、以上ｋｙｏｎｓｉでした！

第十四話　血戦の終わり（前書き）

すいません、投稿したもんだと思っていたんですが……なんというか、されてなかったみたいで……本当に申し訳ありません！

さて、今回でアンケは締め切らせてもらいますｗ

それでは、残りは後書きで、では楽しんで頂けると幸いです！

第十四話　血戦の終わり

シグナムは剣を振るい切りつけようとし、響は剣をかわして自らもシグナムを斬りつけようとひび割れ、今にも折れそうな刀で狙う。しかしシグナムはそれを許さず迎撃、響も巧みに剣をかわしては再び斬りつける。

「陣風！！はぁあああ！」

［Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ！］

「ちぃっ！地龍砕波ぁ！」

レヴァンティンから衝撃波が発生し響に襲い掛かる。響もまた迎撃しようと斬撃を撃ち放つが、同時に響の持つ二本の刀が砕け落ち、その斬撃の威力もまた半減し、シグナムの放った衝撃波に負け、まともな回避行動も取れずに響は吹き飛ばされ、木々をへし折りながら叩きつけられた。

「がぁ……っ！」

更にシグナムが追撃し、木に体重を預けている響にボディブローを叩き込もうと一気に接近するが、響も負けてはいない。勝利を確信したシグナムが見たのは、高速で突っ込んでくる自分に対して自分を目で捉えてカウンターをあわせ様としている響の姿だった。思わぬ光景に驚愕するシグナムだが、その時彼女は響と目が合った。そして、気づく、いや正確には思い出した。彼とどこで会い、自分が何をしたのかを。

だが、その目に映る響は刀を――――柄を捨て、技を放つ体勢に入っ

ていた。

「……秘技、クロイツ・インパクト」

一瞬だけ密着したのを良いことに胸に手を沿え、シグナムに衝撃を叩き込む。

再び喰らった衝撃を歯を食いしばって耐え抜き、その勢いのまま響の顔面を掴むように掌打を放ち、後頭部を木に叩きつけ、その威力で再び木がへし折れる。

響は朦朧とする意識の中で、更にもう一発衝撃を叩き込む。

同時に、二人とも気を失いその場に倒れ、この模擬戦は幕を閉じた。

――ｓｉｄｅ奏――

「な……なんだありゃあ」

隣で今の模擬戦を見ていたヴィータ副隊長が小さく呟いてる。

震離は眼の前で起こったことがまだ信じられないようで、口を半開きにしている。

だけど、私は私で。

「さ……さぁ」

今目の前で起こった事をまだ把握しきってない。

正直それが一番の謎だった。それ以前に何で普段やる気のない響が今回に限ってここまで本気で戦ったのかが謎でしょうがない。だけど、だけど……。

「なんで、体術なんて……？」

「あぁ、そりゃ俺らが武器持つ前に叩き込まれたからだよ」

「そう……え？」

「よっ、久しぶり奏に震離？」

「え、あぁ、久しぶり優夜」

いつの間にか隣に優夜が来てて、私の疑問に答えてくれてた。
正直、頭の中で呟いてると思ってたけど、口に出てたらしい。だけど。

「武器を持つ前に叩き込まれてたってどういう事だ？」

「あ、お疲れ様でヴィータ副隊長、えぇ、響の親……もとい、響の母さんが武器を手に取る前に叩き込んでたんですよ、俺や響に煌の三人に」

「いや、武器があるならそれで練習とかしたらいいんじゃないか？」

うん、ヴィータ副隊長の言うとおりだ。私も響から小太刀二刀流を学んだって言っても今は既に我流の領域にある、ガンカタも取り込んだけど、今はライフルだから厳しいから出来ないけど。

「はい、俺もあいつも昔はそう思ってたんですけど、剣士にしろ何にしろ、武器がなかったら一気に無力化することが多いじゃないですか？」

「あぁ、特に魔導師はそうだな」

「なんか、そうならないように体術を最初に教えてたらしいんですよ、実際狭い室内とかじゃすごく役に立つんですけど……」

そこまで言って優夜の口が止まった。というより言いにくそうにし始めた。

なんだろ？

「どうしたの優夜？早く続きを」

「うん、分かった、ただ体術を極めたわけじゃなくて、教えた本質としては、武器がなくなった時、撤退用に教えられたんですよ」

「はぁ！？あの威力で撤退用だと！？」

「えぇ、それで響も最終手段として使う様にしてたみたいですけど、今回刀に罅が入ってて、なんか色々あって負けたくないって思ったから初手でいきなり使ったんじゃないですか？」

そこまで聞いてなんか気になる点が一つ出来た。

普段響ってあんまり因縁とか気にしないタイプなのに、今回は何であんなにやる気を出したんだろう。

「ねぇ優夜？何で響って今回あんなにやる気出してたの？」

「あ？そりゃ震離の方が知ってんじゃないのか？俺よか付き合い長いんだし」

……あれ？ということは……

「なぁ、お前ら緋凰ってか、響と何年来の付き合いなんだ？」

「へ、あぁ私が１２年位で」

「俺が１１年の付き合いですね」

……思ってた以上に長いんだね二人とも。

そう考えてると、ヴィータ副隊長がこっちを見たから私も答える。

「私は８年位ですね」

「……余計に分からなくなったな」

「そういや、なのはさん達は結局来なかったですね？」

そういえばそうだ。なのはさん達も模擬戦を見るって言ってたけど結局こっちに来なかった。

どうしたんだろうか？

「え、あぁ、食堂でＦＷ組と見るってさっき連絡貰ったぞ」

「……この血戦を？」

「……あぁ」

うわぁ、食堂今頃倒れてる人が居るんじゃないか……って。

「あ、震離！響とシグナムさんを医務室に！」

「え、あああ！」

「やべぇ、急ぐぞ！！」

慌てて私と震離とヴィータ副隊長が響達の元へ飛んで行く。

その間に優夜が医務室に連絡を入れてくれてたから、医務室についたとたんすぐに治療に入った。

第十四話　血戦の終わり（後書き）

アンケ結果は、１番の響＆奏、ある日奏は、響が見知らぬ女の人と話しているのを発見した、それだけならまだしも、その女の人と響は急に顔を接近させていたのを目撃して……

というものになりました、残りの選択肢はまた今度の記念アンケの時にもう一度エントリーさせますｗ

さて、次回はちょっと響とシグナムの因縁というか関係を書きますが……期待せずに待ってくださいねｗ本当にちょこっと書くだけなので、同時に予定じゃ流も含めてオリキャラ８人が全員揃う予定です、感想のコメントを返す人数も増える予定です！

それでは、また次回も読んで頂けると幸いです！以上ｋｙｏｎｓｉでした！

第十五話　昔のことをちょっとだけ（前書き）

さて、今日は人数多いけど。全員分セリフ出させなかった……すいません！

さて、キャラ紹介のところにイメージＣＶを書きました！
響を除けば皆知ってるかもしれない方々です！

さて、今回の話楽しんで頂けると幸いです！、

第十五話　昔のことをちょっとだけ

夢を見る、というより昔の事を思い出してた。
震離が付いてきてて、優夜と煌が喧嘩してて、奏に剣を教えてて、瑞希が泣いてて、雪奈がそれを守ってて。
それで、皆で山に……はっ！

「俺勝った!?」

「引き分けだよ、そして寝てないと」

「ぐぇっ！」

意識を取り戻したと同時に、どっちが勝ったか分からなくて疑問を口にしたら、即効で奏に倒された。
そうか、引き分けか。あーあ、刀にひびが入ってなかったら……いや、どっちにしろ折られてたか。
って、何気なく周りを見回すと、なんか隊長陣と、奏達全員が揃ってた。なんだ？

「……何で皆揃ってるんだ？」

「あ？あぁ、お前が柄にもなく珍しく本気で模擬戦してたから全員気になって此処に来たんだよ、というか本当にどうしたよ？始まる前までめんどそうにしてたのに」

俺の疑問を煌が答えてくれた。あれ、言ってなかった……な、うん。
それよか……

「シグナム副隊長は？」

「あ、あぁ、副隊長？」

「む、あぁ、起きたか緋凰」

隣のベットからカーテンを分けてシグナム副隊長が出てきた。

うん、あんまり外傷はないな、中はどうかはしらんけど。

「で、響はどうしてあんなに本気でやったの？」

「お、久しぶり、瑞希に雪奈？」

「やほ、久しぶり」

ベットを挟んで窓側に瑞希と雪奈がいて、瑞希の疑問よりも先に挨拶をしておく。

雪奈は声で返事してくれて、瑞希は笑いかけてきて、うん。二人とも久しぶりかどうかは知らんが、可愛くなっ……はっ！

「響？」

「なんでもない、本気でやったのはちょっと訳ありでな？」

「どんな理由なん？」

うん、はやてさんが聞いてくるけど、何で全員揃ってんだよ？

すごく、びっくりだよ、本当に。

「シグナム副隊長、最初に聞きますけど、俺のこと覚えてますか？」

「……あぁ、先程の模擬戦で思い出した」

「さいですか、そうですね……とりあえず」

もう一度周りを見渡す、うん、こっちの面子はともかくとして、隊長陣が全員揃ってるのを確認する。

同時にＦＷ組、もといティアナ達が居ないかも確認する。もしかすると話してないかもしれないし、それ以前に知らないかもしれないからな。さて。

「そうですね、八神はやてさん？」

「ん、どないしたん、急に改まって？」

いえいえ、改まりますよ、何だって俺は。

「今から１０年前、ちょうど俺らが７歳の時の今頃か位に、ここにいる俺を含めた７人の頭の中に一つ言葉が響きました。単純に「助けて」って、そん時の俺や優夜、煌に震離は気のせいだってことにした、親に説明しても無視されたからね」

この事を話した瞬間、なのはさんとフェイトさんの目が見開いた。うん、こっちも管理局来てから調べてたからな。

「これがきっかけで、奏と瑞希、雪奈の三人は魔法の存在を知ったんだよな、雪奈？」

「う、うん、お父さんに話したら他言無用ってことで説明受けて、驚いたのを覚えてるよ」

まぁ、こんとき震離は俺らと行動してたからまだ知らないんだよな。
後々自力で知ったけど。
さて、いい加減じらすのはやめるか。

「まぁ、話が脱線しましたが、それから数ヵ月後、ある晩に優夜の家から自分の家に戻る途中にある違和感を感じたんだけど……この話は皆知ってるか？」

「いや、知らん、ただお前が2，3日寝込んだのは覚えてるがな」

煌が答えてくれる。うん、あの時母さんが泣いて、震離も泣いて、優夜と煌は落ち着かなかったんだよな。
うん、懐かしいけど、今は置いておこう。

「まぁ、その違和感が全く人の気配を感じなかったって事なんですよ、で、おかしいなーとか思いながら歩いてたら空から人が降りてきたんだ、一本の剣を持った女の人が」

そこまで言ってはやてさんを含めたヴォルケンリッターの皆さんの顔が青くなる。特にシグナムさんは苦痛の表情を浮かべてる。それでも口は閉じない。

「それで降りてきて早々に、「すまないな。君の魔力をもらうぞ」って言ってから拳を振り下ろしてきたんだ」

まぁ、ここまで話して俺ら側はともかくとして、向こう側の表情がどんどん強ばってくる。
そこまで気にしなくてもいいんだけど……まぁ、後で言うか。

「まぁ、そこからなんやかんやで」

「なんでやねん！」

椅子に座って話を聞いていたはやてさんから突っ込みを受ける。
だって、なんか暗い話になってきたんだもん、仕方ない。

「まぁ、ただで負けるほどお人好しじゃないから、せめて俺を倒してから……勝ってから奪えって子供ながらに言ったんだよ」

「……ばかだなお前」

「響らしいな」

「うっせ」

今まで黙って話しを聞いてた優夜と煌がなんかいってくるけど、あんまり相手にしない！
ニヤニヤしててもしないんだ！

「で、そこから全力戦闘したんだけど……そん時得物無くて、仕方ないから素手で戦ったんだよ」

「で、何分持った？」

「1分半持ったかな？でも、魔力なしの、それこそ、その時の状態で殺すくらいの勢いでクロイツ打ち込んだ」

「……ぅ」

そこまで話してシグナムさんから小さく声が漏れる、うん、思い出してたか！
まぁ、思い出すよなーここまで話して思い出してなかったら人違いだと思うもん。

「それで、負けたからコア抜かれて、死ぬほど痛ぇとか思ってたら、抜き終わったから、シグナムさんが帰ろうとしたら、結界が急に割れたんだよ」

「結界割れたの？管理局来てなかったんでしょ？」

「うん」

うん、あの時管理局結局最後まで来なかったらしいんだけど、まぁ、それは置いといて。

「それで、統夜さんと、光一郎さんと、母さんが得物持って各々別の場所から突っ込んできた」

「あぁ、あの時突っ込んでいったな、いきなり槍取り出して、外に出るなよって言ってから」

優夜があの時のことを思い出してしみじみ語る。うん、あの時意識はほぼ吹っ飛んでたけどぎりぎりあったからな、微妙に覚えてる。

「で終わり」

って言った瞬間、あたり一面一気に静かになった。まぁ、わからんでもない。だけど俺がまさかこの立ち位置になるとは思わなかったけどな。せーの。

「はぁあああ！？」

「おぉ、皆さん揃った」

お笑い芸人もびっくりのシンクロ具合だ。

まぁ、それでもはやてさんとシグナムさんの表情は暗いけどな。

「……なぁ響？」

「なんでしょうか？はやてさん？」

「本当に、本当に……」

うつむきながら肩を震わせている。まぁ、ここまでにして本音を言うか。

「ストップ、そこまで」

「え、でも！？」

「別に俺らが恨みをいだいていたらさっさとあなた方に何かしてます。でも今までも何もしてませんし、これからも絶対にしません」

「……でも」

まぁ、この程度じゃ納得しないよなー。まぁ仕方ないな。普通だったら殺気立つところなんだろうし。

「はやてさん、俺は……いや、俺と優夜、煌の三人はそれがきっか

けで魔法の事を、管理局の存在を知ったんです」

うん、言った瞬間目が点になった。後ろじゃ奏達全員苦笑いを浮かべてて、煌と優夜の二人はケラケラ笑ってるし……そろそろか、せーの。

「えええええええ！？」

「満点です！」

うん、もう俺満足だ！笑い的な意味じゃ！

第十五話　昔のことをちょっとだけ（後書き）

さて、今回喋ってない方をあげよ！

なのはさん、フェイトさん、ヴィータさん、シャマルさん、ザッフィー、そして流の五人です！多くて書けなかったんです！

さて、イメージＣＶで響のイメージＣＶの方が昔どのアニメでどの役をやっていたのか当てた方には！
なんと、小説のリクエスト、うちのキャラを無料で連れていけること、もしくは、何か要望を言っていただくと、頑張って実行します！ですが、この三つの内の一つに限定させていただきます！

くっだらねぇと思われても構いませんｗむしろくだらなくて結構だ！
期限は次回投稿までで人数は特に指定しません。
応募は早めに……

それでは！ｋｙｏｎｓｉでした！

……自分で首を占めてる気がしてならないなｗ

第十六話　初日の終わり（前書き）

無理矢理感が半端ないんですが、初日をやっと終わらせます。
次回からはドラマＣＤもとい、鳴海行きです！

さて、長話もなんですので、どうぞ本編を読んで頂けると幸いです！

第十六話　初日の終わり

――ｓｉｄｅ響――

「あっはっはっは、響、この部隊楽しいだろ？」

「おう、最高だ」

後ろで腹押さえて笑ってる煌の質問に親指を立てて返事する。
本当に楽しいなこの部隊。本当に新部隊なんだろうか？
だって、あれから数秒立ってんのに、まだはやてさん達驚いて硬直してんだもん。

「な、そ、そんなわけあらへん！」

……おーぅ？いきなり全否定されて、後ろで爆笑してた二人の時も止まった。
勿論俺もだ。サムズアップした状態で止まってる。

「普通、夜天の書の主である私に恨みとか、響の魔力を奪ったシグナムを責めるはずや！」

「……えー」

さっきの説明だけじゃ絶対にアウトかなーとか思ってたけど、ここまで全否定されるとは思わなかった。
まぁ、ちゃんとってか、その時の心情言っても……駄目だろうなやっぱり。とりあえず言おう。そうしないとずっと平行線のままだ。

それはいけないし。

「……多分普通の人ならそうでしょうね、だけど当時の俺が抱いた事はただ一つ。次にあの騎士が……いや、シグナムさんが来たとき、絶対に勝つって事ただ一つなんです」

「……でも」

「そりゃうちの母さんは泣きましたよ、俺のことに対して、でもその時から魔力コントロールを教えてくれて、ひと通り空も飛べるようになったんです！……俺は」

とりあえず付け加えとく、とりあえず。

だけど、それでもはやてさん納得行かない様子で。

「……でも」

……うーん、ここまで来ると逆にこっちが悪いことしてるみたいじゃんか。無理やり終わらせるか。

「そこまでにしましょう、はやてさん？もしあのとき俺が恨みを抱いていたら、何らかの手段を持って報復しに行ってます」

「……」

気まずい空気が流れる、だけど口は閉じないし、やめない。

「それに、さっきも言ったとおり別に俺は気にしてません、きっかけは酷いもんでしたが、良くも悪くもそれが元で今俺やユウ、煌の三人はここにいるんです、だからもう気にしないで下さい、ってか

それ以上言ったら俺が悪者に見えるんで」

苦笑いを浮かべながら、後ろに視線をやる。多分、この中にいるはずだ、さっきフェイトさんの屋上で話してたの見てた奴が！現に一人を除いて、全員首をかしげるが、俺の意図が通じたのが反応してくれた。

「まぁ、お前結構悪だしな？現に模擬戦直後にフェイトさん泣かしてたし」

「……」

一瞬の静寂、そっかお前だったのかー、うん、何となく理解してたよ、お前屋上とか風がよく通る場所が大好きだもんね？そうだよな？

「はぁあああ！？」

「やっぱりてめぇか優夜ぁあああ！！」

「はっ！てめぇが悪いんだろうが！」

「あぁ！？軽い人生相談みたいなことになってたんだよ！！！」

ベットから飛び上がって、優夜に掴みかかる。そんで同時にアイコンタクト！

――――助かった、ありがとうな？

――――気にすんな、貸一つな？

で、終了、うん、身内ネットワークだと念話とかしなくても大体言いたいことが通じるから便利だよね。
さて！

「てめぇ、ごらぁ、表でろやぁあああ！！」

「上等だ響！！今日こそ俺が白じゃ！！！」

「返り討ちにするわぁ！！」

「はっ！」

そう言って、ドタバタしながら医務室の外に出ていく、俺と優夜…と奏。ちょっと！？何でデバイス起動してんの！？やめて！？ってか絶対さっきの真に受けてんだろ！？俺泣かしてないよ！？
視線を優夜にやると、再びアイコンタクト発動。

――――助けて！？

――――無理だ！！

生まれて初めて、友情が役に立たないと思った瞬間です。
ちくしょう、刀折れてんのに奏の相手なんか無理なんだけど！？

――ｓｉｄｅ煌――

「てめぇ、表でろやぁあああ！！！」

「上等だ響！！今日こそ俺が白じゃ！！！」

「返り討ちにするわぁ！！」

「はっ！」

……まず一言。いいなー俺だって久しぶりに体動かしたいのにな～。最近ずっと事務仕事ばっかで素振りぐらいしかやってないんだもん。まぁ、それよりも、優夜と響が行って……あ、奏ちゃんが銃持って行った。頑張れ響。

さてと。足音が遠くに行ったのを感じてから。

「……今日はお開きにしましょうか？」

とりあえず提案を一つあげるけど。それでもやっぱりはやてさんの表情は暗い。

せっかく響が自爆してまで空気変えたのにな～、それで奥でフェイトさんが顔を赤くして、なのはさんが慰めて、シャマルさんが話を聞いてる。パッと見女子高みたいな感じだ。それよりも、隣にいる雪奈さんに視線をやる。

――頼める？

――はいはい、ちょっと行ってくるよ

――あんがと。

一瞬だけ視線合わせて思ってることを伝えて、雪奈さんを響達の元に送り出す。

さて、こっちも片付けるか。

「んー、別に気にしなくてもいいと思いますよ、はやてさん？」

「……でも、夜天の書の事は」

ここまで来るとほんと扱いに困るな。まぁ、いいかそんだけ重いことなんだろ。

「本人が気にしてねぇって言ってるんです、多分もういいんじゃないんですか？」

「……」

「さっき本人が言ってたでしょう？本当に恨んでたら何かしてたって、それにあいつシグナムさんの甲冑見てから思い出したみたいだし」

多分本当の意味じゃそうだろう。実際模擬戦前の映像見てたけど、名乗り上げるまで引っかかってた程度だしな。

「それに……」

「それに？」

「あいつが……緋凰響がそんな事気にするタイプの人間なら、俺も優夜も瑞希も雪奈も奏も震離も誰もあいつと一緒に居ませんよ」

「……は？」

「だから気にしないで下さいって言っても無理だと思うんで、せめてあいつに気を使わせないでやってください、明日からせっかく地

元に帰れるのに、そんな暗い顔をしてたら折角の美人な顔が台無しですよ？」

ここまで言ってようやっと納得した感じで暗い顔が明るくなっていった。

よっしゃ、俺頑張った！現にはやてさんもシグナムさんの表情が普段どおりに戻りつつある。

さてと、所で瑞希よ？

「俺が悪かったから、不貞腐れんなよ？」

「……別に不貞腐れてないし、それよりまだいくつか仕事が残ってるので私はこれで」

「あ、瑞希私も手伝うよ？」

「ありがと震離、終わったらご飯一緒に食べない？」

「いいねー、流も行こう？」

「え、ちょ……」

「いいからいいから」

おーい、無理やり連れて行っちゃ……って遅いかもう。

まぁ、いいか、後で会いに行くかね。さて、俺もそろそろ。

「よし、俺もそろそろ行きますねー」

「ん、どこに行くん？」

「多分屋上で、響が困ってるだろうからその助っ人に」

まぁ、実際雪奈さんがいるから問題ないと思うけど、奏ちゃん案外頑固だからなー、多分駄目だろうし。

それに面白いことになってたら、楽しいしね。

「あ、そうや、煌達四人のお願いがるんやけど？」

「明日の出張のお手伝いなら出来ませんよ～、四人追加配属の資料、更には別の仕事も山ほどあるんです、とてもじゃないですけど、忙しすぎて厳しいです」

ちゃんとはっきり伝えとく、ここに新人の子達普通にすごい人ばっかだけど、まだ新人ということもあってまだ即戦力にはならない。

最低でも後二週間くらい教えとかないと、動かないしね。

「……そっか」

「すいません、それでは！」

軽く敬礼ししてから、俺も医務室を出て、廊下に出た瞬間。

とりあえず屋上に向かって全力ダッシュ！久しぶりに体を動かして、その後響にも仕事手伝わして……その後あいつの部屋に突撃して皆で麻雀でもしたら、絶対に楽しいしな！

ちなみに、その後、案の定屋上で響と奏のガチバトルが勃発してたのは多分言わなくても分かるだろう。

第十六話　初日の終わり（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？
正直めちゃくちゃ急ぎ足で書いてる点が目立ちます。
もういっそ二話分かいて投稿しようかなと思い始めた自分が居ます。
早く、早く、早く！一番好きな二人を絡ませたいんだっ！

前振りしときますと、何時になるかはわかりませんが、ある人物がかわいそうな結果になって、ある人物のことを後々苦手になります。
ちなみに、このタイプの話を嫌う人がいるかもですが、それは申し訳ありません。まぁ、前振りなので、これ以上ハードルは上げたくないのでおとなしく、今日は終わります。

それでは次回も読んで頂けると有難いです、以上ｋｙｏｎｓｉでした！

……この作品面白いと思ってる方は果たして何人いるのだろうか…
…ｏｒｚ
と最近思ってしまって仕方ありません。
あと、要望等がありましたらメッセージや、感想に書いてくれますと返事等をしますのでお気軽にご利用下さい！

それでは！

第十七話　外に行こう（前書き）

さてさて、少しＣＤ前にオリジナル面子を一度全員出したいなということでいきなり方向転換させました！
ごめんなさい……ＣＤ出せよと思ってる方ごめんなさい……

それでも楽しんでいただけたら幸いです、ではどうぞ！

第十七話　外に行こう

――ｓｉｄｅ震離――

「服買いに行こー」

「あ？」

目の前で麻雀を打つ響、優夜、煌の三人、略してひゆこに言う。
というか日を跨いでるのにまだ麻雀打ってたんだ。麻雀なんて確率ゲームなのに何が楽しいのやら。
まぁいいや。

「……今何時だと思う？」

「午前０時１１分４８秒！」

「相変わらず、具体的すぎるなーで、何で震離ちゃんは服なんか買いに行くんだよ？あ、それポン」

「……えー」

煌が笑いながら聞いてくるけど、一応そこは乙女の……いいやめんどくさいし。

「……単純に遊び用の服とか入った荷物がまだ届いてないんだよ、私も奏も響も、そうだよね？」

「震離ー、今なんか考えたけど絶対面倒だと思ったでしょ？チーだ」

「うわ、優夜にバレた」

ものの数秒でバレたよ、やっぱり付き合いが妙に長いからなーやっぱり隠しきれないかー。
それよか響さー。

「なんでそんな微妙そうな顔してんの？ほい！」

「……いやさ、ここってさ一応は男子寮だろう？」

「うん、そうだねー」

「……大丈夫だったか？いろいろとっ！」

あー、そういえば。

「ここに来る途中に上半身マッp」

「あー了解、もう言うな」

即効で響がストップしてきたけど、私は！

「……それ以上言ったらお前の子供の頃の写真見せるぞ」

「フッ……誰に見せると？」

「……はやてさんにだ、多分あの人そう言うの大好きだと思うぞ？」

「了解」

くっ、あの人きっと楽しむ様なタイプだろうからなー、話すまでどんな人かわからなかったから怖かったしね。

「くっくっく、やっぱりそうやってるとお前らほんと兄妹みたいに見えるぞ？」

「あー？そうでもないだろう、てか震離も俺みたいな兄は嫌だろう？ほいリーチ」

「何！？ここで負けたらトータルプラマイゼロじゃねぇかよ！？」

あれ、普段だったら負けないぜ！とか言う煌なのになんか焦ってるな、まぁいいや。

響が兄さんだったら、か……まぁ。

「そうでもないよ、ていうか行くの？行かないの？」

「あー、まぁ待てこれがオーラスだから、もう終わる……ほら早く出せよ煌？早く出せよ、今きた牌を！」

「落ち着け俺、場に一つと山にドラ表示に出てるんだ……通れ！」

「ほい、清老頭だ！優夜だっけ免許取ってるのは？」

「あぁ、一応取ってあるから送ってくよ、外出届書きに行くかー」

なんかプルプルしながらそっと山からとった牌をそのまま場に置いたと同時に、響が自分の牌を全部倒した。

へぇ、なんか鳥っぽいやつを煌が出して、響が一って書いてる牌と

丸っぽい奴が書かれた奴と棒が九こ掘られた……いいや、説明するのが面倒になった。それよりも。

「あー、あたしら荷物届いてないけど、流はどうなんだろう？」

「ん？あぁ、一応連絡入れておくか……三人とも先行っててくれ、連絡入れてからいくよ」

「……おぅ」

そう言って響の部屋から出て行くけど、煌も一瞬だけ沈んでたけどもう回復してる。
さすがだね！どうでもいいけども。

「じゃあ、俺は車借りる手続きしてくるよ？ちなみに誰がくるんだ？」

「え、幼なじみ全員」

うん、服がないこと伝えたら瑞希も雪奈も付いてくーって言ってからね。
そして、何で優夜はずっこけたの？

「……まぁいいやワゴン系の借りてくるから……煌、俺の分の外出届書いといて」

「おーぅ分かった」

「それじゃあ私は響の分の外出届書こうかな」

「そうしたら？ってかこんな時間に開いてんの？」

あーやっぱりそういう突っ込みが来たか、まぁ。そこんとこちゃんと調べてるんだけど。
ちゃんと下準備はしてるに決まってんじゃん！

「そっかならいいさ」

「……まだ言ってないよ？」

「あっはっは、別に付き合いは長いんだ大体分かるよ、さっさと行くか」

「え、ちょっとー」

何で言ってないのにバレたの！？ってそのあと聞いても笑ってばっかりで煌は教えてくれなかった。
ちぇっ、ちょっとかっこ良く行ってみたかったのになー。

で。

そんなこんなで。

「結局全員で行くのかよ」

なんか珍しく8人全員の外出届が受理されたんだって。煌に渡したらなんかすっごく驚いてた。
珍しすぎて、笑ってたしね。
それよりも、正直に言おう、ん？違うな正直に思おう。いや言おう。

「どうして流もいるの？」

「うん？俺が連れてきたに決まってるだろう？」

「……響、胸張って言うことじゃないと思うよ？」

うんそれは分かるよ、そして、瑞希の言うこともそうだけど、私が言いたいのは若干流不機嫌だよね？
何でなの？って聞こうとしたら。

「ん、流はどうしたんだ？」

お、馬鹿がじゃない煌が言った。そういえば響が負けて全員合流したときに挨拶してたね～。すっかり忘れてた。

「いえ、自分は服があるのでいいと言ったんですが……」

「流、訓練着で外に行っちゃいかん、ちゃんとした格好した方がいいぞ？」

あーなるほど。それはうん。仕方ない。カワイ……普通にお洒落するのもいいと思うよ？
それに地球だしね、なるべく観光客みたいな格好だったら怪しまれないだろうし。
あ……管理局の海鳴のガイドマップあとで見とこう、美味しいスイーツ店とか書いてあるし……

「で？開いてる店があるから出るんだろう？どこなんだ？」

「あ、それは私が案内するよ、震離をそっちに行かせてる間に調べ

たしね～」

「おぉ、さすがは雪奈だ、助手席で案内してくれないか……って、誰か助手席に乗らないと吐くってやついる？」

って優夜の質問に全員静かになる。まぁ居ないよね。ワゴン車だから結構広いし。問題ないかな全員で行くのは。

「じゃあ行くから全員乗ってくれー」

優夜の合図で皆車に乗り込む、ちなみに優夜が運転して、雪奈が助手席、真ん中に私と奏、瑞希がのって、後ろに煌、響、流の順で乗ってる。さて、ここで一言。

「なんだろう行ったこと無いけど修学旅行みたいな感じがして若干テンションが上がってる私が」

「こらこら、興奮しすぎない、そしてよくワンブレスで言い切ったね」

え、普通こんな事になったら何となくテンション上がらない！？私の中で今上がりまくってんだけど！

「でも、分からなくはないよ？」

「ありがとう瑞希！」

やった、さすが瑞希、話がわかる。そして後ろの面子は寝てるしね！

第十七話　外に行こう（後書き）

さてさて、楽しんでいただけたでしょうか？

とりあえず自分の中で選択しがありました、このまま服買いにそのまま続けさせるか、昨日のってか回想って事にしてドラマＣＤコースに入るかの二択があります、隠しにバトル展開が……いえ、何でも無いですｗ

それでは、次回も読んで頂けると幸いです！

第十八話　そして、この結果（前書き）

はい、今回もオリキャラチームで無双中で御座います。
すいません、まだＣＤまでの道のりは長いです。

いい加減記念も書かねばならぬ！

それでは楽しんで頂けると幸いです。ではどうぞ！

第十八話　そして、この結果

――ｓｉｄｅ震離――

「うん、落ち着け私、うん、落ち着け、今の状況を整理しよう。
えーと、３０分前に、デパートに到着して、皆で入った、ここまではいい。
で次は、各階に何があるか確認して、近くにエレベーターがあったからそれに乗って。
そこから、女性もの売ってる階に降りたら、既に誰もいなくて、私だけが降りてて。
で、待ってて折り返して戻ってきたかと思ったら、誰も居なくて、
今のこの状況っと！」

で、心のなかで一言。というより声を大にして一言言いたい。
何この状況！？あっれ？何でみんなはぐれたの！？まぁ、落ち着いて私。
今いる階が女性もの売ってる階だから……あ、あの服可愛いな……
はっ！違う。

「とりあえず、皆探そう！」

ふと引き返して、迷子センターの案内が目に入ったけど、気にしない、絶対に気にしないんだからね！
だけど、一人はやだなー、面白く無いのにな～ってか、よく考えたら私舞い上がってたかな？
だから、一人……？待って落ち着いて私！多分、多分なんかあるんだよ、きっとね！
……付き合うのが面倒とか言われたりは……しないよね！とりあえ

ず……ん、あれは？

――ｓｉｄｅ響――

さてと、いきなりで何だが……

「あっはっは、参ったなぁ……」

「……うぇぇえええ」

「……笑い事じゃないですよ」

とりあえず今の状況を言おう。

実言うと、３０分ほど前か、車から降りて皆でデパートに入ったんだけど、震離が案内を見てからエレベーターに直接行って、それを瑞希が追っかけていって、なんかそんなこんなで。

皆はぐれて、流と行動してたんだけども。

「ママがグレたー」

「……だから違うよ？」

と、なんか迷子の子が寄ってきて流の事を母さんって呼んでるんだよな～。ちなみに女の子ね。

なんかこの子の母さんが管理局員で、今日一緒に来たんだけど、母さんとはぐれたらしい。

というか、こんな時間に連れてくるなよー、深夜だぜ？俺らも人のことは言えないけども！

「……ねぇ、名前はなんていうの？」

「……グスッ」

目の前で流が困ってるのを見て、苦笑いを浮かべる。まぁ、まだ流とはそんなに付き合ってないけども、いろんな表情するんだな。さて、本気で困りだしたからいい加減助け舟出すか。

さっきから本気で困った顔してチラチラこっち見てるし。

「ねぇ、名前はなんていうの？」

「……グスッ、フレア……フレア・Ａ・アルトゥール」

「フレアちゃんか、えっと、俺の名前は響なんだけど、ごめんね？お母さんの名前はなんていうの？」

フレアちゃんの目線に合わせて話をする。なんていうか赤い髪のツインテールで、赤いチェックののワンピースを着て、凄く可愛らしい格好をしている。ちなみに言おう、俺はロリコンじゃないからな？ちゃんと、片想いの人とかいるからね！でもＡ？なんの略だ？

「……フレイって言うの、今日私の誕生日だったけど、急にお仕事が……」

「そうか」

なるほど、それでこんな時間に来たのか……まぁ、これで俺の考えが間違えていたら恥ずかしいよな。

さて、と、いい加減行動するか。

「フレアちゃん、一緒にお母さんを探そうか？」

「……これがお母さん」

「……そっくりだけど、その子一応男の子だからね？」

「……男の娘？」

「ん？うん、男の子」

あれ、なんか意思の疎通が出来てない気がするのは気のせいか？
まぁ、いいや。こりゃ服なんて買ってる暇は無いかもな。まぁ、適当にサイズ合わせて買うかな。

「じゃあ、行こうか？」

「……うん」

「ほら、流も？」

「……はい」

んー、流にそっくりだったらマジで笑いそうで怖いなー、頑張ろう俺。
……そういや、他の奴らは何してんだろうか？
やっぱりもう服買ってんだろうなー。あー、優夜にでも頼めばよかったなぁ、まぁ後の祭りか。

――ｓｉｄｅ奏――

「あはは、震離とはぐれたな？」

「……ぅ、まさか人ごみでエレベーターから降ろされるとは思わなかったよ」

「……まぁ、こんな時間なのに明らかに人多すぎるからね、でもどうする？」

うん、それが一番の悩みどころ。まさかエレベーターに6人乗って、私と優夜と瑞希の三人が人ごみに流されて別の階に降りるとは思わなかったよ。

響と流はぎりぎり間に合わなかったけど、そのうち登ってくると思ってたら一向に来ないし。

「……まぁ、他の面子は自力で来るだろうし、とりあえず服でも買いに行くか？」

「……んーでもなぁ」

「……それもいいかもね、優夜は響のサイズは分かってるの？」

「だいたいはな、一応あいつがどんな好きなのかも分かるし、まぁ、文句言って来たら居ないお前が悪いって言えばいいしな、それじゃ行ってくるよ」

手をひらひら振りながら、男物が売ってるフロアへ通ずる階段を下ってく、やっぱり、エレベーターはさっきので嫌になったんだね。

まぁ、私も嫌だけども。

「……それじゃ、私達も行こうか？」

「そうだね、女性物は４つ上の階だね、エレベーターは嫌だし、エスカレーターでいこうか？」

「うん、了解、それで奏は何買うの？」

「んー、まだ決めてない」

「真っ白いワンピースとかは？」

「……えっ！私が！？」

「うん、奏が」

え、ちょっと待って私が白いワンピースを着てる所を想像する。

……うん、無いな。

「瑞希、私じゃ似合わないよ」

「そんなこと無いと思うよ？奏って元が可愛いから、普通に似合うと思う」

普通に可愛いなんてあまり言われたこと無いから、顔が熱くなってくるのが分かる。瑞希だって言われたら軽くパニクッちゃってるくせになー、いけないこのままだと負ける！

「それ、私よりも震離や瑞希、雪奈の方だよ……私じゃ……」

「んー……まぁ嫌がるなら無理強いはしないよ」

「……うん、ごめんね？」

「気にしない気にしない、まぁ、私が見たかっただけって言うのもあるけどね」

「プッ、何それ？」

エスカレーターに乗りながら瑞希と話をする。あぁ、こうやってると昔を思い出すなー。

結局勝ててないけども、まぁ、いっか、皆でこうやってどこかで買い物して、何か食べたりしてね。ん？

「あれ、瑞希、このお店って……」

「……うん、あ、このお店は」

第十八話　そして、この結果（後書き）

さて、今回も楽しんでいただけたでしょうか？
毎回毎回不安な作者ですｗ

さて、次回は少し方向を変えていきます。

とは言っても表現できるかなと思っています、自分に文才無いのであれですけどもｗ

それでは、次回も読んで頂けると幸いです！

以上ｋｙｏｎｓｉでした！

第十九話　生まれた疑念（前書き）

今回は前回と打って変わって、原作サイドにしました。
はい、難しいですね関西弁、関西に……というか近畿に二年近く住んでるのにいろいろ掴めません。
相変わらず、まだ初日が終わった直後なのに何でこんなにイベントを追加するんだろう、この次海鳴に行くのにねｗ

それでは、今回も楽しんで頂けると幸いです！

第十九話　生まれた疑念

――時間は少し巻き戻る、それは響達が外へ服を買いに行く前よりも前、震離が部屋を訪れるよりも少し前に。

――ｓｉｄｅはやて――

「ゴメンな、二人ともこんな夜遅くに呼び出して？」

「ううん、大丈夫だよ」

「それよりもどうしたのはやて？」

目の前に私の親友であるなのはちゃんとフェイトちゃんの二人を呼び出す。
本当はもう仕事ももう終わって、二人とも疲れてるはずなのにそれでも来てくれたことに感謝すら覚える。

「うん、実はな二人に紹介しておきたい人がいるんよ、ただその人は機動六課の設立に手を貸してくれた人で、その人のお陰でこの六課の隊舎を手に入れることができたんや」

「すごい人なんだね」

「うん、そうなんよ、私もいろいろお世話になってる人やし、ただ、その人がなのはちゃんとフェイトちゃんに挨拶したいって言ってた

から今日は呼び出したんよ」

「あ、はやてちゃん、挨拶する前にその人の名前はなんて言うの？」

なのはちゃんの言葉に思わず名前を言ってなかったこと思い出す。

危ない危ない、失礼なことになる前で良かった。

「あ、そやったね、その人の名前は「アヤ・アースライト・クランベル」三等空佐って言う方や」

「あぁ、その人の事は知ってるよ、本局でも有名な方で、一度あったことがあるよ」

「うん、私もあるよ」

何や二人ともあったことあるんやね……それなら、内緒にしておけば良かったと心のなかで思う。

けどまぁ、六課に取っては恩人なんやし、失礼な事はあんまりしたくはない。

「それじゃあ、アヤ三佐に繋げるけど、用意はええか？」

「うん」

「大丈夫だよ」

「それじゃあ……ちょっと……あ、繋がった」

モニタを操作して本局と繋がったのを二人に見せる。

そして、そこに写ったのは、肩まで伸ばした黒い髪に、ややつり気

味の青い眼に、丸いメガネを付けてる人物が現れた。

『お久しぶりです、高町なのはさん、フェイト・T・ハラオウンさん、アヤ・アースライト・クランベルです』

モニタの向こうで深々と挨拶するアヤ三佐。うん、相変わらず大きな胸や。フェイトちゃんとシグナムとも引けを取らんほど人や。

「いえ、こちらこそお久しぶりです」

二人の声が重なる、うん、やっぱり会ったことあるから、それほど緊張してないみたいや。
まぁ、それよりもや。

「それにしてもアヤ三佐？今日は、どのような用ですか？」

「え、はやてちゃん知らないの？」

「……うん」

だってなぁ、なのはちゃんとフェイトちゃんに挨拶したいって言っただけで、他はなんにも言ってなかったもん。分からなかった。

『あぁ、そうね、えっと、今日そちらに三人ほど異動してきた子がいるでしょう？』

「え、えぇ、四人居ますよ」

『……四人？』

あれ、なんか四人来たって伝えたら眉を潜めたで？え、私なんか失礼な事を！？

（落ち着いてはやてちゃん！）

（あ、うん、大丈夫やで、なのはちゃん！）

心のなかでありがとうと本気で思う。

うん、あの子ら何をしでかしたんやろうか？

『あぁ、多分私の情報が遅かっただけです、はやてさん、なのはさん、フェイトさん、「緋凰響」と同じ部隊の三人には気をつけなさい』

「……え！？」

正直考えてもなかったことを言われたから凄く驚いてる。だって、今日異動してきた三人に気をつけなさいって、どういう事や？

『まだ、私も確証を得たわけではないけど、その三人、あなた達の……いえ、機動六課の不祥事をどこかに報告しているみたいなの』

「えぇ！？」

『ただ、報告先は本局ということを考慮したら、地上のレジアス中将ではないけど、まだ安心は出来ないの』

「……それは本当ですか？」

なのはちゃんの声が少し震えている。私やってそうや、まだ会って

一日も経ってないけど機動六課の仲間を疑う事はあまりしたくない。
それはフェイトちゃんも同じようで、少し肩が震えてる。

『現にその子達……正確には、「緋凰響」「天雅奏」の二人は良くどこかに報告しているらしいの、ただ、これ以上は向こうに悟られるから調べられなかったけど……』

「……」

正直思っても居なかった、私達の予想は地上から来た流が監視者かと思ってた、いやまだその可能性は捨てきれない。だけど、あの三人が……いや、響と奏が監視者だったなんて……正直凄く驚いてる。

『ごめんなさい、ただ、警戒はしておいてって言う事を伝えたかっただけなの』

「いえ、わざわざ教えてくださって」

『いえ、私こそこんなことでしか貴方達の力になれなくて……でも』

『アヤ三佐、時間です』

アヤ三佐の秘書らしき人の声が入った。そうか……アヤ三佐忙しいのにわざわざ連絡を……

『ごめんなさい、はやてさん、なのはさん、フェイトさん、今回はこれで』

「あ、いえ、こちらこそ」

モニタの向こうで深々と頭をさげるアヤ三佐に釣られてこっちも頭をさげる。

頭を上げたと同時に、モニタが閉じた。同時に、この場を支配する沈黙が痛々しくて、明日から彼らとどうやって顔を合わせればいいのか分からなくなった。

だけど、今日はそのまま解散したけど、あの三人に対する疑念が生まれた瞬間でもあった。

第十九話　生まれた疑念（後書き）

次回はいつも通りの路線（笑）もとい、はぐれてる面子と男の娘の話に戻ります。ちょっとシリアスは苦手です……多分修正を入れると思います！

そして、ちょっと、記念小説を投稿したんで、目を通してくださると有難いです！

それでは次回も楽しんで頂けると幸いです。

第二十話　己が分からない（前書き）

はい、なんか前回のまま終わったらモヤモヤするので、とりあえず明るく行こうと連チャンで投稿します。

はい、キャラ崩壊してるんじゃないかと思われても、崩壊してないから恥ずかしくないもん！

はい、それでは楽しんで頂けると幸いです！

第二十話　己が分からない

――ｓｉｄｅ響――

「……ママ抱っこ」

「……はいはい」

後ろでそんな会話が聞こえてきて、思わずってか吹き出している。だけど、流に悟られないように笑うけど、声が出そうで辛い。だって、ねぇ？

普通に順応していうる流がもう……ん？今俺なんて思った？うん、少し落ち着け、落ち着けよ俺！俺は普通だ、普通の男だ、男が可愛いなんて思わねぇぞ！

そう思いながら、多分嫌がってるだろう流の顔を確認しようと、後ろを振り向き、流の顔を見る。

「……グスッ」

「よしよし」

……普段ってか、まだ会って２４時間経ってないけど……けど、けど！

「うわぁあああああああ！！！」

「っ！緋凰……さん？」

「違うんだぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！」

本気で走る。なんか普段から想像出来ない位笑顔で、フレアちゃんをあやしてるのを見て可愛いって思ってないぞ、思ってないんだ！俺は俺は俺は！普通で！

とにかく好きな子がいて、まだ告って無いけど！俺は普通だなんだ！！！！

「お客様ぁあ！？」

「ごめんなさいぃぃいいいいぃぃい！！！！」

この時俺の中の何かがぶっ壊れた瞬間でもあった。

言っとくけど、俺は普通だからな！絶対普通だからな！

――ｓｉｄｅ流――

「お客様ぁあ！？」

「ごめんなさいぃぃいいいいぃぃい！！！！」

なんか謝りながら走っていく緋凰さんの後ろ姿を見送る。

正直に言えば、走って追いかけたいけど、フレアちゃんを抱っこしてる状態だと、正直無理で。

だから見送るしか無いけど……どうしよ？

（マスター？とりあえず、迷子センターに連れて行ったら良いので

は？）

（うん、それは後で、先に確認取っておきたいから）

（……はぁ）

アークから念話が届いたけど、それよりも先に。

とりあえず、周りに六課関係の人が居ないのを確認してから。

「ねぇ、フレア？フレアはどこでお母さんと離れたの？」

「……ぅ、エレベーターに乗ってたら、人に連れられて……」

「……そう」

正直危ない気がしたけど、多分気のせいだよね。正直その危ない部分が何か分からないけど……うん、もう一つ聞いておこうかな。

「フレアは今日誕生日だったんだよね？ここには何しに来たの？」

「……お母さんが誕生日プレゼントに新しいお洋服を買ってあげるって言ってたら……それで……」

「そう」

なるほど、服を買いに来たのか。だったら、子供服売り場にいる可能性が高いな……それでも見つからなかったら……

「……置いてかないで」

「ぅ、大丈夫、見つかるまで一緒にいるからね」

（墓穴ほった！マスターが墓穴ほった！）

（アーク！）

念話でアークが騒いで、ギルは注意するけど、どっちにしろ傷つくからやめてね？本当に。

さて、子供服売り場は……ここから3つ上か、あ、ここって男性物が売ってるフロアなんだ……緋凰さんと階段登ってきて良かった、一階だといろいろ駄目だったしね。

「……お母さんエレベーターが来たよ」

「……フレア？私の名前は流、風鈴流なんだよ」

「……にゃがれ？」

……まぁいいか、呼びやすい方がいいだろうし。

「うん、呼びやすい方でいいよ？」

「……にゃがれお母さん」

そこは譲らないのかー、なんて考えながらエレベーターに乗り込んで3つ上の階のボタンを押す。

うん、あんまり人乗ってないんだねー。

「にゃがれお母さん～♪」

「……はいはい」

男だけど、お母さんって呼ばれるなんて正直思わなかったよ。

だけど、悪くは無いかな……。

――ｓｉｄｅ優夜――

あー階段で降りるのめんどくさいな。思ってた以上に、普通にエスカレーターで下れば良かった。さて、男物が売ってるフロアに到着して、辺りを見渡す。

うん、なかなかいいなー、お？エレベーターの扉が締まっていく。

うん、人が多いからもう乗らねぇ。絶対乗らねぇ。

まぁ、そんなことよりもだ。

「流と響はどこ行ったー？」

良く解らん口調を呟くけど、言ってて寒くなった。

けど、あいつらほんとどこ行ったんだ？まぁ、エレベーターに乗ってて人の波に負けた俺が言えることじゃないけども……さて、どこから探すかね。なんて思ってたら。エスカレーターから登ってくるのが二人。

「おぅ、優夜―」

「あれ、迷子だ？」

「……違うからね雪奈？」

普通に挨拶する煌と、会ってそうそうにいきなり失礼なことを言う雪奈にジト目で視線を送る。

まぁ、私を見よって目で語ってるからもうやめるけど。だって、それでも見てたらなんか精神的に負けた気がするからね！

「で、響と流と震離は？」

「あ、知らんけど、瑞希と奏ちゃんは？」

「女性物売ってる場所に行ったから、雪奈も行って来たら？」

「そう、じゃあ行ってくるよ、エスカレーターで」

あぁ、何だ雪奈も被害者か。それならば仕方ないな。もう乗って良く解らん場所に折りたくないしね……。

エスカレーターに乗って登っていく雪奈を見送って、さて。

「どうする？」

「ん、ノープランだ」

「……とりあえず、俺は響の分の服さがすけど、煌は？」

「あぁ、じゃあ俺は三人の捜索かな、お前はまだここにいるんだろう？」

「んー、まぁ、ここに居なかったら食べ物フロアにいるかもしれんから」

「あいあい、じゃあまたな？」

そう言って煌もエスカレーターに乗って、また下ってく。

まぁ、上には雪奈達がいるし、このフロアには俺がいるし……まぁ、大丈夫だろ。さて、適当に決めるかな。

第二十話　己が分からない（後書き）

はい、楽しんでいただけたでしょうか？

私自身最近自分の小説の設定と展開、説明の甘さがひどすぎてちょっとヤバイかなと危機感……ちょっとどころじゃないな、かなりレッドゾーンで危機感が半端ないです。

もう本当に甘いなと自覚してから、再び下ってますけど、それでも頑張る！

それでは次回も楽しんで頂けると幸いです！

え、流は男だろうって？違う、流は広いんだ！「広いん」をカタカナに変換してね？

……何やってんだ俺はｏｒｚ

第二十一話　人が分からないけど、親子はいいね。（前書き）

はい、オリジナル街道終了までこれを含めて後二話です。

前回はよく分からない暴走をしていましたが、問題ないです。

それでは楽しんで頂けると幸いです！

第二十一話　人が分からないけど、親子はいいね。

――ｓｉｄｅ震離――

「……本当に付き合わせてしまって、本当にごめんなさい」

「いえいえ、お気になさらず～、困ったときはお互い様ですよ」

お隣りを歩く赤っぽい髪のロングの女の人と話をする。

ん、私？さっきまで迷子じゃなかったかって？そんなことは無い。

さっきは、響辺りが迷子センターに居ないかなーって思ったから迷子センターが目に入ったんだよ！

「……震離さん？どうかしましたか？」

「ん、大丈夫です、連れのことを考えてただけですよ（……あれ、名乗ったっけ？まぁ、いいか）」

「……本当に探してくださって本当にありがとうございます」

「いえいえ」

まぁ、私の事は置いておいて、今私のとなりを歩く女の人は、ついさっき出会った人だ。

髪が赤っぽくて、ロングなこと以外、正直な所、流にしか見えない。

実際迷子センターに居て、凄く驚いた。

だって、私の第一声が「え！？流！？」で、この人……いや、フレイさんが「え、えぇ！？」って反応させてしまって驚かせてしまっ

た。だって、そっくりなんだもん……本当に、ただ流との違いは、眼の色、髪の色、髪の長さくらいだもん。それ以外はほぼ一緒、流とも同じくらいの慎重だしね。

「それよりもフレイさん？」

「はい、どうしましたか？」

「……すっごく失礼な事を聞きますけど、年は……？」

「ん、ふふっ、何歳に見えますか？」

優しく微笑みながら、逆に聞いてくる。

うん、わかんない！だって、この人５歳になる娘がいるんだよ！？

あ、説明してなかったけど、今の私の状態は、フレイさんと一緒に、娘のフレアちゃんを探してるんだ！ついでにはぐれた面々を探してるんだけども。

さて、フレイさんの問題にもいい加減答えなければ……あれ？あのベンチに座って、黒い尻尾はやした人は……あ。

「あ、すいません、ちょっと待って下さい」

「ん、わかりました」

「……おーい、ひーびーきー！」

ベンチに座ってた人が私の声に反応した。顔が見えて、うん。響で間違ってなかった。

だけど、なんか疲れきってる気がするのは気のせいかな？なんかよろよろした足でこっちに来たけど……

「……おぅ、どうした？」

「……どうしたの？」

「……いや、ちょっと、俺の中で何かが崩れて……ん？」

と話してたら、私の隣にいる人に視線がいって……あれ、なんか顔が赤くなって、一気に青くなった。どうしたんだろう？

「……何だ流はついに子連れから、そっちの道に行ったの？むしろ行かせたの？」

「……なんか、わかんないけど、とりあえず失礼な事言ってるよね？」

「あ？」

――事情説明中＆ａｍｐ；自己紹介――

ただ、途中でお前が迷子じゃねぇかって言われたけど、私じゃないもん！

「……えと、その子って、今日……ってか昨日誕生日で、赤い髪のツインテールで赤のチェックのワンピース着てる子じゃないですよね？」

「え！？」

「そして、フレアって名前じゃないですよね？」

「はい、その子です！」

「うぉぅ」

ってなんか響が膝ついてなんか崩れた。分かりやすく言えばｏｒｚ状態だ。
この反応から察するに。

「さっきまで、俺その子と一緒にいた」

「えぇ！あの子は今どこに！？」

「あ、待ってフレイさん、今はとりあえず流が側にいて、一つ下の階にいると思います。動いてなければの話ですが」

「で、何で響はココにいたの？」

って私が聞いたらなんか遠い目で、どっか見だしたよ。え、何この反応は？
ん？そういえばさっき、「……何だ流はついに子連れから、そっちの道に行ったの？むしろ行かせたの？」って私に言ってきたな……
そっから察するに。

「何だ、響、流見て発ｚｙ」

「あ゛？」

「なんでもない、とりあえず行きましょうか、フレイさん？」

「はい」

なんか後ろで黒いオーラを私に向けて発する響は置いといて……とにかくフレイさんと共に、一つ下の階に向かう。ただ一つ言っておくけど、響が怖いからじゃないからね!?

あ、そういやさっきの話の続きが残ってなー。よし。

「フレイさんフレイさん?」

「はい?」

「……さっきの話ってまだ続いてますか?」

「さっきの……あぁ、年の話ですか?」

「はい!何となく回答がわかりました!」

「……お前、そんなこと聞いちゃ失礼だろう?」

うるさいな響、さっきのやりとり知らないくせに!

「響さんは、私の事何歳に見えますか?」

「……え?あ、あー……少し待ってください」

「……響だって、即答出来ないじゃん」

うっせ、って目で訴えかけるけど、私は知らない。

さて、フレイさんの年齢、私の予想は!

「フレイさんの年は、２５ですね！」

「……それはどうしてですか？」

「えっと、フレアちゃんの年が五歳って言うのと、フレイさんの容姿が若すぎるからですね！」

多分ってか絶対そうだ、これにはちょっと自信がある。
隣を歩く響も納得したみたいに首を縦に振ってるし。これはいったんじゃない！？
当てても何ももらえないけどね。

「……もっと上ですよ♪」

「「……えぇ！？」」

「え！？嘘ぉ！？じゃあ、じゃあ、２９歳とか！？」

「いいえ、もっともっと上です♪」

「……失礼ですが、３２とか３とかですか？」

「……もう少し♪」

ここまで言われて私と響が顔を見合わせて、顔が引きつる。
幾ら何でも若い若いって……えぇ～、パッと見流と同じくらいなのに！？

「あ、この階ですよね、響さん？」

「え、あ、あぁ、はい、さっきまでここにいるはずです」

で、降りてきた階は、男性物とか取り扱ってる所で、本当にさっきまでここにいたんだろうか……こんな時間だから、男の人も白髪の……あれ、優夜じゃない？

「あれ、優夜だ、ってかあいつ服買ってるし……おーい、優夜~」

響が遠くから、声を掛けると大きな袋を二つ持った優夜がこっちに来た。

「おぅ、迷子二人」

「違うよ！」「かもな」

私は一人で否定して、響は軽く認めてるし……あれ、もしかして私だけ孤立してたのかな……？いや、そんなこと無い、とりあえず優夜にも事情を……って、響が説明して、もう終わってるし。

「……いや、しばらくここにいるけど、流は見てない」

「え？じゃあ赤いチェックのワンピ来た女の子は？」

「いや、もっと見てない、すいませんフレイさんお役にたてなくて」

……あれ？そうすると、本当にどこ行ったのか分からなくなったんじゃ……なんか響の顔見ると若干青ざめてるし、フレイさんも青くなってるし……あれ、本当にヤバい。

「おーい、響ー」

「「「ん？」」」

なんか重苦しい雰囲気になった頃にエスカレーターから煌が登ってきた。

とりあえず。

「煌―、下の階で赤いチェックのワンピ着た女の子か、流の何方か見なかった？」

「いんや、見てない、下の階見てきたけど、居なかった……そちらの方は？」

「あぁ、この人は……」

って優夜と響が煌に説明している間、私はフレイさんの隣に移動する。

私自身、ちょっと役になってないからね、それで……

「……ごめんなさい、フレイさん……」

「いいえ、こちらこそ協力してもらってるんです、こちらこそ本当にごめんなさい……元々私がいけないです、私が管理局の仕事に……」

「いえ、でも、いいお母さんじゃないですか！」

「……何時もあの子の側にいてあげられないから……誕生日の時位一緒居ようと……」

あぁ、なんかフレイさんのネガティブスイッチをいれちゃった……いけない、どうしたら良いの！？えと、響―って、話ししてる……優夜―って、同じく会話中……こう……はもっと会話中だ。どうしたら……あ。

「フレイさん、そのフレアちゃんの誕生日プレゼントって何買う予定だったんですか！？」

「え、あ、今日はあの子に新しいお洋服を……」

「それはフレアちゃんも知ってるんですね？」

「え、えぇ、ちゃんと伝えて一緒に買おうねって……」

よし、分かった。大体流と一緒にいるんだったら多分、子供服売り場のある階だ！

「響！？」

「分かった、どうするエレベーターで行くか！？」

「はぁ！？」「また逸れるだろうが！」「ばかじゃないの！？」

「何で俺がそこまで言われなきゃいけないんだよ！？」

とりあえず、階を確認して……三つ上か！

「ごめんなさい、フレイさん！」

「えぇ、きゃ！」

フレイさんを抱えて……早い話が、お姫様だっこして、とにかく急いで子供服売り場に向かって走りこむ。だけど、お姫様だっこって憧れるよね！でも、だっこしてから気づく、フレイさんの顔を見れば見るほど、流にそっくりだよなーって。

ちなみに男どもはというと。

「お客様ぁあああ！？あ、さっきの！！」

「やべ！」

「何したお前！？」

「巻き込むなよ、今さっき登ってきたばっかりなのに！？」

ありがとう私のために犠牲になってくれて。さて、急いで親子の対面をさせようかな！

……今日は服買えないなー、でも、ま、いっか。

第二十一話　人が分からないけど、親子はいいね。（後書き）

さて、次回で終了です、そこから先はドラマＣＤです、長かったですねｗ
そして、事務組が出なくなります、少し悲しいです。

さて、次回はちょっと珍しい人物事、アルトゥール親子の話の終わりなんですが、さてさて、少し変わった出会いになります。ちなみに、次回で終わりますが、しばらくＣＤ編が終わってもしばらく、いやーな流れになります。流と事務組以外は。まぁ、既にこれでネタバレじゃね？と思われますが、少しでも楽しみにして頂けると有難いです！

それでは、今回はこれで失礼します。次回も読んで頂けると幸いです！

第二十二話　親子っていいね（前書き）

はい、オリジナル路線の終着駅です。

今回は長くてすいません、今日で終わらせるって言ったので、無理矢理二話分を詰め込みました。そして、何時もの二倍の容量にｗ本当にすいません。

それでは、楽しんでいただけたら幸いです。

第二十二話　親子っていいね

――ｓｉｄｅ震離――

「はっ、はっ、はっ、はぁ」

「……大丈夫ですか、震離さん？」

「勿論ですよ、ただ、思ってた以上に長くて、エスカレーター使えばよかったって後悔してます」

ちょっと中腰の体勢で息を整える。まさか男を犠牲にして、階段登ったら思ってた以上にきつくて、もう二度と走って……人を抱えて登るかっ！って思った。

まぁ、それはさて置いて。

「ふー、はー、ふぅ、さて、フレアちゃんを探しましょう！」

「はい」

私がそう言うと、フレイさんはニッコリと笑ってくれる。多分さっきの話で内心すぐにでも探し回りたいはずなのに、私が息を整えるのを待ってくれた。というか本当にすごいなとおもう、流が付いてるとはいえ、フレイさんからしたら初対面の人に預けてるようなもんだから、生きた心地がしないはずなのに。それでも落ち着いてる。だから、本当に。

「……すごいなぁ」

「……凄くないですよ」

「え、あ、その……」

「気にしないで下さい、私は何時もあの子を待たせてるんです、今日……いえ、昨日だって本当は一緒に入れるはずだったのに、私が仕事を優先させてあの子に寂しい思いをさせて……本当、ダメな母親ですね」

そう言って笑うフレイさんの笑顔は凄く痛々しい物だった。たしかに一般的な母親の像から考えると正直ダメな方だと思う。だけど、だけど私の中では――

――化物！何で、何であんたなんか――――――――――よかったのに！！！！

「……りさん？震離さん？」

「え、あ、はい？」

「どうしましたか？急に？」

「あ、いえ、少し考え事を……というかフレイさんはダメな母親じゃないですよ？こんなにもフレアちゃんの事を心配してるんです、それだけで十分優しくて、暖かい人だって伝わってきます」

「ありがとう」

さっきと違って、今度は本当に温かい笑顔を浮かべる。うん、この人はこの笑顔が本当に良く似合うなぁ。だけど、私も本当馬鹿だな、

今更昔のことを思い出すなんて。あの人はもう関係の無い人。今更どうこう思う人じゃない。うん、もうやめよう今は流とフレアちゃんを探すことに専念しよう。

「……いませんね」

「えぇ、移動したのかな？」

だけど、流の事だ流もフレアちゃんから話を聞いてたら多分ここに来てるはず、だけど……姿が見えない。少し歩いて見ると。

「……あ、叶望さん」

「え？」「あ、流」

柱の陰のベンチに座っている流と、流の膝枕で眠る女の子……多分この子がフレアちゃんだね、きっと。そう思いながら、フレイさんの顔を見ると、本当に安心したみたいで、自然と顔が微笑んでる。うんうん、よかったよかった。だけど、なんか流が妙にこなれてるっていうか、母親っぽい感じなんだけど……あれ、なんか流の目が点になった。あ、フレイさんも目が点になった。あ、紹介してないや。

「あ、えっと、流この人がその子の……フレアちゃんのお母さんの」

「へ、あ、えと、フレイ・A・アルトゥールと言います」

「あ、ご丁寧に、自分は風鈴流と言います……あ、すいません、フレアちゃんを……その」

「あぁ、いえ、事情は分かってます、本当にありがとうございます」

優しく微笑みながら頭をさげるフレイさんと、釣られて頭を下げる流。だけど、眠るふれあちゃんに気を使って、起こさないようにゆっくり動く。本当にこなれてなんか凄いな。

だけそ、フレイさんは、もう慣れたようだけど、流はまだ驚いてる。

「あ、そうだ……そのアルトゥールさん？」

「フレイでいいですよ？」

「え、あ」

「フレイでいいですよ？」

「うぁ」

「フレイでいいですよ？」

「……フレイさん」

「はい？」

……フレイさん凄い！私まだ名前呼んでもらったこと無いのに……一瞬で呼ばせた……今度私もやってみようかな、でも失敗しそうだけど。ちょっと無理矢理距離を詰めよう！うん、そうしよう。

「その、フレアが言っていたんですけど、プレゼントなんていらないから、少しでも一緒にいてほしいって、さっきまで言ってました」

「……はい」

「だけど、フレイさんの事が大好きで仕方がないみたいですよ」

「……ありがとうね、流さん？」

「いえ」

……さん付けで呼べば私も最初の時、あんなに地雷を踏まなくて済んだのかもなー。

「えっと、今なら熟睡してるみたいなので……起こさないように」

「あ、はい、おんぶしたいので、私の背中に」

「はい、起こさないように……」

おぉ、流がゆっくりフレアちゃんを抱いて、フレイさんの背中に乗せた……本当に上手いなー。なんて考えてるうちに、フレイさんがおんぶして、いろいろ準備が終わったっぽい。

「流さん、ありがとうございます」

「いえ、この後はどうされるんですか？」

「……そうですね、今日までお休みなので、今日はフレアと一緒にいます」

「はい、そうしてあげてください」

……普段は絶対に見せそうにないくらい可愛らしい笑顔を浮かべて、フレイさんも優しそうな笑顔を浮かべてる。

「あ、そうだ流さん、震離さん、響さん達にも伝えてください、何か困ったことがありましたら、私に言ってください」

「え、あ、でも」

「大丈夫ですよ、本局につなげて私の名前を言ってくれたら繋がりますから、今日は本当にありがとうございます」

「あぁ、いえ、こちらこそ、本当にすいません」

そう言って流もフレイさんも頭を下げる。うん、本当似てるようで全く似てないなと思う。ううん、今はまだそう思うだけで、本当は凄く似たもの同士なんだろうな。

「それでは、失礼します、震離さん、流さん、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

そう言って、エスカレーターに乗ってゆっくりと下っていった。だけど、本当にいいお母さんだよなー。あ、そうだ。

「流？」

「なんでしょうか？」

ぅぁ、私の心が折れそうになった、だって、さっきの優しそうな表情とは打って変わって、いつも通りの無表情に戻ってて、正直心が折れかけた。だけど、私負けない！いろいろもう手遅れの気がするけど負けないし！

「とりあえず、奏達が女性物売り場にいるから合流しない？」

「そうですね」

ごめん、負けないって言ってたけど正直折れそう。ここまでギャップってか、態度の変わり様がすごすぎます……。

――ｓｉｄｅ響――

登ってくるエスカレーターの見えるベンチに俺と奏が座ってる。さて、一言。

「死ねる」

「……そりゃあ、店員さんから逃げ回りながら、階段登ってきたら誰だってキツイよ」

「……奏、言わないでくれ」

「いや、自分でやったことだし仕方ないよ」

うん、俺もそう思う。というか自分でまいた種だからな。仕方ないけど。仕方ないけどあの店員さんすごすぎだろう！？壁走ってたぞ！？俺の気のせいじゃなければね！？

「ま、真相は知らないから、なんとも言えないけどね」

「で、奏は服買ったのか？」

「ん、うん、ほら」

そう言って奏の手には大きな袋が二つあった。いろいろ買っても二つは多すぎじゃないか？まぁ、俺が言っても仕方ないけど……そういや、優夜も袋二つ持ってたな。

「あぁ、これ、震離の分、あの子結局ここにこなかったし、多分優夜の奴も響と流の服だと思うよ」

「……うわぁ、マジでありがてぇ」

「よかったね？ま、中身に対して文句言っちゃいけないよ？」

「……あぁ」

本当にそうだよなぁ、買ってもらってるのに文句言うとかアウトだろう。後でお金払っとこう、ついでに流の分も払っておこう、え？他意は無いよ？普通に迷惑掛けたからそのお詫びだ、深い意味はない。絶対に。

「そういや、まだ来ないな」

「そうだねぇ」

「ま、来たらすぐに降りなきゃいけないけどな……そういや」

「ん、あぁ、今の時間は午前3時だよ」

「ん、ありがとう」

言わなくても伝わってるから正直凄くありがたいな。明日ってか今日は出張、地球に帰れる。ただ、家には行けないし、母さんに挨拶することも出来ないな。まぁ、仕方ない。帰ったときうんと話を聞かせよう、震離が、奏が、みんながって。
まぁ、それよりも流が来たとき対応をどうにかしないとなー。って。

「噂をしたらなんとやら」

「そうだねぇ」

ベンチから立ち上がって、二人に声をかける。フレアちゃんがいないところを見ると、ちゃんと親子を再会させて返してあげたんだな。
まぁ、その話はまた今度でいいか。

「おまたー」

「すいません、逸れてしまって」

うん、流は悪気がある……ってか、悪いのは俺の方なんだけどな。というか、さっきと違ってお前、ほんと無表情だな、まぁ、ソッチの方がやりやすいからいいんだけど、それにしても震離よ？

「少しは悪びれろ」

「……逸れてないし」

「それは多数決で決める。さて行くぞ」

震離に言いながらさっさと下りのエスカレーターに乗って、一つ下に降りる。

まぁ、流は静かに付いてきて、震離は「また下るのー」とかなんとか文句をたれながら付いてくる。とりあえず、黙って付いてこい。

「ま、付いてきたらいいものがあるよ？」

奏がそう言ったら、震離が納得する。ていうか、何で奏が言うとお前はちゃんと言うこと聞くんだよ！？

まぁ、いいか、とりあえずさっさと目標の店を探して……あった。

「ほれ行くぞ？」

「あ、このお店って、え、こんな時間にもやってたんだ！？ってかここに入ってたんだ！凄い！」

うん、お前がそんだけ言うってことは本当にここ有名なんだな。

ミッド語で、カフェ「スカイメイル」。なんかここで作られるケーキやアイス、お菓子等が最近の女の子の中でブームになってるらしい。まぁ、どうでもいいんだけどって。

「どうした流？」

「あ、いえ、なんでもないです」

なんか目がキラキラしてる……その視線の先を追っかけると……なるほど。

まぁ、一緒に頼むか。甘すぎなければある程度いけるし……。

とりあえず店内に入って……ってか夜中ってこともあってほっとんど人いねぇな、ある意味穴場じゃないか。

「よ、お待たせ」

「おせぇよ、響？」「二人とも、お疲れさん」「流ー、お疲れ流？」
「二人とも、一緒に食べよう？」

店に入って、皆を見つける。各々なにか行ってくるけど、やっぱりこの面々といると本当に安心する。煌が騒いで、優夜が抑えて、雪奈が釣られて、奏が鎮めて、雪奈が変な方向に行ったら、瑞希が止めて、まだあってそんなに経ってないけど、流がいて……本当に安心する。

さて、変に感傷的になるのはやめて、流がほしがってるパフェでも頼んで皆で食べるか！

――ｓｉｄｅ親子――

「んむ……あ、おかあひゃん？」

「はーい？」

「ありぇ？にゃがれは？」

「フレアが寝てるから、先にかえっちゃった」

「……また会えるかな？」

「……うん、会えるよ、流さんは勿論、皆管理局員みたいだし」

「おかあひゃんよりもえりゃいの？でも、おかあひゃん、上から数えたほうが早いよね？」

「さぁ？どうかな、そうだ今日は一緒に入れるから、また買い物に行こっか？」

「んー、フレアお絵かきしたい、にゃがれの絵を書いて、今度あげる」

「そう、それはいい考えね、だけど今日はもうねんねしなさい」

「うん、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

うん、フレアを寝かしつけてから、静かにリビングに戻ってソファに座る。

そして、今日の……いいえ、少し前の出来事を思い出す。フレアがいなくなって本当に焦ったけど、それよりも……

「まさか、ね、あんなところで出会えるなんて思ってもいなかったよ、１３番目の守護の翼にあえるとは、これは私も動かなきゃいけないかな、あの子達には助けられたお礼もしなきゃいけないし」

なんて、考えながら。少し笑みが溢れる。だってね、あの子達がまだ管理局にいるのはおそらく「テイ君」のお陰だろうし。それは後々聞くとして、とりあえず私が居ない間の報告で変わった事……は。

「……そう、あの子が動いたか……これはちょっと急いで動かない

とね」

フレアが起きるその時まで、部屋の中をパネルを叩く音だけが静かに響いていた。

そのモニタには機動六課、レリック、スカリエッティといった単語が表示されていた。

だが、一つ、この場所に場違いな単語が一つ。それは。

［Ｗａｌｌｅｎ・Ａ・Ｆ・Ｓｔｅｉｎ］という単語が。

第二十二話　親子っていいね（後書き）

さて、楽しんでいただけたでしょうか？
ちなみに、本当はこの話、中盤に入れる予定でしたが、なのはは中盤から一気に動くので、どこに入れるか悩んだ末、最初に持ってきましたｗ
すいません、無理矢理感が凄くて……

このオリジナル回で、のちの伏線もたくさん盛り込みました、まぁ見え見えのたと思いますがｗ

さて、次はキャラ設定ですが、ほぼ謎ですｗ

それでは、次回も楽しんで頂けると幸いです。むしろ読んでいただけるだけでも幸いです！それでは失礼します！

追加キャラクター設定（前書き）

はい、タイトル通りです、とりあえず響達の部隊の隊長と、通信で出た、アヤさん、そして親子の計四人です。

ほぼ?が付いてるんですけどね！

それではどうぞ！

追加キャラクター設定

ティレット・ラートゥス

性別／男
年齢／推定３０代半ば
役職・階級／時空管理局本局第６武装隊・三等空佐
魔法術式／？
魔導士ランク／？
魔力光／？
利き腕／左
デバイス／？

ぼさぼさの金髪に、管理局の制服を着ているが、その上からジャケットを着ており、本人曰く寒がり。
機動六課に来る前に響達が所属していた部隊の部隊長である。
一見すれば部隊長としての器ではないと評される事が非常に多く、更には本人自身が軽い言動が多いため、他の部隊長達からは、ダメ隊長という評価をされている。しかし、その評価をしている隊長たちの殆どがダメ隊長である。
しかし、仕事と気遣い、更には部下からの信頼の高さ等、一人の人としての評価は非常に高く、一部の部隊長、つまり本当に優秀な部隊長達からは非常に高い評価をうけている。
更には自分の手柄を部下に譲ることが非常に多く、彼の元にいる人材の多くは彼を超えていくことが多い。その為、少将クラスの人間でも彼にアドバイス等を求めることがある。
しかし、それでも一部でダメ隊長と呼ばれる上に、妬まれ、挙句には厄介な人材を押し付けられることも非常に多い。
響、優夜、煌、奏、雪奈、瑞希の7名の世話をした時期もあり、同

時に彼らの事情を知ってはいるが、その事を彼らには伝えておらず、逆に知らないふりをしている。

アヤ・アースライト・クランベル

性別／女
年齢／推定２０代後半
役職・階級／時空管理局本局所属・三等空佐
魔法術式／ミッド式
魔導士ランク／推定・Ｓ
魔力光／冷たさを感じる青
利き腕／右
デバイス／？
魔力変換／氷

ややつり気味の青い眼を黒いロングを伸ばし腰のところで結んでいる。普段は丸いメガネを掛けているため、初対面の人はキツイ人物と思うことがおおいが、本人は至って普通で、むしろ慈愛に満ち溢れていることから、管理局のお嫁にしたいランキングの上位に常にいる。
更には魔導師ランクも高いことから一部の管理局の女性局員から「お姉さま」と呼び慕われている、あくまで裏で慕われており、本人は知らない。更にはその人徳のお陰か、別の意味で管理局と地上に影響をあたえるほどの発言力も持っている。

機動六課の隊舎を提供した人物としてはやてたち六課の面々からは常々感謝されている。
同時に独自のネットワークを持っているらしく情報網が広いが、謎

に満ち溢れている……

そして、響達がどこかに情報を流していることを突き止めており、それをはやて達隊長に伝えている。

フレイ・A・アルトゥール

性別／女
年齢／推定３０代半ば
役職・階級／時空管理局本局所属、階級は不明
魔法術式／？
魔導士ランク／？
魔力光／？
利き腕／右
デバイス／？
魔力変換／？

赤っぽい髪を背中に付くくらいに伸ばしているが、背が低い事が影響してロングに見える。
ただし六課の面々からすれば、流の色違いにしか見えないとの事。
この事は本人も認めており、よく娘のネタにしている。そして、娘持ちの割には若い容姿のため、普通に子供と言っても問題はないが、本人はあまり好ましくないとのこと。
そして、娘であるフレアに母親としての愛情を注げていないのではないかと不安がっているフシがあるが、デパートの一件で更に絆が深まった。
響達とはデパートで出会ったが、震離が名乗るよりも先に震離の名

前をしっており、流を除いた他の面々の事も知っている様子であったが詳細は不明。
そして、娘であるフレアの発言から管理局の中でもかなりの権力を持っている様子だが、詳細は不明。
響たちには自分のセカンドネームを言っていない。そして、旦那は既に居ないとのこと。

フレア・A・アルトゥール
性別／女
年齢／5歳
役職・階級／無し
魔法術式／？
魔導士ランク／測定していない
魔力光／？
利き腕／左
魔力変換／？

母親譲りの赤っぽい髪をツインテールにしており、髪の色に負けず劣らず元気な少女だが、流達と出会ったときは母であるフレイとはぐれたため、少し不安定な状態であった。母であるフレイの事は勿論、その母とそっくりな流の事が大好きで、後に出会う震離のことはどういうわけか敵対意識を持っている。
本人曰く「にゃがれお母さんが取られるから」とのことだが、母曰く何か別の事で嫌っているというより、警戒しているとのこと。

機動六課の比較的側に住んでいることから、家に来ているお手伝いさんと共に遊びに来ることがあり、来るたびに流が家まで連れ帰っており、家に帰ったらフレイと流に怒られている。

そして、フレア曰くフレイの階級は上から数えたほうが早いとのことだが、細かいところまでは不明。ちなみに休みの日にはフレアが魔法を教えており、体運び等も教えているため同世代の中では強い方である。

追加キャラクター設定（後書き）

はい、以上です。とは言っても上の四人しばらくは出てきません、
ＣＤ挟みますしｗ
やはりこの四人の中からも感想の返信に参加させたほうが良いのでしょうか？

とりあえず、感想の返信に参加してるのが、流を除いたオリジナルメンバーの７人だけですｗそれでも、出席率とか異常に高い奴も居ますがｗ

さて、こんどこそ、次回からＣＤです。次はちゃんと本当ですｗ
それでは次回も読んでくれると有難いです。

第二十三話　出張だ、そして変身、だが眠い（前書き）

はい、今回から一気にドラマＣＤ回です、いやぁ、オリジナル回と違って書きやすいかと思ってたらそうでもなかったｗ
理由、ドラマＣＤのデータの入ったＰＳ３が動かなかった……ｏｒｚ

慌ててＣＤ探して聞きましたとも！そして、面白くて聞きながら書いたら二話分出来たので連続投稿いたします。

さて、それでは楽しんで頂けると幸いです！

第二十三話　出張だ、そして変身、だが眠い

――ｓｉｄｅ震離――

「ほなら、みんな準備できたか？」

はやてさんが、資料を片手に、両隊長に話を聞く。

うん、すっごく元気そうだなー。

「スターズ分隊、準備完了！」

「ライトニング分隊も、大丈夫だよ。」

「ほな、異世界出張任務。出発！」

なんかいつもより（昨日からの付き合いだけど）元気に見えるのは多分気のせいじゃない。

まぁ、地元に仕事だけど帰れるって、テンション上がるしねぇ。分からないでもないけど。

響？立ったまま、資料を見る体勢のまま寝るのはどうかと思うよ？

「まぁ、いっか」

私が起こす必要なんてないし、ていうか奏が起こしたし。

まぁ、どうでもいいけど、早くヘリに乗りたい、風が強すぎて……

あ、ちなみに今いるのは、ヘリポートに居て、皆の手にあるのは資料という名のパンフ。

え？何で資料なのにパンフかって？分かった、資料の中身を見せようじゃないか！

異世界出張任務（ｂｙ機動六課）

目的地：第９７管理外世界　現地惑星名称「地球」

目的：現地にて存在が確認されたロスト・ロギアの確保、及び封印

持ち物：所有するデバイス

現地活動可能な私服数着

お菓子や飲み物　（ただし３００円まで。果物はお菓子に含まない）

お小遣い　（ただし５０００円まで。それ以上を求める場合は部隊長室まで）

現地協力者の援助により、生活場所は確保済み

ね？パンフでしょう、そして分かりやすい資料でしょう？多分はやてさんの仕業だと思う、というか絶対にそうだよ。それ以外にありえないんだよ！

「叶望さん？のらないんですか？」

「へっ、あ？」

気がつくと、既にティアナ達はヘリに乗り込んでて、外にいるのは私と流だけ。

「え、あ、ごめんなさい！」

「いやいや、全然大丈夫やで」

ごめんなさい、と心のなかで何度呟いたんだろう……本当に。

――ｓｉｄｅ響――

まぁ、うんとりあえず呟かせて……呟いたらアウトか、ヘリの中だし。とりあえず思わせてくれ。

スッゲェ眠い。うん眠い。ちなみに昨日帰ってきたのは、結局五時前で、女性陣と流は仮眠とったらしいけど、俺らは予想通り。「もう朝方だしこのままやるか」→「さんせー」という乗りで結局麻雀をずっと打ってた。だから死ぬほど眠い。

あぁ、昨日も六課に移動するからって書類書いて寝てないのに、今日も徹夜とか馬鹿だろ俺？

「響？どうしたの、なんか疲れてるみたいだけど」

「ん、あぁ、大丈夫だよ、ありがとエリオ」

「そうなんだ、そういえば響達の故郷もなのはさん達と同じ地球なんだよね？」

「あぁ、地球だよ、ちなみに最近ってか、今朝方知ったことだけど、なのはさん達の故郷の近くやね」

「えぇ！？」

俺がそう言うと、なのはさん、フェイトさん、はやてさんの三隊長が凄く驚いた。まぁ、普通そうだよな。俺も隣町？だと思わなかったし。

「え、あ、ちなみになんていう場所なの？」

「あぁ、桜庭って所です、ただ海鳴から桜庭まで海岸沿い走って二時間くらいなんであまり行かない場所ですね、俺らも海鳴の人も」

話しながら実際そうなんだよねと思う。俺らの住んでた場所は海鳴に比べるとちょっと田舎だ、だけど困る程でもないし、デパートとか行きたいと思えば海鳴よりも近い場所に行けばそれなりにあるから、別に用がない限り海鳴に行くことはないんだ。

「でも、なんでそんな世界からなのはさんや、八神部隊長みたいな、オーバーSランク魔導師が……」

「突然変異というか、たまたまぁ～な感じかな？」

「へっ？っあ！す、すいません……」

「ええよ？別に。私もなのはちゃんも、魔法と出会ったのは偶然だしね」

なのはさんと、はやてさんの話を聞きながら、そうなんだと思う。俺らはまだ魔法と出会おうと思えば、何かきっかけがあったら直ぐにその道がひらけたと思う。実際うちの街で、俺の知り合いで管理局関係の人多いし。まぁ、今更選んだ道に文句付ける気はない、だけど。俺のせいで、誰かの道が悪くなるのは……死ぬほど嫌だ。

「はい。リィンちゃんのお洋服。」

「わー！シャマルありがとですーっ！」

隣でリインさんとシャマルさんの会話が耳に入って、皆の顔がそっちに向く。

だけど、その状況を見て思わず目が点になった。だって、リインさんのサイズの割に服大きすぎるだろうに。それを見てたキャロやティアナが思わず聴きにいった。

「あの、リィンさん。その服って……」

「はやてちゃんの、ちっちゃい頃のおさがりですっ。」

「あ、いえ。そうではなく……」

「可愛らしいですね！」

「震離ありがとうですっ！」

「待って震離、リインさん、それ普通の人のサイズですよね……」

正しくその通りなんだけど、本当に震離はマイペースなんだなと思う。だけど服のサイズからしてエリオとキャロのサイズに比べたら少し小さい。それでもリインさんと比べると遙かにでかい。

どうひねっても……あ、なるほど。案外考えてみるとすぐに分かった。多分震離も気づいたから、普通に接したんだろうな。

「う～ん……あはっ！そう言えば、フォワードのみんなには見せた

こと無かったですね」

「へっ？」

「システムスイッチ。アウトフレーム・フルサイズッ！」

「おぉっ！？」

リインさんがそう言うと、俺と……めんどくせ、追加組を抜いたFW組が口をそろえた。

だけど、ごめん少し間違えてたわ、幻術とか使うもんだと思ってたけど、そういえばリインさんってデバイスだったね。うん、忘れてた。

「っと。一応、このくらいのサイズにもなれるですよっ？」

「デカッ！」

「いや、それでもまだちっちゃいけど～」

スバルにティアナよ、それは……それは失礼だと思うぞ？まぁ、思った段階で俺も同類なんだけど、口に出してないし、問題ない！

「リインさん、普通の女の子のサイズですね」

「向こうの世界には、リインサイズの人間も、フワフワ飛んでる人間もいねぇからなぁ」

「あの……一応ミッドにもいないとは思います」

「……はい」

「スバルにティアナ、多分どころか、普通に居ないよ、新しい世界が見つかる以外は……」

思わず突っ込んだ。だって居ないだろうそんな人は！
けど、リインさんくらい小さいと飯代浮くんだろうな……。

「ふ～ん。だいたい、エリオやキャロと同じくらいですかね？」

「ですね」

「リィンさん、かわいいです」

「えへへ」

うん、どこからどう見ても子どもに見えますよー。ん、そういや、俺の隣りに座ってる流は……
あ、死んでる。やっぱ、昨日のはきつかったか……。

「リィン曹長。そのサイズでいた方が、便利じゃないんですか？」

「こっちの姿は、燃費と魔力効率があんまり良くないんですよ～っ。コンパクトサイズで飛んでいる方が楽チンなんですっ！」

「なるほど～」

リインさんの話を聞いて、また納得する。というか本当にデバイスっぽくないよなー。
まぁ、確かに、サイズが小さければ小さいほど消費魔力は小さいだ

ろう。どんだけ消費するかは知らんし、あんまり興味もないけどね！

まぁ、いいか、皆普通に話ししてるし、多分気づかれないだろうから、俺も少し寝よう。

そう思って目をつぶって意識がなくなるまで5秒もかかりませんでした。

で、起こされるまで5分もかかりませんでした！

第二十三話　出張だ、そして変身、だが眠い（後書き）

はい、以上です、今回は移動前で次回がようやく動く前ですｗ

それでは次回の後書きでｗ

第二十四話　仕事という名の（前書き）

さて、連続です。

では、お楽しみただけたら幸いです

第二十四話　仕事という名の

たたき起こされてから、皆で集団転送ポートの乗り、目的地へと転送される。
ちなみに、はやてさんとリインさんと留守番しているザフィーラさんを除いたヴォルケンズは途中で降りたらしい、何か先に現地入りしたって。
で、久しぶりに帰ってきた地球なんだけど。

「……本当に地球か？」

なんか、なんか、なんか知らんけど俺の第六感がスゲェ警告音鳴らしてるんだけど、何！？

「響どうしたの？」

いや、エリオよ、なんか感じないか？何か行ったら死ぬ気がするって？
はやてさんは……っく、先に降りたんだった、フェイトさんは……純粋な出身者じゃないから、今回は駄目だ、じゃあなのはさん！

「なのはさん、ここってなんかいます？退職したＳＳＳくらいの魔導師の方とか」

「ううん、いないよ」

「……じゃあ、魔力以外の人で、何かまぁ、境地に達してる人とかは？」

なんか後ろでＦＷメンバー（震離も奏も含む）視線が痛い。それこそ何聞いてんの？っていう生暖かーい視線が。やめろよもう！？おれだって聞きたくねぇよ！けどいろいろあんだよ！？

「……いないよ」

ちょっ目を合わせて喋ってくださいよ、いないんですよね。知覚外から近付く人とか、目を見て、いないって言ってくださいよ！！そしていたらどこにいるか教えて下さい！為になると思うから！？

しかも何か、向こう側からエンジン音が聞こえてきて、俺らの少し離れた所で止まって、中から女性の方が降りてきたし。

「自動車？こっちの世界にもあるんだ」

「ティアナ、それ酷い」

「え！？」

うん、震離の突っ込みは間違ってない。多分突っ込まなかったら俺が突っ込んでた。

ちなみに車の持ち主の方は降りてからまっすぐなのはさんの元へ向かっている。多分知り合いだな。

「なのはっ！フェイトッ！」

「アリサちゃんっ！」

「アリサッ！」

うん、やっぱり知り合いだったか。そして隊長の知り合い、多分あの反応からだと幼なじみかなんかか。そして、アリサさんという方は、金髪ショートに、雰囲気から察するに、スゲェ活発そう。表裏もなさそうだし。

「なによも～。ご無沙汰だったじゃない？」

「にゃははっ。ごめんごめん」

「いろいろ忙しくって」

「アタシだって忙しいわよ？大学生なんだから」

「アリサさ～んっ。こんにちわですっ！」

「リィン！久しぶりっ！」

「は～いですぅ～っ」

うん、和やかーな雰囲気で会話が弾んでるところ申し訳ないですけども、説明をしてください……俺ら八人蚊帳の外状態って。特にティアナ達は、どうしていいのかわからないみたいで、なんか困ってるし……。うん、まだ掛かりそうだな、今のうちに……

「桜庭の方角はっと」

太陽の位置からだいたい場所を割って、桜庭があるんだろうなと思う位置に向いて。誰にも気付かれないように……、手を合わせて、黙祷。二年近く帰って来なかったからな。これくらいしておきたい。多分仕事してたら忘れるだろうから、覚えてるうちに。いや、忘れ

る俺がどうかしてるんだよな。

「響」

「……あぁ、終わった」

俺の様子を見てた奏が声を掛けてくる、うん、内容が分かってるだけ、説明も楽だ。聞かれないところを見ると、誰にも見られてないな。

そう考えてるうちに、俺らを放置していた事に気がついたフェイトさんが、アリサさんと呼ばれる人物の紹介を行なう。

「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

「アリサ・バニングスです。よろしくね」

「よろしくお願いしますっ！」

FW組八人の声が揃う。バニングスって名前どっかで聞いたことあるなーとか思いながら、頭を上げたときになんか、俺と目が合った。はて？

「……どこかで会ったこと無い？」

「……すいません、具体的な場所を言って下されば……」

「八年くらい前に有栖着物店って名前のお店で……」

八年前で、優夜の家……はてなんか……あっ！！！

「多分人違いですよ」

「そう？それじゃあごめんなさい、昔そっくりな人とあった事あるなと思っただけだから」

「いえ、気にしないで下さい」

できるだけ、顔に出さないで、平静を保って……ふと、視線を隣にやると、ジト目の奏と目があった。そして、例によって例の如く発動。

――本当は？

――時間があったら話す、ただ、俺の中じゃ死ぬほど忘れたいことだから

一秒たらずで目で会話する。うん、後で説明するから、だからジト目で見るなよ！？

本当、何で俺ばっかりこんな目に合うんだろうか？

で、なんだかんだで。

「さて。じゃあ改めて、今回の任務を簡単に説明するよ」

「はいっ！」

コテージの中に入って、海鳴の地図を開いて簡単な作戦会議を開く。

「捜索地域は……ここ。海鳴市の市内全域。反応があったのは、ここととここと、ここ」

「移動してますね？」

「そう。誰かが持って移動しているか、独立して動いているのかは、判らないけど。対象ロスト・ロギアの危険性は、今のところ確認されてない。仮にレリックだったとしても、この世界には魔力保有者が滅多にいないから。暴走の危険は、かなり薄いね。」

「けど、動いてるところを見ると、誰かが持ってるか、最悪魔導師の人かもしれないし、万が一に備えて動いたほうがいいですね」

「そうだね。レリックでもそうでなくても、やっぱり相手はロスト・ロギア。何が起こるか判らないし、場所も市街地。油断せずに、しっかり捜索していこう」

「はいっ！」

さて、俺らはどの班で移動するのかねー、人数的には七人、八人か、多いな。

なんて、考えてると。

「そうだ、響くん？」

「はい、なんですか？」

「さすがに市街地を大人数で動くのは大変だから、響が奏と、震離、そして流の四人を連れて、サーチャーの設置をしてくれないかな？」

「はい、わかりました、けどいいんでしょうか？」

とりあえず本音を言っておく、だってねぇ？俺らだけで動いていいとか、なんかその、はやてさんに言っとかないとダメな気が……

「大丈夫だよ、これはやてちゃんからの指示だし」

「あ、なるほど了解です」

まぁ、捜索指定範囲が結構広いから分散してやろうってことだな。だけど、遊びそうな奴が一人いるんだよなー。とりあえず、聞いておくか。

「なのはさん、早く終わったらどうしたら？」

「ん、観光してもいいよ？」

「……え？」

落ち着け俺、今なんてなのはさん言ったよ？艦攻って言ったか？でも船なんてないし、間違っても観光って事はない、一応仕事なんだし……ボケかまさないで確認取るか。

「……本当にいいんですか？」

「うん、大体はやてちゃんから詳細聞いてるからね、そして今日はスバル達の……」

「あ、なるほど、了解です」

そこまで聞いて納得、たしかに回収任務でレリックかも知んないよってぼかしてるけども、実際はどんなんか聞いてるのか、それは納

得。そして、スバル達に経験を積ませようって事か。
とりあえず。

「へーい、震離に奏に、流ー俺らはとりあえず別行動だー」

「はーい」「うん、わかった」「了解です」

各々返事してとりあえず辺りを見渡す。うん初めての主張任務だからか、皆楽しそうだ。
特にエリオとキャロはフェイトさんと行動できるから嬉しそうだけど。
フェイトさんの顔を見ると本気で嬉しいのかなんか後ろから光が見えるんだけど……まぁ、いいか。

「では、副隊長達には後で合流してもらうので、先攻して出発しちゃおう。あ、一応私服でね？市街地を捜索するから」

「はい！」

さて、優夜が買ってくれた服でも纏ってさっさと行くかね。
いろいろ自由が利くらしいから、ちょっと楽しみすぎて、眠気なんて吹っ飛んだわ！
相変わらず、俺の本能は逃げろ！って言ってるけどね！

第二十四話　仕事という名の（後書き）

さて、次回は今回存在感が皆無だった流と震離が活躍します。え？仕事何それ美味しいの？

冗談です、ただ次回は好きな人には面白いと思えるでしょうけど…嫌いな人にはマジないわ、作者死ねよと思うかもしれません……だけど、自分が好きなことを押し通す！

とは言っても大体予測が付いていそうなんですけどもw何か分かったら書きこんでみてくださいねw当たってたら何か……プレゼントは出来ないな……せめて、何かリクエスト等を言ってくれたらやります！

それでは、失礼します、次回も読んでいただけたら幸いです！

ｋｙｏｎｓｉでした！

第二十五話　思い出したくないことと、事故で地雷が。（前書き）

ごめんなさい、こちらのミスで、今回は6時に投稿できませんでした……本当にごめんなさい。

それでは、どうぞ楽しんでいただけたら幸いです。

第二十五話　思い出したくないことと、事故で地雷が。

――ｓｉｄｅ響――

「で、アリサさんとはどんな関係なの？」

「……あー」

街に繰り出してからはや小一時間、皆でサーチャーを設置しながら、奏がさっきの事を聞いてくる。

ちくしょう、適当に観光も織りまぜながら進んできたから、もう忘れたもんだと思ってた。くそぅ、まだ覚えてたか。俺にとっちゃ忘れ去りたい事なのに。とりあえず確認をとろう。

「ちなみにどんな関係だと思う」

「え……あー、うん、昔の幼なじみとか？」

「はい！私的に昔に告白したとか！？」

「うん、大体わかった、先に言っとく、そんな関係じゃない」

とりあえず大事なことだから、先に言っとく。だって、俺の中じゃもう本当に忘れ去りたい、ってかその事知ってる人全員消したいわ。優夜もこの事知ってるけど、その話は絶対にしないし。

「……昔さ、どういうわけだか、優夜ん家の、着物店にあの人とそのメイドさん、そしてその父親みたいな人が来たんだよ、アリサさん用の着物を買いに」

「へぇ」「そこから告白」

「うん、いい加減諦めろよお前も。まぁいいや、それで来たのはいいんだけど、問題が一つあってな」

「うん」

……さて、ここまでは話した。ただこっから先言いたくないんだよなーもう。

いいやもう、言おう。言ってさっさと観光しよう。

「ただ、そん時優夜ん家には、サンプルってか、カタログ替わりの着物を着る女の子が居なかった、まぁある意味今もだけど」

「うん、それで？」

ここまで言って、奏の顔が微妙な表情に変わり始めた。うん、早く気づいてね。

「で、だ。そん時どういうわけだか知らんけども、俺に白羽の矢が立ったんよ」

ここまで言ったらさすがに奏は気づいたか。でも。

「まだわからんか？」

「いや、大体予想は付いたけど、それなら私に白羽の矢が立たないのが不思議で」

首を傾げながら震離が呟くけど。お前あの時いろいろひどかったからな。まぁ簡単に言っとくか。

「……いや、お前、あの時どんな状態だったか思い出してみ？」

「……ん、ぁ～うん、それは響に矢が立つわけだ。ごめん」

うん、あの時のお前ひどかったからな……まぁ、そん時のお前に言っても絶対にやらなかっただろうし。まぁ、仕方ない。だけど俺の中じゃ忘れ去りたいけどね。

「あ、じゃあ響の家にあるあの綺麗な着物の女の子って響だったんだ」

「いちいち言うなよ！」

「だけど、可愛かったなぁ、大和撫子って言うのは、こういうモノなんだって思ったし」

このやろう……ただ、悪気がないのも分かるから、なんか怒りにくいし……。奏に見せたこと無いからか、スゲェ興味持ってるし……くそぅ、必死に誤魔化したのに。第一男が化粧までして女性物の和服を着せさせられるとは思わなかった。

「でもさ、響？」

「……んだよ」

「何でアリサさんはわざわざここから、遠い桜庭に来たの？」

「……知らんよ」

実際本当に知らない。何で遠いところの優夜の家に来たのか、あの時の俺は考える余裕なんてなかったし、今もあんまり興味ないから気にならないし。

「それで？その時アリサさんと何話したの？」

「……そん時は全部優夜に任せて、俺は黙ってた。だって着物重いし、精神的にいろいろ来てたしね」

「了解もうなんか、ごめんね」

うん、そうしてくれ。俺の心がガリガリ削れていってるから。はぁ、嫌なの思い出した。

さて、残りのサーチャーの設置箇所は……何だほぼ終わってんじゃん。体を影にしてから、海鳴の地図を表示する。なのはさん組と、フェイトさん組、俺らの三組でサーチャーの設置にあたっているからか、予定よりも早く終わりそうだ。しかも俺らの担当分既に終わってたし。

「ねぇ、これだったら少し余裕あるんじゃない！？」

「あぁ、あるけど耳元で騒ぐな」

震離が隣で俺の手元のマップを見て、軽く叫ぶ。うん、うるさい。だけど、観光つっても、それほど目ぼしいもんなんて無いと思うんだけどな。

ん、なんか隣にいる震離の目がなんか輝いてきた。あ、なんとなくヤバいと思ったのは内緒だ。

――その数分後。

――ｓｉｄｅ震離――

「うん、美味しい」

「……昨日も食べて……今日も食べて……ちょっとカロリーが」

「……」

うん、やっぱり美味しい。さすが管理局の観光マップ。スイーツ系なら「翠屋」ってお店がいいって書いてあったし。だけど、駅の近くで人はたくさん来るだろうし、テラスもあってなかなかお洒落なお店で私的には凄く好きなお店だ。うん、凄くいいんだけど。私の前で紅茶を飲んでる流を除いた二人がなんかテンションが低いんだけど、どうしたんだろう？

「奏どうしたの？」

「……うん、美味しくてねー」

「だけどあんまり食べてないじゃん」

「……夜中に食べてカロリーが……今日あんまり動きそうにないし」

「……分かった」

うん、分かった言いたいことは分かったけど、美味しい物は食べたほうがいいのにね。

我慢は体のなんとやら。私は気にしないからいいか。最悪奏が食べなかったら私が食べればいいんだし。それで響も何でテンション低いんだろう？

「どうしたの？」

「……お持ち帰りで外で食べない？」

「……何で？その場で、お店の中で食べるから美味しいんでしょう？」

「うん、分かる、分かるんだけどさ。俺ここあまり居たくない」

……はて、何でこんなにネガティブなんだろう？何時もなら響もそれなり楽しむはずなのに。

……えっと、お昼時で平日だからか、今日はまだそれほど人は居ない、で、店内にいるのは。

メガネを掛けた女の人と、そのお姉さんみたいな人。そして、このお店のマスターっぽい男の人。

計三名、外には何人かいるけども。はて？

「……なんか不安要素でもあるの？」

「……ひと通りみてなにも感じないならいいよ、もう」

なんか失礼なこと言ってコーヒーを飲みだした。まぁいいや。さてケーキは一つ残しておいて……

ちょっと立ち上がって、目立つようにしてからの。

「すいません、シュークリーム３つ下さーい」

「はい、今から作りますので、少々お待ち下さいね？」

「はいっ♪」

わーい、焼き立てが食べれると思って思わずガッツポーズ。
正直シュークリームの出来立って凄く美味しいよね！

「……震離～まだ頼むの～？」

「うん、美味しそうだし」

「……そう」

なんか、奏が葛藤してるなー、まぁケーキ一つだけ食べてるのに対して、私ケーキ3つに、これからシュークリームを三つ食べるからね。さすがに葛藤もするか。
さて、いい加減座ろうかな。

って、思った瞬間。

「お母さ～ん。ただいま～」

「なのは～っ。お帰り～っ！」

「え〝っ！？」「え、なのはさん？」「何！？」「……？」

ちなみに、発言順は私、奏、響、流の順。
で突然のことで正直びっくりして体勢を崩して……手元に置いといたケーキのお皿の縁をドンって手を付いて、ケーキを宙を舞って、

慌ててキャッチしようとしたら手元の紅茶を「流」側に向かってこぼして。で。

「……ぅぇ」

「あれ、そこに居るのは……って、何があったの！？」

「いろいろすいませんでした」

流を除いた私達三人で先に謝っとく。うん、謝っとく。
そして私に、簡単な説明を……懺悔をさせて下さい。
まず、私の席は窓側で流も向かい側の窓側、響と奏は通路側だったんだけど。
今の一瞬で、私がケーキとお皿を吹き飛ばして、しかも紅茶を流側にこぼして。
それで、ケーキのお皿が廊下に落ちそうになって、それを響がキャッチして、割らなくてすんで……。で、問題のケーキが。

「流……本当にごめんね……」

「……いえ」

ケーキが流の頭にあたって、顔の方に零れて、流が飲んでた自分の紅茶をその時の反動で零して、更には、私がこぼした紅茶が流の足に思いっきりかかって……早い話が。

「……大惨事じゃねぇかよ」

「……本っ当にごめん」

「……いえ、問題ないです」

あぁ……昨日優夜が買った流の黒い服がケーキのクリームその他もろもろでなんか、なんか、なんか、もう。本当にごめんなさい。もうやだ、私昨日からずっと地雷踏んでばっかりじゃん、しかも流に対して……、もう、さすがに心が砕け散りそうです。本当に。

第二十五話　思い出したくないことと、事故で地雷が。（後書き）

え、響とアリサの関係はこれだけかって？ＹＥＳ。正直な所、響よりも優夜の方がフラグ立ててます。そして、優夜はわざわざお金持ちがうちに来た理由を知っていますが、それはまた後日何かしらで書きたいと思います。
たまには、本編でペアを書いてあげないとｗ

それでは次回も楽しんでいただけたら幸いです。
あ、前回言ってた好きな人には……以下略の件は、こんどこそ次回です。ただ、もうフラグを立てたので、予想しやすいかと思いますがｗ

それではこんどこそ失礼します。それではｋｙｏｎｓｉでした！

第二十六話　ミイラ取りがミイラに（前書き）

今回はキャラ崩壊が酷いと思います、特にフェイトさんと、震離が。

だけど、今回は震離ｓｉｄｅオンリー

ただ、これ見なくても一応いけると思いますｗ

それでは、楽しんでいただけたら幸いです。

第二十六話　ミイラ取りがミイラに

――ｓｉｄｅ震離――

「……震離、もう気にするなよ」

「……だってさぁ」

本当昨日から私いいところ無しじゃん、ほぼ確実に流私のこと嫌いになったでしょう。
もう絶対そうだよ……。

「すみません、なのはさん、士郎さん」

「ううん、気にしないで」

「あぁ、大丈夫だよ」

ううぅううう、今ん所私机の上で突っ伏してる状態なんだけど、正直泣きそう。
ちなみに響がそこに座ってて、奏はフェイトさんに迎えを頼んでて、スバルとティアナはなんか念話で話してる。そしてリインさんはなんか食べてるけど。ちなみに、流は桃子さんと美由希さんに着替えをさせるって連れてかれた。
だけど……はぁ。

「もう消えて無くなりたい、分子結合崩壊しないかな……」

「……もう好きにしろよ……」

うん、そうする。そういえば物の数分前に遡るけど。まぁ、片付けしながら各々挨拶して言ったんだ。それでメガネの方……もとい、美由希さんのお姉さんみたいな人がなのはさんのお母さんだとは思わなかった。だけどフレイさんと比べると、別に意味で若い。普通に女子大生くらいだと思ったもん
。

「……流が戻ってきたらもう一回謝ろう」

「……あぁ、そうしろそうしろ」

うん、そうする。だけどこの最中で視線をなのはさん達に向けると、なのはさんと士郎さんがものすごく微妙な顔してるんだけど、どういう事なんだろう？
あ、響もその事に気づいたみたいで、少し首を傾げてる。

「なのはさん、士郎さん、どうしましたか？」

「え、あぁ、ううん、ちょっと、ね？ちょっと、流が心配で」

「……は？」

「あぁ、あの二人は、かわいいものを見つけたら……その、な……」

なんか二人の顔色がなんか悪いように見える。本当にどうしたんだろうとか思っていたら。
お店の奥から。

「おまたせ～」

「少し時間が掛かっちゃって」

そう言いながら、美由希さんと桃子さんが出てくる。そして、それにつられてもう一人の……要するに流が出てきた時。正直に言おう。私のテンションゲージが限界を突破して。奏もスバルもティアナも凄く驚いた。

「あっ」

全員の言葉が一致した瞬間だ。なんだって、奥から出てきたのは膝下くらいまでのダークブラウンのブーツ、黒いスパッツの上に赤と黒のチェックのレイヤードスカート。

真っ白いブラウスに赤いネクタイをつけて、髪の毛も洗ったのか普段立てている状態ではなく、完全に髪が寝ていて、清楚っぽい子にみえる。まぁ、要するに。

「……可愛い」

今度は美由紀さんと桃子さんを除いた女性陣だけで揃った。

もうここまで言ったら分かると思うけど、流が女の子の格好で出て来たんだ。

着替える前が全部黒だったのに対して、今のは白も入ってるし、というか流自身顔を真赤にして俯きながらスカートを握って小さく震えてる。だから……その。

「震離、鼻血」

「え、はっ！？」

なんか気がつかないうちに鼻血が出てた。もう本当に気づかなかったけど、ねぇ響、何でそんな憐れそうな瞳で流見てるの？なんか凄く……可哀想に見えるんだけど……というか血が、血が足りない。

「……お母さん？」

「なに、なのは？」

「これは一体何？」

「うん、あぁ、流君に合う服がなかったからね、仕方なくね」

そう言いながら笑ってるけど……凄く分かりやすい計画的犯行だ。
本当にセンスがいい……本当に、いかん、流が涙目で上目遣いでこっちを見てて、止まりかけてた鼻血がまた吹き出した。
あ、やばい、本当にやばい、若干意識が……いや、まだだ！

「おまたせなのは、今着いた……よ……」

扉を開けて入ってきたのはフェイトさんなんだけど、お店の奥にいる流と目があったらしく。
しかも、涙目＋上目遣い＋赤面のコンボをフルで貰ったらしく。
そのまま扉を閉めた。それを見て本気で思う。アレは、アレは本当に、危ない。まだ鼻血が止まらないもん。

「流、ここにはやてちゃんが居なくて、本当によかったね……」

そういうなのはさんも口をハンカチで抑えてるけど、なんか赤い物が付着してる気がする。
だけど、はやてさんがいたら写真とか普通に取りそう。

よし、やっと鼻血が止まった、若干ふらつくけど、まだ逝ける。あれ、なんか字が違う気が。

「……えっと、そろそろ時間だから、皆行こっか？」

「はいっ！」

普通に返事したんだけどさ。流はどうするんだろう？とか思ってたら、流がなのはさんの所に行って。

「……自分は、どうしたら良いでしょうか……？」

顔を伏せながら話してるけど、それでも顔が真っ赤なのがよくわかる。だって耳まで赤いもん。

落ち着け私、Ｋｏｏｌになるんだ。さすがに吐血はいけない、本当に死ぬ。

「あ、えっ……と」

と視線を泳がして、本気で焦ってるなのはさん。くそう普段なら普通に可愛いと思うんだけど、今回最強クラスが現れたから……くっ！

「なのは？」

「えっ、なに、お姉ちゃん？」

「集合場所って言っても、あのコテージでしょ？」

「うん、そうだけど」

「なら、後でエイミィ達と一緒に行くから、服が乾くまで流君ここにおいていてもいいよ？」

美由紀さんがそう告げると、なのはさんもそうする気らしく、流もそうしてほしいらしく。無言で一致した。うん、念話もないけど雰囲気だけで伝わるんだね。

「じゃあ、流またあとでね？」

「……はぃ」

小さく返事するけど、本当いろいろ限界来てるんだろうなぁ。だけど、本当に可愛くて……って、あれ？なんか響が居ないんだけど、どこに……？

「おーぃ、震離ーお前ここ残れ」

扉を開けたと同時に、響がそんな事言う。っていうか、何でそんな事言うの！？私に出血多量で死ねと！？

「……これから戻って、俺は対策の会議に参加して、奏はキャロに封印作業の最終チェックして、それで、なんだかんだでお前しか空いてねぇからだよ」

「……了解」

なんだ暫定的に私しか居ないのか、それならば仕方ない。甘んじて受けようじゃないか！

ん？なんか響がずっとこっち見てる何だろう……あ。アイコンか。

――てめぇ、ミイラ取りがミイラになったとか洒落にならんからするなよ？

――……了解。

この一瞬のやりとりが終わった瞬間、直ぐに響が視線を外す。正直怖かった。あぁ、響も経験してるから辛いのが分かるんだね。フフフ響私がミイラ化する訳ないじゃない！もう耐性付いたよ！

「震離？」

「あ、はい、なんですかなのはさん？」

「……お母さんとお姉ちゃんが暴走したら……止めてね？」

その一言を聞いて、私の視線が一度美由紀さんと桃子さんの元に行って直ぐになのはさんに視線を合わせて。

「……頑張ります」

「……うん、それじゃあ、また後で」

そう言ってからなのはさんはリインさんとスバルとティアナを連れてお店の外に、そして最後まで残っていた奏は。

「……大変だと思うけど、頑張ってね？」

「……うん」

頭を軽くなでられてから、フェイトさんの運転してきたワゴン系の

車に皆乗り込んでく。
それで、皆乗ってから、車は発進していった……。だけど、なんか玄関付近に赤い水たまりが出来てる事に関しては絶対に突っ込まない。フェイトさんの口に赤い物が付いていても絶対に突っ込まない！そして、こっちではというと。

「ねぇ、流君？これも着てくれない？」

そう言いながら、どこからか取り出したのは真っ黒のフリフリのゴスロリ服と、真っ白いワンピース。

「お母さん！」

「どうしたの美由紀？」

先ほどとは考えられないくらい険しくて、凛々しい顔をした美由紀さん、まさか味方が……。

「ピンク系の奴もいいと思うよ！」

「あぁ、やっぱり？」

うん、ですよね。なんか目の前で、キャアキャアと本当に女子高生位のノリで話を進める二人だけど、あぁ、あぁ！

「メイド服もいいと思います！」

「そうね！」「そうだね！」

「……3分ももたなかったか」

小さく呟きながら士郎さんがお店の奥に退散していって、残された流は。
こっそり、そのままの格好で外に逃げようとしてたけど。
それに気づいた、美由紀さんが一気に接近して、肩をつかみ、青ざめた顔で、流がこちらを向く。
そして、桃子さんと美由紀さんの一言。

「逃さないよ流君？」

って言いながら、手に持ってた服を徐々に近づけていって。
流の瞳から涙がこぼれたように見えて――――

うん、後は予想通りで、本当にいいものを見せてもらった。写真のデータも貰えたし。
これは、これは！失った物（血）は多いけど！お陰で目眩とか酷いけど！これは、私だけの秘蔵のお宝だ！絶対に誰にもあげない。家宝にしよう、そう心に誓ってる瞬間、流は多分二度とここにこないんだろうなと本気で思う。

そして、後日この画像が桃子さん手により、１００％ではないが、画像のデータをはやてさんに送って、ちょっとした事件が起こったのはまた別の話。

第二十六話　ミイラ取りがミイラに（後書き）

はい、どうでしょうか、何かリアクションを送って頂けると幸いですｗ

次回はＢＱと温泉か……別名死ねよエリオのイベントか。
だけど、次回の流は何時も以上に存在がｗ
しかし、一つ問題が……女湯の描写を入れるべきか否か。普通に最初は響でやって、その後女性ｓｉｄｅを加えるか……
ただ、どっちにしろ、次回で温泉までいける気がしないというｗ

それでは、次回も楽しんでいただけたら幸いです！

第二十七話　バーベキューとは戦場である（前書き）

はい、前回とは打って変わって、今回です。

さて、長話も何ですし、どうぞ楽しんでいただけたら有難いです。

ではどうぞ。

第二十七話　バーベキューとは戦場である

――side響――

「ちょっとスバル！あんたさっきからお肉食べ過ぎっ！」

「え～だってぇ～……ってあぁぁぁ！ね、狙ってたお肉がぁぁぁ……」

「ふっ、甘いでぇスバル。バーベキューの網の上は常に戦場や！周囲を警戒し、尚かつ自分の領分をしっかり守る。それがバーベキューの基本中の基本や」

「了解ですっ！八神部隊長！」

「ヴィータ。お前も少し食べすぎだぞ？……っ！貴様っ！私の焼いていた肉を全て取りおって！」

「ハッ、あめぇんだよシグナム。はやても言ってただろ？『バーベキューの網の上は常に戦場』だってな」

ん～まずは一言、何このカオス。

あ、いきなり食事シーンなのは、翠屋から帰ってきてからの話があんまり面白くなかったからだ！

まぁ、それはさておき。今やってるのは勿論バーベキュー。六課の隊長陣の友人さんからの差し入れなんだ。で、網を二つに分けて、食べてるんだけど。

異常とも言えるほど食べるスバルと、肉を食べたいんだろうと思わ

れるヴィータさんを中心とした肉取り合戦が、片方で行われてて、もう一つの網の方は、小食系の、エリキャロになのはさんとフェイトさん。そしてその友人二人と奏がいる。まぁ、一人異常が混ざってんだけど。

え、俺？俺はというと。

「はい、焼けましたんで、適当に食ってくださいねー」

うん、肉焼いて、野菜焼いて飯盒で米炊いて。

早い話が仕切ってる事になってる。実際居なかったらこの人達……ってかこいつら生焼けしてても食おうとするんだもんよ！

あ、ウィンナーもある、ボイル出来るし、それで出そう。

あ～腹減った。ちなみに俺の手元には焼けた肉とか野菜とか盛られた皿が３つ、ちなみに俺のも混じってる。そして残りの二つは、ここには居ない二人のためのものだ、食ってないとか言われたら洒落にならんしね。

「フリード、直接鉄板から食ったらやけどするから、ちゃんと待ってろよー」

うん、フリード用の更にも肉とか食べても問題のないものを？食べさせてる、大丈夫かどうかは知らん、キャロが突っ込まないしね。

あー忙しい。さっさとボイルしに行くか。……離れても大丈夫か？

――――――

「ごちそうさまでしたー！」

やっと御開か、うん疲れた。やっぱ皆で飯を食べるのは楽しいな、

その度に俺食えてない気がするが。さて、俺の分が……無い！？３つ皿が減ってる！？

「ハッ！？」

何となく後ろで気配を感じたので、振り返ると。

「……ぁ？」

なんか、器用に肉とか野菜とか乗ったお皿を背中に乗せてる子狐が一匹。

正直、狐って器用なんだなーとか思ってたら去っていった。

あ、俺の飯が無い。いかん軽く絶望したくなってきた……くっ！

「はい、響」

「え？」

狐に取られて俯いている俺の視線に写ったのは肉と野菜とウィンナーが！

顔をあげると、そこにいたのは奏。

「いっつもやってるし、もしかしたらと思って用意してて良かったよ」

「うぉおおお、ありがとう！」

奏から受け取って、とりあえず俺も飯を食う。うん、美味い！

って！

「あいつらの分が！」

「ん、あいつらって流と震離ならもう合流してるよ」

「え！？何時！？」

「響がなんか居なかった時に」

視線を皆が居るところにやるとさっきまで居なかったくせに、普通に馴染んでる震離と、なんか悟りを開いた流、そしてさっきもあった美由紀さんと、なんか知らない人と、子どもが居る。

「そっか、それで皿が減ってたんだな」

「うん、合流して響のいたところに皿が二つあったから多分と思ったけど……もしかして違った？」

「いや問題ないさ」

奏の気遣いに感謝しつつ箸を進める。矢張り肉は美味いな、ていうか普通に良いところの肉だろこれ、市販のよりも普通にウメェ。

「あ、響ー、さっき挨拶してなかったから、ちょっとこっちのみんなと自己紹介しようか」

「え、あ、はい！」

とりあえず、肉と野菜とご飯を一気にかきこんで、胃に収める。一応口を拭いてからなのはさん達の元に行って、とりあえず挨拶していなかったら挨拶を。多分無礼講だろうし、階級とかはいいかな。

「緋凰響です、先程は顔を出さずに失礼しました」

「さっきも挨拶したと思うけど、アリサ・バニングスよ」

はい、いろんな意味で知っています。ただ、意地でも知らないふりをするけどね！

「月村すずかだよ、よろしくね」

うん、静かな方だけど、正直に言おう本能がこの人には逆らうなって警告出してる。
何だ！？何で今日はこんな事が多いんだよ！？

「アルフだ、フェイトの使い魔改めハラオウン家の使い魔だ」

これまた小さい、しかしフェイトさんの使い魔ならかなり強いはずだけど、まぁいいか。

「エイミイ・ハラオウン、フェイトとエースのお兄さんのお嫁さんやってます、つまり義姉さんだね」

へぇ、フェイトさんの姉か、なんかさっぱりした人だけど……エース？どこかで聞いたことがある、いや、最近聞いたことがあると思うが……どこだ？まぁ、後で考えるとして。

「で、さっきも紹介したけど、私が高町美由希、なのはのお姉さん」

うん、こちらもさっき聞いたんだけど……聞いたんだけど、何でだ！？

いいやもう、聞こう。

「えーっと、美由紀さん、何でさっきにも増して、武装が増えてるんですか？」

いや手首のバンドとか内ポケとか重そうだよ。なんだ、全員ボサっとして。

さっきも見たけど、美由紀さんの手足とかすごい、とにかく無駄な肉が無い。

手のひらにもタコがあるし、肩が張ってないから打撃じゃない、多分刃物使いだけど……他のものも使ってるはず、暗器系の物を。

「おー、よく判ったね、何でまた？」

「いえ、最初は重心ぶれねぇなーとか思って観察してたら、なんか士郎さんも美由紀さんも店員にしては無駄がないなと思って、更に観察していろいろ気づいたんです」

「へぇ、結構見るんだね」

「いえ、俺何時もの面子の中だと攻撃力とか、力、技術が凄いとかそういうのじゃないんで、その分観察するんですよ」

結構重要なことだよね、観察って、相手が何が得意とかって体に出るし。

俺は刀術重視だからそこまでだけど、煌なんかいろんな意味で体が詰まってる、優夜なんか痩せてるようで技術は異常に高いしね。で、何で皆目が点になってんだよ？そして、お前何いってんだよって顔してんだよ！？

「そっか、私、家が実戦剣術やっててね、それで普段から色々と」

「へぇ、それじゃあなのはさんも？」

「にゃはは、私は運動が苦手だから」

……んー、普通そんな人が三次元運動してて教導官なんてやらないで、「エース・オブ・エース」なんて呼ばれないと思う。それで、その後適当に話に入った訳なんだけど、とりあえず言おう、俺魔力無しの戦闘で美由紀さん達と戦ったら、ほぼ勝ち目ないね。そして、武器指摘した瞬間の冷たい目が忘れられない。だからか、こんな人が普通にいるからヤバイ気がしてたのか。そして、お兄さんとお父さんはもっと強いらしい。うん、全力出しても……いや、奥の奥の奥の手の切り札を出せば……いや無理だ！

第二十七話　バーベキューとは戦場である（後書き）

はい、楽しんでいただけたでしょうか！？

さて、今回はちょっと、おや？おかしくねエイミィさん？と思う方がいると思うので、とりあえず説明を。

エイミィさんの言った人物「エース」とは、珀狼先生の書いてらっしゃる「金の閃光のもう一人の義兄」の主人公です。
普通におもしろいので、是非足を運んでみてください！

そして、何ではっきり出さないんだ！？という方も居ると思うので説明しておくと、何の前触れもなくいきなり他の作者様のキャラをだすと、その後の展開が自分的にきつくなります。なので、コラボしたい！という先生のキャラについては、存在は明示してフラグは立てても、しばらくはちょっと出さないで、自分の中で、その人用の話のプロットを練ります。そしてそこで始めてその先生のキャラが出ます。
ただ、その人用の話のプロットと言っていますが、普通に原作の話を改変しても出せます、ただ、ちょっと変更するので、なのはさん達の知り合いって方なら、かっこ良くピンチの時にとかw普通にオイシイ役を与えます。

少しどころかかなり長くなってしまいましたが、とにかく一言、めんどくさい人間で申し訳ありません。ただ、ただ、ちゃんと他の先生のキャラを活躍させたくて！かっこ良く書きたくて！それで時間がかかってしまうんです！

それでは、今回はこれで失礼します！

ちなみに、うちの子とコラボさせて！って方や、響達を連れてってもいい！？って方が居ましたらどうぞ、感想にでもメッセージにでも気軽に言ってください！文才の無い自分ですが、できるだけ頑張ってみますｗ

第二十八話　せんとう準備！（前書き）

はい、通称死ねよエリオの回です。

今回までがちょっと抑えて、次回に一気にはっちゃけようかと思ってます。

それでは、楽しんでいただけたら幸いです！

第二十八話　せんとう準備！

「……どうしたら良いの私……」

「自業自得、因果応報、その他もろもろなんとやら、分かってやったんだろ？今更どうこう出来ねぇよ」

「響がひどいよ助けて奏……」

「……ごめん無理」

んー、前回に引き続き、なんていうか俺ら側ではカオスになってる。実際、なのはさん達は俺らのこと憐れそうな目で見てるけど、はやてさんは妙に顔がつやつやしてて、流はというと、スッゲェ悟りでも開いたのごとく、無表情だ。目と顔も赤いこと以外は。

で、何でこんなことになってるかというと。

話は少し前に戻る。

――――――

「次はみんなで風呂にはいるでぇ！！」

部隊長ー、はっちゃけ過ぎでしょうに。というかいいのか？昼間に観光とか、茶店に寄った俺が言うことじゃないけど、いいのかなー？というか風呂入るって、このコテージに風呂はないし、湖で水浴びする季節でもない。

いや、頑張れば入れるよ、一応、苦行と称して、滝に打たれたこともあるけど。

「そうすると……やっぱり……あそこですかね？」

「あそこでしょう？」

なんかはやてさんとなのはさん達がなんか顔を見合わせて笑ってんだけど。

あそこって言われても俺らはわからない。大体予測は付いたけど。

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備っ！これより、市内のスーパー銭湯に向かうですっ！」

「スーパー……」

「セントウ……？」

正直思った事を言おう、もうちょいなんかいい名前なかったの！？あるだろうなんか、「海鳴の湯」とかさぁ！？あ、駄目だ発想が腐ってやがる。

「……響ー？」

「え、あ、今行く」

なんか、皆車の側に移動してるし。なんか置いてかれた感が凄くてなんか寂しい。

で、一つここで問題が発生してたんだ。

俺らの目的地は「スーパー銭湯」って場所で、そこまでは、当然車で移動する。

そして、今ある車は、フェイトさんと、アリサさん、エイミィさん

の車の三台だけで。
それで、問題が！

「皆乗れなくね？」

「うん、今、どうするって話しをしてる」

うんその通りで、今いる人数と、車の数が合わないんだよな。
だからって歩いて行くには、遠いし、この時間で飛んだら何あれって言われまくるだろうし。
さて、どうするかね？

「じゃあ、流が私の膝に座ればいいよ」

「……は？」

……震離（バカ）が逝った。
普通なら絶対にってか、普通に流は断ったんだけど、はやてさん、悪ノリだけは天下一品らしく。普通に拒んだ流に、隊長命令という超荒業を発動。そして結果は。

「～～～～～～！！！！！」

「♪」

言うまでもなく流が押し負けて。一応申し訳程度に奏を置いといたんだけど。
乗っていた奏曰く、車に乗って、震離の膝に座ってた流は、ずっと真っ赤になって俯いてて、その様子を美由紀さんが写真を撮って、多分桃子さんに送ってたらしい。

で、到着して、扉を開けたと同時に流はさっさと震離から離れて。
その震離はというとね！

「なぁなぁ、震離？流どうやった？」

「最高です、抱き心地も最高ですし、そこまで重くもなかったし」

で、高校生のノリで話してるんだけど。多分ってか確実に流は怒ってんだろうなと思って視線をやると、案の定、顔が赤くて、目が赤いけど、完全に不機嫌ってことが分かる。
で、再び。

「あ、流～？」

って、先程のことを忘れたんだろうって思うほど明るい声で震離が流に声を掛けるけども。

「……なんでしょうか？叶望一等空士？」

「……グハッ！」

なんか、流の中で震離のランクが下がったらしく。苗字と階級で呼ばれてた。
ここに来る前まではさん付けだったのに。で、少し立ち直ったらしく、よろよろとした脚付きでこっちに近づいてきて。

「……どうしたら良いの私……」

「自業自得、因果応報、その他もろもろなんとやら、分かっててやったんだろ？今更どうこう出来ねぇよ」

「響がひどいよ助けて奏……」

「……ごめん無理」

まさに自業自得。お前好かれたいなら好かれたいでいろいろ方法が合ったろうに。何で自分から嫌われる方向に持って行くんだよ？
まぁ、言わないけどね。たまには頭でも冷やせばいいと俺は思う。

で、そんなこんなで全員揃って。銭湯の中に入る。
「スーパー銭湯」って言うだけあって、軽い健康ランド見たいなデカさだ。
で、再び一悶着。流とヴィータさんで問題が。

「は～い。いらっしゃいませ～。海鳴スパラクーアへようこ……団体様ですかぁ～？」

「えっとぉ……大人１５人、子供５人です」

シャマルさんの発言になんか引っかかったらしく、スバルが小さく手を上げてから口を開く。

「えと、エリオと、キャロと……」

「わたしとアルフと流ですよっ！」

と、リインさんが答えてるけども、それでも納得いかないらしく、スバルが続ける。
正直、死亡フラグだよね？

「あのぉ、ヴィータ副隊長は～……？」

「あたしは大人だ」

うん、子供五人としてカウントされてなかったから大体予想はついてた。

……多分ヴィータさんに睨まれてたから、スバルの奴帰ったらキッツい訓練なんだろうなー。

だけど、この重苦しい空気どうしようか？

「は、は～いっ。ではこちらへどうぞ～」

で、店員さんの案内されて、一行が進んだ場所は普通にロビーで、そこから男湯、女湯に分かれてる。少し遅れて会計を済ませたはやてさんが合流。

だけど、正直一つだけ、俺の中で不安要素が一つ。

ヘアバンド忘れた……。

ちくしょう、マナー的にもアウトなのに、忘れるとか俺何やってんだ……。とか考えてると。

「響ー」

「ん、何奏……って、ぉぅ？」

なんか奏に物を投げられて、それが顔に被さる。

なんだろうと思って見てみると、それは風呂用の黒いヘアバンドで。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

皆の視線がお風呂の地図に集中してる時だったから誰にも見られてないから、突っ込まれないし。
正直スゲェ有難い！で、俺らがそんなコトしてる直ぐ側で。

「広いお風呂だって。楽しみだね？エリオくんっ。」

「あ、うん。そうだね。スバルさん達と、一緒に楽しんできて」

「……えっ？エリオくんは？」

「えっ！？ぼ、僕は、その、一応、男の子だし……」

「うん……でも、ほらっ。あれ見て？」

隣でそんな会話してるもんだから、思わずキャロの指差す方を見る。
そして納得。
ん？何で納得かって？それはこう書いてあったんだ。

「女湯への男児入浴は、１１歳以下のお子様のみでお願いします」

って。そして、エリオは１０歳。見事に問題なくて、法律的にもセーフだ。
だけど、キャロよ。こんなことに気づくとか、恐るべし。だけど、ただエリオと一緒に入りたいだけだろうから、エリオも断りにくいらしく、しどろもどろになってる。
……助け舟は……まぁ、キャロ相手だし、適当にやばくなったら判断して出すか。

なんて、考えてたら。

「せっかくだし、一緒に入ろうよ？」

「フェイトさんっ！？」

なんという、なんという追い打ち。まさかのパターンで思わず吹き出しそうになったじゃねぇか。

ほぼ退路は立たれたけど、どうするエリオ！？ミスったら女湯に直行だぞ！

「い、いいいや、あああのですね。それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とか、アリサさん達もいますしっ！」

「別にアタシはかまわないけど？」

「って言うか、前から頭洗ってあげようか～とか言ってるじゃない？」

「あたしらも良いわよ？ね？」

「うんっ」

「いいんじゃない？仲良く入れば」

「そうだよ。エリオと一緒にお風呂は、久しぶりだし……。入りたいなぁ」

うわぁ、マジで声出して笑いてぇ。ここまで見事に孤立無援になるとか。エリオには悪いけど、面白すぎる。他の女性陣に反対する気

なんて無いみたいだし。奏も震離も問題ないみたいだしね。
さぁ、頑張れエリオ！俺と流は先に行くから！そう思いながら流に視線をやって、先に男湯の方に向かう。

「あ、あのっ。お気持ちは、非常に……なんですが……ほ、ほらっ！そうなると響が1人になってしまいますしっ！」

……えー、そこで俺に振るの？しかも一人って事はお前流の存在完全に忘れてるだろう？
あんまりにも突然の振りに反応できなかったし、なんか女性陣の視線が俺に来てるし。しかも流は既に男湯に入ってったし。えー、もう、えー？普通に髪縛ってる紐に手ぇ掛けて、これから着替えて、風呂入りますって状態一歩手前なんだけど。

「……なーエリオー？」

「え、どうしたの響？」

うわぁ、なんか期待に満ち溢れた目で俺を見て、女性陣……ってかフェイトさんとキャロの視線はなんか不安っぽいし。えー、俺に任されんの！？いいや自分で何とかするだろう。

「……まぁ、頑張れ」

「えぇぇえ！？」

そう言い残してから、男湯ののれんを分けて入る。そしてすぐに髪を溶いて、髪を全部前に持っていく。俗にいう貞子スタイルになって待機。正直今までやったこと無いから気づかなかったけど、ほぼ前見えねぇよ。

「響ー！？戻ってよー！？」

案の定直ぐに声を掛けられて、そのスタイルのまま。

「なんだよもう！？」

なんか出た瞬間、全員固まったらしく、少しの間静かになって。そして。

「出たぁあああああ！？」

うん、ビックリするんだろうなぁ、もしくは笑うんだろうなぁとか思って、出てみたものの、なんか女性陣が叫びながら女湯の方へ走って行った。狙ってやったことだけど、正直オモシロイと思ったのは内緒だ。そして、残ったエリオは。

「エリオ、行くぞ」

「え、あ、う、うん」

髪を全部後ろに流しながら、もう一度男湯ののれんを潜る。あぁ、これ終わったら俺怒られるんだろうなぁ。絶対。でも、頑張って言い訳しよう！

でも、ここで一つミスを犯してたんだ、俺。

だって、女性陣全員行ったと思ってたんだけど。一人まだロビーに残ってたらしく。

そのまま、利用規約の方を確認して、目的の文章を見つけたらしく。

「あ、あったぁ～」

って、目的の場所へののれんをくぐったんだ。

第二十八話　せんとう準備！（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？毎回不安ですｗ

それはともかく、次回もこんなノリで書いて行きますｗ

多分……

それでは今回はこれで失礼します。

次回も読んでいただけたら幸いです！

第二十九話　せんとう中！（前書き）

さてさて、早いもので二十九話目です。ところがどっこい。中身はまだドラマＣＤだという。原作に換算すると、６話７話の間だという……ごめんなさい、進めるのが遅くて！

さて、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

第二十九話　せんとう中！

まぁ、まて、最初に一つ言わせてくれ。

「……人居ねぇ」

「え、響どうしたの？」

「ん、何でもないさ、それよかロッカーの使い方は分かるか？」

「えと……１００円を入れて、鍵が取れるから……これでいいの？」

「へぇ、意外と出来るもんだな」

「うん、さっき流……さんが教えてくれました」

まだ流に対してぎこちない感じだけど、まぁ、まだ仕方ないか。
流もあぁだし。それよりもエリオに教えてるとは思わなかった。俺は髪をといて、いろいろ用意してたから話聞いてなかったんだよね。

「さて、行くか……って、どうしたエリオ、ボケッとして？」

「ううん、少し考え事をしてたんだ」

ふぅん、表情から察するに、ちょっと何かが苦手なことか？まぁ、いいか。ちょっとちょっかい出せば、なんとかなるな。

「……考え事って、女湯の事か？」

「え、な、違うよ！」

あっはっはっは、真っ赤になって否定してるけど。それは裏をかえせば行きたかったって捉えられるんだぜ？さて、さっさと風呂に行くかね。流は既に行ってるし。あぁ、ある意味久しぶりの風呂だ。最近はずっとシャワーだったし。さっさと服をたたんで。それから。

「ありがとうございますっ」

おぅ？この声は……え！？

「……えっ？」

エリオも気づいたらしく、二人揃って予想外の人物の声を聞き、振り返る。

で、俺の視界に写ったのは、多分女湯の管理をしてる人と、長めのタオルを纏ったキャロがそこにいて。俺は正直苦笑い。来るとは思えなかったし、それで隣にいるエリオはというと。

「あはっ。エリオくんっ」

「キャ、キャキャキャキャキャロ。キャロッ！」

「？」

「ふ、ふふっ服、服っ！」

「うん。女性用更衣室の方で脱いできたよ？エヘッ。だからほら。タオルを……」

「見せなくて良いから～～っっっっっ！！！！」

「……あ……えへへ。ごめん」

うん、言わなくても分かるだろうけど、何の恥じらいもないかもしれないキャロと、耳まで真っ赤にしてるエリオ。あー、考えが甘かったなーもう。まぁいいか。

「あのっ！っていうかっ！こっち男性用っ！」

「女の子も１１歳以下は男性用の方に入って良いんだって。注意書きの方にも書いてあったよ？」

「あ、いやっ、その……」

うん、こりゃキャロの言うとおりだな。
ここまで来てんだ、別に追い返すわけにもいかないし……ん？お前ロリコンかって？それはない、誰とは！言わないけど、俺の知り合いに居る金髪ショートの女の子は１２まで人の家の風呂に「俺が」居るときに突撃かまして、髪洗わせてーだの、背中洗ってーだの、言って来てるから別に耐性なんぞとうの昔についてるよっ！
……言ってて悲しくなってきた。

「はぁ、仕方ないな、ほれ二人とも行くぞー」

「はいっ」

「ええ！？響！？」

「エリオー、もうここまでキャロは来たんだから、もう腹くくって

一緒に行くぞー」

「ぅぅ、わかった」

……なんだろうかこのコンビは、なんか片方は自然ガールでもう片方は都会ボーイじゃーん。

まぁ、そのうち慣れるだろう。つーかほぼ服脱いでるからさっさと風呂行きたいしね。寒いし。

さて、二人を連れて、いざ風呂場へ！

「うわぁ～……すごい、きれいですね、ここのお風呂。」

「う、うん……そうだね……」

へぇ、健康ランドみたいなもんだと軽く舐めてたが予想以上に良い設備じゃん。

ただ、天井を見ると、多分女湯とつながってるだろうな。まぁ、完全に独立してるわけ無いしよくある話だ。

「はいっ！」

「ん、どうしたキャロ？」

「皆で背中流しっこしたりしましょうよ」

「うん、元気よく片手をあげるのは構わんが。タオルがずれるから気をつけなさい」

「はいっ」

うん、テンション高いし、機嫌もいいなぁ。まぁこう言うことあんまりやったこと無さそうだし。別にいいか付き合うのも悪くはない。

「まぁ、いいぞ」

「え、響!?」

「まぁ、諦めろー、こういう機会はほぼ無いんだ、楽しんだもん勝ちだよ。あ」

これから二人を座らせて体を洗わせようとした時にふと気づく。あいつは……あ、半身浴の所にいた。へぇ、その隣は普通の風呂か。ていうか流、お前翠屋にいた時以上に女の子っぽいな。まぁそれはいいや。

「流ーお前はどうするー?」

「……自分はもう洗いましたので、遠慮しておきます」

うん、だろうな。浴槽の前の桶にタオルとか、石けんとか入ってるからもう終わってるんだろうなと思ったよ。さてと。

「あいよ、わかった、さて、三人でやるとして順番はエリオ、俺、キャロの順な?キャロは体洗う時と、湯船以外じゃタオルとっちゃいかんぞ?」

「はいっ」

「うぅ、分かった……」

とりあえずキャロに釘は打っておく。だってねぇ、別に俺はロリの人じゃないから問題ないけど、そうしないとエリオが倒れる。久しぶりの風呂だもんよ、ゆっくり浸かりてぇよ。
そして、三人一緒に座る。

「エリオ、痛かったら言えよ？そして、キャロ、力一杯やっていいから」

「うん。うんしょ、うんしょ」

うんさすがに凄く上手いとかそう言うのは全く無いけど、声でわかる。凄く機嫌がいいなって。
そのせいか、何時もみたいに丁寧語が混じってない。

「響……さんの髪の毛って凄く綺麗ですね」

「ん、あぁ、これは母さん譲りなんだよ、それよかキャロ？」

「はいっ？」

「さん付けはいいよって言ってるじゃん、エリオは普通に呼んでるんだ、キャロも普通でいいよ？呼び捨てがダメなら、好きなふうに読んでくれても構わんし」

「……えと、じゃあ……お兄ちゃん？」

ん、一気にランク上がったなぁー、普通に響の方がいいと思うんだが……まぁいいか。

「ん、それでいいよ、エリオは痒いところはあるか？」

「ううん、平気。えと、その、僕も呼んでいい？」

「ん、いいよ」

うん、二人の顔は俺の位置だと見えないけれど、二人揃って凄く機嫌が良くなったのは凄く分かる。

キャロなんて、鼻歌交じりだし。だけど、アレだ。エリオの背中を洗ってて、キャロが背中を洗ってくれてよく分かる。本当に魔法は歪なんだな。俺や優夜、煌に震離、雪奈に瑞希、奏は正直ミッドに来る前に各々実力があるか、ちゃんとヤッていけるかって言う試験もどきを受けた。

ま、結果は今のとおりなんだけどさ。だけど、それでも、俺より小さい子が前に出てることが正直怖い。何時居なくなるか分からないからな、だけど、絶対にさせない、もう知り合ったんだ。だから。

「……お兄ちゃん？どうしたの？」

「ん、何でもないさ、さて、キャロとエリオ交代。エリオ頼むよ？」

「分かった」「うんっ」

今度は入れ替わって、キャロの背中を洗う。うん、やっぱりキャロもまだ小さいし、男女の差がそれほど出てない。さすがに女性特有の柔らかさがあるけど。それでも小さいな。

……うん、統夜さんや、震樹さん達が必死になってた気持ちが少し分かった気がする。よっしゃ。こんだけ洗えばもういいだろう！

「さて、体も洗ったし、風呂に行くぞー」

持参したヘアバンドを頭に装備して、髪が湯船に浸からぬように注意してから、半身浴の隣の普通の風呂に入る。うん、いい湯だね！うん、キャロも気持いいみたいで、風呂を楽しんでるけど、エリオよ、いい加減慣れろよ。
仕方ない。一つネタでも教えるか。

「エリオ、キャロ？見てみ、タオルの真ん中を持ち上げながら外縁を沈めると空気の山ができるんだ。このタオルに包まれた空気の固まりを水中で握りつぶすのがおもしろいんだ、やってみ？」

「あ、本当。タオルが丸くなってる、なんか、可愛いかも？」

「ハハッ、それで後両指をこういうふうに組んで、水を指の間に入れればっ！」

「わっ、結構飛ぶね！」

風呂に客が居ないから、二人に軽い遊びを教えてる。楽しいよね！？一人だとゆっくり浸かる方を選ぶけども。
さて、視線を辺りに回してからの……うん、あった。なんか書いてあるな……何々。
『子供用露天風呂』１２歳以上の男子立ち入り禁止。よし、オッケィ！

「なぁ、エリオ、キャロ？　あそこに『子供用露天風呂』がある。一緒に入ってきたらどうだ？」

「えぇえええ！？」

「あ、ホントだ。お兄ちゃんも行くの？」

「……無理、この世界の法律が許してくれないからな。それにいろいろ風呂もあるんだ今のうちに体験しとけよ、露天はいいぞ？風が気持ちいいしな」

「うん、じゃあ行ってきます！エリオ君行こっ！」

「う、うん……」

良し二人とも露天風呂に行ったな。さてと、少しの間ゆっくり浸かるかね。

後はあの二人の問題だしね。これで更に仲良くなればいい事だ。

さて、と。

「なぁ、流？」

「はい、なんでしょうか？」

「ちょっと、話しでもしないか？」

「……えぇ、構いませんよ」

よしよし、やっぱ風呂だと結構話してくれるな。

「そうだな～、そうだ、得意な魔法は？」

「……砲撃系、斬撃系のこの二つですね」

「へぇ、すごいな、じゃあさ、スリーサイズは？」

「……測ったことありません」

「はは、そうか、悪い。じゃあ、好きな食べ物は？」

「……基本的には何でも食べます」

「好きな色は？」

「……白と黒の二つですね」

「そうか～、えーと、あとさ、あとさ」

「……」

「――どこから来た？」

さて、蛇が出るか、鬼が出るか、はたまた魔王が出るか。さぁ、一勝負。

第二十九話　せんとう中！（後書き）

はい、響がエリキャロの二人の兄になりましたーｗ

そして、次回は女性陣かもしれません。

さて、自分は突っ込みという名の感ｓ……ゲフンゲフン、何でも無いです。

それでは次回も読んでいただけたら幸いです！

第三十話　「風鈴流」の異常性（前書き）

前回フラグが立ったと思われると思いますが、一旦消して、ちょっと後のための物を仕掛けておきます。

それではどうぞ。

第三十話　「風鈴流」の異常性

――ｓｉｄｅ響――

「――どこから来た？」

さて、どう出るかな？一応背中越しに声をかけてるから、顔の表情はお互いに見えない。
そういうふうに話しかけたのは、少し俺も隠し事してるから自然にこうなったんだ。
まぁ、少しどころの問題じゃないけどね。

「……はぁ、はぁ、どこから、と言いますと？」

ん、なんか息が荒いな、さっきも少し肩で息してる感じだったけど、何だ？
まぁ、とりあえず。

「流はどこから来たって、文字通りの意味だよ」

「……ん、ふぅ、そこの入り口からですよ」

んー、何だなんか微妙に話が噛み合ってないな、わざと話題を変えてる……のか？
とにかく普通にいくかね。いけるところまで。

「単純な話、流は本当はどの部隊から来たのかって話だよ」

「……」

うん、とりあえず聞きたいことを聞いておく。まぁ、ちょっと流が「あいつ」からの差し金かどうか確かめるだけなんだけど。だけど、これを聞くってことは。普通に俺が流を信頼していないって証拠だよなぁ。

「……緋凰さん？」

「んー？」

おぉ、釣れたかな？だけど否定するかな、どっちだ？

「……失礼……ですが、逆に……聞きますね？」

「おぅ」

なんか途切れ途切れで話してるけども流は大丈夫なのか？だけども、ここまで来て引き返すのも何だかなぁ……。

「……どうして、貴方は……上に……プクプクプク……」

ん、急に途切れて、プクプク……って！？

「流ーーーー！？」

慌てて振り返ると、そこには湯の中に顔から倒れてる流の姿が。慌てて流をひっくり返して、抱き上げる。

って、よく見たら全身真っ赤で、お湯に浸かり過ぎてたせいで体も熱くなってる……早い話が。

「……ミスったぁあああ、流も一応ミッドの人なんだったぁぁああ……」

正直、本気でミスった。普通に日本人の名前のせいで普通に忘れてた。顔とか普通に外人さんだけど、流も一応始めての風呂だったかもしれないんだ……しくじった！

「流？おい、聞こえるか？」

「んっ……ん」

ＯＫ、落ち着け俺。目の間で抱き上げてるのは男だ。よし落ち着け。可愛さだけならあいつのほうが数倍も上だ。

うん、落ち着け。

「お湯は飲んでないが……正直やばいな、直ぐに熱を冷まさないと」

とりあえず流を湯船から脱衣所まで移動させる。ちなみにおんぶ等だと色々アウトだから、流を抱っこして移動させる。うん？どうやって抱っこしてるかって？そんなもん、俗にいう姫様以下略だ。言わせないで下さい、恥ずかしすぎるので。

とりあえず、移動させて、流にひと通り服を着せるけど……脱衣所なんかよりロビーで休ませたほうが一番いいんだけどなぁ、正直、今の状態だとアウトすぎる。

体が拭けば何とかなった、問題は俺で、髪を少し拭いた程度じゃ全然乾かねぇんだ。

……どうしよう、流をそこにおいておくのは凄く気が引けるし、かと言って。俺がそこにいて床を水浸しにさせるのも悪い。

んー、どうしたら……あ。そうだ。

――数分後。

「というわけで、頼んだぞ震離！俺は髪拭いてくるから」

「ん～りょうかーい」

とりあえず助っ人を女湯から念話で呼び出した。奏だと髪を拭くのに時間がかかるからキツイだろうし、エリオ達に頼もうと思ったけど今頃多分露天を満喫してる頃だろうし。野暮な真似はしない。そして、いろいろ考えて震離が多分うってつけだろ考えた。

理由はひとつ。少しでも信頼回復のために。幾ら何でも同じ部隊で仲が悪かったらねぇ、駄目だろう。

一応同じ日に異動になった者同士だし。

とにかく、まぁ、あいつに任せるかね。

……後で牛乳とか買って持って行こう。うん、そうしよう。

――ｓｉｄｅ震離――

最初にいきなりいいたいというか、思わせてもらいたいな。

流の寝顔、可愛いな……本当に。

顔は若干赤いせいか、なんか色っぽいし。これで男の娘だから……

あ、字間違えた。

まぁ、それでも。

「本当に、昼間は迷惑掛けたなぁ」

我ながら本当にそう思う。普通に考えると、女装をさせて喜ぶ男の子なんて普通いない、それは流も同じで、全力で嫌がってたし。だけど、途中から、言葉に変化が訪れた。最初は淡々と拒否の言葉を言ってたけど、少しずつ歳相応の、言葉を使っての否定。そして気づく。

私の膝の上で熱を冷ましてるこの子の事が少しだけ分かった。

最初に流の一人称が「私」だと言う事に。多分これが流の……ううん、この子の素の部分なんだろうな。使い慣れてない感じなんて微塵も感じないくらいに、自然に私って言ってたからね。

だけど、この後が問題なんだ。多分、美由紀さんも、桃子さんも……それこそ響もまだ気づいてないと思う。流の異常性に。

事の発端は少し前の翠屋のあの時。

私が流に白いゴスロリ風の服を着せたときに、私が冗談で言ったんだ。

「これなら、何時運命の人が来ても誓いのキスができるね」と。

正直に言う。普通この言葉を聞いた瞬間、よほど慣れてる人とか以外の反応は真っ赤になってそんな人居ない！とか、照れる程度で、逆に慣れてる人はこちらをからかいに来る。もしくは全力で知らないふりをするだろう、それでも少しの反応でだいたい分かる。

だけど、流の反応はその何方でもない。

「……誓いの……キス？」

私は顔には出さなかったけど、正直に言おう。本当に驚いた。なんでかって?私の考えが、受け取り方が間違いじゃなければ、たしかにあの子の中ではこう思ったんだろう。

「それはなんですか」って?

私はこの返しにはっきりとした違和感を覚える。

流の年は14。別に珍しい年でもない、現にスバルの一つ下だしね。だけど、それでもおかしい。普通なら14という年は、ある程度の事を知っているはずだ。勿論さっきの「誓いのキス」の意味も。それがどんな箱入り息子であっても、どんな天然でも何かしらの反応を取るはずだ。

だけど、私の考えてることは、おそらく私一人の空想だろう。だからこそ考えられる。「風鈴流」の異常性を。同類の人間の感じを。

「ん、んん?」

「あれ、起きた?」

「あ、あれ、わた……自分は……あ、失礼しました叶望さん!」

「ほら、まだのぼせてるんだから冷やさないとだめだよー」

そう言って起き上がった流を私の膝に寝かせて、うちわで仰ぐ。

私の膝の上で横になる流は、先ほどとは違った意味で顔が赤くなる。

だけど、それでも私の中の疑問は尽きないし、流に対する別の考えも止まる事は無い。けれど、それは絶対に疑いじゃない、ただ、た

だ、私はこの子と――――

「ほい」

「ひゃ?!」

急に声が聞こえたかと思ったら、首筋に冷たいものがピトってくっついた。

思わず飛び上がろうとするけど、膝に流を寝かせているから反応できず、変な声だけが漏れた。

「何すんの響!?」

「いや、終わったから差し入れ替わりに牛乳買ってきたんだが……要らないか?」

「あ、ありがとー」

わーい、牛乳だ。正直これを飲んだところで胸が大きくなるわけじゃないけど、大きくなるわけじゃないけど、なんか悔しくて、今女湯に居る人達が恨めしくて……何で、あんな大きくなるの!?って聞けば、牛乳かな?って、毎日飲んでるよ、毎日飲んでも胸なんて胸なんて……

「え、あの叶望さん……?」

「うぅ、なんでもないよ」

とにかく貰った牛乳を一気に飲みほして、一言!

「もう一本！」

「……買ってくるけど、腹壊すなよ？」

言われなくても分かってるもん！

第三十話　「風鈴流」の異常性（後書き）

はい、こんなの震離じゃねぇと思いのかたいらっしゃいますと思いますが、震離の心のなかでの独白で、ちょっと、言わせてみました。ただ、これから少しずつ違和感等を表現していきたいと思いますが、自分自身難しいものだと思うので頑張ってみます。ただ、これがこの子の「本心」の一部分だろ認識して頂けると幸いです。

それでは次回も読んで頂けると幸いです。

第三十一話　封印完了（前書き）

えーと、今回はちょっと飛んで、いきなり封印にとりかかります。

アリサとスズカの出番はひとまず終わりですが、短編等で響達８人のうち誰かが必ず、海鳴に行くので、その時に出ますｗ

それでは、どうぞ楽しんでいただけたら幸いです！

第三十一話　封印完了

――ｓｉｄｅ奏――

「もうやだこのカオス」

「……頑張りましょう」

うん、そうだね、そうだよね。
ちなみに私と流は今海鳴の河川敷グラウンド上空で待機して、下ではティアナ達がロスト・ロギアの捕獲に当たって私と流は、そのロスト・ロギアが逃げないように適当な攻撃をしてるんだけど。だけど、だけどね！？

「何で４人中２人しか動けないの！？」

「……さぁ、それは自分もわかりません」

隣で流が牽制しながら私の問に答えてくれる。ごめんね忙しいのに。
ちなみにここに居ない、震離はというと。

「……待って、大丈夫行けるから」

「貧血で立ちくらみ起こしてる人が言っても説得力はないから後ろで私達と援護するの、分かった？」

「……大丈夫、ちょっと血が足りないだけで、問題ｎ」「分かった！！？」

うん、これだけ釘を刺せばさすがに震離も黙ってくれる。というかこの子、昼間のアレのせいで現在進行形で貧血起こしてついさっき倒れそうになってたんだよね。
で、まだ震離はいいよ、スターズだし、ちゃんと仕事してるからいいけど。でもね!?

「もうヤダこの小隊」

「……」「……まぁ、アレは仕方ないよ、何で攻撃されてるのか分からないけど」

うん、私もそう思う。そして、その問題の響はというと。

「がっ!?ちょ!?まっ!?ぐぁ!?」

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで」

うん、これが一番のカオスなんだよね。
なんか空で金色の渦の中から腕が一本生えてる。
言わずもがな、フェイトさんがなんか響に攻撃してるんだ。

ことの発端はついさっきで。

――数分前。

銭湯から出たと同時に設置していたサーチャーが反応して、皆でそこに急行。
そして、河川敷グラウンドに居たんだけど。

「な、なにこれっ!?ぷにょぷにょスライム?」

「ちょっと、かわいい……」

「うん、結構かわいいね!」

スバルはともかくとしてもさ、何で震離とキャロはアレを可愛いと言えるんだろう?
なんか普通に気持ち悪いなー程度にしか見えないんだけどな。

「これ、全部本体ですか?」

「ん、あぁ、それはない、なんか危険を察知するとダミーを増やすんだとさ、けど本体は一つ」

「うん、そして本体を封印すると、他のダミーも纏めて消えるんだ」

実際その通りでこの類のロスト・ロギアは高価で貴重なものだから比較的楽なものなんだ。
たまに、凄い変なロスト・ロギアとかあるけどね。精神を入れ替えるロスト・ロギアとか……アレは、うん、忘れよう。

「放っておけば、増殖したダミーが町中に広がりかねない。空戦チームは広がったダミーを回収する。そっちはお前らがやって見ろ」

「素早く考えて、素早く動く!練習通りでいけるはずだよっ!」

「はいッ!」

……空戦チームって私達もカウントされてるから今回は私達も援護

に回るんだ。
正直この部隊での初任務だからちょっと頑張ってみようかと思ってたんだけどな。さて。私たちは四人で集まって指示を仰ぐかな。

「どうする響？」

「あぁ、普通にティアナ達の援護に回る……んだけど」

ん、なんか響の様子がなんかおかしいよ？どうしたんだろう？

「響、どうしたの？」

「んー、今回は楽な任務だし、とりあえず言おう。俺今日戦闘ほぼ出来ない」

「は！？」「え、貧血起こして立ちくらみ起こした私よりも元気じゃん！？」

震離、理由はともかくとして、それは今どうでもいいよ。

「まぁ、聞けよ。昨日の模擬戦以降さ、刀整備してなかったせいで、正直今こんな状態」

セットアップしてるから、響のその手に刀がさやに入った状態で手に現れる。
そして、その刀を二本抜いてみると。

「昨日からこれだから戦闘は出来なくはないけど、正直キツイね」

根元から折れた刀が二本。しかも残った刃の方にもひびが入ってる

し。

「あー、うん、分かった、一応私達三人でやるから……震離いける？」

「ふっ、任せて奏！これから私がぁあああ……ちょっとタイム」

なんか震離も杖に魔力刃を装備して、振り上げたと思ったら、なんか膝ついたよ？

「ちょっと、貧血が」

「……何で？」

「……昼間のアレで、血を出しすぎて」

……どんだけ出したの？って正直聞きたかったけど、やめとく。だって隣で普通に流が顔赤くしてたもん。

え、ちょっと待って。今響がほぼ戦闘できないで、震離の調子が悪いって事は、私と流しかマトモに戦えないじゃん。

「そんな、攻撃手段が封じられるなんて……」

「さすがはロスト・ロギア。見た目はかわいいですが、侮れません……！」

おや、下じゃちょっと苦戦してるっぽいな。援護は……って響がなんか言おうとしてるし、任せようかな。

「エリオ、キャロ、今さっき解析が終わって、その辺りにオリジナ

ルは居ないぞ。それでだ、オリジナル現在位置は……キャロの南西５０のポイント付近に居るぞ！」

「ありがとう、お兄ちゃん」

へぇ、響もうあの二人に懐かれたんだ。響の顔も何となく嬉しそ……って！？

なんか、エリオとキャロの二人に「お兄ちゃん」って言われた瞬間、閃光が走ったんだけど！？

そして、なんか、なんか、響の体が横にくの字に折れ曲がり、そのまま吹っ飛んでいって。

響の居た位置に持ってた刀が落ちてって……え、何が！？普通に私も驚いてるけど、流も驚いてるみたいで、キョトンとしてて、震離は開いた口がふさがらず唖然としている。

「ぐぉおお……何！？」

響が体勢を立てなおして、自分を吹き飛ばした人物を見る。

そこにいたのは自分のデバイスである「バルディッシュ」を構えて起き上がるのを待っていた、フェイトさんが居るんだけど、後ろ姿からでも分かる、その姿が死神が今にも魂を刈り取ろうとしてる様に見えるんだけど！？

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで」

「え、何！？何が！？ちょ、フェイトさぁあああん！？」

なんか響が叫んだと同時に、なんか惨劇が始まった。

金色の体積の固まりのようなものが響がいたであろう場所に叩きつけられていく。既に最初の一撃で、もう響は金色の気体に包まれてみることができないでいた。正直もう響の姿なんて見えないし、何が起こってるかわからない。だけど。

「フェイトさん、とりあえず落ち着こうぜ」

「どうしてどうしてどうして」

……生きていることが分かって、さっきよりも容赦のない攻撃が続けられていく。どうやらまだあの金色の固まりの中にいるみたいだけど、なんか余裕に聞こえてくるのは私の気のせいかな?あ、なんか金色の渦の真ん中から腕が……なんか赤く染まった腕が顔を出した。うん響はそこにいるのは分かったけど、何で赤くなってるかは気にしたくない。

「とにかく、状況を、ガフゥ!」

「なんでなんでなんで」

「言ってくれないと、グハァ!!さすがにっ、俺も、ガァ!!」

もう、痛々しくて聞いてはいられない。なんか響の悲鳴の度に腕が痙攣しているのが生々しいし。

「あ、グゥっ!分かったから、ブフッ!とりあえず、ゴフッ!止まって、ブハッ!」

「どうしてどうしてどうして」

「とりあえず、十分仲良くなってるんだし……ッ！！」

言葉が途中で途切れたと同時に、赤い腕がまた金色の渦の中に沈んでいくんだけど。

なんか、最後の言葉が何時もと違ってて、それでいて終わったように聞こえたのは私だけかな!?もう……。

「もうやだこのカオス」

なんか響が死にかけてるのを見てるうちに、下じゃ封印終わってたしね。少ししか援護できなかったよ……。

なにはともあれ、出張任務は終わったんだけども……次の日に休むかなって思ってたら普通に響訓練に出てきたんだけどね。

……まだ二日目でこのチームワークでこれから先私達やっていけるのかな……主にライトニングとして……。

第三十一話　封印完了（後書き）

はい、今回は以上です。

くそぅ、己の文才の無さに相変わらず絶望しています。
ちなみに私の中ではフェイトさん優しいお姉さん的なポジションにいたはずなんですが……何でこうなったんだろうと書いてて思いましたｗ

それでは次回も読んで頂けると幸いです！

第三十二話　ドレスはともかく、あんたら若いのに（前書き）

はい、久しぶりの事務員パートで、煌さんがメインですｗつっても次回はホテル編に行くんですけどもｗ

さて、少しずつ文章が多くなってまりました。同時に文才の無さに絶望を覚えます。

では、どうぞ楽しんで頂けると幸いです！

第三十二話　ドレスはともかく、あんたら若いのに

――ｓｉｄｅ煌――

とりあえず、一言言わせろ。失礼、言わせてください。それがダメなら思わせてください。

――なんてことしてくれたんだ、このやろう。

はい、少し気が紛れました。とにかくこれだけでは分からないと思うので、少し前に戻します。
事の発端と、問題発生の二つに分かれるけどね！では、どうぞ。

――数時間前。

「へぇー、響達三人用のデバイスか、いいんじゃないですか？」

「やっぱり煌君もそう思う！？だから、一つお願いしてもいいかな？」

「あぁ、大体分かったので了解です、この資料の素材とか受注しとくんで、午後には来るかと」

「ありがとー、じゃあ私リイン曹長のメンテがあるからっ」

「はいはい」

事務室で仕事をしながら、シャーリーとの話をしてる……いや、し

てたになるな。もう行ったし。
さて、いきなりデバイス云々の話が出たんだけども、これにはちょっと訳があって。
なんかシグナムさんが直々にはやてさんに言ったらしい。「緋凰達にデバイスを～」って。まぁ、細かいことは知らないから実際なんて言ったか知らないんだけどね。
それよりも……

「……煌、奏達ってデバイスなんて受け取らないと思うんだけど？」

「あぁ、俺もそう思うけど、既に作成しとけば問題ないよ、あいつら用って言えばいやでも納得するだろうし」

「……そうかな？」

「あぁ、さすがにそこまでされて、逆に受け取らないほうが失礼だろう」

「……まぁ、そうだね」

隣で瑞希がそう言うけど、実際その通りだ。あいつらに言ってからつくると、絶対に拒否するだろうしな。要らないって言ったのにとかいろいろ難癖付けて、でも黙って作って、そしてあげると、問題なく受け取るだろう。好意なんだからって付け加えたら尚よし。

「おっしゃ、受注完了、十分経費で落ちるな」

「うん、良かった」

でもさ、今月ってか近いうちに、ホテルの警護するらしいんだよなーうちの部隊。俺らには関係ないけども……戦えないからね。さてさて。

「瑞希、飯でも食いに行かないか？」

「ごめん、今日はちょっと雪奈達と食べる約束したんだ」

「ありゃ、それは残念だ、じゃあまた今度なー」

「ん、指きりげんまんでもする？」

「ん～、それはさすがに恥ずいから、遠慮しとく、じゃな」

「はい、またね」

で、なんだかんだで、皆にふられて一人で飯食ってたんだけどね。ちなみに響は最近フェイトさんに拉致られてる。何でもＦＷのちびっ子二人に「お兄ちゃん」って呼ばれてるからしいが、正直わからん。

未だにＦＷの四人と会ったこと無いしね。だから外見はしってる、だけどどんな人達かは知らん。

あー、それよか午後までにひまだな。外のベンチで寝るかな。

……で、ここまでは良かったんだ。今日は楽な一日だって。

そして、問題がこれ！起きて事務室に戻って、仕事に取り掛かったらさ！

なんか、普段こっちに来ないレアな人が来たんだよ。で、開口一番ふざけたこと抜かしたけども、それは言えない。だから途中からス

タートします。

「ねぇ、煌君？」

「駄目です」

……目の前の視界を殆ど白衣の女性の体で埋め尽くさせる。

正直毎回思うのは、男の匂いは不快なだけなのに、異性ってだけでこうまで違うのかと、毎回思う。

別に変態じゃないからな？

「お願い、頼めるのはあなただけなの」

「だから無理ですって」

さらに近づかれるけど、俺は動じない。並の人なら動じるんだろうけど俺は問題ない。

「ねえ」

柔らかくて細い指が俺のゴツゴツした手を握る。ガキの頃から棒を振ってたせいで豆とかいろいろ出来ててゴツゴツしてるから、あんまり女性と手を繋ぎたくないんだよな。簡単な理由として、なんか女性の肌を傷つけそうだから。

だけど、そんなことはお構いなしと言わんばかりに、その白衣の女性は空いた手から一枚の紙をそっと差し出した。女性らしい可愛らしい文字で、紙にはこう書いてあった。

――領収書――

――上様――

「経費で落して、今月ピンチなの！」

「知るかーー！！」

階級なんて、もう気にしない、だってさぁ！？これだぜもう！？
ちなみに白衣を着てるのはシャマル先生で、さっきの色っぽい雰囲気は次元の彼方にぶん投げている。

「えー、だってお仕事で使うんですよ～」

「何処の世界に警備でドレス代払う組織があんですか！！」

そりゃさぁ、それを……警護を本職としてる人達ならば、仕方ないよ必要なんだろうけども。
でも、俺らの場合……いや、うちみたいな舞台の場合話は違う。うちの場合は警備で、要するに見せ札だ。だから、敵に警備してますよって見せつける程度しかできない。

「オークション会場なのよ、こう、スーツにドレスで入る所なんだから」

「……知りませんよ、大体階級とかボロボロ付いてるうちの隊長陣の制服のほうがハッタリには向いてると思いますよ？」

大体なんで三着も買うんだよ、内部から怪盗でもでるってんなら、話は別だけども。

「はやてちゃん達はこういう時に役に立つのよ？」

「うわ、ダメフラグ」

包囲網の構築、経路の先読み、それに合わせた人員配置に不意に備える予備人員の待機とかさ！？
うちの部隊とはいろいろ相性悪いだろうよ！？

「そもそも何で俺に話すんですか、補佐官が会計でしょうに？」

「グリフィス君が、優夜君か、煌君に通してくださいって」

……ＷＨＹ？思わず、視線を補佐官もといグリフィスさんに視線を持ってく。
こちらの視線に気づいたのか、俺にニッコリと笑みを見せてから、なんか涙がこぼれた。
うん、了解。大体分かった。だって、見渡すかぎり、事務室全員の視線が俺に向いてるもん。
わかったよ、大体話し来てから検討するよ……。

「で、何でまたこんなもん買ったんですか」

どーしょもない理由ならそれで跳ねればいいんだ。
ううん、と呻くシャマルさん、うん設定年齢２２歳に見えねえ。
だけど、今の俺にはなんとも思わんがな！

「実は、もうすぐはやてちゃんの誕生日が……」

「へぇ、街を歩いていてドレスが目に入り、衝動買いする際に次の任務を思い出し、つい三人分買ってしまったと」

「はい！！」

「あっはっはっはっは、それはナイスですね～～～、なんて言うかぁあああ！！」

思わず咆哮、それに対してキャーって乗ってきたシャマル先生。なんかもう、いろいろ疲れてきたな。
それよりも気になる点が一つ。

「何故このような値段に……」

領収書の金額は結構な額に達していたけど、なんかこの金額どっかで見たんだよな、それもついさっき。
はて、どこで見たんだっけか？

「さ、三人に見劣りしない物を選んだらそうなっちゃったのよ～」

思わないようにしてたけど、先生アホでしょ。

「返品」

「もう袖通してもらっちゃった。てへ♪」

……よし。

「よーし、今からこの人殴っていいと思う人～正直に挙手～」

はーい、はーいの大合唱。ありがとう皆、というか雪奈さん、居るんなら援護に来てくださいよ。
俺だけだと厳しいんだから。まぁいいか。

「ひ、酷いみんな！！」

酷いのはアンタだアンタ。

「まあ、衝動買いの部分に同情の余地はありませんが、誕生日という点だけは評価しましょう。でも……あ、あ！？」

「どうしたの？」

「ちょっと、待ってください！！」

慌てて端末を叩いて、ある場所に繋げる。そろそろ付いてる頃だし、ドレス代を経費で落とすとなると、これしか残ってない。

「シャーリーさん、それ返品！」

『……えぇ！？』

「文句はこの人に！」

「え、私！？」

『え、ちょ、何が！？』

「では！」

即効で通信を切って、クーリングオフする手続きを取って、業者さんに持って帰らせる。

だって、ドレス代の金額って、昼前に俺があいつらのデバイスの素

材頼んだ金額と同じだって気づいたもんよ。ちなみにあの後血相を変えたシャーリーさんが、突っ込んできて俺に文句言ったけど、事情を説明して納得させた。うん、俺は悪くない。

で。ドレスのお披露目会が発動。ちなみに前線組には当日まで秘密とのこと。うむ、美女を見るのは純粋に嬉しい。それが着飾った姿なら一見の価値があるだろう。

「ねえ、どんな感じだと思う」

「やっぱり、フェイト隊長は黒でしょ」

えぇ、フェイトさんは黒か。まぁ、バリアジャケット見た限りだと、白と青で構成されてた気がするけどな。まぁ、黒って言われて普通に似合うと思うけども。

「はいはーい、お待たせしました。御入場でーす」

パチパチと拍手のなか入ってくるドレスアップされた隊長達。うん、シャマル先生のセンスが光ってて、ドレスは、綺麗だ。徐々に小さくなる拍手、その理由は感嘆ではないんだ……悲しいことに。

「ど、どうかなみんな……」

うん、綺麗ですよ、ドレスは。

うん、隊長達のにピッタリのドレスだった。おそらく十人中十人が似合うと言うだろう。

なのはさんは、サイドポニーを外して、髪を下ろして明るい感じのドレスを着て、本当に綺麗だし。

フェイトさんは、皆の予想の黒いドレス。そしてはやてさんは、シ

ョートの髪をセットして、花のワンポイントの入った白のドレスだ。
それに透明のストールを付けている、ちなみに三人とも肩出し。
これなら、どのパーティに参加しても普通に問題ない。けど、一つ問題が。

化粧が……そう、はっきり言ってケバい。いまどきあんな化粧するとか、どこの小学生だよと思った俺がいたけど。口に出したらアウトだから言わない。
でも、それ以上に。

（……皆の視線が俺の背中に集中してるし……）

おい、誰か何か言えよ。正直に言うしか無いんじゃない？　あのままじゃアレで行くよ。
こんなテレパシーを交わせるくらい心は一つである。
誰って、ジーって視線が背中を刺すのが分かる。痛いほど分かる。
分かったから、分かったから言葉を考えさせて、って思った瞬間、誰かに後ろから押し出されて三隊長の前に俺参上。

「あ、煌君どうかな？」

うん、綺麗ですよドレスは。でも、こんなとき頭は冷静らしく、響達は呼び捨てで何で俺らは君付けなんだろうかって思ってるし。ああ、隊長方、化粧の上からも赤くなって。
こ、これに真実を告げなくてはいけないのか！？くっ、腹をくくるか……はっ！？

「……綺麗ですよ」

あぁ、皆の視線が殺気に変わったー、まぁ、落ち着けよ、俺の言葉

を聞けよ。

「ですが、隊長方？一つ勘違いしてる点がありますよ？」

「え？」

「元々化粧って言うのは、肌にシミとかいろいろ出来てる人がやるものです。もしくはご高齢の方がやるものですが、隊長方はまだ、華の１９歳、化粧なんぞに頼らなくとも、自然の、それこそナチュラルメイクで十分綺麗なんです、だから自分的には少し化粧を落として、ナチュラルメイクに近くした方がより綺麗に美しくなると思いますよ？」

……よっしゃ、頑張ったよ俺！？普通に綺麗とか言われて三隊長とも、顔を更に赤くしたし。うん眼福。ケバイこと以外は。ちなみに、その後寮母のアイナさんに連絡を入れて、三隊長に正しい化粧の正しい指導を受け、本当に綺麗な姿に変わった。

そして、俺はというと。

「……フン」

「瑞希ぃ～悪かったって」

「……別に気にしてないし」

「……うぅ、本当にごめんって」

普通に俺が隊長たちを綺麗とか言ってるのを瑞希が聞いてたらしく、それで、しばらく口を聞いてもらえなくなった。クソゥ、死ぬほど

悲しい。だけど、この数日後、俺らも響達も予想外の事が起こったけど、それはまた近いうちに……。

第三十二話　ドレスはともかく、あんたら若いのに（後書き）

珍しく本編で活躍しないシャマル先生とシャーリーさんを出してみましたｗ

自分の考えだと、絶対なのは達はワーカーホリックに近いと思うんだ……だから化粧なんて漫画で見るような、ね。

さて、次回も読んで頂けると幸いです！

そろそろ、連続投稿がきつくなって来たな……文字数的な意味でｗ

第三十三話　ホテル・アグスタ　前編（前書き）

１２時間遅れの投稿、申し訳ありません。

そして、アグスタ編と、この後の展開は正直あまりすきじゃない場面なので、少し急ぎ足で突破したいと思います……

ごめんなさい、手落ちしたらデータが吹っ飛んだだけです。すいません。

では、楽しんでいただけたら幸いです！

第三十三話　ホテル・アグスタ　前編

――ｓｉｄｅ響――

地球への出張任務という名のプチ旅行から、早数日。新しい任務。
もとい俺らの始めての任務が言い渡されたんだ。前回のアレは任務じゃねぇ、公開処刑かなんかだ。痛かったし。
で、新しい任務というのが、オークション会場。ホテル・アグスタでの警備任務。
オークションと言っても、骨董価値がある物が出るだけではない。取引許可が出ているロスト・ロギアなどの貴重品も出るし、このような場所は、密輸取引の舞台ともなるし、ロスト・ロギアを奪おうとする連中もいるからな、だから今回六課が出動するはめになった。

「ほな改めて、ここまでの流れと、今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェット・ドローンの制作者。及びレリックの収集者は現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

「こっちの捜査は、一応私が中心になって進めるけど、一応みんなも覚えておいてね」

「はいっ」

「で、今回の任務の会場はここ。ホテル・アグスタッ！」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

んー、モニタ越しから隊長陣の話を聞く。ちなみに他の面々というより女性陣は後ろに全員座っているのだが、如何せん人数が多いということで、俺と流、エリオの三人、要するに男はコックピット側に座ってる。普段居ないシャマル先生もいるから地味に居づらいしね。

だけど、一つ疑問がある。

「隊長陣と響と奏は中のオークションの方の警備で、戦場では副隊長の指示に従ってね」

後ろでなのはさんがそう言うけど、正直一番分からないのがこの指示だ。

別に指示が悪いというわけではない、別にいいと思う、俺が指揮してるわけではないからな、だけどそれが、二つの小隊から一人ずつ、それこそ俺や流、奏や震離、と一人ずつ抜いていくのは理にかなってる。

だけど、どうしてライトニングから俺と奏を抜くのかが分からない。

でも、ま。

「……信頼されたと思えばいいのかね」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「何でもないさ、ちゃんと話聞いとけよ？」

隣に座るエリオが声を掛けてくれるけど、今は作戦の説明の途中だから、軽い注意を。うん、自然に口に出てたか。この時点で、俺も話を聞いてないことだよな。

でも、本当に面倒だ、自分の会場くらい自分でやれよ全く。

――ｓｉｄｅ震離――

あっはっはっは、警備って言ってたから、どんだけ堅苦しい事するんだろうって思ってたけども、実際は言ってよりも落ち着いたものだね。ん、ちなみに私の警備ポイントは二回のテラス。響と奏は内部の警備で襲われたときには前に出るみたい、そしてティアナ達は見回りとかいろいろやってて、ちなみに流はというと、正面玄関を警備してる。うん、近いし、始まるまで時間もあるからちょっと様子見に行こうと思って今、玄関付近に居るんだけども……居るんだけども。

「久しぶりね、流？」

「あっ……お久しぶりです、隊長……いえ、ハルキさん」

うん、なんか会場に流の知り合い？というより、前の部隊の隊長だと思う人が来てたらしく。

今そこで話ししてる。ちなみに私は、側にあったカーテンに身を隠してる。突然だったもん反射で隠れちゃったよ。でも、ここから流とそのハルキさんって方の様子をみる限りだと、ものすごく親しそうだ。

理由は簡単、流の顔が本当に嬉しそうで、楽しそうで、安心してる表情だから。なんだろう、少し胸の中がモヤッとした。

「ええ、本当に久しぶりね。今回、こっちの仕事の関係でもう帰らないといけないけど、その前に貴方の顔を見れてよかったわ」

「え、うぁ」

ハルキさんって方は、流の顔を見て微笑んでて、急に流の頭を撫で始めた。絶対嫌がるかなと思ってたけど、一瞬だけびっくりした様子以外、普通に受け入れて、普通になでられてる。うん、見てて思う。いいなぁ、と。

「ふふっ……」

「どうしましたか？」

「いえ、ね、あなた、私の所にいた時よりも、いい顔つきになっていたから、それがうれしくてね」

「そうでしょうか……？」

「ええ、そうよ……あ、そうだ、近いうちにスカリエッティの資料をあなたに送るわ」

「分かりました」

はて、ここまで聞いて少し疑問が。流の前いた部隊って一応地上の武装隊だよね？そして、流の目の前にいる人は流の前の隊長で……そんな人がスカリエッティの資料なんて持ってるものなんだろうか？なんて考えてるうちに、あっちは既にやることが終わったらしく、帰る用意してるし！

「私はもう帰るけど……気をつけてね？」

「分かりました、ハルキさんも体に気をつけてください」

「ふふっ……ありがとね、またね」

そう言って流から離れようとしたときに。はっきりと、はっきりと私の目を見てから微笑んだ。

うん、バレてたし。でも、疑問点は多いけども、そろそろ始まる時間だし、戻らないと……。

カーテンからゆっくりと離れる時に、ふと流の顔を見ると、どことなく寂しそうな表情をしていたのが印象的だった。

そして、警備し始めてから、少し経った後。周囲に反応が出たんだよね。

――ｓｉｄｅ響――

あぁ、ガジェットドローン？型がおおよそ、３５機かぁ。あぁ。

「……メンドくせぇ」

「ボヤかないボヤかない、仕事でしょう？」

「……初めから外だったらいろいろ出来たのになぁ」

うん、その一言に尽きる。何で隊長という名のショーカーが三枚も中にあるのに、俺みたいなしょぼいカードと、奏みたいに優良手を中に入れるか分からん。でも、ま、大体予想はつく。俺らを中に置いとけば安心するってことは何か隠してるか、純粋な考えかの二択だろうし。俺としては後者がいいけどな。

さて。

「奏？俺は外で遊撃に回ってる流と震離の援護に行くから」

「そして私は、ティアナ達の援護だね分かったよ」

さすが、俺が全部言わなくても、分かってくれるのは凄く有難い。

でもなぁ。

「……警備にドレス来てくるとかうちの部隊って一体」

「でも綺麗だったじゃない？」

「……たかだか警備だぜ？警護じゃなくて」

本当、うちの部隊は何なんだろうか？まぁ、今に始まったことじゃないし、面白ければそれでいいかな。

「さて、周辺のガジェット蹴散らしてから、参ろうか！」

「了解！」

合流する前に少しでも楽させとこうか！とにかく今は叩っ斬る！

「響後ろ！」

「お？うぉおお！？」

ごめん、叩っ斬るつった瞬間、全力でガジェットを殴り飛ばしました。

かっこ良く参ろうかなんて言った直後だったから、恥ずかしいにも程があるよ。

「別に気にしてないよ～っと！」

「……あぁ、そうかい」

気にしてないよって言いながら、奏よ？顔が笑ってるんだけど……。しばらくネタになるかなぁ。さすがは奏、ガジェット群をどんどん打ち抜いていく。さすがって！

「響！！」

「あぁ、分かってる！予定変更、奏はティアナ達の援護に！」

「了解」

突然大きな魔力反応を感じて、直ぐに対応する。とは言っても、最初の段階で離れてる俺らが今できるのは限られているけどな。でも、最悪な展開を防げればそれでいいさ。

――ｓｉｄｅ震離――

なんかいきなりおっきな魔力を感じたけど、それよりも先に！

「もう、欝陶しいなぁ、もう！」

自分の杖に刃をつけて一気に薙ぎ払って、周辺のガジェットを破壊する。実際、響ほどじゃないけども、身体強化してるから魔力刃が消えるよりも先にぶち当てれば何とか壊せる。ま、隣で砲撃と斬撃

魔法を駆使して戦闘する流に比べればまだまだなんだけどねー。

「……どうかしましたか叶望さん？」

「ううん、なんでもないよ」

……やっぱりまだ私との心の距離はあるなぁ。この数日流に接してきたけど、殆ど表情出さないし……。だけど、流をデレさせれば……ハルキさんって方に見せてた表情を見ることがきっと出来る！よし！

「頑張ろう！」

「そうですね」

ぅ、声に出てた……心のなかで言った言葉だと思ってたからかなり恥ずかしい。

しかも、なんかまたガジェットが複数出てきたし……よし、いいところを見せようじゃないか！

「流、ここは私がやるよ！」

「え、しかし……」

「だいじょーぶ、ちゃんと手はあるよん♪」

実際ちゃんと手はあるしね。それにハッタリで言うわけ無いしねー。

「いっくよ！カタストロフィ！」

刃を展開させた杖を構えて、雷を纏った砲撃をガジェットに向けて発射する。流が使ってる技だけど、結構使い勝手がいいかな、私的には十分使いやすい。威力も申し分ないし、周辺に見える限りのガジェットは破壊し終えたし。いいかなこれで。

「どうよ！」

「……凄いですね」

やった、素直に驚いてくれた！現に普通に驚いてるのか目が点になってるし。

よっしゃ。このへんは終わったし次は……。あれ、流の顔が一気に変わった。

「しんｒ……叶望さん！後ろ！」

「は？」

しんってまで言いかけたんなら、最後まで呼べばいいのになーとか思いながら、後ろを見た瞬間、黒い服に黒い陣羽織を纏った仮面の男が刀を振りかぶって、振り下ろした瞬間だった。

第三十三話　ホテル・アグスタ　前編（後書き）

はい、以上です！そして、オリジナル展開半端ないですｗ

それでは、次回も読んでいただけたら幸いです！

では！

第三十四話　ホテル・アグスタ　中編（前書き）

さて、一応［Ｒ１５］のタグと【残酷な描写］のタグを付けました。
一応苦手な方が居る可能性があるので。

さて、合いも変わらずなのはといいつつ、なのは達が全く出てきません。
それでは、楽しんで頂けると幸いです！

第三十四話　ホテル・アグスタ　中編

――ｓｉｄｅ流――

油断していた……正直こんな私でも、腹がたつ。いや、自分が嫌になる。
気を失った震離さんを、仮面の人から引き離して、少し離れた場所へと連れてくる。
脈は正常。怪我も無し。ただ、突然のことで防ぎきれなくて、気を失っただけ……か。

「よかったぁ……っと」

思わず声が漏れた。本当に良かった、というかそれよりも。
何であの仮面は、峰打ちしたんだ？いや、こちらとしてはそれで十分助かった。現に震離さんは気を失った程度だし。だからこっちとしては文句はない。
だけど、正直不気味だ。
空を見上げる。そこにいるのは黒い内服に黒い陣羽織、そして身の丈ほどの刀を左手に持ってる。そして、陣羽織の内が一つ膨らんでることから多分小太刀か何かを持っているんだろう。
……勝てる見込みはほぼ無いかな。リミッターがなければ問題なく倒せると思うんだけどね。
だけど。まぁ。

「ギル。「イージス・プロテクション」展開して」

［了解しました。Ａｅｇｉｓ・Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ］

万が一にもあいつが震離さんを攻撃するかもしれないから、防御魔法を張っておく。

私の魔力の半分位を使って発動するから、正直キツイ。同時にギルを震離さんの側に置いての発動だから。今の手持ちの武装はアークだけ。銃だから接近戦は厳しい……だけど。

「少女よ！私を愚弄する気か！」

「……」

「私は全力の貴様を殺す命を受けている！しかし、その寝ている女性は関係ない！故に攻撃は」

「黙れ」

何で私を狙うかなんて正直今は、どうでもいい。

抜き打ちで砲撃を――カタストロフィを撃ち放つ。けど案の定かわされたけど。それと同時に。

（バレルオープン）

［（はい！バレルネットワーク展開！行きますよ！）］

砲撃の先にマジックバレルを。魔法陣を展開させる。そして。

「リフレクト。ショット！」

［ＢａｒｒｅｌＦｏｒｍａｔｉｏｎ．Ｒｅｆｌｅｃｔ&ａｍｐ；Ｓ

ｈｏｔ！」

「何だと！？」

私の砲撃が魔法陣に当たった瞬間、砲撃が私に向かって戻ったとほぼ同時にもう一つ魔法陣が展開。
当たった瞬間、散弾状になって仮面の男に向かって降り注いだ。

「だが、しかし！」

その程度の砲撃は聞かないと言わんばかりに、仮面の男は散弾を自分の刀で切り落としていく。
……はぁ、どうせ。聞かないことは分かってたよ。

「少女よ！この程度……何！？」

「……どうせ当たらないことは分かってたんだ。そのまま失せろ。アーク」

［了解。グングニル！］

思いっきり、反論させる暇も与えない位早く、仮面の男の水下目がけてアークを突き刺す。
勿論シールドで阻まれたけど。それでも。

「発射」

「ぐぉ！？」

シールドがあってもなくても。ゼロ距離から砲撃を撃ち放てば、何

の問題もない。
赤黒い魔力光に包まれながら、森の中へ突っ込み、大きな土煙をあげる。
だけど、一つ。一つだけ気になる点が。

「……手応えがない」

［は！？何言ってるんですかマスター！？十分すぎるほど……］

「うん、アークを突き刺した瞬間まではあったんだ……だけど」

砲撃を撃った瞬間。急に消えた。というより無くなった。何だ？土煙が邪魔であいつがどこに居るのか分からない……いろいろ間違えた……。

「失敗したな……」

「そうだな！。鳴け血粋（ちすい）」

「ッ！？」

嘘でしょう！？何で、今まで下に居たのに。何の気配も感じさせないで……後ろにいるんだ！？
刀は既に振り上げてるから……かわせない！？だったら！！アークで防げば！

「くぅ！！」

「残念だな。銃鬼よ打て！」

そう言って、仮面の男は陣羽織の内から赤い、真っ赤に染まった拳銃を取り出して。私に向けた。
これは……いけない！そう思った瞬間。引き金を引かれたと同時に体を捻ってかわそうとするけど。

「つぅ！！」

［マスター！？］

左の脇腹に一発。致命傷は避けられたけど。仮面の男は……また刀を振りあげてる。これは、避けられる！一歩後ろに下がれば！

「見え見えだぞ！」

「何！？」

振り上げたまま、一気に突き出してきた刀を交わすことが出来ずその刃が……真っ直ぐ私を貫いた。

「残念だ少女よ。制限なしで戦いたかった」

「ぅ、ッ！？」

「願わくば。安らかに眠れ」

私に突き刺さった刃を一気に引きぬいて。黒い仮面の男は鞘に収める。
瞬間。私の内で仮面の男の魔力が爆発して、私の内から血が飛び散って……なんだろ。始めて綺麗だなって思って……それで……それで……誰かの声が聞こえたけど。それよりも凄く眠くて……そこで

途切れた。

――ｓｉｄｅ震離――

痛ぅ……効いたなぁ……あの陣羽織……武者め。どうせやるなら、もうちょい優しくやればいいのに……。って。

「流は！？」

［叶望一等空士！？無事でしたか！］

「え、あぁ、うん。ってか、このシールドは？」

なんか私の前に流のデバイスのギルガメッシュが刺さってて、それを中心にバリアが張られてるけど。

しかも周りはなんか土煙で見えないし……。そう思って空を見上げたら、ぎりぎり見えたと思ったら。流が飛んでる。

「あ、流……え？」

［マスター！？］

見えたと思った瞬間。なんかあの黒い陣羽織が……刀で流を突き刺してて。後ろから見える流の姿は。黒い防護服なのに、左の脇腹辺りから血が流れててどす黒く変色してて、そのまま刀を抜かれたと思ったら。流の体から血が勢い良く吹き出して……。それを見た瞬間、頭が真っ白になって。

「あぁあああああああああ！！！！！！！！！！」

近くにいたギルをつかみとって、自分の杖も持って。手持ちのカートリッジを全部使って。真っ直ぐ仮面の男に向かって跳んだ。

「ギル！力貸して！雷神剣！天覇双裂斬！」

「何だと！？」

魔力刃を杖とギルにありったけの魔力を込めて、展開させて仮面の男に叩きつける。

「グゥ！？なかなかいい打ち込みだ！」

うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい。無我夢中で、全力で陣羽織目がけて、両手の剣を叩きつける。だけど。

「届かない！！」

「まだまだ！」

わずかに見える口元が笑ってる。それが私を余計に熱くさせる。イラつかせる。腹ただしいほど。ムカツクほどに。

「くぅ、やるな！先程の少女よりも手応えがある！これが私の望んだ戦いだ！」

手応えがある？何を巫山戯たことを！！！！

「何が手応え……！笑わせないでよ！！あんたの言う勝負ってのは実力の半分しか出せない相手とのことを言うの！？だとしたらあん

たは屑以下だ！！！！」

「何だと！？」

私のこの言葉に。仮面の男は動揺したのか。刀に込める力が少し弱くなった。

ここだ！と思った瞬間、杖を――剣を振りあげて相手の腕を左腕を弾き飛ばす。そこにギルを畳み込めば！

「だが、甘い！」

「ッ！？銃！？」

視認した段階で既に私も攻撃態勢に入ってた。だから気づく。避けきれない。そして私よりも早く相手の攻撃が私を貫くと。やばいと思ったその瞬間。

「――侍が銃なんて使ったら駄目だろう？」

「何！？」

「何だと！？」

声が聞こえたとほぼ同時に、私の体は真横に弾き飛ばされて。そのまま。

「秘技、衝撃十字（クロイツ・インパクト）」

「な……がぁああ！？」

相手の胸に手を添えたと同時に。衝撃を打ち込んで、相手を吹っ飛ばす。
あぁ、あぁ。

「響！」

「よぅ」

正直今までの中で二番目位に声を大にして言いたい。ありがとうって言葉を。

「震離。とりあえず、流を連れて、シャマル先生の元へ」

「でも！？」

「大丈夫。一応手持ちの武装じゃきついから、杖を貸してくれ？」

「でも！」

「震離！あいつがもどってこないうちに言っとく。正直こっから見ただけでも流の状態は下手すると一刻を争うほどヤバい。少しでも足の早いお前が流を連れていくのが一番いいんだ！」

響の言ってることは理解できるよ。でも。でも！

「急げ、震離！」

「～～～はい！」

私の杖を響に預ける。そのまま地上に。流の堕ちた位置に行くと。

「……ッ！アーク、流の状態は！？」

［……脈がどんどん弱くなっていっています。このままだと］

「わかった、ギル、アーク！全力で止血してて、私が連れてくから！」

［お願いします。マスターを助けて……下さい！］

［お願いします叶望一等空士！］

二つのデバイスからの願いを聞いて。私は流を打き抱えて、空へと上がる。こうやって抱いてる状態でもどんどん血が溢れて。もう私の手は流の血で赤く染まってる。流の顔を見ても。正直真っ白で文字通り血の気が無い。

私が……私が気さえ失わなければ……！少なくても流にここまで怪我させなかったのに……ッ！

「……ぅ……ぁ」

「ッ！」

そんなこと考えてる場合じゃない。今は。今は！シャマル先生の元へ！急がないと！

できるだけ揺らさないように、それでいて全力で空を駆ける。死なないで。

第三十四話　ホテル・アグスタ　中編（後書き）

はい、何やってるんだお前は！何殺しかけてるんだと言われそうですが……後のために必要……？なんですよ！あ、ごめんなさい、逆ギレして。ごめんなさい。

それでは、次回も読んで頂けると幸いです！

第三十五話　ホテル・アグスタ　後編（前書き）

はぁ、この回と次の奴は正直あまり好きじゃありません。

とりあえず、あの二、三話位したら、またキャラ紹介を追加します。

ごめんなさい本当に。

さて、それでは楽しんでいただければ幸いです。

第三十五話　ホテル・アグスタ　後編

――side響――

震離が流を連れて、シャマル先生の元へと飛んでいったのを確認する。

うん、正直今の震離に任せたらいろいろ危ないからな。さっきだってやばかったし。さて。

「どうする偽侍？」

「……フフフ」

おおぅ？笑ってるなぁもう。どうしたんだ？

「会いたかった……」

「あ？」

「会いたかったぞ！緋凰響！」

「あー？」

会いたかったぞって、俺に？しかもフルで名前知られてるし。もしかして昔の俺を知ってる……？

いや、それだったら震離のことも知ってるはずだ。だけど知らないみたいな素振りだったし……。

「貴殿の夢を私は何度も何度もみた！そして貴殿こそが侍だと！武

士道を歩むものだと！私は知っている！」

……何いってんだこいつ？俺の「夢」をなんども見たって……何いってんだ？

だけど、あいつが知ってるのならば、俺もあいつを知ってるはずだ。

誰だ？

「我が名は……何だ！？」

「はぁ！？知らねぇよ！？」

とりあえず。なんだコイツは！？ていうか、こいつの戦闘スタイルって。左に刀……いや、剣。右に銃って。どうにも「あいつ」を彷彿とさせるスタイルだな。だけど性格はあいつよりウザイな。

「えぇい、だが、名など無くとも貴殿と戦える！」

「……調子狂うなぁ。だけど」

震離の杖を背中に掛けて、片方にかけていた二本の刀を両腰に差して、ゆっくりと刀を抜く。

同時にカートリッジを一発使う。残りは三発だけど。

「……とりあえず、話聞かせろ」

「何！？」

あいつの懐まで踏み込む。さぁ、始めようぜ？

――――結論だけ言うならば。あの後少し戦闘。いや、斬り合ってから直ぐにアイツは撤退した。
そん時。何故だ!?とか、いろいろ言ってたけど、どうやらアイツの飼い主らしく。さっさとゆうこと聞いて召喚魔法で撤退した。

「……はぁ、だめだな俺は」

周りに誰もいないのを確認して地上に降りてから呟く。隊長陣に意見して俺か奏の何方かを流と震離の側に置いておけば良かった。いや、ティアナ達の援護に付けとけば、俺や奏が遊撃に回れた。

「いや、違うな」

本当にそう思う。それは結果だ。もう戻れない結果だ。俺が少しでも警戒しておけば。警戒する任務だと侮ってなければ。こんな結果にならなかったはずだ。

「～～～ッ!!!!」

地面に拳をぶつける。周辺が割れたけど。それよりもそれよりも。

「俺の……ミスだ!」

あの時急げば。警備を見なおせば。あいつらを援護に回しとけば。
そういう考えが頭の中を駆け巡る。
だけど、同時にアイツの偽侍の動きが気になる。
あの動き、あの剣筋刀だからと、甘く見てたけどアレは剣の筋だ。
そして、あの銃撃パターンは……。いや。

「そんなわけない。そんなわけ無いんだ……ッ!」

頭の中じゃ分かってるよ、分かってる。だけど心は違う。あの動きは。

「……リュウキ？だけど、アイツはもう……」

死んだはずだろう？

――ｓｉｄｅ震離――

……参ったなぁ。本当に本当に。だけどシャマル先生に見せる前に流の体を触診だけしてみた限りだと。

外見よりも大丈夫そうだった。だけど、あの出血量は危ない。流の体は小さいから。エリオやキャロよりも少し大きくても、子供として括られる程小さい。それでも。

「……何やってんだろ」

本当にその一言に尽きる。いいところを見せようと、張り切って自分の背後を疎かにして。気を失わされて。私は……私はッ！

「震離」

「奏、どうしたの？」

「ん、ちょっと、様子が気になってね」

私の隣に奏が座り込む。一応ガジェットの調査とかしてるけど。さっきから流の事で頭が一杯で。正直今は誰とも会いたくないし。話したくない。

「……こっちもあっちも大変だから、とりあえず、さ。誰も見てないから泣きなよ」

「……何いってんの？」

奏がよく分からないこと言いながら私の真ん前に座る。いやでも奏の顔が見えるから、視線を横に流すけど、奏は口を止めない。

「……震離、私や響、瑞希に雪奈。煌や優夜とは付き合い長いからあなたの事を知ってる。けど、ティアナ達はあなたの明るい部分しか知らないよね？」

「……」

「せめて、皆の前じゃ笑ってなさい。そうしないと皆不安がる。FW組は今、大変な状態になってきたから」

「……」

「大丈夫」

「……ッ！」

奏の胸に顔をうずめて、声を殺す。正直誰かが見たら情けないって思われるかもしれないけど。だけど、たくさん泣いて、泣いて、少し心が軽くなった。

――ｓｉｄｅ響――

……よし、動こう。そう思ったと同時に空へと上がり、ホテルを目指す。同時に機動六課へと回線を繋ぎモニタを開く。そして繋いだ先にいたのは。

『おぅ、どうした響？』

「すまん優夜。少し調べてほしいことが出来た」

『はいはい、何をって、今そっち作戦中じゃないの？』

「あぁ、ちょっといろいろあってな。とりあえず黒い服に黒い陣羽織、そして頭がすっぽり隠れるほどの仮面と、身の丈ほどの刀、そして赤い銃を持った人間で、管理局に敵対してる奴を調べてくれ」

『なんだ、その偽侍は？まぁ、調べるけど時間掛かるぜ？』

「いいさ、あと帰ったらみんなに……いや、四人に見せたいものがあるから俺の部屋に、夜に来てくれ？」

『……了解、すぐに調べるけどあまり期待するなよ？じゃ』

そう言ってモニタが閉じる。さて、あいつらの元に戻って。今回の件の報告と。ちょっと質問してみるかな。そんなこと思って空を飛んでいたら、森の中をなのはさんとティアナが歩いてた。だけどどうにも二人の表情は暗くて、特にティアナなんて本当に暗い。

「……何かあったと見るべきか。けど」

なのはさんが話をしているから多分大丈夫だろう。それよりも一度流の様子を見るか。

本当に無事でいてほしい。本当に。
そう思って、はやてさん達の元に行ったら、どこ行ってたの!?って怒られた。まぁ、俺が悪いけど。ちょっとだけ、ほんの少しだけ上がつかえねぇって思ってしまった。
そして、流の容態は、しばらく前線で戦えない。いや、無理すれば行けるけど、隊長陣は無理をさせない方針を取ったらしい。

第三十五話　ホテル・アグスタ　後編（後書き）

……どんだけオリキャラ出てくるんだろうw今回までカウントしたら、１３人……しかもまだ増えるという……なんという。ほんとオリ路線を突っ走ってごめんなさい。なのは出せよという方もいらっしゃると思いますが、本当に謝罪の言葉しか浮かびません……本当にごめんなさい。

第三十六話　質問と自主練と（前書き）

さて、欝回が続きます。ちなみに自分としては欝の部分を回避させようと思ってたら、あれ、ヤバくねと。ヤバイ部分に足突っ込みかけてます。

では、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

ちなみに学校で一限目始まるまで暇で……すいません。

第三十六話　質問と自主練と

「とりあえず。流のデバイス。ギルとアークから引き抜いた偽侍の映像がこれだ。ちなみに隊長たちに見せた奴と同じな」

「はーい」

とりあえず煌、優夜、瑞希、雪奈、奏、震離の６人を俺の部屋に集める。震離と奏は今日普通に大変だったから、正直申し訳ない。実際まだ疲れてるんだろうし。震離に至っては精神的に。とりあえず一通り見せるか。話はそれから。

――――数分後。

「で、全部見てから皆に聞きたい。何か気づいたことは？」

部屋に座る皆を見渡しながら質問を投げかける。すると震離以外、皆手を上げやがった。

まぁ、いいや。

「じゃ、一番端に居る瑞希からどうぞ」

「はい、そんな質問をする響はどう思ってるの？」

「え、俺？」

……なんか見渡すと皆そんな目で俺見てくるし。んだよ。まぁいいや。

「多分皆思ったんだろうけども。これじゃそれほど情報を得るのは難しい。だけど。この動きに俺は、いや、「俺ら」は心あたりがあるはず」

「あぁ、あるな。流の攻撃を避けた術に俺も心あたりがある。ただ、な」

あぁ、そうだな煌。だけど皆まで言わなくていい。そう目でいうと、分かってくれたのか頷いてくれた。本当、こういう時は助かる。さて。とりあえず。

「正直こんなことで皆を呼んだのは正直申し訳ないと思ってる。だけど、俺だけじゃ決められない」

「でもさ響？」

「どうした雪奈？」

小さく挙手しながら質問してくる雪奈を皆が見る。まぁ、雪奈はそんなの気にしないで普通に続けてるんだけどね。

「……正直可能性としては、かなり低いよ。それでも？」

「あぁ、それでもだ。ちょうど背格好もアイツと同じくらいだ。それに」

「うん、レイやクラン。アーチェ達に朗報として伝えることができるけど」

「あぁ、分かってる」

うん、分かってるもしかするとアイツは全く違う奴かもしれない。背格好が似てるだけの奴かもしれない。それにアイツの飼い主がスカリエッティならば、やりかねない。ただ、それだと何でアイツを？って言う疑問が出てくるんだけどね。

「だから、皆に聞きたい。こいつは「リュウキ・ソウリュウ」かもしれないと思ってるのは何人くらいいるか」

これが俺の質問の内容だ。

――ホテル・アグスタから数日後。

とりあえず。流の傷の表面はほぼ回復して、見た目はなんとも無い。内臓のほうにまだダメージが残っているらしく、シャマル先生と震離のせいで医務室で軽く監禁状態になっている。心配した時に震離は異常に強いからな。あらゆる手段使っておとなしくさせるし。

まぁ、けが人がおとなしくするのは当然だし、出て行く流を脅せる手段もあれば、なんとかなるだろう。

それよりも、問題が一つ。というよりさっき知ったんだけどね。

「なぁ、奏？」

「ん、どうしたの響？なんか疲れてる顔してるけど？」

食堂の向かいの席に座る奏に話しかける。うん、軽いことでも心配してくれてありがとう！あと疲れてんのは。フェイトさんにまた拉致られたからだ。まぁそんなことよりも。

「ティアナのこと。奏はどう思う？」

「はぁ、無茶したらいけないよって言ったのになぁ」

ため息吐きながら紅茶を飲む奏。うん、こういう時じゃなければ普通に綺麗だと思うけどね。あ、現実逃避に入ってた。まぁ、話は聞いてるからだいたい分かるんだけど。それでもな。

「ん、だけど、俺リアルタイムで余計な事言ったしなぁ」

「それなら私だってそうだよ……」

うん、つまるところ。俺と奏はティアナの事で悩んでる。流が負傷した時。つまりアグスタでの一件で、どうもティアナがミスショットをしたらしい。相方のスバルに当てて、怪我させそうなくらいの危ない奴を。で、それをヴィータ副隊長が守って注意されたんだけども、ティアナの奴はアグスタから帰ってからずっと自主練を続けてる。

だけど、今からほんとちょっと前に。俺が余計なことをしくさったんだ……。

――――数時間前。

……毎日の日課だけはやっとかないと体がなんか気持ち悪い。そう思って部屋の中で素振りしようと思ってたんだけど。たまには外でやるのも悪くないと思って。

六課の隊舎の裏側にある木々の間で素振りをする。うん。

「風が気持ちいいな」

なんて呟きながら、日課をしていると。自分とは違う風をきる音がどこかから聞こえてくる。

「……誰だ？」

正直無視しても良かったんだけど、こんな時間まで誰がやってるのか正直。興味が湧いて思わず探した。

そして、その音が聞こえる場所まで行くと。

「……アレ、ティアナ？」

うん、文字通り視線の先にティアナがいて周りには魔力スフィアが囲んでいて、その魔力スフィアが光ったり、消えたりしている。

その光輝いたスフィアに向けてティアナはクロスミラージュを素早く翳しているけど。正直。

無理してるなぁと見た限りそう思う。

ただまぁ、今声をかけるのは正直ちょっと邪魔しそうだから。終わるまでせめて待ってみる。

だけど思う。ティアナは本当に努力家なんだなと。そう思っていたら、ティアナの周囲に浮かんでたスフィアが消えたから、そろそろいいかなって思って近づいたら……

「っ！誰！？」

「俺だよっと」

茂みを越えながら話すけど。そのティアナの様子は正直なんか安心

したような感じだ。
というより。この反応は誰かに見られたらって、まぁ大体分かるからいいか。それよりも。ここまでやる理由はまぁ、この前のアレだよな。

「とりあえず、疲れた体に鞭打ったってなんにもならんよ？」

「……大丈夫よ」

そう言いながらまた周囲にスフィアを展開して訓練を再開させる。正直この動き。かなりの集中力と瞬発力がいると奴だし、その分意識しないと大変って奏が言ってたな。まぁ、さっきよりも確実に動きにブレが見えてきてんだけど。

「……別に止める気はないけども。無茶してもなんにもならんよ？」

うわぁなんか俺の口は矛盾っぽい何かを吐きましたよ。

「無茶してるのは自分でも承知してるわ……でもね、私は凡人だから……凡人だから私は誰よりも努力しなければ行けないのよ」

……は？

「凡人？お前が？」

「そっ！私は、凡人、だから、よ！」

……ちょっと、本気で話さなきゃならんと思って。とりあえずティアナの自主練を中断するように言って。地面に体育座りをさせるけど、やっぱりきつかったのか。その間に顔を埋めながら話しだした。

やっぱり無理してるじゃんよ。

「私に……スバルやエリオ、奏のような力は無いから……凡人が強くなるためには頑張らなくちゃ……強くなんてなれないのよ……」

全然そうは思わないんだけどなぁ。普通に俺から見たら十分凄いんだけどね。っていうか、この考え方だと。普通に自分が一番役立たずとか思ってる口か？

「私が強くないと……指示する自分が足を引っ張りたくないのよ……！」

正直に言おう。ティアナの今の言葉に対して。このやろうって思った。

とりあえず。ちょっと抑えて。

「ティアナ」

「……なによ」

「お前。何か履き違えているだろ？」

わ、言った瞬間目が見開いて。うん、凄く怒った瞬間だな。

こりゃ自分が正しいと思い込んでるな。絶対に。

「何がよ？私が間違ってるとでもいいたいの？」

うん、やっぱりな。だからちょっときつい事かもしれんけどちゃんと……は聞いてくれないな。

「確かに強くなりたいってのは俺でも分かる、だけどよ。そんなに無茶して傷つくのは自分なんだ、わかるか？」

「……あんた達は強いから……才能があるから……そんなことが言えるのよ！」

「うぉう」

ティアナが立ち上がったと同時に、俺の襟首を掴んで無理矢理立たされる。うん。女の子にこんな事されるなんて思わなかった。

「あんたみたいなやつに言われたくないわよ！？分かる！？凡人が強くなるにはこれしかないのよ！？」

……こりゃ俺が今言っても無駄だな。

「……分かった。分かったから手ぇ離せ。これ以上なにも言わないし。もう干渉しない」

「……当たり前よ」

そう吐き捨てるかのように言ったティアナの言葉を背中でうけながら。その場から離れようとして。また後ろから風を斬る音が聞こえた。

――――そして、食堂に戻る。

「って事があった」

「……ん～、なんていうか。ある意味正解だけど。ね？」

「あぁ」

実際その通りだ。今の状態のティアナは正直止められる気がしない。だけど、引いたのもちゃんと理由があって。

「……まぁ、「教導官」で「隊長」をやってる人が居るんだ。どうにかするだろう」

「そうだね。でも、それでもどうにもならなかったら？」

「動くよ。だってそうだろう？」

席を立ちながら本音を言う。

「折角の仲間がこんな事で潰れてほしくないし」

本当にそう思う。だからなのはさん。いや高町隊長？あなたの動き次第じゃ、ちょっと動きますよ？

第三十六話　質問と自主練と（後書き）

さて、とりあえず響が隊長達に少し疑念をいだいて、他の面々、早い話が流以外のオリキャラの面々は響の動きに合わせていきます。

これがどういう結果になるか正直書いてる自分が分からないというｗ

では、次回も読んでいただけたら幸いです。

第三十七話　戦えない理由と気まずさと（前書き）

はい、本音を言うとそのまま撃墜まで させたくなくて……はい。
欝すぎるので、少しいつも通りの震離と、その少し素を見せて。空気を一旦和ませようと。はい、すいません。

では、楽しんでいただけたら幸いです！

第三十七話　戦えない理由と気まずさと

響とティアナが夜会ってから数日後の晩。

――ｓｉｄｅ優夜――

「え、なんとおっしゃりましたか？シグナム副隊長閣下？」

「……閣下ではない、それでどうなんだ？」

「いや、だから今なんと？」

うん、正直今死ぬほど驚いてる。今まで尻尾を見られることはあっても。完全にバレることはなかった。いや違う。全員揃ったからバレたんだな。今までとは違うから。いやまだ聞き間違いの可能性がある！

「もう一度聞こう。なぜ有栖と南部は戦わないのだ？」

うん、間違いじゃなかった。ちくしょう。

まぁ、始まりは単純なことで。食堂で、俺と煌が暇だし組み手でもしようぜって。そう言って別れてからシグナムさんに捕まったわけなんだけど。開口一番。

「お前達はなぜ戦わないのだ？」

だもん。死ぬほどびっくりしたわ。だけど冷静に考えればばれるよなぁ。今までは普通に誤魔化してきたけど。やっぱりばれる人にはばれるからなぁ。はぁ。

「……とりあえず、外の空気でも吸いにいきません？」

「あぁ、分かった」

……後で響に怒られるかなぁ。

――とりあえず海沿いのベンチに移動して。お茶を買ってきて渡して。うん。

「なんの」「とぼけるな」

ごめんなさい。本気で睨みつけられると正直怖い。

だけどなぁ。うん、まぁ。口止めしとくか。

「……響と戦ってから気づいたんですか？」

「まぁ、そうだな。そして少しお前達の事を知ってる奴と話ができてな」

「あー、そうですか。それって、もしかしてもしかすると、赤い髪のショートで。『私に蹴り砕けぬもの無し！』とか戦闘中に言うシスターもどきの人だったりします？」

「……あぁ」

うん、正直に思ったことを。あのやろう。何バラしてやがんだよ。ぜってぇ雪奈あたりに言って怒ってもらおう。そうしよう……。つっても俺もバレた要素に心あたりがあるんだよね（17話参照）。

まぁ、とりあえず目先の問題を片そう。

「……ちなみにこの話は誰かに？」

「いや、緋凰に確認をとろうと思ったが、今は忙しくて無理そうだしな。南部は事務でいろいろやっていて。今空いてるのがお前だけなのだ」

「了解です」

うん、あの野郎。あ、女の子だから野郎じゃない。ちくしょうぜってぇ、怒る。ぶち切れる。会ったら軽く文句行っても俺ら悪くない。まぁ、それは後でいいや。どうせさわりしか聞いてないだろうし、響が信頼してる人だしまぁいいか。ほぼ言えないけどね。

「とりあえず言いますけども、――」

――――――――――

「――以上です」

「……そうか」

「……いろいろあるんです。理由があるから俺も煌も皆、戦ってないんです」

その通りだしね。少し温くなってちょうどいい感じになったお茶を少し口に含む。

ちょうど喉が乾いてたから、凄く美味い。

「それで、いろいろ言ってどこから今回の件が漏れるか分からない

ので、もう言えませんけどね」

「……そうか」

俺が不利になることだったら別に気にしないんだけどね。だけど…
…まぁいろいろあるから戦えない。
だけど、曖昧すぎる説明だけど納得してくれた。普通の人だったら
無理にでも追及すると思うんだけどなぁ普通は。だけど聞いてこな
いことからいい人だと言うのは分かる。ん～。そうだ。

「……まぁ、これだけだと、いろいろ申し訳ありませんので。つま
らない話なんですが。一つ聞きますか？」

「何をだ？」

「単純に「緋凰響」が強い理由を」

「……ほう？」

うわぁすげぇ目が輝いてる。まぁいいか。こんな事しか話せないし。
別に響をよく観察してればいやでも分かることだしな。さて。

「それはですね――」

――次の日

――ｓｉｄｅ震離――

太陽が昇るよりも先に、屋上に足を運んで軽く体をほぐす、そして

呼吸を整えて、左手に木刀を持って。とにかくまっすぐに！

「フッ！」

一直線に振り下ろす。

……正直自分が脳筋かなと思うくらい木刀を振っているといろいろ落ち着く。

だけど。あの時の事が正直頭から離れない。そのせいでここ最近寝付けてないし、流と面と向かって話す事もできない。あの時奏のお陰である程度落ち着いたけど……けど。それでも。

「……怖い」

いつの間にか素振りも止まって自然と体が俯いてる。正直あの日以来、少し流を避けてる。話をしたら嫌われていそうで、軽蔑されそうで、言葉を掛けてくれ無さそうで。

けど、私はそれくらいのことを、失態を犯した。それは間違いじゃない。

そりゃシャマル先生に言われて流が訓練に戻ろうとするのを止めるけど、一言二言言葉を交わす程度で、会話には程遠い。ていうか私が「戻らないと、本気で止めるよ」って半分脅しをかけてる点もあるし。あぁ。

「駄目だなぁ。本当に」

本当にそう思う。今日は各分隊でタッグでの模擬戦。私や響、奏は既にある程度の部分までいけてるから問題ないって事で、今回は見学に回るけど。見学に回ろうが回らないが私は参加できない。相方に近い流が今動けないから。うん、私のせいで……。ヤバい、涙出

てきた。

それに気がつけば、太陽も頭を出し始めて、辺りが少しずつ明るくなってきた。そういえば朝起きたときにはもう奏は居なかったけど。何処に言ったんだろう？

やっぱり、探したほうが……「ぐ～～……」……とりあえず、ご飯食べよう。そうしようそしたら少しは気分が紛れるだろうし。

だけど、一つ問題があって。

「……空いてるかな」

実際その通りで、この時間から食堂って開いてたかな？空いてても誰も居なかったらなにも食べられないし。私は料理出来ないし。どうしよう。

なんて考えているうちに。食堂の前に到着。うん。分かってたよ電気が付いてないからまだ食堂の方達まだ来てないのは分かるよ。だけど、だけど！

「居ますよーにっ」

小さく呟きながら、食堂の扉を少しだけ開けて、中を確認。まず最初に厨房の方の電気が付いてて、美味しそうな匂いが鼻をくすぐるから……良し、居るな！そう思って勢い良く開けると。

「……あれ？」

正直に言おう、今一番ってか気まずくて会えない人がそこにいた。

うん、もう分かると思うけど。

「……叶望さん？こんな時間にどうかしましたか？」

うん、流？今医務室に居なきゃだめだよね？って言葉が言えなかった。

だって、普通にエプロン付けて料理してるんだよ？一瞬思った何処のお母さん？と。

……それよりも、流が凄く変な顔してるから思わず笑いそうになる。私の前でもこんな顔してくれるんだって分かって。それが嬉しくて。

「そういう流こそ、何でここにいるの？」

「え、あ、その、なかなか寝付けなかったので、しばらく起きていたのですが……」

「そう、つまり流もお腹が空いたって事なの？」

「……ぅ、はい」

なんか雰囲気的に小さくなった気がする。最初の頃の固い雰囲気じゃなくて、全体的に少し柔らかくなった感じがする。うん、普通に料理してるってことは。普通に作れるってことだから……よし。

「そう、えっと、その。お願いがあるんだけど？」

プライドなんて投げ捨てる！って思って話しかけるけど。正直やっぱり気恥ずかしいもので。自然と目線が泳ぐ。でも言いたいことは言い難くて……どうしようかと思ってたら。

「いいですよ。そこで座って待ってて下さいね」

そう言って私の思ってることは既に見ぬかれてた。そのまま厨房の道具をいろいろ使いながら料理を再開するけど。その前、流が移動する前に一瞬だけ。一瞬だけ優しい顔つきになったのを私は見逃さなかった。そして思う。

凄く可愛い。と！

うん。本当に可愛い！あぁ、私も料理……辞めとこ。響達に怒られる。絶対に。

なんて思って待つこと数十分。

私と流はそれぞれ目の前の席に座って、俗にいう相席だ。で。

「……」

「……どうかしましたか、叶望さん？」

「……」

「……もしかしてお口に合いませんでしたか……？」

目の前でどことなく不安そうな顔をしている流。

ちなみに流が作ったご飯は、ご飯とわかめの味噌汁の玉子焼きという。日本の一般的な朝御飯で。

多分、私に気を使ってくれたと思う。確信はないけど。

だけど流が作ったご飯を一口食べて、今の状況なんだけど。なんだけど。

本気で全力で思ったことを言おう。というか心に浮かんだ言葉を言おう。つーか吐こう。

「流？」

「……何でしょうか？」

「……私の嫁にならない？」

「……」

……うん、何いってんだろう私。心に浮かんだ言葉をそのまま口に出したら、私の口はなんか馬鹿な事を吐き出しましたよ？あぁ、あぁ、あぁ。顔がどんどん熱くなってくるのが分かる。視線が泳ぐけど、なんとか流を捉えるけど。その流もなんか私を見たまま固まってて。あぁ。あぁ！

「え、あ、そ、その！今の間違いだから！そのご飯美味しくて、つい口からなんかポロって！だから、気にしないで！間違いだから気にしないで！ね！」

生まれて初めてここまで恥ずかしいと思ったことはない。目の前にあったご飯を何時もの倍以上のスピードで食べ進めて。慌てて自分の食べた分を片付けて。

「ぜ、ぜ、ぜっちゃい、き、気にしにゃいでにぇ！？」

もう自分でもなに言ってるか分からない言葉を吐きながら、本気でその場から離れる。

そして、思う。もう修復不可能かな……と。うぅ、泣きそうです。

ちなみにその後、自室に戻って、ベット入って、布団をかぶって。ずっと左右に転がってました。だけど、かなり楽になった。別の問題が出来た気がするけど。

――ｓｉｄｅ響――

「……今日だっけ？分隊ごとで……ティアナ達がやるのって？」

「うん、そうだよ。そして私たちは見学。間違いがあったら言ってくれたら助かるって」

「そうか、でもさ。あの二人……ティアナとスバルの動き。奏はどう思う？」

「……本音を言うと、あの二人の動き。なのはさんの教えを破ってるよね」

視線の先に、正確には木々の隙間から少しだけ観える二人の姿を観察する。じっくり見れば木があっても問題ない。普通に大体の動きがわかればいいしね。

「あぁ、そうだな。だけど今回のは模擬戦だ。どんな事言っても本質は変わらないよ」

「……うんでも、なのはさんは練習だって」

「あぁ」

でもさ、奏よ。一ついいこと教えるよ。

「……奏、今まで敵さんが『練習』通りの動きなんてしたことあったか？」

「……無いよ」

「あぁ、そんな敵居るわけないからな。この意味分かるか？」

「ううん。でも、どっちも正しい気がする」

「そっか」

本当そう思うよな。俺もそう思う俺が思ってることは多分正解じゃない。でも多分間違いじゃない。それはなのはさんとて同じ。あの人の考えも多分正解じゃない。でも多分間違いじゃない。だけど今回のティアナ達の動きは。正直いうと正しくとも間違いでもない。でも、それはまだやるとしては、早いこと、いや早過ぎることだ。だから。なのはさんが……いや、高町隊長がどうやってあの二人を叱るのかただそれだけが気になる。それは「隊長」として叱るのか、それとも「教導官」として叱るのか、ということを。だから。

「何もなく普通に終わればいいんだけどなぁ」

「うん、そうだね」

朝日がどんどん登って、朝になった。模擬戦まで後少しだ。

第三十七話　戦えない理由と気まずさと（後書き）

……はぁ、次回以降。テンションが上がりません。多分ｓｔｓ時代を書いて、本編再構築している方々は分かると思います。アニメ見た段階で、凄くやだなと思うシーンに来ましたよ！あぁ、駄目だ魔王が。いやゼオライマーが。やだなぁ。

とりあえず、簡単に説明すると響は、普通にシグナム副隊長を信頼しています。他の三人の隊長よりもはるかに。
実際本気で戦ってるから、どんな人か分かっているので、同じくシグナムさんも響がどんなタイプの人間か分かっています。今はまだ現れていないんですが、ヴィータさんを含めた四隊長に比べて、シグナムだけは普通に何の裏もなく接しますし。そして、今回７人の事情を知った。というより知らせたんですけどもｗただ、この説明かなり無理が有る気もしますけどもｗ

では、次回も楽しみにしていただけたらぁあああああ。幸いです。いやだぁぁぁ、あのなのはさん達書きたくないよぉぉぉぉ。

すいません。取り乱しました。では、次回も読んでいただけたら幸いです！以上ｋｙｏｎｎｓｉでした！

第三十八話　つながり（前書き）

二択あったんです……響の行動には。二択……ッ！
ただ、今回この選択肢を取ったんですけど、もう一つは……残りは後書きで。

それでは、楽しんでいただけたら幸いです。

第三十八話　つながり

皆の前じゃ、俺はあの人達をあまり信じてない。そんな風に言っていたかもしれない。俺もそう思いながら話していたから。だけど。心の中じゃ何処か信じていたかもしれない。「教導官」であるよりも「隊長」であるよりも、一人の「人」として、分かってあげているのかもしれないと。

俺はこの時は本気でそう思ってしまった。

ティアナの根本的な悩みも、理由も何も知らなかったから。だから、模擬戦の途中、いや最後は本気で止めようと思った。だけど、それは……

「少し、頭ひやそうか……」

高町隊長の指から走る光弾はティアナを撃ち抜き

「ティアー！！っバインド！？」

「今日の模擬戦は二人とも撃墜されて終了」

多分最悪に近い形で問題は顔をだしたのだ。

正直この光景を見て、俺は本気で驚いた。多分今までで一番マヌケ面なんだろうな。そう思えるほど驚いたから。そして、ティアナが落ちそうになった瞬間。ティアナの落下ポイントを見て、やばいと思って本気でティアナの元へと飛んで。落ちるティアナを抱き抱える。

あのまま落ちていたら、ウィングロードから少し外れて地面に直撃していたから。正直危なかった。

「響、ティアは」

「大丈夫、落ちてるだけ、医務室に運ぶ」

何時も震離と同じくらいに笑っているはずのスバルには、何時もの笑顔がなく。

高町隊長も俺らに目を合わせなかった。

とにかく。シャマル先生のもとへ連れて行くか。

正直、ここにいると何するかわからん。

ティアナの事をはたく程度はすると思っていた。そうしないと直ぐに話は出来ないからな。

だけど、気絶までさせるのはさすがにやりすぎではないのかと思った。現にティアナは気絶してしまい、話すことさえ出来ない。正直この事に怒りを……いや、呆れを感じた。

だけど、ティアナも錯乱していたし、なにより疲労も溜まっていたので、気絶してしまっても仕方ないと何とか納得する。何にしてもこれで高町隊長もティアナのこともわかっただろうし、後で二人で話し合って丸く収まるのを待つばかりだ。だけど、俺が一番気になったのは、　ティアナを撃つときの高町隊長の目が気になった。あれは悲しみと悔しさ……そして怒りだった。

あの後ティアナを医務室に運び、そっと寝かした。一応大丈夫らしいシャマル先生の話だと明日以降にはダメージが残らないように設定されていて、それでいて強力である。

シャマル先生の診察に安堵する三人、隊長達は高町隊長のところ。

震離と奏は少し俺が言って、煌達の元に行ってくれと頼んだ。この後のことを話すために。

要するにだ。今回の問題はここにあるんだ。

なのはさんが。いや高町隊長がティアナにやったことは「教導官」としては満点。いや、それ以上の事だ。それだけ上手いんだからな。だけど、今、医務室に居る隊長組はシャマル先生しかいない。そう、全員が全員知り合いを優先したんだ。他の隊長陣は、高町隊長の技量を信じているから、ティアナは大丈夫と思っている。だから、高町隊長のメンタルケアを上位においた。

うん、友人関係としては満点だ。普通にいい友情で、関係の深さがよくわかる。

だけど「隊長」として。上司としては最低だ。

……まぁ、いいかもな。高町隊長若いんだし。俺も人のこと言えないけど。あの人も人だもん。何でもかんでもできるわけ無いし。早い話がまた同じこと繰り返さなきゃいいんだ。

「……お兄ちゃん。どうしてこうなったのかな……」

んー、キャロは不安そう……ってか、三人とも不安そうだな。あいつらの元に行く前に、こっちを少しやっておくか。とりあえず、三人を椅子に座らせて、お茶を買ってきて飲ませて落ち着かせる。うん、ある程度は落ち着いたな。だけどそれでも一番落ち込んでるのはスバルだなやっぱり。

まぁ、アレだけ練習してたんだ、開始直前は興奮気味だったしな。

さて。

「で、スバル達はどうしたい？」

うん、返事がない。いきなりだとわかんないだろうしな。

「……わかんない」

小さくエリオが呟くと、他の二人も小さく頷く。まぁ。

「実際俺もよくわからん。なんせ、二人が何思ってこうなったのかわかんないもん」

人間、分かり合うなんてそうそうできるものじゃない。
簡単にできたら誰も苦労しないよ。実際そうだしな。

「……それは！……」

スバルが説明したいらしいがやめる。うん、こんだけ人がムキになる話だ。ティアナから直接話しを聞いた方がいい。何方にしてもこっちはティアナが起きないと始まらない。今は自分の感情に整理をつける時間だろう。コイツらも、そして俺自身も。いや、正直言おう。凄くイラついてる。顔に出していないだけでね。

「で、柄にもなくイライラしてるわけ、か」

若干日が沈みかけた頃、屋上で皆で集まる。さっきまで顔には出さなかったけど、ここに来てから正直隠すのが面倒になって顔に出してる。何時もはケラケラ笑ってる煌も今回ばかりは普通に真顔だ。
まぁ、今回の件結構深いし。
皆で集まって、普通にお茶飲みながら。奏がポツリと。

「だけど、壁が出来てるなぁとは思ってたけど、まさかここまで来てると思わなかった」

「ん、だね私や瑞希、煌に優夜はＦＷ組とはほぼ喋ったこと無いけど、それだけは分かる。ＦＷの子達は４人で派閥を作ってるし」

うん、雪奈の言うとおり。この前のアグスタ以降軽い冷戦気味になったなとは思ってたし、なんとかなると思ってた結果がこれだ。その上ティアナ達は四人で派閥作ってるし。早い話が隊員同士と隊長達で組が出来ちまってるんだ。まあ、隊長達の付き合いは十年。普通に回りに壁できるし。

そりゃ俺らも派閥っぽいのは出来てる。だけど、俺は隊長たちと普通に話すし、ティアナ達とも話す。煌達繋がりで、ロングアーチとも仲良くなって話してるし。普通にいろいろやってる。早い話がなんか俺は第三国扱いになってる。

「で、どうすんだ。俺ら事務組はそっちの面々あまり知らないからお節介は出来ねぇぞ」

「まぁ、なんとかするさ」

実際そうするしか無いし。

まぁ、今回の件すっごく分かりやすく言えば、スバル達と隊長達の見えなくて自覚出来ない壁が原因だ。

それで互いに突っ込んだ会話が出来ないわけだ。ただ、一つ疑問があってさ。

「……何で俺なんだよ」

「ごめん、私や震離は何方かというとティアナ達側だもん」

「気にすんな、それは仕方ない」

うん、分かってるし、別に悪いことじゃない。そしてこんな事態に陥ったわけだから、既に何方かの陣営の崩壊を待つっていう手段は無い。というか最初からそれは最終手段だし。あーどうしよう。

「なぁ、響？」

「……んだよ、優夜？」

「とりあえず、自由に動けば？俺らのことある程度知ってる人も出来たわけだし」

「あぁ、言われなくても自由に……あ？」

ちょっとまて、優夜さん、今なんつった？

そう思って視線を優夜に合わせると。髪を手ぐしで掻きあげてるところで……うん。

「……説明してみ？」

「え、何が？」

「隠し事良くない。言え」

「え、隠し事してないよ。疑っちゃいかんぞ」

ほう、そういうか。ならばな。

「お前嘘ついた瞬間とか、不利と感じた瞬間。髪の毛掻き上げるっていう癖があるんだぞ」

……少しの沈黙を置いてからの！

「ごめん！レイ経由でシグナムさんに問い詰められた！」

「はぁ！？」

と優夜以外の6人の声が一気に被りました。何しくさってんだよもう！

で、事情を聞いて。

「それだったらいいや。ある程度ぼかしたんだろ？」

「あぁ、そうしないといろいろまずいだろう。もしかするとアイツの使いが居るかもしれないんだから」

まぁ、そうだな。それは仕方ない。

「でも、シグナムさんに言った、か」

「……まずかった？」

「ん、いや問題ないよ。あの人だけだもん。今んとこ俺と奏に対して含みなしで接してくれるの」

実際その通りで。なんか俺と奏はどういうわけか高町隊長、フェイ

トさん、はやてさん、ヴィータさんの四人のそばに置かれることが多い。なんでだろうねぇ。まぁ無理矢理信頼されてるって思ってるけど、なんか違うし。おそらくは。別の意図だろうし。

あー、駄目だ。それでもイラつく色々と。

なんて考えていると。目の前にモニタが開いたと思ったと同時に警報が鳴り響く。

空を見上げると既に暗くなっていて星が見えてて……。正直面倒事は一度に来られると大変なんだけどなと思った時だった。

第三十八話　つながり（後書き）

さて、前書きの続きを。二択あって、今回は比較的安全な方。もう片方は、確実に響達と六課陣営に亀裂が入るんです。
まぁ、これはそのうちおいおい語るとして……

今回ほどタイトルを付けるのに考えた事はありませんｗ

さて、今回軽くあの描写を書くのを逃げました……本当にごめんなさい。ただ、シグナムさんの鉄拳シーン以降ちょっと頑張るので楽しみにして頂けると幸いです！

それでは、次回も読んで頂けると幸いです！

第三十九話　思いと謝罪、そして疑問（前書き）

終わったぁあああ、けど、別の意味で亀裂が入ったかもしれない……うっうっ。ごめんなさい。二話分を詰めました。いやだったんです。書いてて本当にロウテンションだったし……そして、いろいろ変更したら矛盾が出来てそうだ。てかそれしか無い。

ただ、今までで一番面白くないと言われても仕方ないくらい。今回は難しかったです。

では、楽しんでいただけたら幸いです。

第三十九話　思いと謝罪、そして疑問

直後に屋上に集合ということで、俺と奏、震離はそこでそのまま待機だったんだけども。

少し前に。俺ら7人全員揃っていたせいで、煌達まだそこにいるんだよなぁ、存在を殺してるだけで。

それで、ぼちぼち皆揃ったなぁと思った隊長達とスバル達が集まってきて、ティアナが起きてるところを見ると大丈夫と思ったけど、どうもイライラしてるようで落ち込んでるみたいな表情で。

「今回は空中戦だから私やフェイト隊長、ヴィータ副隊長。そして響と奏だけで行くからみんなは待機ね」

って全員揃ったのを確認してから、高町隊長がそう言う。またかよって思うよりも先に。

……ある程度折り合いを付けたか？まぁ、これで後はちゃんと二人で話しあえば……とりあえず今回は終わりそうだけど……絶対にないよなぁ。

「今回ティアナは待機から外れておこうか」

この言葉を聞いた時、俺は何も考えずに動いていた。いや違う。聞いた瞬間。別の事が頭に浮かんだ。

――何を行っているんだと。

「え、ちょ、響？」

ヘリの影に高町隊長を連れて行く。ヴィータさんがなんか言ってけ

ど、知らん。
それよりも、それよりも！

「何考えてるんですか高町隊長……ッ！」

「……え？」

最初のほうこそ声の音量を調整できたけど、感情を調整できなくて、言途中から声が大きくなっていった事に驚いたけど。

「あんな事あった直後に何言ってるって聞いてるんですよ！！」

「だから、今日は休んでいてって」

あー、うん、落ち着け俺。熱くなったら駄目だ。今のティアナにこの会話を聞かれた方が不味い。だけど、やっぱり感情は調整は出来なくて。

「アレじゃあ端から聞いて役立たずって聞こえるんですよ！！」

「ッ！！私、そんなつもりは！！」

「そんなつもりは無くてもそう取られるんだよ！！」

だんだん声が大きくなるのと、徐々に敬語が抜けていく。
同時にどんどん腹が立っていく。この人達は何がしたいんだと。だけど、俺の考えなんて二の次だ。問題はティアナで。視線をティアナに戻す。
だけどやっぱり。さっきのあの言葉で顔面蒼白で、多分俺らの会話なんて聞いてないんだろう。

下手すりゃ、ティアナの中でさっきのあの言葉は別の意味で捉えているかもしれない。
それを見たのか高町隊長はティアナの側に行って。俺もその後を追う。

「えっとね、ティアナさっきのは、今日の所は体調管理をしっかりして、明日からに備えてって意味だから」

少しティアナの目に意思が戻ったのを遠目で確認する。だけど。

「言うこと聞けない人間は要らないって事ですか」

「おい、落ち着けって」

「何でアンタが口出すのよ!!アンタなら分かるでしょう?私なんかいくらだって代わりがいる事を!」

「だから、少し落ち着けよ」

「なんでアンタまでそっち側なのよ、そうよね、違うよね、アンタも」

あぁ、あぁ、あぁ。本当にヤバい。何でここまでこの子は言ってんのに、隊長陣が動かないのかとか、何でそこまで思いつめるのとか。そんなことよりも先に俺がブチ切れそうだ。

「……あたしは、あんたみたいな、エリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいな稀少技能(レアスキル)も無い。少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんかならないのよ!?」

あぁ。この子がこんなにもこんなにも思いつめてるのに。貴方達は何もしないんですね。うん。人だから、とかもういいや。うん、分かった。なら俺も考えがある。

「震離ー」

「え、あ、はい!?」

えらく静かな声で、震離を呼ぶ。シグナム副隊長が動こうとしたけど俺の発言で止まった。

「ほい」

「え、あ、何!?」

俺のデバイスをアイツに投げ渡す。早い話が。

「震離ー俺の代わりに行ってくんない?どうせ奴さんは、くっだらない事調べようとしてるみたいだし」

「え、あ、でも」

「あぁー大丈夫だーあの変態はかせさー、多分ガジェットが壊されるデータ取りに来てるはずなんだよ、だから俺よりもお前が言ったほうが楽だろう。刀も貸してやるし、案外楽に終わるだろう?」

「ちょ、お前!?」

いろいろ説明をはしょって、震離とそんな会話をしていると隣からヴィータ副隊長の怒号が聞こえる。ちょうどいいやカマかけよう。

「作戦通りにっ！」

「……ならばなぜ、俺と奏なんですか？戦力としては、接近戦しかできん俺よりも、震離の方が優秀で貴女がたの予想した戦力調査としては最適ですよ。それに同じ分隊から出すとかおかしいでしょう？」

「ッ！？それは……」

……そうか。その反応で十分ですよ。俺と奏の評価を。もう大体理解したから。

「高町隊長、早く行ったらどうですか？」

「え？」

「え、じゃなくて出動でしょう」

そう言ってから、奏が震離を引っ張り連れてヘリに乗って隊長達もヘリに乗ってそのまま飛んでいった。

そして。

「で、お前は何したいんだ？」

目の前でうつむくティアナに声をかける。多分今のやり取りでちったぁ頭冷えたろ。

「……」

「何もなければ、部屋に帰ってとりあえず休め。まだ完全にダメージ取れてないだろう」

黙りこくってるティアナに声を浴びせ続ける。正直自分のことが最低だなぁと思う。

すると、いつの間にかスバルがティアナの側に来てて。

「響……、命令違反は、絶対に駄目だよ……さっきのティアの言葉とか。確かに私も駄目だと思う！」

「……」

「けど、自分なりに強くなろうとすることとか！大変なときに、頑張っちゃいけないの！？」

「……」

「自分なりに努力するとか、やっちゃだめなの！？」

うん、分かるよ。分かる。だけど、それは今は駄目なんだよ。だけど、って言葉を言おうとしたけど。

それよりも先に。

「自主練習はいいことだし、強くなるための努力もすごくいいことだよ」

不意にこの場にいないはずの人の声がして、俺たちは声の方を向いて、そこにいたのは、とても辛そうな顔をしたシャーリーがいた。

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはリィン曹長が居てくれますから。……なんかもう、みんな不器用で……見てられなくて。みんなロビーに集まって、私が説明するから」

そう言われて、皆でロビーに集まる。
そして、なのはさんの教導の意味を伝えると言って映されたのは、なのは隊長の魔法との出会いと戦い。
そして敗北。
シャマルさんとシグナム副隊長の解説の元知らされた。知らない隊長達の歴史。

――――だけど。

「なのはさんはみんなが怪我をしないように」

「そこまでだ。もうそこまででいい」

そこまでで止めた。

「え、響？」

「やっぱ、関係ない話だろう。それは。だから撃墜されても仕方なかったって、馬鹿でも分かる話でもしたいの？」

「私はなのはさんがどんなに必死なのかを」

「んなもん、皆知ってるわ。病的なくらい熱心に教導に励んでる事位。だから今回の事が起きたんだよ」

そんなこと言われなくても分かる。普通にあの人ワーカーホリックだろうって思うくらいやってるの皆知ってる。だからスバル達も「成長」したってことを示したかったんだろう。昔よりも強くなったって。

「いい加減もういいよ、あの人じゃなくて周りが悪い、周りが悪いって、どんだけ高町隊長をヒーローにしてえんだよ……人間だぜ……あの人だって」

俺のこの言葉で、こんどこそ誰も何も話すことは無かった。

で、無言で時間だけがどんどん過ぎていって、遠くからヘリの音が聞こえてきた。

それを聞いて、正直面倒だと思ったけど、他の面々は違うだろうな。多分これで今日という日は終わるってそう思ってんだろう。

そして、ヘリの音が止まったと思ったら。

息を切らせて走りこんで来たのは、高町隊長だった。

流石にこの場を包んでる空気を察したのか、すぐに呼吸を整えた。

そして後からやってきたハラオウン隊長にヴィータ副隊長に奏と震離。そしてまた静かになった。

「ティアナ、お前が何考えて、何を思ったのか、ちゃんと話せ」

ティアナに視線をやった後、この場の全員の顔を見る。この中でまだイライラしてんのは俺だけだ。

別にいいさ。俺の今の状態がどんなもんか分かったし。それでここに居場所が無くなってもいいさ。

「……私、は……」

ヘリポートでの熱は完全に抜けたのか、もう勢いを感じない。だけど、言いたいことは言わせないと後々危ないしな。

「強くなりたかった、兄さんは役立たずなんかじゃない、ランスターの魔法は負けないって」

そうして語る過去の話、兄が殉職した、そして上司はそれを無能とメディアで断じた。
だから証明する、兄の夢の執務官を兄の魔法でたどり着くことで……
どうもこの件は俺以外には周知の事実のようだ。奏や震離も知ってるみたいだし。
おそらく身辺調査あたりでも読み取れるぐらいに前面に出してきたんだろう。

それで一つ思った。その事を言ったその上司の言葉を。
その人はどんな気持ちでそれを言ったのか。
死んでしまった事に憤ったのか。
それとも純粋に悪意か。
または職業人としての意見か。
もしくはまた、別の意味で、か。

多分悪意ならば、そいつが管理局に居る可能性はほぼないな。
確実にレジアス中将が飛ばしてる。絶対に。あの人はやり方こそ荒い部分があるけど。その代わり、死んだ人間を侮辱する奴に対しては本気で容赦しない。現にあの人が地上を守るようになってからどんどん治安が良くなったってデータでも証明してる。死んでも必ず中将が家族を守ってくれると信頼されたから。
そんなことを考えていると、ティアナの告白が終わる。

「次、高町隊長」

いつの間にか俺は司会のようなことをしている。
本音を言えば面倒だからやりたくない。だけど、ここでどっちにも味方しないのは多分俺だけだ。

「私は、ティアナが危ないことをしたからそれで……」

なんか戯けたこと言ったから、じっと高町隊長の目を見る。
俺の意図に気づいたのか、一度眼を閉じて。そしてもう一度目が開いた。

「……ううん違うね、ちょっと頭に来ちゃったんだ、昔の私を見てるみたいで、無茶して、みんなに心配かけちゃって、それでたくさん迷惑かけて、一番嫌いな時の私を見てるみたいで、だからだね」

すごくつらそうな顔だったけど、少しだけすっきりした顔だ。

「ティアナ、本当にごめんなさい。そしてスターズ分隊隊長の私としてごめんなさい。私は貴方のことをしっかり見てなかった。隊長としてだけ見て、訓練だけ見て、数字の貴方ばっかり見てて、私が本当のティアナを見てなかったんだ」

唖然とした後に感極まったみたいに泣き出すティアナ。それにつられて何人か泣いてるけども。それよりも。

「明日から話そう、悩みがあったら皆に教えて、勿論私も一緒に考える。きっと皆、ティアナの夢を応援してくれる。ちょっと間違っても、きっと誰かが止めてくれるから。話を聞いてくれるから」

うん、この問題は、これで終わりだな。やっと。
さて、あんまり泣いてるところに居るわけには行かないし。黙ってさっさと席をたつ。出来るだけ気配を殺して行ったから皆高町隊長と、ティアナを見てるから多分問題ない。

一応確認をとろう。

そう思って海沿いのテーブル付きのベンチに座ってると。
普通に優夜と煌が黙って隣にどかっと座って、雪奈と瑞希、奏に震離が向かいの席に座った。
さて。

「正直に聞く。俺と奏以外で、あの人達に避けられてるとか違和感を感じた事あるのは？」

そう言って、手を上げたのは震離だけだ。まぁ、そうだな。それは仕方ない。

「……そうか。じゃあ今回の件全員聞いたな？」

「……」

皆にそう聞くと、無言で首を縦に振った。

「じゃあ、まだ仮定だけど。今回の件。おそらく「アイツ」が動いたと思う。そして俺と奏、震離が情報を流してることに、六課陣営が何らかの方法で、気づいたと思うんだ。」

「……響、それはまだ早いんじゃないのか？」

「あぁ、俺もそう思うだけど、こんなかでここ数年、精力的に部隊の情報流したヤツいるか？」

再び沈黙。それは同時にやっていないということでもある。うん。だから。

「だから、おかしいんだよ。まだ仮定だけど、ここ数年スパイ行動なんてして無いにもかかわらず、何で知っている？そして、知らないと仮定するならば、何で隊長達は俺と奏を警戒する？」

実際その通りだ。自慢じゃないが、ここ数年目立った問題なんて起こしてない。それに異動した先の隊長達は普通に良い人達で、問題なんて全くなかったし。

「それに。おかしいんだよ。今回今まで文章だけで言って来たのに、今回は普通に「震離」を呼び出して直接命令してきやがった」

「うん」

「だから、何か仕掛けるか。傍また本気で上に行きたい。逆に八神部隊長を妬んでるか……と、判断材料はまぁ、まだまだなんだけど……そうだな。どう思いますか？シグナム副隊長？」

「え」「は」「嘘」「居るの？」「……」「最初から混ぜればいいのに」

左から順に雪奈と瑞希、奏に震離、優夜に煌の順だ。

そして、俺がそう声を掛けると、木の影からゆっくりとシグナム副隊長が出てきた。他の面々はごまかせたけど、この人は誤魔化しきれないか。

「さて、シグナム副隊長？何処から説明しましょうか？ここまで来てもう貴女に対して隠し事はしませんよ」

「そうか。ならばお前達のこと全て話せ」

「了解です」

――その晩俺らに一人味方が出来た気がして、ちゃんとシグナムさんから六課の状態を聞かされて。大体分かった。

何がわかったって？

いろいろと、さ。

さぁ、明日からあの四人と高町隊長達はいつも通りに戻るだろう。だけど、不安要素が……いや、俺ら自体が不安要素なのにな。まぁ、それよりも一つ疑問が浮かんだ。

――俺らが仕事をしないスパイだけど、「風鈴流」はなんだろうと。

第三十九話　思いと謝罪、そして疑問（後書き）

ヴィヴィオ登場まで、一気に原作ルートで行くゾォおおお！

はい、宣言しました。

そして、矛盾しかないじゃんって思われるでしょう……だけど、これが自分の答えです。というかアニメを見てそうしか捉えられないんです。ダメな視聴者で……ごめんなさい。

さて、今回、シグナムに響達は、全部話しました。スパイのことも何もかもを、そして自分たちが「誰」に情報を流すことになっているのかも。え、わかんないって……ごめんなさい。もう少しで響達がどんな人なのか分かります。それこそあらすじに書いた「皆を守るために～」って奴の説明もします。だからその時は、いろいろ長くなります。

だからもう少し待って下さい。その代わり自身はありませんが全力で楽しんでいただけるように本気で頑張ります。

それでは、ｋｙｏｎｓｉでした。

第四十話　いいさ、もう。雰囲気だけでも。（前書き）

はい、前回と打って変わって。セカンド解除兼、休みに入りますが……定番のデート追跡はさせませんｗ

だってめんど……大変だもん。その後の展開考えると。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

第四十話　いいさ、もう。雰囲気だけでも。

例の一件以来、訓練は更に厳しさを増した。けれどそのなかで一番ティアナが輝いてた。理由は言うまでもなく悩みと凡人発言が無くなったからだ。というか主席で凡人とかどの口が言ってるんだろうなぁ。

お兄さんびっくりだよ。まぁ、アレから何だかんだで二週間くらいたった。

ちなみに、隊長陣はなんか俺らに対する行動規制をやめたっぽい。まぁ、それでも警戒されてんだろうなぁって分かってるしね。シグナムさんから聞いてるし。

で、話がそれて、今訓練着を着た、俺らの前には高町隊長、ハラオウン隊長、ヴィータ副隊長、シグナムさんが揃ってる。で、俺と奏、震離は普通に突っ立てるけども。ティアナ達四人は普通に体育座りしてる。今日は一段ときつかったしね。

「はいっ。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様っ」

けど、普通にバテてるティアナ達には返事を返す体力も残ってない。まぁいつもに比べて、今日の模擬戦は特別で、いつも以上にきつかったからな。

「でね？実は何気に、今日の模擬戦が第2段階クリアの見極めテストだったんだけど」

「えぇ！？」

……正直に言おう。抜き打ちって怖いよね。しかも終わってからと

か余計に怖いよ。

「どうでした？隊長さんと教官さん？」

「合格」

「はやっ！」

うん、普通に動きがいいんだもん。ダメとか言われたら逆に俺が聞くわ。

「ま、こんだけみっちりやってて問題あるようなら、大変だってこった」

「あ、あはは……」

ですよねー。でもまぁ。この2週間本当に。ティアナ達四人の伸び方は異常だと思う。

基本に返る。基本に返って、とにかく基礎を重点に訓練を行なう。基礎出来ずして応用ならず。この4人は、ようやく応用の段階へと入ったし。

……ティアナじゃねぇけども。普通に才能のある奴多いよなぁ。まぁ、俺の後ろでボーッとつっ立ってる震離が一番異常で、天才だけど。まぁいいか。

「わたしもみんな良い線いってると思うし。じゃぁこれにて第2段階終了っ！」

「やったぁ～っ！」

おぉ、座ってたのに一気に立ち上がってガッツポーズとか取ってる。
まぁ、いよいよ応用とかになるとうれしいよね。俺もそうだったし。

「デバイスリミッターも一段解除するから、あとでシャーリーの所に行ってきてね？」

「明日からはセカンドモードを基本に訓練していくからな」

「はいッ！」

「……え、明日？」

スバルよ、首を傾げながら言うなよ……。
ん？明日だと？え、そのパターンって。

「あぁ。訓練再開は、明日からだ」

「今日は私たちも、隊舎で待機する予定だし、みんな入隊日からずっと訓練浸けだったしね」

「はぁ」

「ま、そんなわけで。」

「今日はみんな、一日お休みですっ。街にでも出かけて、遊んでくるといいよ」

「はーい」

ん～、この流れだと俺らは自由待機かな。さすがにＦＷ全員休ませるわけには行かないだろうし。

「お兄ちゃん。一緒にでかけましょう！」

おや。ハラオウン隊長の様子が……？ってか絶対にＢだろう！ランクが人から、金色夜叉に進化とか無い無い。ってかやめて！？そしてエリオにキャロよ。そんな眩しい目で俺を見るな！！ってかＢボタンキャンセルが！

「ごめんね、エリオ、キャロ？私達は休みじゃないよ」

心のなかでＢボタンを押してたら。奏が助け舟を出してくれた。マジでありがとう。やっとＢボタンが動いたよ。現にハラオウン隊長は落ち着いたし。

「え、でも」

「やだなぁ、なのはさん。さすがに隊長達が居るからって、ＦＷ全員放出したらアウトでしょう」

奏だけじゃなくて、震離も助け舟出してくれた！マジでありがとう！

「ま、そういう事だ。とりあえず楽しんできたらいいよ」

「……分かった」

……ごめんよ本当に。今度行列の出来る上手いカフェに連れてくから。そこのチョコパフェおごるから。

と、心が痛くなりました。もうヤダ。

そして、何だかんだで。

「……んだよ、優夜も煌も瑞希も雪奈も外かよ」

というより正確には休みで全員家に帰った。ちなみに俺らの家って。ちょっとミッドの郊外から離れた４階建ての馬鹿でかい集合住宅で、部屋も多いし風呂とトイレが各回に一つずつあるとか馬鹿だろう。なんか異常に安くで出回ってたから、７人で買った。ちなみにミッド郊外とか言いつつ、ぶっちゃけるとベルカ郊外に近くて。少し歩けばＳｔ．ヒルデ魔法学院がある。ちなみに各々勝手に部屋を改造してる。俺の部屋とか和室だしね。さて、と。

「震離は……って、流の所で、奏は……何処かに行ったし……結局俺一人か」

うん、正直暇だ。飯も食い終わったし。やることがない。自由待機とか言いつつ仕事はほぼ終わってるからやること無いから軽く休みだし……うん。どうしよう。

「……一人だし……ぁ」

そうだ。久しぶりにアレやろう。そうしよう！

そう思って走って部屋に戻る。そして、一応引越しの度に持ってきている物を取り出す。一つ目は馬鹿でっかい麦わら帽子。コレひとつで人一人は影に入るという優れものだ。そしてもう一つ。箱と竿を取り出して。食堂から余った物を貰って……いざ！

「久しぶりの釣りだ！」

そう思って六課の堤防に登って、麦わら帽子を被って。竿固定の金具を設置して、糸を垂らす。そして、垂らし終わったら。足をぶらりと投げ出してから、横になる。
うん、このほのぼのとした時間が俺は大好きです。あぁ、ほのぼのしてて本当に……って。

「もう来た」

糸をたらして、ほんの数十秒。早いな～、とか思いながらリールを巻く。けれど竿が反応した割には軽すぎる。すなわち。

「……持ってかれた」

ものの見事に餌だけ取られてた。で、餌をつけようと思ったら。

「キュク？」

「……そうか、置いてかれたんだな」

普通にフリードがそこで生肉食ってるし。
まぁ、釣りするとか言いながらあんまりこのへんの食べたくないんだよね。なんかいろいろ入ってそうで怖いし。だから、まぁ。

「……空気だけでも楽しむか」

「キュク～」

実際その通りで。餌の付いてない釣り針をたらして。そのまま横になる。うん。平和だな。

……十秒持たなかったけどね。

「ちょぉ、震離、待ちぃ！」

「絶対やです！」

「ちょっとだけ、ちょっとだけ貸して！」

「絶対絶対やです！」

「ええやん！流の写真くらい！」

「絶対絶対絶対やです！」

なんか隊舎が若干遠いはずなのに。普通に叫び声とかいろいろ聞こえる。

……静かに寝かせろよ。ていうか何ではやてさんが知って……リインさん辺りがバラしたなきっと。

まぁ。普通に寝れば……。

「フリード～どこ～」

「キュクル～」

なんだお前は！？餌だけ食って行きやがった！？あの野郎……ってか、雄雌どっちかしらんけども！もう、餌無いじゃん！いいよもう！空気だけでも楽しむよ！釣りの醍醐味もあったもんじゃねぇ！！

そう思って帽子を顔にかぶせる。なんだろう。温かいものが目からこぼれたよ……

第四十話　いいさ、もう。雰囲気だけでも。（後書き）

さて、もうしばらく休みが続きます。そして……ヴィヴィオのっていう流れです。

あと、一つ疑問が。エリオとキャロがデートに行った際。フリードはキャロと一緒にいたんだろうか？

うろ覚えで書いたせいで若干覚えてなくてごめんなさい。

それでは、また次回も読んで頂けると幸いです。

第四十一話　さぁ、事件の始まりだ（前書き）

はい、今回からまたシリアスっぽくなります。ごめんなさいね！本当に！

一応クッションとして、ほのぼの的なのを入れていますがｗ

それでは、どうか楽しんで頂けるとさいわいです！

第四十一話　さぁ、事件の始まりだ

あ～、ちくしょぅ。餌があったらまだ……まだ。起きた時になんか掛かってるかもしれないという楽しみがあったのになぁ。クソゥ。でもまぁ、いいか。ここ最近無駄に大変だったし。一人でこんな風に時間潰したことなんて無かったしなぁ……。

「釣れますか～？」

ん？誰だ？いや落ち着け俺。この声ここ半年の内どっかで聞いたことあるぞ。はて、何処だ。

けど、安眠妨害だから無視るけどね。俺は今不貞腐れてんです。餌もなく釣りをする滑稽な人として。

「も～、釣れますか～って、聞いてるじゃん、響お兄ちゃん？」

……！？お兄ちゃんだと！？エリキャロはさっき外に出ていったから居ない。だけど、六課で俺のことを兄だと呼ぶ奴は……いねぇ！？なんて、考えてたら麦わら帽子を持ち上げられて、あぁ。日光が目に当たって眩しくて……軽く目を閉じる。で、帽子を持ち上げた人物を見ると。

白いワンピースに、可愛らしいバックを掛けて、赤いツインテールの……

「フレア！？」

「やっぱり響お兄ちゃんだー」

人の麦わら帽子を持ちながらニコニコと笑う。というかフレアよ。

「……何でここに居るの？」

「……？」

……とりあえず分かったことが、フレアの家って言うよりフレイさんの住んでる家が一応六課の側にあるんだと。それで家の側に一人であそびに行こうと思ったらしく、街にじゃなくて海沿いのこっち側に来た。それで散歩がてらぶらぶらしてたら、釣りしてる変な人が居るなぁって思ってよく見たら、黒い尻尾が生えてて、直ぐに俺だとわかったって。

うん、突っ込むところは数点あるけど。それよりも。

「とりあえず、帽子は被っときなさい」

「うぇ」

フレアが持ってた俺の帽子をフレアにかぶせる。ツインテが崩れるって言ってたけど関係ない。

女の子がこんな真昼間に散歩して、熱中症で倒れたら洒落にならん。見たところ水筒なんて持ってないみたいだし。

「で、今日はどうしたんだ？」

「うん、きどーろっかって所ににゃがれ……お母さんが居るって、お母さんから聞いたからー」

「へぇ、フレイさｎ……お母さんは知ってるの？」

「うん、本当は今日お休みだからって一緒に出かけようとしてたんだけど……なんか、お仕事のほうが大変になったって、今日慌てて行っちゃった……」

「そっか」

そういや、一応フレイさんも管理局員なんだよな。震離が本局でフレイさんの名前出したら繋がるとか行ってたけども。……ん？そう考えるとフレイさんって、もしかして。

「ねぇフレア？」

「ん～？なぁに？」

「お母さんの……その、階級とかって分かる？」

「……かいきゅう？」

あ、駄目だわかってない。うん少し説明してダメだったら諦めようかな。

「なんていうかその、お母さんはどれだけえらいとかそう言うの」

「ん～、あ、上から数えたほうが早いよ～」

「……そ、そっか」

え～上から数えたほうがいいって。え～待て落ち着け。元帥、中将、少将……え？いやまぁ、落ち着け。

まだ決まったわけじゃない。だけど、俺かなり粗相をしたんじゃないか……って、思った瞬間。

『響！』

「うぉぅ！？どうした優夜？」

なんか目の前にモニタが開いたと思った瞬間、血相を変えた優夜の顔が。何時もは余裕のある顔しか見てないから、俺自身、かなり驚いてる。

『よく聞けよ。二年前のあの事件。「あいつ」がやった証拠を掴んだ』

「何？」

『だけど、この二年経ったこの時期で、この情報、もう意味は分かるな？』

「あぁ、分かった今何処にいる？」

『そっちに戻ろうとしてる、車だから一時間以内には……』

『こちら、ライトニング０４。緊急事態につき、現場状況を報告します』

優夜との通信中にまた別の通信が開く。優夜に視線を合わせてあとで連絡するというのを聞いてからそちらのモニタを閉じる。そして、キャロからの通信の内容は。エリオと訪れていた『サードアベニュー』の路地裏で、レリックの入ったケースを発見したというもの。

しかも、ケースを持っていたのは小さな女の子だそうだ。
現在は意識不明で、話だけだけど、その女の子がレリックを運んでいたのは間違いない。
なのはさんたちから通信が回り、俺たちはキャロたちと合流する指示が下され、飛行許可も降りた。
救急スタッフも向かっているようで、謎の少女はすぐに保護される。
で問題が一つ。

「フレア、ちょっとごめんね」

「わ、わ、お姫様抱っこ！」

うん、文字通りフレアをお姫様だっこして、宿舎に走る。そして、宿舎の屋上を訪れて。

「すいません。アイナさん！この子ちょっと預かっててください。終わったら俺が家まで送り届けるんで！」

「え、え、響さん！？」

「響お兄ちゃんまたねー」

突然の訪問に驚いて、洗濯物を握ったままで固まるアイナさん。はい、いきなりでごめんなさい。
そして、フレアを下ろして、六課の隊舎にまた向かう。
二人は絶対についてくるとしても、だ。一人不安要素ってか、まだ動かすわけにはいかない人物が一人。
急いで医務室前に行くと。案の定。

「緋凰さん？どうかしましたか？」

流が医務室から出てきた。やっぱりなぁ……思ってはいたけど。

「お前……一応お前は今日も待機だ」

「しかし……」

「おおかたシャマル先生がいないから、抜けようと思ったんだろう？」

「……」

図星……か、まぁ、わからんでもないけど。それでも。

「怪我してるんだ。完璧に治ってから動け。シャマル先生にもそう言われたろ？」

「……でも」

「でも何も無い。けが人は大人しくしてろ。だけど、怪我が完治したときには絶対にお前を頼るから。それまで力を蓄えとけ。いいな！？」

無理矢理、流を医務室に押しこむ。一応最後の言葉で納得してくれたのか、扉が閉まる直前に「頑張って下さい」って言ったように聞こえた。小さくて聞き取りにくかったけどね。

さて、と。

（震離、奏？今何処にいる？）

二人に念話を繋げる。ちょっと俺が出遅れた感があるからなぁ。全く。
そして、少ししてから。

（え、今六課のロビー前で今から行こうとしてる所）

（遅いよ響）

……はやいなーとか思うけど。いろいろ合ったしなぁ。フレアをとりあえず人のいる場所に連れてって、流を止めてっていろいろしたし。まぁ、いいわけだな。

（悪い、今直ぐにそっちに行くからちょっと待ってて）

（了解。それじゃね）（急いでねー）

と二人との念話をやめる。
さて、急いでそっちに向かおうとしたときに。

一瞬で、身が凍った。いや頭が冷えた。

――いや本能的に見た瞬間。心の中からどす黒い感情が湧き出たのが分かったから。

通路の角から出てきたその人を見て。一瞬で二人に念話を入れる「先にいけ」ただその一言を。
そして、角から出てきたその人は俺の顔を見て笑った。初対面の人が見たらいい人と思わせるような笑みを顔に貼っつけて。だけど、俺にはもう通用しない。

何でって？

答えは単純。その人が俺達に六課の情報を流すように言った人物なのだから。

だけど、俺はこの人のことを嫌いになることは無い。理由は単純だけど、この事を皆に言ったときには全力で否定された。けど俺はそう思わない。なぜなら――俺とこの人は似ているから。

――そうでしょう？

「お久しぶりですね。アヤ・アースライト・クランベル三等空佐」

「えぇ、お久しぶりですね。緋凰響空曹」

本当に久しぶりに受け入れられるよ。

不条理を、理不尽を、風評を、不都合を、憎しみを。

瞬間、いつか震離が教えてくれた、どっかの偉人の言葉が頭に浮かんだ。

『愛はつまり憎しみであり、憎しみは愛である。　対立する者への憎しみは、一致する者への愛であり、後者への愛は、前者への憎しみである。』

あぁ、そうかも知れないな。だって、こんなにも憎たらしくて憎たらしくて仕方ないんだからさ。

第四十一話　さぁ、事件の始まりだ（後書き）

さて、今回より動きます。基本は原作基準ですが、オリジナルｓｉｄｅを交えてお送り致します。

そして、ここからです。ここから全力で頑張ります。

それでは、今回はこれで失礼します。

最後に出てきた言葉の引用先はブルーノ「原因と原理および一者について」から引用しました。

第四十二話　作戦開始前（前書き）

はい、大凡一週間位更新しなくて、本当に申し訳ありませんでした！

とは言ってもここで私が言ってもただの言い訳にしかなりませんので、何も言いません。それでも活動報告に書いちゃったので矛盾していますが。

それでは、楽しんで頂けると幸いです。

第四十二話　作戦開始前

――ｓｉｄｅ響――

「とりあえず、まぁ、今日はどうしたんですか？クランベル三佐」

「貴方には関係の無いことですよ。緋凰空曹」

柄にもなく、ニコニコと笑みを浮かべて目の前の人物と会話する。
正直、こんなにも笑えるものなんだなと自分で感心してるくらいだよ。
まぁ、でも。

「そうですか、それではこれから出動なので。自分はこれで」

「えぇ、気をつけてくださいね」

「心配ご無用。あぁ、隊長室はここことは正反対の位置にありますよ」

「そうなんですか、知らなかったわ」

「そうですか、何ならご案内を仕りましょうか？」

「いいえ、それには及びませんよ」

「そうですか、てっきりここを提供した方がここで迷ったのかと心配しました」

互いに笑う。俺も目の前の人もニコニコと。
だけど。心は、目は笑っていないんだけどね。さて。こいつの事もスッゲェ気になるけど。
さっさと出撃しないとならんし。というか、屋上でヘリが待機してるけど何か待ってるのか？
まぁいいや。

「それでは、失礼しますね」

「えぇ、こちらこそ失礼しますね」

敬礼して背を向けて歩き出す。さて、さっさと問題片して、優夜から話聞かないとな！

って考えながらロビーに出た瞬間。

「遅い！」

「ぐはぁ！？」

全力で震離に杖で殴られて受身すら取れませんでした。凄く痛いです。
とりあえず、事情を説明して。遅れた理由と先に行けって言った理由もちゃんと説明したし。
さて、気を取り直そう。凄く痛いけども。

「さて、行こうか……ガフッ」

「……はいはい」「まぁ、アレは響が悪いし」

……少しは心配してくれよ。
で、本気で空を飛んで、エリオ達の元へと向かう。
同時にヴァイスさんのヘリも飛んだから、一応連絡取りやすいように近くを飛びながらエリオ達の元へと付いた。そして、ヘリからシャマル先生が降りて、その診断の結果。少女に命の別状はないが、少々疲労しているとのこと。

そしてその直後、ガジェット襲来を伝える警報が鳴り響く。正直面倒だと思ったけどね。

「ガジェットの数はっと……地下水道から数機ずつのグループで総数16、20で、海上方面、12機単位が5グループ。ちょっと多いかな」

隣で震離がガジェットの位置を調べて皆に教える。
なるほど……海上は、空戦チームの足止めか。もしくはあの少女の確保かな。まぁレリック持ってる少女ってか幼女なんていろいろ訳ありっぽいしね。鎖の長さとかから考えるともう一つレリックがあった。だから地下水道からガジェットが来た、か。

ん～、よし。

「高町隊長～、一つ提案があるんですけども」

「ん、何かな？」

「とりあえず、この後のプランが分からないのですが、とりあえず。俺がティアナ達に付いて行って、地下水道に入って。震離と奏の二人をヘリの護衛に付けたらいいと思います」

まぁ、敵の戦力も分からんしね。海上の奴は高町隊長達がなんとかするだろうし。
二人がヘリについていれば……まぁ、なんとかなるだろう。俺よか強いしね。

「うん、分かったそれでいこう。一応ヘリにはシャマル先生と」

「私がいますから大丈夫ですよ」

高町隊長の言葉を拾いながら、ヘリの中から六課で別れたあの人が出てきた。
瞬間、震離と奏の雰囲気が変わった。奏は不敵な笑みを浮かべてるのに対して。震離はただ、ただ静かになった。何時もニコニコと笑っているから雰囲気変わりすぎだろうに。

まぁ、とりあえずだ。

（あんまり気負うな。二人いりゃ大丈夫だろう？）

（ん、了解。私が援護で震離が前って布陣かな、守るときは？）

（あぁ、そん時は任せたよ？震離も、とりあえず何時もの顔に戻せ）

（……了解）

とりあえず、これでいいかな。
不安要素がヘリにいる時点でかなり怖いけども。まぁいいか。

「ティアナ、とりあえず俺はそっちの指揮に入るよ」

「え、でも私よりも響の方が」

「経験積めよー、まぁ、俺なんかが入ってもあんまり戦力にならん気がするけどなー」

「……それ嫌味？」

「さぁ」

ティアナがジト目でこっちを見るけど。口には出さないけど言い返そうじゃないか。

うっせぇ、天才め！

って言ったら今のティアナだと絶対に否定するだろうしな。

そうこうしていたら、ヘリの回転翼が勢い良く回りだした。そろそろ飛ぶんだな。

「まぁ、とりあえず。頑張れよ」

「そっちこそ、気をつけてね」

「あぁ、それじゃあ」

そう言ってヘリが飛んで、二人を見送る。

さて、と。

目標を再確認しよう。地下でレリックを回収しガジェットも制圧。

ただ、これだけだ。

「さて……みんな、短い休みは堪能したわね？」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合入れて行こう！」

ティアナとスバルの言葉に返事をして、各々のデバイスを掲げる。

まぁ、俺は休んで……遊んでたから休みにカウントされるかな？まぁいいや。

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ（スタンバイ）」

「セェエェットアァァップ！」「開始用意っと」

……叫び過ぎだろうとか思ったのは内緒だ。

さぁ、頑張って行きますかね。ただまぁ、正直に言おうこちらに流れが向いていないことは何となく分かる。これがどう出るか、正直分からないけど。

――ｓｉｄｅ優夜――

「優夜、まだ着かないのか！？」

「そうあせりなさんな、今最短ルート通ってるつっても、まだ掛かるんだから」

後部座席で腕を組んで明らかに不機嫌ですって態度を取ってる煌。

まぁ、わからんでもないよ。そりゃ俺だって内心焦ってるさ。なんて言ったって。一発で響と奏を助けられるカードを手に入れたんだからさ。だけど――

「やっぱりおかしいよね」

「ん～？」

後部座席の煌の隣に座る瑞希が不意に呟く。

「だって、今まで優夜の情報網に掛からなかったのに、何で急に……」

「そうだね。だけどね瑞希？今の私達にその情報が本当かどうか確かめる余裕はないの」

「だけど」

「私だって本音を言えば多分。罠だと思うし、多分響もそう思ってる。だけど、手札が増えたことに変わりは無い。どんな事に対しても、ね」

うん、その通りだと思う。助手席に座る雪奈が背中越しで瑞希に語りかけるけど。本当にその通りだ。

まぁ、その手札を切って、相手がどう動くかは分からない。もしくは分かっててやったかもしれない。どういう意図があってかは知らないけども。

「とりあえず、廃墟街通ってるからバレたら俺らもやばいよなー」

「うっ」「だね」「まぁな」

ちなみに左から雪奈、瑞希、煌の順だ。実際立ち入り禁止地区だからなー。だけどここ通ったほうが六課までは早いんだよなー。なんて考えてたら。

『いきなりですいません。こちら、フレイ・A・アルトゥール――

です』

「……え？」

なんか見知った人の顔が出たなぁとか思って、フレイさんが名乗ったわけなんだけど。フレイさんの階級聞いた瞬間。思わずハンドルを握る手から力が抜けて事故りそうになった。雪奈達も同じらしく。全員あっけに取られてる。

うん、はっきり思ったよ。今この人何つったって。だって聞き間違いじゃなければ確かにこう言ったんだもん。

フレイ・Ａ・アルトゥール『少将』って。

第四十二話　作戦開始前（後書き）

はい、今回は以上です。
近いうちに事務員達４人も本格的にストーリーに混ざっていきます。
ただ、自分に書けるかどうか本当に微妙なんですが。

それでは、次回も読んで頂けると幸いです。

第四十三話　地下水道での一戦（前書き）

さて、少しずつオリジナル設定等がチラチラ出てまいりました。
多分ツッコミ等が多いかと思いますが。もうちょい待ってください。
キャラ設定等が出ますので、それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです

第四十三話　地下水道での一戦

――ｓｉｄｅ響――

「あー暗い」

「え、お兄ちゃんどうしたの？」

「ん、何でもないさ、ちゃんとギンガさんの報告聞けよ～」

「うん、わかった」

目の前を走るちびっ子もとい、エリオとキャロに軽い注意をする。まぁ、独り言呟いた俺が一番悪いんだけどね。さて、話を変えようか。ちょうど今さ。人造魔導師計画なんてものの話が出ていて。地上で保護した女の子が実はそうなんじゃないかって話の途中だ。

その言葉。人造魔導師計画って聞いた瞬間、全員が言葉を失った。まぁ、わからんでもないけどさ。

『これは、あくまで推測ですが……あの子は人造魔導師の素材として作り出された子供ではないかと』

「優秀な遺伝子を使って、人工的に生み出した子供に投薬とか、機械部品を埋め込んで後天的に強力な魔力や能力を出せる……それが人造魔導師」

ギンガさんって方の言葉を拾ってスバルが繋げる。……さすがは主席って所と思えばいいかな？

まぁ、それよりも。

「エリオ、後数分以内でガジェットくるから警戒を怠るなよー」

「う、うん。わかった」

歯切れが悪い、そして少し顔が青い。何かあるか、もしくは……やめよう。人間だもん秘密の一つや二つ持ってるもんだ。エリオが俺に言ってくれるまで待とう。それまで余計な事は考えないでいこうか。

［Ａｍｏｖｅｍｅｎｔ ｒｅａｃｔｉｏｎ ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ，ａｔ ｔｈｅ Ｇａｄｇｅｔ Ｄｒｏｎｅ.（動体反応確認。ガジェットドローンです）」］

「来ます！　小型ガジェット、８機！」

うん、なんか動いてる気配はあったし、『音』も聞こえてた。予想通りだな全く。

さて、と。

「ティアナ。俺はどうすれば？」

「え、あぁ、それじゃあ……前じゃ……スバルと被るわね」

あぁ、なるほど。そういや日頃の訓練だと、俺は震離よりも前に出てたからそれでか。

「あぁ、それじゃ俺はスバルの少し後ろ、エリオの援護をメインにやるよ」

「わかったわ、それでお願い」

「あい、わかった。頼りないかもしれんが宜しくな二人とも」

「は！？」「え！？」

……なんだよ、その何いってんのこの人はって感じの目は。仕方ないやん。俺の火力お前らよりも低いんだから。しかも刀なんてよく折れるし。最近震離に「折れる砕けるひび割れるの三拍子揃った刀だね」なんて言われて少し凹まされたし。

まぁ、それはいいや。

「二人とも前見ないとレーザー打ってきたぞー」

「っと！」「危な！」

戦闘中によそ見なんてしちゃいかんよー。二人が前にでて、俺もそれに続く。

そして、二人が倒しそこねたガジェットを切り落としていくという簡単な作業。うん、本当に強くなったなーこいつら。さて、怪我させないようにフォローに回りましょうかね。

――数分後。

「てぇやあぁあああ！」

スバルの一撃でガジェットが砕け散る。うん、やっぱりカートリッジがあって魔力が多いと強いね全く。

さて、周囲にガジェットの気配なし。ていうかやっぱ室内戦楽だわ。

無理に距離詰めなくてもある程度近いから楽だしね。ん？爆発は危なくないのかって？
その辺は大丈夫。震離たちみたいに無駄に魔力は使わずにただ切り落としてるだけだから、あんまり爆発しないんだよ。それでも一応気を使ってるけどね。

「空の上は、なんだか大変みたいね」

さっきから流れている通信の状況を聞いていたティアナがため息を漏らす。
それもそうか。遂に八神部隊長も前線に出て、その上リミッターの解除までやっちまったしな。
でも、まぁ。見せ札としてはもってこいだと思うけどな。一応存在感もアピールできるしね。
さて、と。

「キャロ、ケースのある場所はまだ先か？」

「あ、もうちょっと！」

うん、元気だね全く。と思いながら皆が先に進もうとした瞬間。聞き覚えのある音が聞こえた。
なんかこう、ローラーが走る音。早い話がスバルのデバイス、マッハキャリバーの音みたいなのがどんどん近づいていくる。はて、スバルは俺の前を走ってるけど、それとは別に聞こえる。
で、その音はこの壁の向こうから聞こえてくる。

「スバル」

「ん？」

「ギンガさんってお前のお姉さんって言ってたよな？」

「うん、そうだよ」

「そうか、だったら戦闘スタイルもスバルと同じと思えばいいか？」

「うん、同じＳＡ（シューティングアーツ）だよ」

「そうか分かった」

「うん？」

首を傾げるスバルを無視して。壁の前に立つ。うん、その間も絶えず向こう側からローラーの音は聞こえる。そして、その勢いだと……うん、やばいね！そう思った瞬間。刀を二本とも一度鞘に戻す。これやると絶対罅入るからやりたくないんだけどね。さて。

「二刀流。砕星」

「ん？どうしたの響？刀を直して、また抜いたりして？」

「あぁ、気にすんな。それよか離れてろ、危ないぞ？」

スバル達の側に移動して、少し離れるように指示する。うん、何いってんのって思われてるけどいいんだよ。なんて考えた瞬間。さっきまで俺がいた位置の壁が爆発して、炎が噴出した。

うん、予想通り！

粉塵が晴れると、そこには紫色の長い髪の女の人が立っていて、膝

から下と胸周りを守る装甲に黒いバリアジャケット。そして左手にはスバルと同じリボルバーナックル。うん、案の定壁ぶち抜いてきたよ。

「ギン姉っ！」

「ギンガさんっ！」

そう言って、スバルとティアナがギンガさんの元に駆け寄る。ちなみにギンガさんがぶち抜いてきた壁は……いや、壁だったものは綺麗に砕かれてるけど、ギンガさんの立つ位置、壁のあった場所は綺麗に壁がくり抜かれたようになっている。うん、誰も突っ込まなくて良かったよ。

まぁ、それよりも、だ。

「あー、感動の対面中申し訳ないんだけども、さ。俺は緋凰響、宜しくギンガさん」

「あ、こちらこそ、ギンガ・ナカジマです。呼び捨てでいいですよ」

「うん、宜しく。いきなりで悪いんだけどもさ。地下水路を破壊するというのはどうかと思うぞ」

「え！？」

あーうん、なんかギクッ！？って聞こえるような感じだったな。おおかた、この辺りが廃棄都市区画だったからぶち抜いたんだろうな。……マジで保険かけてよかったわ。

「まぁ、とやかく言いたくないけども。地下水路ってさ、その構造

上、何処かの柱が崩れれば連鎖的に壊れかねないからさ、次からは気をつけてな？」

「は、はい。申し訳ありませんでした……」

「あっはっは、気にすんな。あとタメ語でいいさ」

「うん、分かった」

うん、多分年も似たような感じだろう。階級が上だったら逆にアレだけど、多分大丈夫だろうな。

で、ギンガがエリオとキャロに挨拶してる間。刀を確認。うん、一本はまだ大丈夫だけど、もう一本に薄く罅が入ってる。

本当に、少し本気出したらこれだ。まぁ、今回はあんまり派手なの使えないし、目立ちたくなかったから使っただけって言うバチでも当たったんだろうな。あぁ、本当に。ちゃんとした刀がほしいよ。全く。

なんて考えてたら、皆俺置いて先に行ってました。正直に言おう俺このポジションなのかな？

最近本当にもう多すぎるんだよなーもう。

それで、追いついた頃には既に全員レリックの反応地点に到着してました。え、置いてかれて怒ってるんじゃないかって？

フフフ、それは無い。ただ、ちょっとガジェットの生き残りが居てただ切り刻んだだけですよ。本当に面倒なんて思ってないさ。うん、本当だよ？

「ありましたっ！」

「……俺何もしてねぇよ」

うん、今さっき着いて、空気読んで探し始めた瞬間なんだけどなぁもう。

まぁ、とりあえず。

「キャロ、ナイスー」

「うん、ありがとうお兄ちゃん！」

レリックの入った箱を持って笑顔のキャロの頭を軽く撫でる。

うん、いい笑顔ですな全く。スバル達も集合したし今回はこれで……。いや！何かが地面を蹴る音が聞こえた瞬間。俺はキャロの前に移動する。そして、刀を抜いた瞬間、俺の視線の先の空間が水面を叩いた時みたいに歪んだ。だけど！

「魔力弾程度で！」

歪んだ空間より、四つの魔力弾が飛んでくるけど、二本の刀でそれを叩っ斬る。

だけど、その瞬間、右の刀から鈍くて嫌な音が聞こえた。

持って後数撃。だけど左の刀はまだ持つ。だったら――

「まだいける！」

左の刀を鞘に戻して、右の刀一本で微かに歪んでいる空間目がけて、斬撃を撃ち放つ。同時に砕けたけど、斬撃は放てた。魔力を使ってない純粋の斬撃だ。当たればそれなりに痛い。だけど、斬撃が当たるよりも先に、地面に着弾して、粉塵が舞う。同時に歪んだ空間が移動したけど！

「エリオ！」

「うん！でやあああああっっ！！」

気合の咆哮と共に、歪んだ空間目がけて斬りかかる。
だけど、歪んだ空間の主もエリオ目がけて突っ込む。そして、エリオのストラーダの一閃。
そのまま距離を取って俺とキャロの前に着地した。

「くっ……！」

瞬間、エリオの頬から鮮血が飛ぶ。
正直、安直すぎたと後悔しそうだけど、それは後で今は目の前のことに集中しよう。
そして、辺りを舞っていた粉塵が晴れる。そして、俺達の目の前にいたのは。

「……人型甲殻虫……いや、この場合は召喚獣か？」

目の前にいたのは、全身が黒い人型甲殻虫のような人？だった。
そして、その人形甲殻虫の後ろには紫のロングヘアーの少女。年から見て、エリオとキャロと同じくらい。そして、両手に付けてるのはキャロと似たタイプのデバイスか？だとすれば……この子がアグスタの時の敵方の召喚者か？

なんて、考えてるうちに、その少女がこちらに左手を向けた瞬間。

「邪魔」

小さく呟いたと同時に魔力を放出。うん、いつだったか震離が言ってたな。

「放出した魔力を、圧縮したシールドなり、バリアを張れば一瞬だけ反発するけど、その一瞬で方向を変更すれば受け流せる、もしくは反射（リフレクト）できる」って。うん、やってみるか。

右の手の甲に圧縮したシールドをつけて。目の前に来た放出された魔力を！

「フッ！」

打ち払う！ぶつけた瞬間、反発作用で腕が弾き飛ばされそうになったけど、少し踏ん張って腕を振り抜く。すると目の前までに来ていた少女より、放出された魔力が向きを変え、腕を振り抜いた方へ飛んでいく。

「え！？」「わ！？」

後ろで二人が驚いてるけども……正直に言おう。二度としねぇ。

まぁ、とりあえずだな。

「その程度で、レリック奪おうなんざ、数年早いぜ？」

左の刀を抜いて、その切っ先を黒い人型甲殻虫と、紫の少女に向ける。うん、ちょっと罪悪感が半端ないね！しかも右手が凄く痛い。

普通に斜めにシールド張って受け流せば良かった。

でも、まぁ。ハッタリには十分だろうな。

さて、と。それじゃあ。

「やろうか？」

ただ一言、目の前に立つ二人へと声をかける。

だけど、人が格好良く。滅多にやらないことやって、キメたその瞬間に。

轟音とともに、天井が一部爆発して、抜けた。そして、天井が抜けたとほぼ同時に。

「会いたかったぞ、さぁぁぁぁあああむぅうううぅうううらぁぁぁぁあああいぃぃぃぃいいいい！！！！！」

っていう大声がホールに反響したんだ。

うん、そうだよ、こいつホテルアグスタの時の偽侍なんだけど、なんだけど。

アイツの声が聞こえて、黒い人？と少女の前に着地した瞬間。条件反射で口が動いちゃったんだよね。はっきりと。

「めんどくせぇのが来た！」

「つれないな、侍よ！」

「うるせェよ！」

だって、お前の登場で俺の後ろにいるエリオとキャロは口が半開きだし、スバル達もどうリアクション取っていいか分かってねぇじゃんかよ。だけど……まぁ。

「興が乗らぬ戦いだと思っていたが、まさか貴公と出会えるとはな、矢張り貴公と某は、死合をやるべき運命（さだめ）のようだな！」

目の前で俺に切っ先を向けて、べらべらと偽侍が何か言ってるけど、正直に言おうか。

――かなりまずいな。

第四十三話　地下水道での一戦（後書き）

ガリューの姿個人的には好きなんだけどなぁ。本当に。仮面ライダーぽくてｗ

さて、しばらくＦＷの面々に付き添う響さんｓｉｄｅですが、ちゃんと震離達も活躍します。それでは、今回はこれで失礼しますね。

以上ｋｙｏｎｓｉでした！

第四十四話　続・地下水道での一戦（前書き）

あい、再び更新を止めていて申し訳ありませんでした。先ほど、終わりましたので、とりあえず投稿いたします。明日からは出来るだけ更新していきますので、楽しみにして頂けると幸いです！

それでは、どうぞ楽しんで頂けると幸いです！

第四十四話　続・地下水道での一戦

正面には、黒い人型と、その主であろう少女。そして、アグスタの時に現れた偽侍の三人がそこにいる。
こちらの戦力は刀が一本折れた俺と、頬を斬ったエリオ、そしてレリックを持ったキャロと、スバルにティアナ、そしてギンガの６名。普通に考えれば二人一組になってあいつらを迎撃すればいいんだけども……。それじゃあヤバい。だったらやることは一つ。

（ティアナ）

（何、響？）

（あの偽侍は俺が抑えこむ。だから他の二人は任せてもいいか？）

（な！危ないわよ！それに二人一組でなら……）

（アイツ、流を戦闘不能にさせてるし、それに確実に奥の手も持ってるはずだ。それに俺らの作戦目標はあいつらと戦闘することじゃあないだろう？）

（……そうね。なら任せるけど、いい？）

（了解、任された。後レリックさ。どうにかしてたらいいと思うぞ）

（えぇ、ちゃんと考えてあるわ。それじゃ）

（あぁ）

ティアナとの念話を断ち切る。俺のやることはただ一つ。アイツを引きつけるただそれだけ。
そして、俺の装備は折れた太刀が一つと、薄い鰯の入った太刀が一つ。

うん。正直に言おう。今のこの状態で、今の俺がアイツに勝つためには。
限界の戦いをするしか無いよなぁ。だけど手の内を晒したくないとか言ってる場合じゃない。
一応、上司がリミット解除って言うカードを切ったんだ。こちらもそれくらいしても、問題ないな。

「侍！某は純粋に貴公との戦いを望む！だが、今の貴公の状態では話にならぬ！某は万全の貴公との戦いを望む！」

……万全じゃない、か。あっはっはっはっは。あぁ、あぁ、あぁ。
傑作だ。

笑えるほど、なめられたもんだ。

手足と一刀。これすなわち万全なり。俺が万全じゃない時、それは俺の腕が無くなった時を、大切な奴らを人質に取られた時を、俺が死んだ時を差すんだよ。

「だが、これも仕事！某は――」

「うるさい」

足に魔力を送り、一気に踏み込む。衝撃で地面が割れたけどそんなの気にしない。

今はただ。ただただ、黒い侍を抑えることに集中するだけだ。

「――ッ！よかろう！」

「チッ」

俺の踏み込みを寸の所で回避し、黒い人型と少女達と一気に距離をとった。だけど、それでも黒い侍は距離をとりつつ、俺から逃げながらも、自分の最適な距離を取り一気に仕掛けようと、踏み込んだ。

――面白い！

「鳴けよ血粋（ちすい）！」

［了］

アイツが構える刀より、短く機械音声が聞こえたと同時に、アイツの刀を中心に青黒い魔力が渦巻く。持ち手を変えたと同時に、下段の構えを取った。角度と、構えから、下方から斜め上に斬り抜ける袈裟斬りだ。その予感は正しくて、俺とアイツの刀がぶつかる瞬間。ただ、その瞬間に。刀を振りあげてきた、けど。

「ぬるい」

「なん――」

折れた刀で、アイツの振り上げた刀を受け止め、そのまま受け流す。受け流したと同時に、その折れた刀を投げ捨てて、アイツの前で足を広げて。腰を落とし、一気に魔力を両腕に集め、そして。

「翔舞激閃！」

両手の拳を、左手はアイツの仮面を、右手はアイツの腹目がけて撃ち放ち、吹き飛ばす。偽侍を吹き飛ばして、近くの柱を削って壁へと激突、崩れる瓦礫と巻き起こった煙の中へと飲み込まれた。

「……だめ、か」

右拳はまだ腹部だからこれといったダメージはない。むしろアイツの中から骨に罅が入る手応えが伝わってきた。だけど、問題は左手で。仮面を殴ったから、これといったダメージはアイツに入ってない。だけど、俺の拳にはダメージが入った。現に、仮面を殴った瞬間、拳から血が噴き出たし。

だけど、手応えから言ってもいい。まだアイツは余裕だろう。あんまりダメージ貰ってないし。さて、どうするかな。

「スターレンゲホイルッッ！！！」

……なんか、そんな声が聞こえたとほぼ同時に俺の背後が一気に明るくなりました。同時に爆音も聞こえて、耳が変になったけど、それは直ぐに治るから問題ないとして……。

ヤベェ、後ろが……エリオ達の所がスゲェ気になる。だってさ、あの紫の少女はそんなに声だ出さないだろうし、黒い人型は喋らないと思うしさ、正直のところ、俺が離れた瞬間、あそこ何があったし？凄い気になるけど、目の前の敵を放置して、振り向くとか怖すぎる……ってか。

「……何で出てこない？」

本気でそう思う。さっき吹き飛ばしたときに起きた煙はもう晴れた。そして、アイツが居るであろう瓦礫の山の形は変わっていない。正直な所。漫画みたいにフラグを立てた覚えはない。やったか！？とか思ったどころか、考えなかったし。むしろまだ余裕だろうとか思ってたしね。

「……へい、無事か偽侍！？」

うん、何処に敵を心配する管理局員が居るんだろうなぁとか思いながら声をかける。いやだって、死んでたりしたら、嫌だしね。というか、ここまで掛かって反応がない、そして、さっきの手応えの無さから考えると……。

「……逃ーげーらーれー、た？」

マジで？でも、ここまで反応がないのは、多分逃げられたんだろう。おそらく第三者の手で。

だって、あの偽侍。俺との死合を望んでたしね。だから、アイツの意思で逃げることはない。戦略的撤退って言って逃げるようなタイプじゃないし……うん、こりゃ逃げられたわ。

だったら、俺のこの仕事は終わった！次に行こう！

と思って振り返って、移動して、あいつらを見つけた瞬間。思わず口が動きました。

「うわちっせぇ！」

「んだと、ゴラァ！？」

いやだって、かっこ良く登場しようと思って、黒いヤツの前に割り込んでみたら、空に小さい人間が浮いてたら、そりゃねぇ？だれだって叫ぶだろうよ。

え、リイン曹長はって？あぁ、あの人。それなりに噂聞いてたから大体予測付いてた。だから驚かなかったし。だけど、敵側に援軍が来たって思ってそれが小さい人だったらだれだって驚くよ。

（響！撤退するわよ！）

（あいあい）

タイミングよくティアナからの念話が届く。まぁ、殿務めろって言われても余裕だって返せるから問題はないけどな。念話をきった瞬間。小さい少女？いいやメンドくせぇ、チビ子から、連続で火の玉を放たれ、それをひたすら避ける。たまに鞘を持って打ち返す。だって、さっき刀捨てて、もう刀一本と、鞘しか無いんだもん！

「アブね！」

「よっしゃ」

打ち返した火の玉がたまたまチビ子の側を通り抜ける。その一瞬の隙を活かして、直ぐにエリオ達の元へと向かい、合流。

「悪い、待たせた」

「お兄ちゃん、怪我してない？大丈夫？」

「あぁ、大丈夫だ、それよりキャロ、ちゃんとレリックの箱持ってろよ？取られたらアウトだから」

「え、あ、うん！」

心配そうな顔で聞いてくるキャロに返事をするけど、なんか歯切れが悪い返事だけど……まぁ、いいか。直ぐに振り返って、警戒態勢に入る。何時あいつらが追撃してきてもいいようにね！すると、黒い人型と、チビ子が二人揃って、俺らの前に立つ。

「こんのぉおおおおお！」

チビ子が自分の大きさよりも遙かにでかい火球を作り出す。そして、悟る。アレは面倒だなぁと。

「回避！！」

ティアナが鋭い声を飛ばし、それに従って俺達は全員思い切り後ろに跳んでそれをかわす。

こちらに向かってきた火球は、地面に着弾したと同時に、爆発。土煙と、爆音を上げ、下水を巻き上げ、それを周囲に撒き散らせる。

そして、直ぐ様ティアナに念話を入れる。

（どうする、俺が囮になろうか？）

（大丈夫！もう来るわ！）

（……え？何が？）

なんて思いながら念話を入れていると。

「っ！？　ルールー、何か近づいてきてる！」

瞬間、チビ子が天井を見上げて焦ったような声を上げた。
何かを探るように天井を見回した後、チビ子の表情に驚きが浮かんだ。

「魔力反応……でけぇっ！？」

「うおりゃあああああああっっっっ！！」

天井が抜けたとほぼ同時に、グラーフアイゼンを構えたヴィータ副隊長が現れたと同時に、黒い人型に殴りかかって、一気にふっ飛ばした。そして、服の影から、リイン曹長が現れて、右手を突き出し、そこに魔法陣を描きながら呪文を詠唱する。

「捕らえよ、凍てつく足枷！」

2人の足元から渦を巻くように風が巻き起こる。
チビ子と紫の少女は足元から突然巻き起こった風に戸惑い、自分の足元へと視線を移す。

「フリーレン、フェッセルン！！」

その刹那、巻き起こった風は一瞬で凍りつき、2人を包むような氷の繭を作り出した。
そして、リイン曹長と、ヴィータ副隊長が集まってから。

「よう、待たせたなっ」

「みんな無事で良かったですっ！」

って言ってるけども……正直に言っていい？ってか思っていい？
俺が居なかったあの一瞬で何がどうして、どれがこうなったんだ？

しかもヴィータ副隊長。いくらなんでも壊したら……って、いいやもうメンドくせぇ。
いいよ、もう。俺、はぶられてても気にしねぇよ。あ、涙出てきそうだ。

第四十四話　続・地下水道での一戦（後書き）

さて、ルーテシア達の名前を一度も使わなかったのは理由がありまして、一応響視点でやってるので知らないものは知らないで通していきますｗ
だから、響の中じゃルーテシアの事はルールーって言うんだって程度にしか捉えてません。今更なんですが、初期案では休みの日ということを利用して、響と震離、奏の三人をルーテシア達と合わせようと思ってたのになぁｗ

さて、少し長くなってしまいましたが、今回はこれで失礼します。
久しぶりに書くと、やっぱり思う。文才ないな、とｗ
それでは、失礼します。ｋｙｏｎｓｉでした！

第四十五話　流れが変わる（前書き）

視点変更が難しくて、今回は混乱する可能性が高いです……。

文才無くてごめんなさい。

それでは、楽しんで頂けると幸いです！

第四十五話　流れが変わる

――side響――

「……ちっ」

黒い人型をふっ飛ばして出来た瓦礫の山を見て、ヴィータ副隊長が小さく舌を打つ。
だけど、気持ちは分からなくもない。理由は単純で、おそらくは。

「こっちもです！」

「あぁ、逃げられた……な」

リイン曹長の言葉に返事をするヴィータ副隊長だけど、その表情はかなり悔しそうだ。
まぁ、分からなくもないけども……今やるのは正直面倒だから、これで撤退してくれると本気で助かる。
だって、俺もう刀は一本ないし、残った刀は罅入ってるし踏んだり蹴ったりよ？意味あってるかどうかしらんけども。

「っ！！」

急に地下水路全体が揺れた。んー……このレベルだったらおそらく長くは持たんな。

「……大型召喚の気配があります。多分、それが原因で」

「……召喚凄いな」

キャロの言葉を聞いて、本気でそう思う。だってあの少女キャロと同じスタイルだとは思ってたけども、地震起こすような奴を呼んだんだぜ？召喚使いって本当に凄いな。

「ひとまず脱出だ！スバル！」

「はい！ウィング、ロード！！」

ヴィータ副隊長の開けた穴へと、外への出口へ向かって、ウィングロードを伸ばす。

ん～、全員直ぐにウィングロードに向かってるってことは、もうやることは無い、か？まぁ、いいや。とりあえず。

「スバル、ギンガ、どっちかティアナを連れてくれ、俺はエリオとキャロとフリード連れるから」

「うん、分かった！ティア？」

「……気をつけなさいよ？」

「うん！」

おー、元気だねぇ全く。まぁいいや。

「フリードは頭に乗っかれ。とりあえず、二人に質問だが、前後に引っ付くとの、両脇に抱えられるのどっちが」

「僕が後ろで、キャロが前で！」

「……了解、さすがに両脇に抱えられるのは嫌か」

人の案を即効で断るエリオ。そして、なんか首を左右に全力で振ってるキャロ。

まぁ、正直なところ両脇に二人抱いたらキツイわ。

「それじゃあエリオ、キツイかもしれんが背中にしがみついて、キャロちょっとごめん」

「わっ！」

エリオが背中にしがみついたのを確認して、キャロを抱っこするけど。傍から見れば、お姫様抱っこだ。

だって、普通に抱えるとキツイし、ぶっちゃけるとこの体勢が一番楽なんだよな。さて、と！

「エリオ、一応きつくなったら言えよ」

「うん、分かった！」

さて、外へ向かって飛びましょうか！

ちなみに空を飛んでたらエリオとキャロが喜んでくれて、正直なところ。お兄さんちょっと嬉しかった。だってねぇ。まさか空飛んでるだけで喜ばれるとか思ってもなかったもん。

――ｓｉｄｅ震離――

とりあえず！久しぶり！メタ発言するなって？気にしないでね！
まぁ、簡単に今のというより、空の状況を教えようかな。

とりあえず現在の状況は、ガジェットＩＩ型の実機と、幻影の編成部隊が周囲に展開してて、それを残滅するために、わざわざはやてさんが前に出てきた。
それまではなのはさんと、フェイトさんがガジェットの相手をしてたけど、はやてさんが来たことで、二人をヘリの護衛に付けるっぽい。そして、私と奏はと言うとね。

「震離、集中してよ！」

「はいはい！」

私がヘリの前に出て、ガジェットを迎撃する。奏もヘリの後方で迎撃してる最中だけどね。
まぁ、ついさっき、ヘリの前後にガジェットが飛んできたんだけど。遠隔召喚による実機と幻影の混合編隊らしく、攻撃の通らないものもある。うん。めんどうだね全く！

まぁ、だけど。

正直なところ、この程度だったら今の私と奏で対応できる。それに少ししたら、なのはさんとフェイトさんって言う強力な戦力がやってくる。しかも海上じゃはやてさんが、ガジェットを殲滅中。
だけど、それでも。不安はぬぐいきれない。理由は単純で、簡単。

ヘリの中に座っている人物が居るから。

［アヤ・アースライト・クランベル］その人がそこにいる。今まで何もしなかった人が。急にこんなトコロまで出張ってきた。多分何か意図があるから出てきたんだと思う。多分なにかあるんだろうな。保護したあの子に、ううん、人造魔導師素体の少女に。

「まぁ、それでもッ！」

カートリッジを数発使って、目の前のガジェットをなぎ払い、進路を確保する。

今は、ヘリを守ることに集中しよう。うん、それがいい！

なんて思った瞬間、はっきりと分かった。凄い大きな魔力反応を。

――――――――

ちなみに、地下水路チームは、少女――もとい、ルーテシアと、融合機であるアギトの拘束に成功し、ここでヴィータが一言。

「子供苛めてるみてーでいい気はしねぇが。市街地での危険魔法使用、及び公務執行妨害。その他諸々で逮捕する」

その場にいた全員が、心の中で「あれ、ヴィータ副隊長って」と思ったとか無いとか……。

だが、その場に居るはずの響の姿が見えなかった。

そして、その響が居ない理由は、少し前に遡る。

――ｓｉｄｅ響――

んー、空の状況を聞いて、ガジェットの広がり具合、状況を確認して一つ思う。これ、いろいろまずくね？

「んー、ヴィータ副隊長？」

「ん？どうした？」

「このガジェットの布陣、どう思います？」

ヴィータ副隊長に、モニタを見せて、確認をさせてみるけども。なんか渋そうな顔したよこの人。なんぞ？

「管轄外だからわからん。で、それがどうかしたか？」

「わぉ、まぁ、とりあえずなんとなーく、やばい気がするので、ヘリの護衛に付きに行きますよ」

「あぁ？別に大丈夫だと思うぞ、私は」

相変わらず渋そうな顔で首を傾げるヴィータ副隊長。まぁ、普通はそう思うよね。俺もそう思いたいし。でもさ。

「ヴィータ副隊長、案外敵って何処に居るもんか分からないもんですよ」

「……気にし過ぎじゃないか？」

「あっはっはっは、気にし過ぎで俺の取り越し苦労だったら、笑い話になりますし。まぁ、保険だと思ってくださいな」

まぁ、実際その通りだったら、隊長陣からの不信感が増えるだけだし大した事じゃあない。
ここ数年、一部の人達以外に信用なんてされてなかったしね。信用されないことに慣れてるし。
まぁ、そんなことは後でもいいや。

「それじゃ行ってきます。まぁ、俺でも肉壁くらいにはなるでしょうし」

「わかった、まぁ、気を付けろよ？」

「はい、それでは！」

ヘリの位置を確認して。足に魔力を送って、いざ、参ろうかッ！

――ｓｉｄｅナンバーズ――

空を飛ぶヘリから離れた廃棄ビルの屋上に、人影が２つ。
１人は白いマントを羽織り、もう１人は茶色いマントに、何か筒のようなものを包み込んだ、同じく茶色の布を持っていた。

「ディエチちゃ～ん。ちゃんと見えてる～？」

「あぁ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える。護衛の魔導師が１人いるみたいだけど、問題ないと思う」

と話す二人、一人はＮｏ．４、名をクアットロ。
大きな丸い眼鏡が特徴で、白いマントを羽織る。
一人はＮｏ．１０、名をディエチ。
茶色の長髪、それを薄黄色のリボンで結われていた。

「でもいいのか？クアットロ。撃っちゃって？ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は、破壊しちゃうことになる」

「ウフフッ。ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当りなら……本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫。だそうよ？」

「ふ～ん……ま、どうせ当たらないし……」

そう言うと、ディエチは持っていた布をはぎ取る。
中から出てきたのは、ロングバレルの砲撃機。

「まぁ、そうね……あら？」

瞬間、クアットロの方には、彼らの姉であり、？？である。ウーノから連絡が来ていた。

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あ～ぁ。そう言えば例のチビ騎士に捕まってましたね～？」

『今はセインが様子をうかがっているけど』

「……フォローします？」

『お願い』

「はぁ～い」

薄ら笑いを浮かべながら、ウーノからの通信をきり、即座にセインと呼ばれる人物へと念話を繋げる。

（セインちゃん？）

（あいよ～クア姉）

（こっちから指示を出すわ。お姉様の言うとおりに動いてね？）

（ふ～ん了解～）

そう言うと、地面がまるで液状化でもしているように、地面から腕が出てくる。
その一本の腕はヴィータ達のいる橋の下の地面から伸びていた。橋の上ではルーテシアに対する簡易尋問が為されている。すると、ルーテシアに向けて念話がはいる。

（は～いルーお嬢様）

（クアットロ？）

（なにやらピンチのようで？お邪魔でなければクアットロがお手伝い致します）

（……お願い）

（はい～。ではお嬢様？クアットロの言うとおりの言葉を……その紅い騎士に）

楽しそうに、それでいて嬉しそうな、悪魔のように気味の悪い笑み

を浮かべながら彼女は念話を続けた。

――ｓｉｄｅ――

「見えた！」

「良かった。ヘリは無事」

その安堵もつかの間、市街地での反応をなのはとフェイトは察知した。

それはロングアーチも捕捉していた。

それはビルの屋上、大型ライフルの狙撃砲を構えたディエチだった

……

『市街地にエネルギー反応っ！お、大きいっ！』

『そんな、まさかっ！』

その力は、遠方にいたはやてにも感じられるほど強く。ヘリのそばにいる震離と奏もその力に警戒を強める。

『砲撃のチャージ確認。物理破壊型、推定Ｓランク！』

その通信を聞くや否やなのはとフェイトは顔を見合せた。

「フェイトちゃん！」

「うん！」

更に勢いをつけて、ヘリへと向かう二人。

それと時を同じくして、廃棄ビルの屋上では、先ほど姿を現した砲撃機がチャージを行なっていた。

「インヒューレント・スキル。『ヘヴィ・バレル』、発動。」

それに合わせて、橋の上に居るルーテシアを介して、クアットロはヴィータへと話しかける。

（逮捕はいいけど）
「逮捕は、いいけど……」

その言葉に、反応するヴィータ、リィン、ギンガ。だが、ルーテシアの言葉は終わっていない。

（大事なヘリは、放っておいていいの？）
「大事なヘリは、放っておいていいの？」

「！？」

その言葉で、ようやく気づき、血の気が引く。
ヘリが、撃墜の危機に瀕していると言うことを。
だが、クアットロは更に言葉を続ける。

（あなたは）
「あなたは」

（また）
「また」

（守れないかもね）
「守れないかもね」

その言葉に、ヴィータが激しく反応する。
瞳は激昂し、明らかな動揺の色が見える。そして――

「――発射」

大気を焼き切るように貫き、瞬神のごとき速度で飛来する砲撃はヘリを捉える。
その刹那、ヘリのあった場所を、轟音、そして爆風が上がった。

第四十五話　流れが変わる（後書き）

さて、ここまでと、あとすこし先までは原作通り行きますよっと。

さて、ここで……死にたくなるほど残念な報告が……。

なんか、Ｒ－１８を書くハメになりました……わー。

理由は単純で友人とアイス掛けてたはずが、なんか摩り替わってこうなりましたwあ、字間違えた……いいや。

さて、今回はこれで失礼します。細かいことは活動報告でやってるので目を通してくれると幸いです。

それでは次回も読んで頂けると幸いです！

第四十六話　読み違い（前書き）

すいません、すいません更新が遅れてしまって本当にすいません。

たった二千三千くらいなのに、更新が遅れて本当に申し訳ありません。

それでは、今回も楽しんで頂けると幸いです。

第四十六話　読み違い

――ｓｉｄｅ響――

実機と幻影の複合部隊。そんなことできる能力者が居るとかまじでびっくりだよ。

だってそうだろう？少ない部隊を何倍にも多く見せることができる。それで弱そうな機械でも、物量という力を得る。いやいやマジで凄いっすね。

――――でもまぁ。

「悪巧みは一流。だけど人の上に立つには三流だな」

実際そうだ。この周辺の実機と幻影の複合部隊のそれぞれの位置を確認したとき明らかに変な点があった。あの保護した女の子を乗せたヘリが狙われるのは分かる。あの子になんかあるんだろうし、多分だけど。まぁ、それは後でもいい。話を戻そう。

俺の言った変な点。それはこの辺一体に複合部隊がいるにもかかわらず、その点だけ……いや、細かく言えばそのとあるビルだけ、複合部隊が、ガジェットが一機もいないんだ。

いやまぁ、たまたまって言われたらなにも言い返せないよ。だけど、地図を確認したときもう一つ確認したことがあるんだ。幻影が出た直後と、現在の状況を確認したんだ。だから結構自信がある、俺の向かってるビルの屋上に何かがいるか、もしくは何かがあるか……ってね。

で、それが当たってたわけなんだけど……なんだけど。

『市街地にエネルギー反応っ！お、大きいっ！』

『そんな、まさかっ！』

当たってたけど……ちくしょう！結構マジで急いでんだけど、間に合いそうにねぇよ！

だけど、ヘリの側にはあの二人がいる。だったらまだ……なんとか……！

『砲撃のチャージ確認。物理破壊型、推定Ｓランク！』

いや、リミットがかかってなかったらまだ行けるはず。だけど、今の二人じゃ……ッ！

間に合えよ――――！

そう思って、ビルの屋上に飛び乗って、もう一度踏み込んで翔ぶ。

その瞬間。

「っ、見えた！」

その言葉を発した瞬間に。目指した屋上の上に二人居るのを確認する。一人は白いマントを羽織った奴と、もう一人は空をとぶヘリに向けて銃口を向けてる奴の二人を。

だけど、その瞬間、砲撃は撃ち放たれて、ヘリのあった場所を、奏の居るところが爆発したんだ。

――ｓｉｄｅ――

砲撃が放たれる瞬間、海上にいたはやては、直ぐに限定解除許可を行った。解除したのはヘリのそばにいる奏と震離ではなく、ヘリに向かっているなのはの限定を直ぐ様解除した。
確かに、スピードならフェイトの方が上で、ＡＡＡとＡＡの二人でも止めれる可能性は高い。しかしあの砲撃を確実に止めるとなるとなのはクラスの防御能力がないと辛いのだ。
そして――

『砲撃……ヘリに直撃……？』

『……そ、そんなはず無いっ！状況確認っ！』

『ジャミングが酷いっ。確認できませんっ！』

ロングアーチの面々から、悲痛な声が聞こえる。同時に寸前までヘリの側にいた二人の反応もかき消えている。直撃する瞬間、そこにいたのは、ヘリの中にいたヴァイスにシャマルにアヤ。そして、あの少女。
更にヘリを護衛していた震離と奏の二人だ。

だが、ヘリの護衛をしていた奏と震離は、リミッター付でＡ。到底あの砲撃を防御できるとは思っていなかった。だからはやてはなのはの制限を取り外した。

そして、爆煙が晴れていき、同時に映像が回復する。
煙が完全に晴れたとき、そこにいたのは――

「ロングアーチへ、こちらスターズ０１。ギリギリでヘリの防御、成功！」

と声を発するのは、限定を解除し、普段のバリアジャケットとは違う格好であり、なのはの限定解除状態である『エクシードモード』の姿で、ヘリを守ったなのはの姿がそこにはあった。そして、なのはの後ろで、二人合わせて何重にもシールドを重ね、なのはの姿に唖然となっている奏と震離の二人の姿がそこにあった。

そして、砲撃を撃った二人はというと。

「あらら……」

「わかっていたけど、やっぱり止められると悔しいね。クアットロ、予定通りお願い」

「うふふ……まっかせなさい！」

「逃がすかよッ！」

と、これから逃げようとする二人に無数の黄色い光弾と、斬撃が雨のように降り注いだ。

それに気付いたクアットロとディエチの二人は、屋上から瞬時に離れるとそれをかわす。

一人は飛び跳ねながら、一人は飛行をしながら逃げようとするが、速さに置いてはフェイトの敵ではない。

ヘリを守り、こちらに向かってきたなのはと、独自の判断で二人を追ってきた響の三人で追い込み、魔力弾で完全に包囲する事に成功した。

――ｓｉｄｅ響――

「そこまでです！　大人しく縛につきなさい！」

「騒乱罪と質量兵器使用の罪で逮捕します！」

死ぬほど急いで、相手二人を捕捉したけど、それよりも先にフェイトさんが付いていて正直かなり焦った。理由は単純。俺へボすぎるだろうって事で。まあ、それは置いといて、今、俺の目の前で高町隊長と、ハラオウン隊長の二人の魔力弾が、白いマントを羽織った、メガネの奴と、狙撃手らしい二人を取り囲んでる。

だけど、確実にあちらのほうが不利なのに、メガネの奴は余裕有りげだ。何だ？

「あらあらぁ。ヘリから離れちゃっていいのかしらぁ？」

……まさか！

そう思った瞬間、ヘリの側にいる二人に念話を飛ばす。

単純に、誰か襲撃をかけにくる、警戒を！って。だけど、俺の思考を呼んだのか、メガネを掛けた奴は俺を見て、笑いながら言った。

「仲間がいるのは確かですけどぉ、誰も「外」からとは言っていませんよぉ？」

聞いた瞬間、ヘリの方を振り返る。俺の念話を聞いた二人がそれぞれヘリの前後に回ったのを確認したと同時に、二人が見ていて寒くなるような、青い誰かのバインドで縛られる。そして、六課のヘリは轟音を上げて爆発、四散した。

「そ、そんな……！！」

「策は常に二重三重に用意するものですわよぉ？」

「くっ……なんて事を！」

後ろで笑い声をあげながら話すメガネの言葉を聞きながら、直ぐに悟る。本気で甘かったと。

煙が消えたところに二組の人影があった。それは。

「良かった、シャマル先生とヴァイス君も無事で、アヤさんがあの子を抱えてる！」

煙から出てきた二組の影は、それぞれヴァイスさんを背中から抱きしめて浮いているシャマル先生と、少女を抱き上げているあの人の姿があった。

そして、高町隊長から喜びの声が上がる。あの人が守ってくれたと思ってるから。だけど、違う。

アレをやったのは……ッ！

「アヤ・アースライト・クランベル！てめぇ、自分が今なにやったのかぁぁあ、分かってんのかぁあああ！！！！！」

自分でもビックリするくらいの声が出た。

そして、少女を抱き上げながらあの人はほほえみを浮かべながら――

「えぇ、たった今ヘリを中から壊しちゃいました♪」

楽しそうに、嬉しそうに、狂ったような瞳で、狂ったような笑みで、たった一言それを発した。

第四十六話　読み違い（後書き）

キャラ人数を多くしたのはいいんですけど、やっぱり描写が甘くなってしまう……本当にすいません。震離出せよって方もいるかも知れませんが、ちゃんと出てます、申し訳ない程度ですけども……

それでは、次回も読んで頂けると幸いです。

第四十七話　己のミスと、追い込みと。

――ｓｉｄｅ響――

ぁぁあああああ……、生まれて初めてだ。ここまで、ここまでコケにされたのは……ッ！！！

あのアマ、最初っからスカリエッティ側と手ぇ組んでやがったか。だけど、どうする。奏と震離はバインドで縛られてる。あぁ、あぁ、あぁ。マジで己が嫌いになりそうだ　。でも、どうする？ここから「全力」で、飛べばアイツに一撃位食らわせられる。だけど、それをしたら　今度はあのクソメガネを取り逃がす。理由は単純、うちの部隊の両隊長が本気で現状を理解してないから　。あぁぁあああ、少しでも、隊長陣との俺らの信頼を回復させときゃ……あの二人でも十分に、いや、カウンター食らわせる位のこと出来たのに……。俺のミスだ……ッ！！！！

「うっふふのふ～、ほんと、こんなにも上手くいくなんて、管理局はなんて馬鹿な連中なんでしょう」

「……」

あぁ、そうだよ。管理局員だって人間だもん。ミスの一つや二つ余裕でやるよ。

でも、でも、この状況を打破するには、どうしたら良い！？あのアマ捕まえるのは最悪無しでもいい。あの子を奪還することが大事だ。理由は単純。レリック持って、ガジェットの追われて、さっきみたいに狙われてんだ。何か持ってるんだろう。ヤバい何かを。だけど、だけど！

（響！！）

「なんだ……って、え？な……え？」

（とりあえず、理由とかいろいろ後で言うけども！どう動けばいい！？全員もうすぐそばまで来たよ！）

え、ちょ、落ち着け。急に念話で話しかけられて、かなり焦る。理由は単純。お前ら今魔力にリミット付いてんじゃなかった？いや、落ち着け。全員来てるってことは……最悪あの子を奪還できるんじゃ……。

（了解分かった。全員ランク的には、どれくらい？）

（大凡全員Ａ位、緊急だったから全部まで外せなかった。で、どうしたら良い？）

（分かった、それだけあったら十分だ。最重要目標はあの子の奪還、そして、余裕があればアイツの確保。指揮は全部任せる）

（あいあい、分かったよ。他にはなにかある？）

（全員に言ってくれ。曲形にもＳランク。絶対に死ぬなよって）

（了解。それじゃあそっちも頑張ってね。大将？）

（そっちも気をつけて）

そう言ってから念話を切る。そして、熱くなった頭が一気に冷めていく。まぁ、それでも自分が色々駄目　すぎて笑っちまいそうだけ

どね。さて、と。俺の今の装備は、罅入った刀と、鞘。うんこんだけあれば上等だな。うっしゃ。

「おいメガネ」

「あら?あら～、どうしてかしら、いや～な予感が……」

「ご名答。あそこは置いといて、お前らを捕まえるさ。必ずな」

「……それは遠慮します～、今日のところは！」

そう言いながら、茶色の長髪の子?を打き抱えて空を飛んで逃げる。馬鹿だなこいつら。二手に別れりゃ、茶色の長髪の人は逃げ切れたかもしれないのに。いや、まだ何かあると考えればいいな。

「追いますよ、高町隊長、ハラオウン隊長」

「で、でも！」

「目先の事を片してからやりましょう。それに大丈夫ですよ……って、信用されてないから聞いてくれませんよね」

「ッ！行こう」

「了解です」

よしよし、少し嫌味を込めていってみる。まぁ、後ろは大丈夫だ。え?何で大丈夫かって?それはおいおい分かる……って。思った瞬間再び念話が。

（奪還成功！これより捕まえにいくね！）

（やばいと思ったら、直ぐ逃げろ。それじゃ！）

（あいあい）

再び念話を切る。たった数十秒で奪還するとかやっぱすごいなあいつら。そう思って、あの人と震離と奏の居るところに視線をやると、砲撃やら、槍やら、電撃、炎、そしてなんか虹まで出来てる。うん、あっちはあっちで問題ないな。さて、と。

「止まりなさいっ！市街地での危険魔法使用。及び殺人未遂の現行犯で、逮捕しますっ！」

「きょ、今日は遠慮しときます～っ！Ｉ・Ｓ（インヒューレント・スキル）発動っ！『シルバーカーテン』！」

メガネがそういった瞬間、あの二人の姿が掻き消える。ティアナのオプティック・ハイドのようなものか？まぁ、何にせよ。あのタイプの逃げるルートは分かりやすいから、楽だな。

『位置確認、詠唱完了っ！発動まで、後４秒っ！』

「了解っ！響！」

「え？」

え、何事と思った瞬間、市街地の上空に別の魔力反応を感じる。あぁ、なるほど八神部隊長の魔法か。なんて考えてたら、既に高町隊長と、ハラオウン隊長は追跡を一旦やめて、離脱してた。いやいや、

ギリギリまで引きつけないとバレるだろうに……まぁ、一応上司だから従うけども。

一応離れて様子を見ると、上空に出来た丸い黒い玉が一気に辺りを飲み込んでいく。

そして、幻術張りながら、逃げるのがキツイのか、幻術を解除して全力であの魔法から離脱した、あの二人の姿があった。だけど――

「（投降の意志なし…逃走の危険ありと認定）」

「（砲撃で昏倒させて捕らえます）」

うわぁ、通信で聞こえたから素直な感想を言おう。バルディッシュさんはともかくとして、レイジングハートさん。砲撃で昏倒させるって……あぁ、だから、今のなのはさんになったのかぁ。納得納得。

なんて思ってると。あの二人の前方にフェイトさんが、そして後方にはなのはさんが。そして、２人の砲撃準備が整う。うん、あんなのに挟まれたら死ぬほど怖いな。だけど、さすがにもう切れる手は無いのか、二人とも砲撃に身構えてる。

かに見えた。

「トライデントッ！」

「エクセリオンッ！」

「スマッシャーッ！」「バスターッ！」

両隊長の二つの砲撃が互いにぶつかり合う。だけど、ぶつかるより

も前に確かに見えた。あの二人が急に空を見上げたのを。そして、ぶつかる前に何かが回収したのを！

『やったっ！ビンゴッ！』

「……じゃない、逃げられたっ！」

『『えっ！？』』

「直前で、救援が入ったっ！」

「アルトッ！直ぐ追ってっ！」

『は、はいっ！』

そう言って追跡を始めるけど、うん。はっきり言おう。ありゃ駄目だ。既に離脱された。

うん、追おうと思えば追えるし、逃げた位置も確認できるんだけどはっきり言おう。多分無理。おそらくこっちも第三者の手で逃げられるだろう。召喚使いが居るんだ、逃げることくらい訳もないだろうし。

（響）

（ん、終わった？）

（うん、女の子を奪還して、一応手傷は与えられたと思う）

（うん）

（でも、逃げられた）

（そっか。それで？誰も怪我とかしてない？）

（うん、誰も怪我してないよ）

（そっか。ならいいや。お疲れ様。悪いな面倒な役やらせて）

（ううん、響こそ）

念話でそう言ってから、念話を閉じる。うん、今晩面倒だよなぁ。いやいやだって、さっきから、俺が念話してた相手って、一応六課の事務員の雪奈だし。

「響」

「……なんですか高町隊長、ハラオウン隊長？」

「知ってること。全部話してくれるよね」

「あっはっはっは。何処から話せばいいのやら。まぁ、六課に帰ってからゆっくり話しますよ。俺のいや、俺らの知ってることを」

「うん、お願い」

さて、どっから話せばいいのやら。めんど……いや、逆か。これで、これであいつらが自由に行動できるようになったんだ。それを喜ばなきゃな。今後のこと考えると面倒だけど……さ。

第四十七話　己のミスと、追い込みと。（後書き）

はい、次回は響ｓｉｄｅではなく、震離達側。早い話が少女、もといヴィヴィオ奪還編です。だけどリアルタイムでの時間と会話量が噛みあいそうにないです……

それでは、次回でこの戦いは終わりでそのつぎからは、あらすじの皆を守るために～、っていう説明が入ります。

それでは、今回はこれで失礼します。そして、次回も読んでいただけると幸いです！

第四十八話　数分間の奪還と、攻撃を。（前書き）

視点変更してても、各々を動かすのがこれ程キツイものだと思ったのはもう無い。というか、多分複数戦はこれ以降ない気がしますｗ

それでは、どうか今回は分かりにくいかもしれませんが、楽しんでいただけると幸いです！

第四十八話　数分間の奪還と、攻撃を。

――ｓｉｄｅ震離――

（誰か襲撃をかけにくる、警戒を！）

「震離！」

「分かってる！」

響からの緊急の念話を聞いて、直ぐに警戒態勢に入る。ついさっき、砲撃がこっちに向けられたとき。本気で思った、リミットを外せば余裕で防げるって。奏もいるしね。

だけど……。信頼されてなかったみたい。まぁそうだよね。たった数ヶ月の信頼よりも、数年の信頼のほうが圧倒的に強い。それも「エース・オブ・エース」なら、尚更だ。

いや、今はそんな事考えてる場合じゃない。今は！

そう思って身構えた瞬間。急に両腕が拘束されて、バインドで縛られた。

何処から――って思った瞬間。私の背後が一瞬明るくなって、爆発音が響いた。

「え、なっ！？」

「何で！？」

ヘリの後方を警戒してた奏もバインドで縛られてる。そして、その

バインドの色は見ていてゾッとするくらい深い青色。それに気を取られているうちに、爆煙が晴れていって、そこにいたのは二組の人物。片方は、ヘリを操縦してたヴァイスさんと、それを抱えるシャマル先生。そして、もう一組が、あの保護した女の子を抱いてるあの人。

「アヤ・アースライト・クランベル！てめぇ、自分が今なにやったのかぁぁあ、分かってんのかぁあああああ！！！！！」

遙か向こうにいるにもかかわらず、響の声がここまで届いた。そして、その声を聞いたあの人は静かに笑みを浮かべて、一言。

「えぇ、たった今ヘリを中から壊しちゃいました♪」

見ていて小凍えそうになるくらいの笑みで、狂気にまみれた瞳でたった一言。その言葉を言い放った。

――正直まずい。

あの子が相手側に取って何か大切なモノを、情報か何かを持ってるんだろうなって言うのは薄々気づいてた。だって、人造魔導師って言ってたし、多分そういう関係で。だから、相手にあの子を渡すのはかなりヤバい。だけど、どうしよう。奏も私もバインドで縛られてて、シャマル先生はヴァイスさんを抱えてるせいで、今は戦闘はできない。仮に出来たとしても。シャマル先生のスタイルは後方支援型。はっきり言って、あの人とでは、相性が悪すぎる。でも、どうしたら？

いや、このバインドを解析すれば。それじゃ駄目だ、時間が足りない。その間に逃げられる。

「さて、私もそろそろ失礼しますね？あぁ、そうそう。叶望さん、天雅さん。今までご苦労様。あなた達の情報はあまり役に立たなかったけど、それなりに使える良い駒だったわ」

悔しい悔しい悔しい！！！！目の前にいるのに！響と奏を苦しめてた奴がそこにいるのに！

何も出来ない！何も、何も！！！

「あら、女の子が簡単に涙を見せちゃだめですよ？」

自然と涙が溢れる。理由は単純。悔し涙だ。私の大好きな親友を苦しめてた奴に何も出来ない自分が悔しい。でも、でも！

（震離、奏？５秒後にバインドを解除するから、震離はあの人に突っ込んで、奏は一旦下がる。分かった？）

（え、ちょ、え！？）（雪奈！？何で！？）

急に繋がった念話に驚く。だって、今はアイツにリミット付けられてる雪奈からだもん。正直なところ。凄く、かなり、びっくりしてる。だけど、そんなこと考えてるうちにカウントはどんどん減って行って、そして。

「それでは……えっ！？」

転移魔法でも発動しようとしたのか、魔力を貯めようとした瞬間。私と奏のバインドが解き放たれ、同時に真っ直ぐ私はアイツの元へと踏み込む。だけど、そっから先はなにしていいのかわかんない。だって雪奈ってば、私に突っ込めってしか言ってなかったし。

「くっ！クライシス！」

［Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．］

「くぅう！！！」

カートリッジも何も使用しないで、杖を槍替わりに、ただ真っ直ぐ突っ込んだだけだけど。アイツは分厚い氷のシールドを展開した。普通のシールドに自分の魔力変換を用いてシールド張るとか、さすがはＳランク。私の考えが甘かったよ！

「さすがは、天才、と呼ぶべきかしら？」

「い～え、私なんてただの小娘ですよ」

シールドを挟んで、少しの会話。正直何時もと違って感情を偽らなくてもいいからすごく楽。

だけど、このままだと、出力とか色んなもので私のほうが負ける……！

「でも、ここまで」

「ッ！？」

私の背後に青色のスフィアが４つ。まずい。このままだとかわしきれない！

って思った瞬間。

「避けろよ震離ちゃん！」

「え！？」「っ、了解！」

その言葉を聞いた瞬間、一気に真上に向かって、急上昇。それと同時に、アイツを左右から挟んでからの……！

「三十三閃……ッ！」

「神道無限流・槍牙、二十七閃」

「斬葉（ざんよう）！！！」「烈風（れっぷう）！」

アイツを挟んで、左方から槍を持った煌の強力な一撃が。右方から二槍を持った優夜の連続突きを。

とっさのことで、少女を抱いていた両手でそれぞれシールドを張って自分の身を守ってるけど……って、あの子落ちてるし！

「瑞希、回収したら、シャマル先生と一緒に撤退。いいね！」

「了解！皆気をつけて！」

真下で待機してたと思う瑞希が、あの女の子をなんとかキャッチして、急いでその場から離れていく。

さすが瑞希。気配隠すのが上手い……ううん、この場合雪奈も協力してるから全然気づかなかった。

って、そんなこと考えてるうちに。

「さすがは、攻撃の主力……強いですねッ！」

「アッハッハ！褒めても何も出ないぜ！」「嘘つけ！」

なんて話してるうちに、急に弾けるように二人がアイツから離れた。いや正確には離れざるを得なかったんだ。あの二人の槍の先端が氷で覆われてる。さっきまではなんとも無かったのに、だ。

早い話が、あのまま続行していたら……二人が凍りづけになってたっていうことだね。

「さて、どうして。あなた達四人がこうして魔力を使えるのかしら？」

「あっはっはっは、馬鹿ですね。一年半有ったんですよ？非公式のリミッターなんて余裕で外せますよ」

「そう。でも私に勝てるとでも？」

「いえいえ、そうは思いません。でも私達の最大の武器は！」

雪奈の言葉と共に。なんか皆の視線が合った。あ、なるほど。ならば一緒に言おうじゃないか！

「策略！」「情報！」「努力！」「根性！」「才能！」

「……え、今なんて？」

「……」「……」「……」「……」「……」

「はぁあああ！？」

ちなみに、左から順に、雪奈、優夜、奏、煌、私の順なんだけど。

少し位合わせに行こうよ！
でも逆に言えば、別の意味で相性が良いってことかな……？

――ｓｉｄｅ雪奈――

自分から振っといてなんだけどもさ、正直。ここまでばらばらになるとは。
うん、凄い面白い！
まぁ、それは置いといて……うん。

「さて、兎にも角にも、優夜、アイツを倒せる自信ある！？」

「さぁ、どうだろ。訓練用のデバイスで、完全にリミットを外せたわけでもない。そして、調子もいいってわけでもないからな」

「だよねぇ」

「でもさ、雪奈さん？Ａの５乗は大凡Ｓ位にはなるだろう、違う？」

「そうだね煌、でもいけるの？」

「行けるさ。いつだって前に出るしか俺には脳がないからな」

「そう……」

笑いながら話す優夜と煌。正直、何時も事務員の仕事してる時とは比べものにならないくらい生き生きしてる。まぁ、分からなくもないよ。だって、久しぶりに空を飛んでるんだもん。魔力を使って戦闘できるもん。特に二人にとっては、「あの人」と一緒に戦えるこ

とが嬉しいんだろうし。

「雪奈、指示してもらってもいい？」

「勿論。とにかく、いつも通りの布陣で！」

「了解！」

「それじゃスタート！」

私の指示と同時に、全員がバラバラに動く。さて、と！

「荒れ狂う流れよ！かの者を包み、かの者を切り刻め！」

「水の……ドーム！？」

私オリジナルの呪文を詠唱したと同時に、空気中に存在している水蒸気を集め、アイツをドーム状に囲み、そして、中にいるアイツを目がけて、無数の水の刃を撃ち放つ！

「だけど、まだ！」

そう言って、アイツの手に手のひらほどの刃渡りのナイフが現れたと同時に、私の作った水球はまるで風船みたいに割れた。

「さすがに、効かない、か」

「フフフ、その程度……ッ！」

私に視線を合わせながら話した瞬間、もう一度あの人の左右に優夜

と煌が直ぐ側まで接近する。そして、そこから一気に！

「うぉおおお！！」「はぁあああ！！」

「ッ！くぅうう！」

二人で挟んで攻撃してるにもかかわらず、アイツは両手でシールドを張って受け止める。いくら何でも、やり過ぎでしょうに！でも、まだまだ！

「震離！」

「勿論！やぁぁぁぁあああああ！！」

がら空きの正面から震離が杖に大きな魔力刃を作って、斬り込む。さすがにこんどこそ！って、ええ！？

「ナメるなぁ！！！！」

「うぉおお！？」「何ぃ！？」

両手に張ったシールド越しから、砲撃を撃ち放って、優夜と煌を引き離して、正面から斬り込んできた、震離の魔力刃をナイフで受け止めた。

何よアレ！いくらSランクだからって、やり過ぎでしょう！

「くぅううう！！！奏！！！！」

「了解、ターゲットロックオン。ファイアリングロック解除！吼えよ！ハウリング・ムーン！！！！」

空高く舞い上がった奏が、アイツに向かって、二丁のライフルの銃口を向け、その銃に魔力を限界いっぱいまで注ぎこむ。そして、それを圧縮、集中させて、一気に撃ち放つ！

「くうぅう！てぃ！」

「な、く……ッ！」

あの人とつばぜり合いをしてた震離は、魔力刃を解除したと同時に、一気に離脱。同時に、無数のスフィアを散布して、アイツが逃げられないようにした。そして、そのまま……。

「あ、ぁぁぁあああ！！！」

寸前にシールドを張ったけど、全力の奏の砲撃を受けて、その場を爆発が包んだ。うん、さすがは奏だね！

って、空高くにいる奏に向かって言おうとしたら。

「ッ！手応えが軽い……逃げられた！」

「えぇ！？」「嘘ぉ！？」

私と震離が同時に声をあげる。だって、あんな砲撃をくらって、何でまだ……？

なんて思って、爆煙が消えるのを待っていたら……

「……居ない、逃げられた……？」

「……だね、詰めが甘かった、ね」

どうやってあの場から逃げたのかは分からない。一応曲形にもSラン
ク、これくらい出来るだろうし。でも、あのままもし、奏の一撃
を防いで、まだ戦闘を続行するようなことがあったら……。ううん、
やめよう。奏も、震離も、優夜も煌も、万全な状態じゃないとは言
えここまでできて、誰一人欠けなかったじゃない。それだけでもい
いことだよ。

「雪奈？」

「ん、どうしたの奏？」

「ほんとうにありがとう、助かったよ。正直私と震離だけだとあの
人を逃げしてただろうし」

「うんうん、そうだよ。本っ当にありがと！」

いつの間にか私のそばに来てた奏と震離。ううん、お礼を言いたい
のは私の方だよ。いつも通りの布陣なんて言ったけど、正直何の作
戦も思いつかなかったのに合わせてくれたんだもん。それだけで十
分だよ。

「でも、雪奈、どうして急に？」

「うん、それ今晩にでも六課の皆に話すときに話すよ。結構凄いこ
とになってるし」

「そう、分かった。とにかく響と合流しよう……って、優夜と煌は
既に響の所に行ってるし」

「男なんてあんなもんだよ、でも、まぁ」

「うん、そうだね」

「瑞希もいたら良かったんだけど、まぁ、仕方ないか、それじゃあ！」

「「「お疲れ様！」」」

三人で手を伸ばしてハイタッチ。本当に、多分数分しか戦ってないけど。今日は大変だった、でも本当に大変なのは私達の方じゃないんだよなぁ。まぁ、いいか。今は喜ぼう。また、皆で空に上がれることを。ただ、それだけを。

第四十八話　数分間の奪還と、攻撃を。（後書き）

はい、ボツタイトルは「風水火雷光ー氷無ＶＳ裏切りし者」という、何時も以上にわけわからんタイトル付けてんじゃねぇよと言われそうです。ただ、左から順に、優夜、雪奈、煌、奏、震離、瑞希、響、そして、最後の裏切り者がアヤです。

ごめんなさい、タイトルが思いつかなくて……そして、見所は、己の武器は！って所かなと思ってます。

さて、次回から、説明回に入ります。早い話が、響達の秘密。そして、それが終われば、真キャラ紹介になります。

おかしいな……当初の予定じゃ四十八話って、ヴィヴィオが既にいて、つかの間の日常編になってるはずだったのになぁｗ
合いも変わらず文才ないなぁｗ

さて、次回も読んでいただけたら幸いです！それでは、ｋｙｏｎｓｉでした！

第四十九話　秘密と信頼と

――ｓｉｄｅ響――

「ほな、喋ってもらおか？知っていることの全てと、何処に情報を流していたのかを」

「えぇ、構いませんよ」

今現在、部隊長室にて査問を受けてまっす☆

あ、すいません。☆いりませんでしたね。本当にすいません。ちょっと変な方向にテンションが上がってまして、はい。

ちなみに、今ここにいる面子は。俺と、奏、震離、そして事務組四人、部隊長と、隊長陣、副隊長陣とヴォルケンリッターの面々。俺が代表して話すことになったんだ。ちなみにシグナムさんと、俺らを除けば、皆が皆、険しい顔つきをしている。

あ、補足として一つ。あの保護した女の子は、聖王教会の病院に連れてかれて、命に別状は無いって。ちなみに流もその女の子と同じ病院に行ったそうだけど、こっちについては、理由はわからん。

でもまぁ。

「何処から話しましょうか」

「誤魔化さなくてもええで、何処に情報を流していたのかを、どんな情報を流していたのかを教えてもらいたいな？監視員さん？」

「あっはっは、監視員……か。まぁ、まずその質問から答えましょう。今まで俺らが流した情報は特にはありません」

「……それを信じろって言うんか？」

「信じるも何も、やっていませんし。それに聞きますけどもだいたい何処に情報流していたのか大体わかったでしょう？」

「……」

うん、実際その通りだ。今日の一件でだいたい俺らがどこに情報を流してて、それを誰が受け取ったのか分かったはずなんだけど。まぁ、受け入れたくないって言うのは分かる。でも、受け入れてもらわないと困る。

「もう分かると思いますが、俺が……いえ、ここにいる七人が情報を流した相手は「アヤ・アースライト・クランベル」その人です」

「……何でや？」

「それは何に対してですか？」

「何で、アヤさんが……ッ！」

目の前で更に険しい顔つきになる八神部隊長。まぁ、分からなくもない。この隊舎を提供して、いろいろ六課の設立に関わったらしいし。でも、それがあの人のやり方だ。

有能な駒になりそう。

ただ、それだけのためにあの人は協力するふりをする。そして、信頼しきった相手を一気にどん底までたたき落として、自分の手駒にする。要するに上げて落とす事を得意とする。

だから、あの人は人に取り入る術を、いい人っぽく振舞う事が出来るんだ。その内にどす黒い感情を持って。

「隊長陣があの人の事をどれほど慕っているのかは知りません。ただ、俺らはあの人の事は死ぬほど大嫌いです。だから、情報を流せって言われても適当に誤魔化してきたんです」

「……じゃあ何で響達はアヤさんに従っていたの？」

「……そうですね。それについても説明しましょうか」

後ろで静かに話を聞いていたハラオウン隊長が一歩前に出て質問してきた。まぁ、もう全て話すつもりだし、隠すつもりもないんだけどね。まぁ、とりあえず。

「じゃあ、説明しますけど。絶対に驚かないでくださいね？」

「うん、物によるけどね」

とりあえず、露骨に振っておく。ただ、まぁ。いつかはエリオ達にもちゃんと話すんだけどね。

勿論流にも、多分流も俺らとは違うけど、似た状況かもしれないし、違っていたら話してくれるかもしれないしね。

さて、軽く一呼吸を入れて。俺の後ろにいる皆に視線を投げて確認。

――いいか？

――勿論。

ただ、それだけを確認する。まぁ、念話を使えって言われたら終わりなんだけど、どうもこっちの方が、俺らっぽくて好きだと皆言ってくれた。

とりあえず、言おうか。そう思いながらちゃんと立って、敬礼をする。

「じゃあ、言います。俺は、元時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊所属。そこで艦長をやっていました。緋凰響元二等空佐です」

「同じく元時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊所属。副艦長をやっていました、天雅奏元二等空佐です」

「所属は同じで、叶望震離元二等空尉です」

「同じく、楠舞煌元一等空尉で、ランクは一応空戦ＡＡＡです。つっても接近戦しか出来ませんけども」

「私も所属は同じで、海藍瑞希元一等空尉です。ランクは空戦ＡＡです」

「俺も同じで、有栖優夜元三等空佐です。ランクは空戦ＡＡＡです」

「そして、私が、高麗雪奈元一等空尉で、空戦ＡＡです！」

と、とりあえず所属と、全員当時の階級をそれぞれ紹介する。うん

やっぱり今言っても違和感バリバリだな全く。そして、シグナムさんを除いた、八神部隊長達は固まってる。さて、と。

「せーのっ！」

「はぁあああああああああ！？」

「タイミングドンピシャ！流石すぎる！」

もうこの部隊楽しいね全く！……あれ、俺前にもこんな事したような無いような……まぁいいか。

「わ、私、そんなん知らない！」

「あっはっはっは、そりゃ知りませんよ。一応特殊部隊と称されて、存在の隠蔽を図られたんですから、多分俺らのこと知ってる人ってかなり上の人達か、変わった部隊の人達だと思いますよ」

「い、いつからなん！？何時から艦長してたん！？」

「え……っと、俺らが１２で入局したから……１３の頃に前の艦長にスカウトされて、１年で仕込まれたから……実質１５歳まで……２年しか艦長してませんね」

「え、１５までって、なんかあったん？」

「……ええ、まぁ」

うん、そんなもんだな。まぁ、実際奏達も一緒にスカウトしてもらって、８人で同じ船に乗ったんだっけ……うん、懐かしい。でも、

それは後だ。懐かしいと思うよりも先に、説明しないと。
ただ、嫌なんだよなぁ。その時期のこと説明するのは……。

「俺らが15になったとき、とある事件が起きたんです。「反聖王教会団体幹部殺害事件」、多分まだ記憶に新しいと思うんですけども」

「う、うん。それうちも少し関わったことやし。それと何か関係があるん？」

「えぇ、俺と奏、その事件の容疑者ですから」

「え！？う、嘘やろ！？」

「いえ、本当です。その事件がきっかけで、今の階級まで降格させられたんです」

まぁ、一気に降格させられたのは、それだけじゃないんだけど、ね。
まぁ、それよりも。

「まぁ、それをやった犯人はコッチで既に上がってたんですけど」

「けど……？」

「逆にその人が、俺らが犯行に及んだと思わせる証拠を握ってたんですよ」

「……もしかして、それが……？」

「えぇ、そうですよ」

うん、八神部隊長の思い描く人ですよ。アイツです。
ただ、別に俺にだけその罪が掛かるのなら、喜んで俺だといってその罪を受けた。だけど、アイツは違う。自分に不利になりそうなことだったからと、俺だけじゃ無く、奏や、震離、煌、瑞希、優夜、雪奈達にも脅しを掛けた。

――言う事を聞かなければ、あなた達の元部下の人達が……ねぇ？

って。船にいたのは、年上の人達ばかりだったけど、その人達の職を、命を守るために黙って従うしか無かった。しかもそれだけで終わらなかった。俺らが自分よりも更に上の階級に返り咲くんじゃないかって、そんな理由で俺と奏のリンカーコアを封じようとした。だけど、それは代わりに煌達四人が受けた。煌達曰く、いつかなんとかなるまで、お前は前にいてくれ、と。そんなことを言ってくれた。

そのせいで、優夜は執務官になれたはずだったのに、煌は教導隊からのスカウトを受けられたのに……

だけど。それ以上に、それよりもキツかったのは――

「響？どないしたん？」

「え、あ、え？」

「いや、私がそうなんや～って言っても、何も反応しなくなったから……どうしたん？」

「え、あぁ、いえ。一応そんなこんなで俺らはあの人に付き従う様

になったんです。最もスパイらしいことなんて全くしてませんけどね」

「……でも、何でそんな人達が六課に集結したん？明らかになんかあるような……」

「……あぁ、それ本気で嘘だと思うでしょうが、マジで偶然です。そうだろ、優夜、煌……って」

後ろを振りかえると、優夜はちゃんと話を聞いてたけど……けど、煌よ。立ったまま寝るのはどうかとおもうんだけど？まぁ、いいか。

「あ～、俺と雪奈は、俺と雪奈に六課に行って、階級とか上げに行きなさいって言われた」

「私と煌も似た感じかな。私達のところの隊長さんが、うちにいたら絶対に錆びるからって……煌、起きないと」

「……んぁ？」

……なんか、お前ら本当に何処言っても優秀なんだね……もう、俺今まで禄に働いてる気がしなかったんだけど。いろんな意味で。というか側に超が付くほどの天才いたし。

なんて、考えていると、八神部隊長が、俺に視線をやる。あぁ、俺も言えってことか。

「うちの場合、絶対六課はなんかに備えてるんだろうから行って来いって言われた」

「え、何その理由！？」

「ん～、まぁいろいろあったんじゃないですか？命令で既に異動の用意されてたし」

ていうか、理由なんて言えねぇよ……だって、優夜が六課の事中から調べて、それをうちの元隊長のティレットさんに教えてからの異動だもん。軽いスパイって言われても仕方ないことしてるし。でも、まぁ。細かい点は伏せたまんまだけど……。

「……一応これが俺らの経歴みたいなものですね」

さぁ、これでどう出るかな。ただ、根本的な問題は解決出来てない気がするけども……。

ただ、ただこれで少しは俺らにも頼ってくれると本当に有難い。だって、そうだろう？だれだって嫌われたまんまなんて嫌じゃん。

「じゃあ、纏めるとや。響達は別に六課の情報を流してたわけじゃなくて、ただ従ってたふりをしてただけやってことやね」

「まぁ、大体そんなもんですね」

「そっっっかぁ～～～、よかったぁ」

なんか、目の前でスゲェ溜めてから安心したよこの人、マジでどうしたんだろうか？

「……八神部隊長、どうかされました？」

「え、ううん、結局自分の勘違いやったんかって、安心したんや。アヤさんから響達が情報を……って、何であの人わざわざ私達に教

えたん？」

「あぁ、なるほど」

なるほど、それで八神部隊長達が俺らのことに気づいたんだ。つーかやり方酷いな本当に。

まぁ、だいたい分かるからいいか。

「多分、一旦信用させてから八神部隊長達を落とそうとしたんですよ。アイツのやりそうなことだ。胸糞悪いったらありゃしねぇ」

「あ～、ほな、響達の今回の事は不問にします。まぁ、元々何もしてないからどうすることも出来ないんやけどね」

「いえ、構いませんよ」

「そして、もう一つ。疑ったりして本当にごめんなさい」

といきなり目の前で腰を折って頭を下げた。それに合わせて高町隊長も、ハラオウン隊長もヴォルケンリッターの皆さんも頭を下げる。

うん、正直に言おう。なんかやだなこれ。現に、俺の後ろにいる震離達なんか、マジで驚いてるし。

「私が、もっと響達の事を信頼しておけば。今日のことも、ヘリを落とされる事まで無かったはずや。だから、本当にごめんなさい」

……これは、もう誤解は解けて、信頼されつつあると思えばいいのか？いや、多分そうなんだろうけど。

だけど。八神部隊長達が俺らを疑うのも無理はない。だって、信用

してる人から、そんな事言われたら不信感の一つや二つ持つだろうし……。別にそれほど気にし……てたわ。うん。まぁ、もういいんだけどね。

「別に気にしないで下さい、だから頭を上げてください八神部隊長？」

「うぅ、まだ怒っとる」

「……え！？いや、別に気にしてないって言ってるじゃないですか！」

「じゃあ、何でシグナムはさん付けで、ヴィータにまで副隊長付けて、私達に至っては苗字と隊長呼ばわりなん？」

……えぇ～……そんな事ですか！？って、声を大にして言えなかった。いやだって。信頼されてないなぁ。だったらこっちもそこまで親しくしなくていいなぁって……あ、これがいけないのか。いやでもなぁ、最近隊長呼びしてるせいでそっちになれたんだよなぁ。クソゥ。

「分かりました、もう気にしてませんよ、はやてさん」

「……ッ！よっしゃ、それじゃあ査問はここまで。この事は……」

って途中まで言ってから俺の顔を見だし始めましたよ？あぁ、なるほど。そういう事か。

「ＦＷの面々にはちゃんと話しますよ。ただ一応あんまり言わないでくださいね？」

って言うと、各々返事をしてくれた。何だかんだで、やっと査問終了。次々と部隊長室から出ていく隊長陣と煌達。何でも煌達は、正式なリミットを付けられたわけじゃないから、これから本局のフレイさんの所に行って一度リミット外して、ちゃんとリミットを付けるらしい。ただ、煌達から聞いたけど、フレイさんの階級が少将なのは驚いた。そして、アイツが管理局を抜けて、煌達がコッチに来たのも全部フレイさんが情報を教えてくれたからだって。今度茶菓子持ってお礼を言いに行かないと……。

あ、ちなみにフレアはアイナさんと共に一度家に帰ったって。

なんて、考えながら隊長室を出ようとすると。

「あ、響君。ちょっと待って」

「え、あ、なんですかシャマルせんせ？」

「明日のことなんだけど。ちょっと聖王教会の病院に行ってくれないかしら？」

「……えぇ、別に構いませんよ。何かあったんですか？」

はて、もしかして俺にあの子のお見舞いにいけと？ただ、まだ意識回復したわけじゃないんだろうし、面識はほぼないんだけどなぁ……はて、なんぞ？

「……流君の事なんだけど」

「あぁ、怪我が思ってた以上に深かったんですか？」

まぁ、あの偽侍に刺されて血が噴き出たつってたし、体の中のダメージもかなりあぶないよな。

「ううん、その逆。怪我自体は、直ぐに治ったの」

「へ？あの言ってる意味が……」

「もっと言えば、流君が私のもとに来た段階で、既に体が治りつつあったって言えば、分かるかしら？」

……なるほど。そういう事か。

「……大体わかりました。俺はどうしたら良いですか？」

「うん、ただ迎えに行ってほしいの」

「……はい？」

え、いや、落ち着け俺。落ち着くんだ俺！こんだけ重い感じの前振りしてきたんだ。絶対なにか頼みごととかされるはずだ！

「あ、それだけよ」

「……そうですか。分かりました明日行ってきます」

うん、ひとつ言わせて。

なんだよもぉおおおおおお！！！！

本当になんだよもう！シャマル先生、そんな深刻そうな顔して言うことじゃないでしょう！？なんだよもう！

いや、もういいや。もう今日疲れた。かえって寝よう。うん、そうしよう。

でも、流って本当に……なんだろうか？

って疑問が俺の中で浮かび上がった。ただ、不思議と流なら大丈夫だろうって何となく思った。

根拠なんて全くないんだけど、ね。

第四十九話　秘密と信頼と（後書き）

多分ご都合設定どころの騒ぎじゃないなぁ。ごめんなさい。私のレベルが低すぎて表現しきれませんでした……本当に申し訳ありません！

さて、今回から響がなのは達を呼ぶ際、前のように名前で呼ぶように戻しました。うん、高町隊長とか打つ方もメンドなのでw

さて、次回はヴィヴィオとの出会いです。

次回も読んでいただけると幸いです！……つってもキャラ紹介なんですけどね……

真・キャラクター紹介　（ネタバレ含みます）（前書き）

相変わらずネタバレを含んでいるので注意を！

真・キャラクター紹介　（ネタバレ含みます）

緋凰　響　（ひおう　ひびき）

性別／男
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊［Ｇｕａｒｄｉａｎ Ｗｉｎｇｓ］艦長　階級二等空佐→時空管理局本局武装隊・空曹機動六課での役職／前線フォワード部隊「ライトニング分隊」　フロントアタッカー・センターガード・フロントバック
魔法術式／近代ベルカ式
魔導士ランク／空戦Ａ－
魔力光／黒
利き腕／両方（主に左）
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
デバイス／真紅・血桜

基本設定はキャラクター設定と同一。
こちらでは書いてない方を。

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで特殊部隊からスカウトされ、同時に響の願いで奏達６人もスカウトしてもらった。そして、たったの１年という期間で艦長の座についた。
これは、訓練校自体に見せつけた、響の卓越した指揮の能力や、戦略設計等を評価されたからであるが、本人はこれを否定している。
そして、この部隊自体、ただの実験の一例であり、実際は他の艦長達からは、「小僧」扱いされていた。実際実験であるがため、１３番の忌み数を与えられた艦を与えられただけではなく、特殊部隊と

称した、存在の隠蔽を図られたために１４から１５まで間、階級等の情報を隠されていた。

尚当時の性格は、今とあまり変わらないものの、自信に溢れ、当時の煌達やクルー達に全面の信頼をよせ、同じくクルー達からも慕われていた。尚、本人曰く何で自分のような凡人が、スカウトされたのかわからないとのこと。

幼少期は、母子家庭に育っており、響自身父親の顔を全く知らず、日本人かどうかすら分かっていない。しかし、母から父の事をあまり教えてもらえていないが母曰く、父親は悪い人ではなかったと教えられていた為、あんまり悪い印象は持っていない。そして、地球で育っているにもかかわらずどういうわけか、親戚等の噂を全く聞かないことを本人も不審がっているが、あんまり気にしていない。
（そもそも管理局員として働いている事から、あんまり関わる余裕が無いとのこと）
そして、その母は響が１０になり、そして自身の母の誕生日の日に原因不明の病で逝ってしまう。ただし母自身それを予感していたらしく、常々母の誕生日に逝く事を伝えられていた。ちなみに母からとある剣術を叩き込まれていたが、現在の刀だと強度不足等の理由から使ったら余裕で折れるからと使用していない。
ただし、優夜と煌、震離曰く、ちゃんとした刀が有っても見たことも、どんな剣術かも聞いたこと無いと言うっている。

そして、幼少期の性格は男女に別け隔てなく接しており、一人で遊んでいたときに、当時引き篭っていた震離の家にミスってボールを打ち込んでから、震離と出会い良く外に連れまわすようになり、震離の兄ポジションになった。そして、その約一年後、越してきた優夜と、家より少し離れた寺に煌が来てから、仲の悪かった二人とも接し、仲良くさせ、そして数年後、とある事件で奏達三人と出会い

友人となる。

優夜と震離の家にある道場を除けば皆、普通の家なのに、響の家のみ和風の屋敷で、露天風呂と道場まで完備という大きな屋敷であり、しかも集落より離れている。一番近いご近所さんが優夜の家である。響自身、自分の母が働いてるところなんて見たことないのい何でそんな屋敷を持っているのか分かっていない。

現在は優夜の両親に家の管理をお願いしており、週一でお手伝いさんに家を掃除させていると聞いたときは、本気で申し訳ないと言っていた。そして、どういうわけか、響だけの私物ではなく、他の6人の着替えや私物も普通に響の家に置かれており、7人で実家に戻ったときは、どういう訳か響の家に揃っていることがよくある。

ちなみに、母が逝ってからは一応優夜の両親が引き取ったことになっており、煌共々良くお世話になっている。

そして、本人曰く、働いてもないのに家を持っていたとかそんなことよりも一番の謎が、母から魔力コントロールを教えられていた事であり、そのコントロールが現在の術式で言うと、「古代ベルカ式」に近く、しかもカートリッジシステムの事を知っており、更には「闇の書」の事もそれなりに知っていた。当時はなんとも思わなかったが、現在は何で知っていたのか分からず仕舞いである。

※しかし響達が15になった際に、管理局にいる「アヤ・アースライト・クランベル三等空佐」の策略で、この人物のミスであり、責任を取らなければならないはずの事件「反聖王教会団体幹部殺害事件」の容疑者に仕立て上げられてしまった挙句、アヤが響達の鑑にウィルスと爆弾を設置して響達の抹殺をしようする。なんとかほぼ全員脱出させることに成功したが、すぐに響が裁判にかけられてし

まう。その場は、証拠不十分という事でなんとか釈放されたが、階級等の降格は避けることが出来ずに、そのまま一気に落とされてしまった。

しかし、当時の情報、つまりアヤが握ったのは響達が「犯行に及んだ」と思わせる証拠を持っているため、響を初めとした7人は（特に響と奏）彼女の命令に従うしか無くなっただけではなく、また響達が再び自分よりも上に行くのではないかと危惧して、響達のリンカーコアの出力を制限しようとしたが、煌達四人がそれを自分たちが受けることとして、その場は丸く収まり、アヤがスカリエッティに付くまで、煌達の出力は制限されていた。
そして、アヤにデバイスも取り上げられており、現在何処にあるのか分かっていない。

当時のデバイスは真紅・血桜という二本の日本刀形デバイスであると同時に、斬った者の魔力を吸収し、持ち手に変換して渡すという効果がある。
血桜は、血を用いてシールドや、攻撃にも使えるがこちらもまた使用されることはきわめて少ない。
そして、血桜の真の能力は刀身が血を吸えば吸うほどその切れ味をましていくことが出来る。
その為危険なのだが、響介が刀に血を吸わせぬよう、刀身に透明で丈夫なシールのようなものを張り、それを抑えている。
同時にこの二本、持ち主と認めたもの以外が刀に触り、抜いた場合、持ち手より刃を突き出し相手を怪我させてしまう、血桜に至ってはそこからも血を吸い斬れ味をましている。

バリアジャケットは赤黒い和服のような感じであり、響も気に入っ

てるが、デバイスがある時のみで、普段は武装隊のバリアジャケットに、二本の刀を付けているだけだが、この刀自体、ミッドで取り扱ってる場所が少ないということから、自作で作った。しかし、素人ゆえに、刀としての完成度は限り無く低く、響や刀の取り扱いを熟知していない者が、この刀で物を斬るとが逆に折れてしまうほど、脆く弱い刀である。
そのため、本来の剣術を扱うことが出来ずにいるが、響自身それ以外のものでカバーしている。

更には訓練校時代に魔力総量が低いと言われ、一時期本気で悩み、本気で自分から魔力を奪ったシグナムに恨みを持ちそうになったが、とある件以降気にしなくなったとのこと。
というか負けてんのに恨むのは筋違いだったのに恥ずかしいことしてたと、本人曰く黒歴史。

ちなみに、響自身、射撃の才能は限り無くゼロに近く、魔力スフィアすら作れず、基礎魔法すら使用できないぐらい魔法の才能は殆ど無い。実際、響が空を飛ぶのに一ヶ月掛かったのに対し、他の七人は3日でマスターしていた。そして、戦闘時に置いては、常に他の6名とは違った身体強化で戦闘しているが、六課に来て以来あんまり使っていないとのこと。

天雅　奏　（あまがみ　かなで）

性別／女
年齢／17
役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第13艦隊［Guardia

ｎＷｉｎｇｓ」副艦長　階級二等空佐→時空管理局本局武装隊・空曹機動六課での役職／前線フォワード部隊「ライトニング分隊」　センターガード・フルバック・ウィングバック
魔法術式／ミッド式
魔導士ランク／総合ＡＡＡ
魔力光／白
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
利き腕／左
魔力変換／光
デバイス／オクスタン・パルチザン

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで響の願いにより、他の６名共々スカウトされ、たったの１年という期間で副艦長の座についた。
これは、響の精神的な支えになると予測されたからであり、実際そのとおりであった。奏自身あまり指揮を取ることは得意ではなく、「私よりも雪奈の方が良い」と常々口にしていた、そして響同様、他の艦長達からは、「小娘」扱いされていた。同時にある意味響とは違ったリーダー性を持っている。

尚当時の性格は、今とあまり変わらず、当時の煌達やクルー達に全面の信頼をよせ、同じくクルー達からも慕われていた。

幼少期の頃は現在と違い、かなり気が強かったが、それ以外は基本的に普通で、たまたま知り合った瑞希と雪奈と仲良くなっていた。
そして数年後、とある事件で響達四人と出会い友人となる。そして、出会ってからは響の家によく遊びに行き、響より二刀流を教えられたが、後にガンカタと組み合わせ独自の銃術を創りだした。

※と同様です。

オクスタン・パルチザン［オクス］［パル］
デバイスはオクスタン・パルチザンの二つであり、カートリッジシステム搭載で、カートリッジは１０発
性格は二つとも主人に忠実。温和で好意的であるが、パルチザンだけが名前を呼ぶ。
どちらも女性人格であり、そして、パルチザンの中には破損データが多数あるが、パルの意向で消されていない。
そして、オクスはパルの事を「姉さん」と呼び慕っており、パルもかわいがっているのと事。
同時にオクスは、震離の持つエクスと色々じゃれあう事が多いため、いつもパルが抑えている。
待機状態は、どちらとも指輪であり、普段はネックレスとして首にかけている。
戦闘時に両指につける。ちなみに二機とも女性人格である。

可変型であり、形態を変更することが出来る。

１つ目は、４丁の拳銃形態だが、砲撃魔法を銃弾のように圧縮する機能があるため、接近戦での威力は高いのだが、遠距離戦には不向き。

２つ目は、普段の二丁のライフル形態であり、デフォルト形態でもある。

３つ目は、対艦ライフル形態であるが、威力が大きすぎてめったに使用されないが、変わった用途で使用される。

銃火器系統の扱いに優れており、超長距離もこなすことができる上に、特に４丁拳銃を用いた接近戦は響たちも一目置いている。

同時に、二丁の対艦ライフルのような物の銃身をもって、全力で殴りつけるという荒業を見せ、シールドを展開した騎士をシールドごと、たたき落としたこともある。

しかし、現段階では手元に存在せず、行方知らずとなっている。

バリアジャケットは白い騎士甲冑で白いコートを羽織っているが、ミッド式で騎士甲冑なため、よく突っ込まれる。

現在はデバイスがないため、武装隊のバリアジャケットに、二丁のライフルを装備している。

叶望　震離　（かなみ　しんり）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊［Ｇｕａｒｄｉａｎ Ｗｉｎｇｓ］所属　階級二等空尉→時空管理局本局武装隊・一等空士
機動六課での役職／前線フォワード部隊「スターズ分隊」　ガードウィング・フロントアタッカー・フロントバック
魔法術式／ミッド＆ベルカハイブリット
魔導士ランク／空戦ＡＡ＋
魔力光／黄色
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
利き腕／右
魔力変換／雷
デバイス／エクスピアシオン

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで響の願いでスカウトされ、たったの一年で現在の階級まで獲得していた。そして響同様、他の艦長達からは、「小娘」扱いされていた。震離自身あまり階級に興味がなかった事、同時にあんまり上に行かずのんびりしたいということから捜査官としての資格等を取得していた。

尚当時の性格は、今とちがって少し暗く、クルー相手に少し距離を取っていたが、心のなかでは、響達同様信頼しており、それがしっかり伝わっていたため、クルー達からも慕われており、接している内に今のように明るい性格になった。

※と同様です。

幼少期の頃の段階で、すでに大学を卒業するほどの天才であったが、とある件で、母親に化物呼ばわりされ、家を出ていかれてから、ひきこもりの生活を送っていた。そして、ある時、響と出会ってから少しずつ改善され、奏という友人ができてから引っ込み思案だが、少しずつ外で遊ぶようになり、４年生の頃にはもう一度小学校に入り直した。

そして、一応実家の剣術である「斬威一刀流」の使い手であり、管理局に入る前に自身の父を倒してから来たが、震離曰く「お父さん、本気じゃなかった」との事。

戦闘スタイルは接近戦・中距離戦のどちらともやり、突撃することが多い。

気に入った魔法を見たりすれば、すぐに覚えて自己流のアレンジを加えるため、周りからは天才と呼ばれている。得意なものはなく、ほとんどのことができる。実際その気になれば、相手の魔法を解読して、無効化することも可能だがめんどうだからやらない。

斬威一刀流としては、一撃で相手を叩き伏せるという一撃必殺の刀術であり、一応使えるものとして実践でも使用している。
ただし本人は魔法の方が楽しいということから最近は事故鍛錬等をサボっていることが多い。

エクスピアシオン　［エクス］
巨大な十字架のような形をした大型剣であり、
カートリッジシステムを搭載している。
カートリッジは４発
剣の先端がドリルのように回るためそれで突撃したりする。
待機状態は、小さな十字架の付いたブレスレット。
性格は明るい時の震離と瓜二つで、なぜかほかのデバイス達と友達みたいになっている。
そして、デバイスの内部は破損データが圧倒的に多いのだが、エクスの意向で消されずに置かれている。
奏のもつデバイス、オクスと仲がよくいつも念話でじゃれあっている。
その性格ゆえに、インテリジェントデバイスと間違われることが多いが、アームドデバイスである。

しかし、現段階では手元に存在せず、行方知らずとなっている。

楠舞　煌　（なんぶ　こう）

性別／男
年齢／１７
役職・階級／役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊［ＧｕａｒｄｉａｎＷｉｎｇｓ］所属　階級一等空尉↓時空管理局本局

事務員・一等空士
機動六課での役職／事務員
魔法術式／近代ベルカ式
魔導士ランク／空戦ＡＡＡ
魔力光／真紅
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
利き腕／右
魔力変換／炎
デバイス／インフェルノ

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで響の願いでスカウトされ、たったの一年で現在の階級まで獲得していた。そして響同様、他の艦長達からは、「小僧」扱いされていた。そして、響の推薦と、響の前の艦長の推薦と同時期に教導隊から、瑞希と共にスカウトされたことがあるが、事件により話し自体なくなってしまう。推薦、スカウトされた理由は、瑞希と共に陸戦魔導師を空戦に仕上げたことがキッカケで教導隊への道がひらけたが、現在はもう行けない道と諦めている。

尚当時の性格は、今と変わらず、瑞希とともにクルーの仕事を教えており、そのおかげでクルー達からも慕われている。

幼少期の頃、事故にあってから、五歳から前の記憶がなく、自身の両親の顔は写真等で知ってはいるが、どんな人物かは知らないでいる。そして、初等部に通ってる途中に自身を預かっている寺の住職でもあった、祖父が無くなって以来、初等部時代は、優夜の家に預けられているということになっている。
そして、幼少期、寺に来た当初は、とある事情にて、優夜とは犬猿の仲といっても過言ではないほど仲が悪かったが、現在では笑い話になっている。

※と同様です。

戦闘スタイルは接近戦しか出来ないのだが、その踏み込む一瞬のスピードはフェイトすら超えてしまう。
同時にナックルを装備しているときは、予測不可能な戦い方をする。
その訳は本人曰く体術をちゃんと習っていないからとのこと。
そして、斧を使った戦闘は剣術と槍術を織り交ぜた戦い方をするが、優夜と違ってパワータイプ。
同時に戦闘時テンションが一定まで高くなると、一気に静かになり、口数も減り、何時もの煌とは１８０度違う様子になるが、響曰くこれが煌の素の状態とのこと。
そして、この状態ととき、自身の炎が赤色から白炎に代わり、火力も上がる。

優夜の家の槍術である「神道無限流・槍牙」の基礎を学んでおり、その槍術を極めつつある優夜とも対等に渡り合えるほどの実力の持ち主である。ただし、煌は自分のは邪道だからと「神道無限流」を名乗らず我流を名乗っている。その理由としては、優夜と違い、薙ぎ払う、打ち込むといった槍術ではなく、何方かというと棒術に近い動きを取り入れ、震離の家の剣術も取り入れているからとの事。
そのため、優夜と同じ技であっても優夜と違って威力が基本的に高い。

バリアジャケットは、黒の内服と赤のコートを着ており、一言で言い表すならど派手。
コートは常に燃えているかのように見えるが、動きにくいためあまりつけずに、黒の長袖のジャケットをきている。

現在はデバイスがないため、武装隊のバリアジャケットに、槍を一

本装備しているだけで、カートリッジは無し。

インフェルノ　［フェル］
待機状態はペンダントの形をしている。
戦闘時は大きさは自身の身の丈よりも大きく、巨大な両刃の斧となる、柄は燃えるような赤で、ナックル時の時は狭い室内とか用とのこと。
煌自身はこれを片手で操るほどの力の持ち主。
ナックルの時はカートリッジはないのだが斧のときはカートリッジシステムを搭載している。
カートリッジは5発

煌とは堅い主従関係が結ばれており
絶対的な信頼を寄せられているが、天然らしく時々変わったことを口走ったりする。
性格は、基本的には静かなのだが、無茶な突撃を諫めるなど冷静な態度で接する。
形態変形できるらしいが、データ破損しているため現在は無理とのこと。女性人格である。

しかし、現段階では手元に存在せず、行方知らずとなっている。

海藍　瑞希　（うらん　みずき）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊［ＧｕａｒｄｉａｎＷｉｎｇｓ］所属　階級一等空尉→時空管理局本局事務員・一等空士
機動六課での役職／事務員

魔法術式／近代ベルカ式
魔導士ランク／空戦ＡＡ
魔力光／白青
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
利き腕／左
魔力変換／氷
デバイス／セルシウス

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで響の願いでスカウトされ、たったの一年で現在の階級まで獲得していた。そして響同様、他の艦長達からは、「小娘」扱いされていた。煌と一緒に陸戦魔導師を空戦に仕上げたことがキッカケで教導隊への道がひらけたが、現在はもう行けない道と諦めている。

尚当時の性格は、今と変わらず、煌とともにクルーの仕事を教えており、そのおかげでクルー達からも慕われている。

幼少の頃は両親が共働きということから一人でいることが多く、そのせいか性格も暗く人見知りが激しかった。しかし、ある日突然、家の隣に越してきた雪奈と出会ってからよく外に連れ回され、その途中で奏と出会い、性格が改善されていき、現在の性格に変わった。ちなみに幼少の頃の優夜と煌の噂を聞いていたが、瑞希はなんとも思っておらず、面白い人達だな程度の認識だった。

※と同様です。

戦闘スタイルは近・中・遠とオールラウンダーである。
本人は何方かというと、自身の魔力変換を用いた魔法攻撃を行うことが多い、一応接近戦もできるが剣術・槍術ともにやったことないため見よう見まねでやっている。そのため、たまに煌や優夜、震離

から手ほどきをうけている。柔術・合気道に自身の魔法を組み合わせて戦うこともあるがこれはデバイスがない時用である。

バリアジャケットは背中に青い十字架が描かれてある白の内服を着て下は白のロングのスカートを着ている。

現在はデバイスがないため、武装隊のバリアジャケットに、片手杖を装備している。カートリッジは無し。

セルシウス［シエル］

待機状態は指輪で
戦闘時は白い剣となり、鞘と連結して槍みたいにすることも出来る。剣の大きさはシグナムの持つレヴァンティンと同じくらいだが、槍のときは自分の身長と同じくらいになる
カートリッジシステムを内臓しており、カートリッジ数は6発あと一つ形態があるそうだが、現時点ではデータ破損しているため発動不可。

穏やかな物腰で落ち着いた話し方をする
瑞希からの信頼を受けており、よく瑞希から相談を受けており、その様子は瑞希が「妹」でシエルが「年の離れたお姉さん」のように見えるとか……
ちなみに自分のマスターの姉である雪奈の持つデバイス「ディーネ」に対しては「姉さん」とよぶ。
ちなみにシエルと呼ばれる所以は、震離がソッチの方が綺麗だからという理由で提案してみたら、瑞希とセルシウスが気に入ったからである。女性人格である。

しかし、現段階では手元に存在せず、行方知らずとなっている。

有栖　優夜　（ありす　ゆうや）

性別／男
年齢／１７
役職・階級／役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊［ＧｕａｒｄｉａｎＷｉｎｇｓ］所属　階級一等空尉→時空管理局本局事務員・一等空士
機動六課での役職／事務員
魔法術式／近代ベルカ式
魔導士ランク／空戦ＡＡＡ
魔力光／碧
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
利き腕／両方（主に右）
魔力変換／風
デバイス／シルフィード

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで響の願いでスカウトされ、たったの一年で現在の階級まで獲得していた。そして響同様、他の艦長達からは、「小僧」扱いされていた。実際実験であるがため、１３番の忌み数を与えられた艦を与えられただけではなく、特殊部隊と称した、存在の隠蔽を図られたために１４から１５まで間、階級等の情報を隠されていた。

尚当時の性格は、今と変わらず、雪奈とともにクルーの仕事を教えており、そのおかげでクルー達からも慕われている。執務官を目指しているが、運が悪かったと本人が言うほど運が悪く。実際、執務官試験を、三度も試験を受けているが、一度目は流行病により、試

験自体受けられず、二度目は筆記は合格し、実技に移る際に緊急で作戦に召集されてしまい結果的に逃し、三度目は全て合格し、執務官と認定されるあと一歩のところまで行ったが、事件に巻き込まれて話し自体なくなってしまった。

幼少期の頃は、実家が着物を取り扱ってる店であり、同時に道場まであり、町の外れにあることから同い年の子供から妙にイジメを受けていたが、子供の頃の優夜がある事をやってから、当時の煌と犬猿の仲といっても過言ではないほど仲が悪くなってしまうが、現在では笑い話になっており。関係が現在のとおり親友として付き合っている。

※と同様です。

戦闘スタイルは戦闘では近・中・遠とオールラウンダーであるが、防御魔法を一つしか使えず、防御も低いため、回避や受け流すといった技術重視の戦い方をする。実際高速戦闘でも傷ひとつ負わずに勝つことがある。

実家の槍術である「神道無限流・槍牙」の正統後継者であり、ある意味槍術の極みに近付いている人物でもある。ただし実家の槍術は一槍での戦闘を想定しており、現在の優夜のスタイルである二槍は対応していないが、独自に改良を加え優夜の代で二槍も「神道無限流・槍牙」と名乗れるほどになった。

ただし、優夜が二槍を使い始めたのは幼少の頃。とある事があったからであり、本人曰く「すっげぇ、馬鹿だった」との事。そして、魔力を扱ったときのみ、六槍も使えるがこちらはあまり対応する技がなく槍術としては全然名乗れないとの事。

バリアジャケットは深い青のロングのズボンと迷彩型のジャケット

を着ており、内服は黒。

現在はデバイスがないため、武装隊のバリアジャケットに、槍を二本付けただけである。カートリッジは無し。

シルフィード［シルフ］
待機状態は羽をかたどったネックレスで
戦闘時は六本の槍を出して戦う（二本は手に持ち、残りは風で扱っている）
この槍は六本を融合させ巨大な槍にしたりもできる。（一本だけ出したりすることも可能）
ちなみに合体させた槍の先端は展開し敵を掴むことが可能。
さらに三本を合体させ、二槍で戦うこともあるが、これら以外にも複数の形態を作ることが可能との事。
大きさは優夜よりも大きい。
カートリッジシステムを内臓しており、カートリッジ数は、７発

優夜とは堅い主従関係が結ばれており
絶対的な信頼を受けている。基本的には静かで主の心配をしている心優しいデバイスなのだが、デバイスのくせに怖がりなところがあるなど若干人間臭い。ちなみに女性人格である。

しかし、現段階では手元に存在せず、行方知らずとなっている。

高麗　雪奈　（こうらい　せつな）

性別／女
年齢／１７
役職・階級／役職・階級／時空管理局本局特殊部隊第１３艦隊［ＧｕａｒｄｉａｎＷｉｎｇｓ］所属　階級一等空尉↓時空管理局本局

事務員・一等空士
機動六課での役職／事務員
魔法術式／近代ミッド式
魔導士ランク／空戦ＡＡ
魔力光／蒼
出身地／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本
利き腕／左
魔力変換／水
デバイス／ウンディーネ

響達が１２で管理局入りし、１３という若さで響の願いでスカウトされ、たったの一年で現在の階級まで獲得していた。そして響同様、他の艦長達からは、「小娘」扱いされていた。

尚当時の性格は、今と変わらず、雪奈とともにクルーの仕事を教えており、そのおかげでクルー達からも慕われている。同時に優夜が執務官を目指してるからという理由で執務官補佐を目指して勉強しており、あと一歩のところまで行ったが、事件に巻き込まれて話し自体なくなってしまった。ちなみに、指揮能力は響についで高く、奏からよく相談を受けていたが、本人曰く自分は女性陣の中では参謀で、奏がリーダー格と常々言っていたが、奏自身あまり納得していなかった。ちなみに指揮能力としては、響が守り系の指揮が上手いのに対し、雪奈は攻めの指揮が得意である。

幼少期は今以上に活発で、海鳴で生まれたが父の実家である桜庭に越して、隣に住んでいた瑞希をいつも連れ回しており、その時に奏と出会い仲良くなった。そして、優夜と煌の仲の悪さの噂を聞いていたが、良い印象は持っておらず、むしろなるべく関わらないようにしていたがとある件で一気に知り合い、一気に打ち解けている。

※と同様です。

戦闘スタイルは中・遠と援護型であり、尚且つ本人も後衛型であるため滅多に前にでることはないが、接近戦はできないと言うわけではないが、それほど強いというわけではない。同時に後衛型ということもあって、様々な術を使い分けている。

バリアジャケットは空のような明るい青の色をしたローブを着ているが、ほぼ飾りである。
中には白い内服を着ておりスカートは深海のような深い青のロングスカートをきている。

しかし、現在は、武装隊のバリアジャケットを纏っている。杖を持っているが、カートリッジは無い

ウンディーネ［ディーネ］

待機状態は小さな懐中時計という珍しいもの、その大きさゆえに、首に掛けている。
戦闘時はハルバードとなるのだがやむを得ず戦闘になる時にしか使わない、そのせいで実質杖の代わりになっている。
柄が青色となっており、カートリッジは内臓されていない。
もう1つ形態があるが、現段階ではデータ破損しているため使用不可とのこと。

性格は雪奈と同じようにマイペースでおっとりしている。雪奈と違って本音しか言わない。
雪奈との間には絶対的な信頼が出来ている。
なぜか瑞希の妹のもつデバイス「シエル」に「姉さん」と呼ばれて

いるが気にしておらず、普通に接している。

しかし、現段階では手元に存在せず、行方知らずとなっている。

真・キャラクター紹介　（ネタバレ含みます）（後書き）

一応、今回の件で分かった人物の紹介です。

ただ、それでも響に至ってはまだ設定があるんですけどねｗ

それでは今回はこれで失礼します！

第五十話　出会い

「……クックックッ」

「……」

「♪」

あっはっはっはっは。なんだろう。出来るだけ顔に出さないように出さないようにって思ってんだけどさすがに完全に隠しきれなくて、含み笑いが出る。ていうか隠しきれないし。

あ、ちなみに現在の状況は、聖王教会のベンチに腰掛けてんだけどさ。俺の隣に流が座ってんだけど、その流の膝の上に金髪のオッドアイの女の子が座っているという状況だ。

うん、はっきり言おう。見てて超面白いなう。

……使い方これであってんのかな？

まぁ、事の発端は数時間前に遡んだけどね。

――数時間前、早朝・聖王教会――

「……いかん超眠い」

昨晩、俺らの恥ずかしい過去（笑）を暴露して、その後シャマルせんせに頼まれて流の迎えに来たわけなんだけど。迎えに行くのは昼からなんだけど、朝っぱらから公欠？かなんか取れてたから、即効で来たんだ！ぶっちゃけ朝練とかしたくないし！

理由は単純、まだエリオらに話してないから知らないけど、なのはさんは俺らの事知ったから、明日から全力で頑張ろうねって死刑宣告してきたからなんだ！
正直、俺の場合、魔力少ないから死ぬし。

まぁ、いいや。そんなこんなで朝っぱらから、コンビニよって、それなりに飯とか買ってから、コッチに来たわけなんだけど。うん簡潔に一つ言おうか。
公園の敷地を案内通りに歩いてたんだけどさ、いつか友人に聖王教会の仲を案内されたからさ、近道と思って、案内に載ってない道を通ったらさ！

「はっはっは、迷った……」

クソゥ。生まれて初めて自分のミスで膝付く体勢取るとは思わなかったぜ。今の体勢、俗にいうｏｒｚ体勢なんだ。多分知らない人から見たら何あのロン毛超キモイとか言われると思うけどね！ちなみに、俺の場合人より髪が伸びるのがちょっと早いだけだよ！

……いかん、斜め上の方向に暴走しだした。落ち着け俺。とりあえず。どっちが北か……分かってりゃ迷うことなんて無いわな。うん。だけどまぁ。

「……どうするかぁ……な？」

がさりと、近くの林の茂みが小さく動いた。うん、ぶっちゃけ風が吹いたわけじゃないから怪しいね。
ただ、動物だったらもうちょい上手く隠れるだろうから、多分相手は人。だけど、殺気とかそんなのは全くない。まぁ、だいたい誰かわかるしいいけどね。とりあえず。

「そこに誰か居るのかー？」

ガサガサとまだ音をたて揺れる茂みに向かって問いかける。

茂みから少しだけ見えたのは、茶髪の髪。うん、だいたい分かると思うけど、万が一がある。

「……出てこないなら、コッチから行くぞー」

一応行くことを伝えてからゆっくりと茂みに近づく。そして、その茂みの前に来たときには完全に気配が消えた。うん、超遅い。だから……

「そういう事は、最初からしろよ。流？」

「……ぅ、申し訳ありません……」

病院服をきた流がそこにいた。うんはっきり言おうか。というか視線で言おうか、なにしてんだよお前は？

「……申し訳ありません、昨日からここに来て検査入院したんですが……」

「おう、それで？」

「……病院食が……子供向けで……少なくて……美味しくなくて」

「……それで？」

「……それで……その」

なんてしどろもどろになりながら話す流。そして、少しした瞬間。
可愛らしい音で「クー」と聞こえた。
要するに。

「スッゲェ腹減ったから病院抜けだして飯買いに行こうとしたんだな？」

「……はい」

「で、その途中で俺が警備の人に見えたとかそんなんだろう？」

「……はい、本当にすいません」

「いや、別にいいさ」

いやいやコッチから逆に言うわ。お前もそれなりに普通の人でよかったよ。いつもいつも無愛想な顔してるから逆にこんなにいろんな表情見せれるって安心した。いろんな意味で。

「とりあえず、遠いし俺のだけど食うか？」

「え、あ、い……いえ」

「遠慮すんな、色々買ってきたし」

まぁ、時間つぶしにと思って、いろいろお菓子とかパンとか飲み物とかあるから適当に好きなのを取ってくれたら有難い。まぁ、本音言ったらオニギリとかそう言うのを食いたかったけどね！さすがはミッド、日本と世界が違いすぎて、日本食なんて滅多に置いてない

よ！

で、何だかんだで。

「ありがとうございます。緋凰さん」

「ん、別にいいさ。一人で飯食うのも味気なかったし、別にこっちが礼を言うよ。ありがとう」

「……いえ、こちらこそ……。そういえば緋凰さん、今日はどうして？」

「ん、あぁ、昼には退院だろ？それで迎えに来た」

「……こんな時間から？」

「うん、こんな時間から。ぶっちゃけると、朝練が面倒だったから」

「……フフ」

おぉ？珍しいこともあるもんだ。仏頂面の流が珍しく笑ったよ。普段もそれくらい話したり笑ったりすりゃいいのにな。さて、時間はそれなりに過ぎた……っと。

「流、時間は大丈夫か？」

「えぇ……大丈夫です……よ？」

……今日はいろいろイベントが起きる日だなぁ。いやいやマジで。いやだって、ついさっき流が隠れてたのに、また茂みに誰かいるよ。

今度は普通に茂みが動いてるから素人っぽいけど。

「……そこに、どなたかいらっしゃいますか？」

隣りに座る流が、ガサガサとまだ音をたて揺れる茂みに向かって静かに問いかける。

茂みから少しだけはみ出して見えたのは艶やかさを帯びる金色の髪だった。多分これほど雑って言ったら悪いけど、隠れ方から見るに子供だと思う。

「……行きますね？」

「あいよ」

静かにベンチから立ち上がって、ゆっくりと茂みに近づく流。ちなみに俺は座ったまんま。だって流が率先してやってくれるんだもん。楽なんだよ……本当に。

「……捕まえまし……た？え……ぁ……陛……下……？」

「……ぁ」

と茂みに手を突っ込んで、持ち上げて現れたのは、現れたのはエリオやキャロよりも少し幼く見える少女ってか、女の子だったんだけど……だけど。一つ言おう。

――あの子昨日の子だよね？

流がこっちを向いて指示を求めてんだけど……正直なところ、今すっごく驚いてる。いやだって、昨日衰弱した状態で見つかってんだ

よ？何でもう起きてるし？ってか、何で警備ザルなんだよ。ってか、流さん？

っていうか、なんで流は流で首かしげてんだよ……って、知らないだったね。って、あーあーあー、あの女の子の顔がどんどん涙目になって……泣くなありゃ。って思った瞬間。

「え、あ……と、驚かせちゃったかな？」

怪我がないか一通り確認してから、抱き上げた女の子を地面へと下ろして目線を合わせて話をしだす。

うん、何でお前、そんなに子供の扱い心得てんだよ。フレアん時も妙に懐かれてたし。

「ひっく……ひっく……グスッ」

「ほら、泣かない泣かない、そうだ、名前……教えてくれるかな？」

女の子の頭を優しく撫でて、目尻に浮かぶ涙を指で振り払ってみてるけど、なんかあの女の子は不安がってる。

「こんにちは、じぶｎ……私の名前は、流。風鈴流」

「ぁぅ……にゃ……がれ？」

「あはは……違うよ、な・が・れって、私の名前は後でいいな……君の名前はなんて言うのかな？教えてくれる？」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか……ヴィヴィオはどうして、ここにいるの？　中庭

なんて何にもないよ？」

って言いながら俺の少し前で、ぐるりと流が周囲を確認する。何となく俺も釣られて確認するけど、辺りを見渡して見てもそこには木々と芝生が生い茂っている変哲のない中庭。ぶっちゃけこんなところに人が来るとしたら、散歩とか日光浴位だろうな。

「……ママ」

「ん？」

「ママがいないの……」

「ママが？」

「うん……ママがいないの」

そう言うとヴィヴィオはまた落ち込み始める。流もどうしていいのか分からず、ただ、壊れそうに静かに震えるヴィヴィオの頭を撫でてあげてる。

「よし、ママが見つかるまで一緒にいてあげるよ」

「ほんと？」

「うん、ほんと、でもね、ヴィヴィオはちょっとお医者さんの所に行かなきゃいけないんだ」

「お医者さん？」

「ん、お医者さん。それから一緒にいて探すの手伝ってあげるから……ね？」

「……うん」

「うん、いい子だ」

よしよしと撫でるとくすぐったそうに目を細めてる。

「よし、部屋に戻ろうか？」

「うん」

「あ、ねぇ、ヴィヴィオ？　ヴィヴィオはどこから歩いて来たの？」

「あっちから歩いて来たの」

と二人手をつないで、ヴィヴィオの指差す方へと進んでく。うん、超微笑ましいわ。ほんと、何で流はあんなに子どもに好かれんのかね。しかもまたにゃがれって言われてるし……。

いやはや、ほんと微笑ましいもんが見れてよかったよか……。

――俺、今、迷子じゃーん……

って思って、慌てて追いかけたけど……うん、見失ったわ！

第五十話　出会い（後書き）

さて、今回からヴィヴィオ参戦です。そして、次回から流視点も入っていきます！

それでは、次回も読んでいただけると幸いです！

第五十一話　厄日と小さな疑問と変な状況

――ｓｉｄｅ響――

はい☆迷子です！

……はい、☆なんて付けて、ごめんなさい。うざかったですよね。ごめんなさい。ちょっと、現実から。自分のミスから目を背けたくて。

昔友人から近道って言われてた道入ったつもりだったんだけどなぁ……。くそぅ。

マジで迷った。しかも流達を見失うし……まぁ、いっか。

そんな時も有るさ。時間は有るんだ。ゆっくり行こう。そうしよう。

なんて、思っていたら。

「チェストーーー！」

そんな声とブースターを吹かす音が聞こえた瞬間、一気にしゃがみ、上を見上げる。

ついさっきまで頭のあった空間を何かが高速で通り抜けた。

「あぶ……ッ！」

「まだまだ！」

しゃがんだところへ、真上よりブースターの音と共に追撃を掛けられる。うん、正直に言おうじゃないか。

当たったら死ねるね！

「ちぃ、避けないでよ！」

「避けるわ！」

うん、正直なところ。面倒事に巻き込まれてますよ！

……今日は厄日かなんかなのか……俺？

まぁ、一応知らない奴じゃないから別にいいんだけどね！

――ｓｉｄｅ流――

―　聖王教会・検査病棟　―

「……ふぅ」

やっと、検査が終わった。体自体はもうとっくに治ってるから正直面倒で仕方がないし。

私的にはあんまり病院は嫌い。というか白衣を着た人が嫌い。嫌なことを思い出すから。

まぁ、そんなことよりも、少し早歩きで別の病室へと向かう。そして、目標の病室を見つけて、その扉を開けると、そこは、検査室の用だけど、他とは隔離されるかのようにガラスで仕切られている変な病室。そして、その中で、何かの検査を受けるヴィヴィオがそこにいるんだ。

だから、私の検査が無いときは出来るだけこの病室に入ってヴィヴィオの側にいるようにしてるんだけど。一つ疑問があるんだ。

――普通。こんな小さな子にこんな検査を受けさせるものなんだろうか？

実際その通りで、ヴィヴィオはその眼の色以外は何処からどう見ても普通の子供にしか見えない。

まぁ、瞳の色がちょっと昔話に出てくる聖王と似てる気がするけど……。ただそれ以外は普通にしか見えない。

「……ん？」

少し考え事をしてる内に、中で検査を受けているヴィヴィオが泣きそうな顔で私を見てた。

だから、出来るだけ優しそうな顔？を作って笑って見せると、中にいるヴィヴィオもまた笑って返してくれた。

うん、良かった。ちゃんと笑えてて……正直意識的に笑うのはあんまり得意じゃない。だけど、なんとなく、何となくだけど。

どこかでやったことがあるような気がする。これと似たようなことを。

でも、何処で？正直心当たりは全くない。でも、心のなかに靄が掛かったような嫌な感じだ。何かこう……大切な事を忘れてるみたいな気持ち悪い感覚が頭の中に広がっていく。

【失礼いたします、マスター。至急、病室へとお戻りください】

（ん？どうかしたの？）

突然、私のデバイスであるギルからの念話で少し驚く。普段あんまり話さないから、少し嬉しいと思ったのは内緒だ。

【お医者様がお探しになられています】

（うん、分かった。アークはどうしたの？）

【……スリープモードになりました】

（そう。じゃあ、直ぐに戻るから、もう少し待っててね？）

【はい、お待ちしております。それでは】

そう言い終えてから念話を閉じる。

実は緋凰さんといるときには手元に置いてたけど、検査を受けるとき取り外して検査室に預けておいたんだ。まぁ、本音を言うとこうやって呼び出してくれるようにって意図があったんだけどね。

まぁ、まだヴィヴィオがこの病室にいる限りはまだ移動しない。だって、見える範囲で移動したら、絶対またヴィヴィオが泣きそうになるし。それは中の人達も大変だし……。

「……よし」

少しだけこの場に残って、ヴィヴィオが別の病室に入ったのを確認して少し早歩きで病室から抜ける。

ただ、正直に言おう。この時凄く間違えたと後々本気で後悔したんだ。だって、私の位置からヴィヴィオの姿は見えなかったけど、ヴィヴィオの位置からは私の姿は丸見えで、私がそこから出て行く姿

を全部ヴィヴィオに見られてたんだ。うん、本気で後悔した。

――ｓｉｄｅ響――

ハァイ！今の状況を教えようじゃないですか！というか聞いてください。お願いします。

ついさっき、知り合いという名の変なのに絡まれたんだけど、現在はというと。

出来る限り気配を殺して、木の影に隠れております！

本音を言えば段ボールがあったら尚良かったんだけどね……。うん、どの世界でも段ボールは最強なんだいつだって、どんな時だって。

で、隠れてるんだけどもさ。木の影から先程から攻撃をしている人を観察する。

「ちょ、え、ちょ、ひ、響さぁん！」

先程まで俺に攻撃をしてきた主が俺を探して辺りを行ったり来たりしている。うん、ぶっちゃけるとアレからずっと攻撃回避してました。理由は単純。面倒、そして、だるい。この二つです。

うん、だってねぇ。折角の公欠ですよ。少しくらい休みたいじゃないですかッ！

いや、まぁ。お前最近働いたって聞かれると、首を縦には触れないんですけどね。これといって役に立った気なんてしないし。

「ちょ、アル！一緒に探してよぉ！」

「えー、ヤダ。私は言いましたよー、どうせ勝てないんだからやめ

といたらって。それでも無理矢理やったマスターの責任なんですし、自力で何とかしてください。力は貸しますけど、知恵は貸しません」

「ちょ、いいじゃん！普段（ウチ）私と一緒に悪ノリするくせに！」

「響さんが相手なら話は別です。あの人にマスターは直接攻撃当てられないでしょう？というか分かってるでしょう？」

「うぅ……気合と根性があれば。それに私に蹴り砕けぬモノってあんまりないよ？」

「精神論と、そんな考えじゃあ駄目です。それでは、頑張ってください」

「え、あ、ちょ、アル！？薄情者ー！」

うん、なんか目の前でデバイスと喧嘩しているのを見て一つ思う。いろいろカオスだなと。

というか今現在の俺の隠れ方がなんかヤダ。いや、嫌だっていうかなんていうか。昔ドラマかなんかでみた隠れ方っぽくてなんか嫌なんだよ。ここを選んだ俺も悪いけども！今の隠れ方ってなんか家政婦は見た！っぽいから、なんか嫌なんだよなぁ。

「ぅ、ぅぅぅぅ、響さーん！私（ウチ）、謝りますから出てきてくださ……へ？」

……うわ、なんか罪悪感が半端無く出てきた。というかどうしたんだ？急に止まったけども。

いや、あの様子だと念話でもしてるのかな？

「はい……はい……えぇ！？わかりました！すぐに探します！え、私（ウチ）ですか。あぁ見回りを……え、ちょ。嘘じゃないですよ！はい！分かりました直ぐに捜索を始めます！」

うん、なんて言うんだろう。念話なのか通信なのか分かりゃしねぇ。独り言にしては、大きすぎるし、多分念話だろう。口から出てるけども。さて。

「へーい、どうしたし？」

「あ、響さん居た！えっと、私の先輩見たいな人から連絡を貰ったんだけどさ」

「うん」

「昨日保護した女の子が検査の途中で抜け出しちゃったみたいで……」

「え、まじで？」

「……うん、それで子供のことだしそこまで警戒しなくていいと思うんだけど、シャッハさん、固い人だから……」

「必要以上に警戒してるわけ、か」

「……うん」

……あぁ、アレからかなり時間がかかったわけか。まぁ、昼間で見つけりゃいいやなんて思ってたら、いきなり襲われたからなぁ。時間間隔がおかしくなってたな。それなりに楽しかったからいいんだ

けどね！

さて、と。ちょっと急ごうかな。

「一応無いとは思うけど、なんか警戒してるんだったら先に見つけよう。脱走だと思われて子供相手に剣とか抜かれたら洒落にならん」

「うん、分かった。というか響さん、手伝ってくれるの？」

「ん、邪魔だったらいいけど」

「ううん、ありがとう！楽できる！」

「そういうのは心の中にしまいなさい」

「はーい」

そう言ってから、二人揃って走りだす。正確には俺は付いて行ってんだけどね。え？迷子になったなんて言えないし。まぁ、なんだかんだで。建物の中へと入って、流と一緒に行ったあの子――ヴィヴィオを探す。そして、二階を探している途中に。

「あ、響さん。居た！」

「おぉ、良かったよかった」

「最悪なパターンで！」

「はぁ！？」

って言うもんだから、慌てて窓の外から下を見下ろす。俺の目に写ったのは、トンファーを構える女の人の前に流が立ち塞がり、流の後ろには半泣き状態のヴィヴィオが尻餅をついたまま座り込んでいたんだけど。正直に言おう。何あの状況。

第五十一話　厄日と小さな疑問と変な状況（後書き）

また新キャラかよーとか言われそうですけど。このキャラの名前については、結構前に一応上がっておりますw

そして、人造魔導師かもしれなかったあの状況で、デバイス展開して子どもの前に出るとか、シャッハさんは何考えてたんだろうか？

それでは、今回はこれで失礼します。次回も読んでいただけると幸いです。

第五十二話　解決そして、帰ろうか？

「まぁ、何にせよ。止めに行くぞー」

「了解！」

二階の窓を開けて俺から先に飛び降りる。理由はもちろん急ぎだから。

いやだって、あの女の人確実に流も敵みたいに捉えてるっぽいもん。

急がないと危ないし。

そう思って二階から飛び降りて着地、そこから慌てて二人のもとへと行くと。

「シャッハさーん気負い過ぎ～！」

「へぁっ！？」

ハリセン片手に俺を追い越して、シャッハさんと呼ばれる方の頭にまっすぐたたき落とした。

えー、分かんないけどお前の上司じゃないの？

「な、何するのレイ！？」

「シャッハさんこそ何やってるんですか？女の子二人にデバイス構えて」

さっきと打って変わって真面目な表情で、それこそシャッハさんと呼ばれる方が流とヴィヴィオに向けていた顔と同じ顔でレイはシャ

ッハさんを睨んでる。うん、レイの発言で流が凹んでるのは言うまでもないと思うけどね。ただ、流もお仕事モードらしく、なるべく表情には出していない。

「わ、私は……その……」

「何があるのか存じませんけど、警戒するにもほどがありますよ。ほら茶髪の子はまだしもその後ろの女の子なんて泣いてますよ？」

「……うぅ」

うわぁ、普段気楽そうに生きてるレイが真面目そうな人に説教してる。正直な意見を言おうじゃないか、面白い図ができてる。まぁ、そんな事してる間に、いつの間にかこっちに来ていたシグナムさんがそこに居て、なのはさんがヴィヴィオの側にいる。ちなみに流は服についた埃を払って少しヴィヴィオとなのはから離れてる。うん、さっきの展開になって欲しくないんだな～。

「ごめんね？　びっくりしたよね？」

ヴィヴィオの側に落ちていたうさぎの人形を拾って、ヴィヴィオに差し出す。

んー、やっぱり女性って子供あやすのが得意なんだろうか？一人例外がいるけども。

「大丈夫？立てる？」

「……うん」

尻餅をついたヴィヴィオをゆっくりと立ち上げて、服に付いている

汚れを払いながら優しそうな笑みをヴィヴィオに向けた。さて、こっちも動くか。

「レーイ？」

「そんなに堅いと……って、何ですか響さん？」

「もういんじゃない？その人が警戒した理由もちゃんとあるんだ、あんまり言い過ぎは良くないぞーってか、お前人の事怒れるほどじゃないだろう？」

「う〝っ！」

「あとは……流！」

少し離れてヴィヴィオとなのはさんの様子を見てる流に声を掛ける。うん、なんとなーく、寂しい雰囲気が出てたからね。一応大体流の事もわかってきたし少しは、雰囲気とか読めるようになって来たよ！……アイコンタクトはまだできんけども。

「何でしょうか？」

「一応聞くけど怪我してない？」

「いえ、自分は大丈夫です。ただあの二人の間に割って入っただけなので」

「そっか、ならいいや」

相変わらずの無表情で応対する流。正直疲れないのか、とさえ思う。

だって物の少し前まであんなに表情とか変えてたのにさ。いや、この場合二人……知らない人が居るからか？
まぁ、どっちにしても。いつか、いつかちゃんと流と向き合って話をしなきゃ……な。

「え～と、流ちゃんでいいのかな？」

「……！」

あ、馬鹿が行って、流の雰囲気が変わった、うん。怒ってる。というかこの流れ、正直どっかで見たぞ。何処だったかな……あ、震離と流があった時の流れだなこりゃ。

「私の名前はレイ。レイ・ナハトって言うんだ。宜しく～」

「……ご丁寧にありがとうございます。自分の名前は風鈴流と申します。そして性別は男です」

「……ゑ？」

あ～ぁ、レイが凍った。というか血の気がどんどん引いていってどうして良いのか分かってないなこりゃ。でも助けないけどね！

「レイ、行きますよ？」

「え、いや、その……シャッハさん。待っ……うぁ、引っ張らないでくださいよ～」

うわぁ、なんか首根っこ捕まれて連れてかれた。なんか哀れだな……。

――数分後――

っていうのがさっきまであって、現在の状況がこれ。

「……クックックッ」

「……」

「♪」

あの後さ、なんかヴィヴィオを六課に連れていくために、なのはさんとシグナムさんがここの院長さんから許可を取ろうと、ヴィヴィオを置いていこうとしたんだけど、その段階で既にヴィヴィオがなのはさんになついてて、置いていこうとしたらヴィヴィオが大泣きしたんだ。そうしてたらヴィヴィオが流を見つけて「にゃがれと一緒にいる！」って言って流のそばに付いたら、こうなったんだ。

ちなみに、なのはさんとシグナムさん。流が慌てた表情見せたもんだから凄く驚いてた。始めてみるとそうなるよなぁ。

「……ねぇ、ヴィヴィオ？」

「ん～？」

「高……なのは隊……なのはさんが来たら、少しの間、離れるかもしれないけどいい……かな？」

なんていった瞬間、目に見えてヴィヴィオの表情が一気に暗くなっ

た。少しずつ涙目になって言って、そのまま流の膝の上で反転して抱きつくってか、しがみ付いて、涙目の状態で流を見上げるヴィヴィオ。同時にその流から「助けてください！」って視線が送られてくるけど。

「なつかれてるのはお前なんだ、しばらくそうしとけ、飲み物買ってくるよー」

「え、あ、ちょ……」

少し離れた自販機に足を運んで急いで飲み物を買いながら、少し耳を済ませる。もちろんあの二人の会話を聞くために。というか面白い展開だからあんまり見逃したくない！

「……」

「ぅ～……」

「……分かった、なのはさんが来たら、来たらお医者さんに話して、また今度ここに来るようにして、今回は一緒に行くよ……これでいい？」

慌てて買って戻ってきたらちょうどそんな事を話ししていた。実際、流がそういった瞬間、涙目だったヴィヴィオの顔が、一気に笑顔に変わったもんよ。まぁ、兎にも角にも。

「はい、お茶。ヴィヴィオにはオレンジジュースな」

「ありがとー♪」

「え、あ……ありがとうございます。えと、お金を……」

「ん？あぁ、気にすんな……ッ！」

全力で流から目を背ける。いやさ、流がその……ヴィヴィオを、抱きながら、あげたお茶を両手で持って、上目遣いで見てきたんだもん。うん、思わず……。

いや、少し待て。思わず何だ？

「……緋凰さん？」

フハハハハハ、落ち着けよ俺。俺は普通だ。普通の男ですよ。いやマジで。かわいい女の子は普通に可愛いと思うよ。うん、うん。落ち着け響。目の前にいるのは男だぜ。震離じゃないんだ俺は普通。仮にも好きな女の子がいて、今度告白しようと思ってる子もいるんだ、そうだろう！？だから！

「俺は普通だぁあああ！！！」

「病院内ではお静かに！」

「ごめんなさい！」

自己暗示した瞬間、たまたま近くを通りかかった看護師さんに怒られた……ちくしょう。不公平すぎるじゃんよ。

そうこうしてるうちに、なのはさん達は帰ってきて、俺と流も一緒に帰ることになった。まぁ、片道代が浮くからいいけどね。

そして、駐車場に付いたらそこにレイとシャッハさんがそこにいた。

なのはさんとヴィヴィオは先に車の後部座席に乗って、シグナムさんはシャッハさんから、書類とか一式もらってる。
そして、俺らはというと。

「さっきはごめんね、流君？あ、これデバイスね」

「あ、ありがとうございます」

さっきよりも血色のよい顔でレイが謝る。さっきは本当に顔が真っ白になったからなぁ。まぁ、それよりもだ。

「レイ？」

「ん、何ですか響さん？」

「これ、クランとアーチェと見てくれ」

そう言ってから、ポケットに入れてたデータチップを一つ渡す。

「何これ？」

「細かい点は中に入れてるから、まぁ中にも書いてるけど確定情報じゃないけどさ、まぁ良いニュースになると思う」

「そっか、まぁ、ありがとうー。お姉ちゃんと、クランが帰ってきたら一緒に見るよ」

ニコニコと笑いながらデータチップをポケットに入れる。うん、割ったりするなよ？まぁ、大丈夫か。

「行くぞ、緋凰、風鈴！」

後ろからシグナムさんの声が響く。うん相変わらず大きな声だ。正直びっくりするくらいに……。

なんて振り返ると、面白いものが見える。流も見えたらしく少し眉を潜めて、困ったような顔になった。

まぁ、面白いものっていうのは、車の後部座席の窓なんだけどね。だって、中でなのはさんになだめられながら、ガラスにすがるように流を見ているヴィヴィオの姿があるんだもん。しかも流に向かって、まだ来ないの！？って言わんばかりに視線を送ってるし。

「流、あれで後ろに乗らなかったら、絶対ヴィヴィオ泣くな？」

「……本当にそうなりそうなので、言わないで下さい……」

「あっはっはっは、そうだな。じゃあ、俺ら行くわ」

振り返ってレイに一言言ってから、車に向かう。まぁ、後ろでレイが「今度模擬戦しようねー」って言ってるけど、ガン無視。だって面倒だもん。そんなこんなで、流が後部座席の扉を開けた瞬間。

「むー！」

「ッ！？」

開けた瞬間、流のお腹めがけて突撃を掛けるヴィヴィオ。お陰で車ん中が騒がしいじゃねぇかよ。だけど面白いから放置するけどねー。って、後ろに乗れんから、俺は前か。というか。俺が乗り込むと同時に流も座るって……ヴィヴィオよ、おとなしくしたらいいのに。

ま、面白いから放置だけどねー。
そして、乗り込んだら乗り込んだでまた問題は起きてるし。

「……ぅぅ」

「……むぅ」

「ヴィヴィオ……手を……というか、腕を……」

「やっ！」

「……ぅぅ」

なんてしてるうちに、シグナムさんが微笑を浮かべながら「出すぞ」って、車が発進したわけなんだけどさ。その後もまだ続行中らしく。ヴィヴィオは流の手を話す気配が全くない。まぁ、別に離れないなら離れないで別に流もそこまで困らなかったと思うけど。問題はヴィヴィオの座る位置で、今現在のヴィヴィオの座ってる位置はというと、なのはさんの膝の上。

なのはさんもヴィヴィオに気に入られてるらしく、膝の上から動こうとしないで、流の腕も離そうとしない。しかもヴィヴィオはまだ小さいから、その腕が届く範囲はまだまだ狭く、そのせいで流となのはさんの距離も限りなく近いんだ。

うん、面白いね後ろは！

「……ふっ」

「むぅっ」

流が少しでも腕を動かそうもんなら、直ぐにヴィヴィオの手に力が入れられ、流が離れないようにする。うん、抜け目ないな。まじで。というか本当に面白い。だって俺なんてさっきから吹き出しそうで色々きついんだもん。シグナムさんはバックミラーで何度も後ろを見てるし、なのはさんは普通に驚いてるしね。

でもまぁ、分からなくもない。だって、普段、オフシフトでも無表情な流が、普段見せない表情を出す上に、困り顔になったり呆れ顔になったりと、表情をころころと、変えるんだから。気にならないわけがない。

でもまぁ。本当に少しだけ距離が詰められて良かったよ。本当に。

「……ふっ！」

「むぅっ！」

……いい加減お前も諦めろよ流……。

第五十二話　解決そして、帰ろうか？（後書き）

少し日を空けてしまって申し訳ありません！

今回でヴィヴィオとの出会い編は終了します。次回からは多分予想がつくと思いますけどねｗ

それでは、次回も読んでいただけると幸いです。

第五十三話　イベントって多けりゃいいってわけじゃない

ふふふ、なんでこうね。イベント関係ってね、纏めてドバっと来るんだろうね！
別に構わんよ。昨日が、なんか女の子ってかヴィヴィオを保護してね、六課のヘリ落とされて、アイツが裏切って、連鎖的に俺らの過去を皆に話してね！
そして、今日は朝から流を迎えに行ったら、ヴィヴィオは病院から抜けだしてね、そして帰るときも流にべったりでそりゃ微笑ましいよ。微笑ましいけど。

「なんだよド畜生ぉおおおお！！！！」

「叫んでないで、さっさと撃墜するよ！」

「あぁ、分かってる！」

はい、現在の状況絶賛遺跡の中で俺と奏の二人で、ガジェットと交戦しております☆

☆なんて付けましたけど、あんまり余裕はそれほどないっていうね。
さて、なんでこうなったのか少しさかのぼってみましょうかね。

――数時間前――

実はあの後、結局ヴィヴィオは流を離すことは無くて、結局流が折れたんだ。
まぁ、それは置いといて。今はそこじゃないんだ。問題は車が六課

の駐車場についた時でさ。

「あれ、どうしたの二人とも？」

「あ、なのはさん。お疲れ様です。いえ、実は……」

「はやてさんからのお達しで、私と奏、響の3人でちょっと管理外世界に行ってロスト・ロギアの回収に行って来てくれと頼まれたもので」

「……お前達だけでか？」

車の中から話を聞いていたシグナムさんが車を降りながら聞いてきた。まぁ、俺も気になるその手の回収系なら隊長とか含めていくべきだろうに。

「はい、響が元アレだったら任せてもいいかって聞いてましたけど……行ける響？」

あぁ、なるほどなるほど。まぁ、信頼されたと思えばいいのかね。面倒な仕事を押し付けられた気がするけどね！

「ん～まぁ……ちなみにどの世界？」

「え、第二無人世界。そこの遺跡にガジェットが集まってるからなんか有るんじゃないかって言ってた」

「……噛み砕いて言った？」

「うん、面倒だったからつい」

テヘッ♪って効果音が聞こえそうなくらいの笑顔で言ってくるけどさ。でも震離よ。そういうのはちゃんと報告してくれよ。分かんねぇだろうが。まぁ、いいけどね。

「まぁ、いいか。じゃあ準備して行こう……」

って言いかけて一つ思う。楽そうな任務だし流も連れていこうと。まぁ、連れて行ってやることは一つなんだけどね。ちゃんと面と向かって話をしよう。

「流ー、俺ら三人だけだと色々辛いから一緒に来てくれー」

「了解です」

ありゃりゃ、流はお仕事モード……って。

「緋凰？風鈴が一緒に行くにはアレを何とかしないといけないな？」

「ですね～」

珍しくシグナムさんが笑いながら話て、流の元を見つめる。いやだってさ。

「え、あ、その……本当にゴメンね。また今度一緒に遊ぶから……ね？」

「うぅ～」

「本当にゴメンね？」

「むぅぅう～」

めちゃくちゃ苦戦しながらも、なんとかヴィヴィオを落ち着かせてから、なのはさんの元まで連れてきた。うん、大変だね。震離も奏もめちゃくちゃ驚いてるし。まぁ、分からなくもないさ、ヴィヴィオを相手に流の表情がコロコロと変わるからね。まぁ、震離はそうでもないみたいだけどね。

さて、それじゃあ。行きましょうか。

必要な手続き、その他もろもろ済ませてから転移ポートに向かってそこから転移して、着いた瞬間。

「暑ぅ！？」

慌ててバリアジャケットを纏う。機能として防寒、防熱の効果があるから、少しは暑さ軽減したけども。それでも糞暑い。しかも転移ポートが設置されてるのは、岩山付近の天然の屋根がある部分に設置されている。さすが無人世界。侮ってたわ。

まぁ、それにしても……。何処からどう見ても砂漠だよなぁ。

「響～暑い～」

「……馬鹿お前まだ髪短いからいいけど、俺なんて髪長いせいで無駄に熱を吸収するんだぞ？」

「う～、暑い～」

俺の隣で暑いって連打する震離がいるんだけど、正直に言おう心頭

滅却すれば火もまた涼しとか言うけどさ、あんまり意味ないよね。
暑いもんは暑いんだし。

さて。

「はい、今回の任務は、この世界にある遺跡になんかガジェットが集結してるからその調査。そして可能ならばロスト・ロギアの回収で、困難な場合は大人しく撤退。何か質問は？」

「暑いから帰りたい」

「よし、奏？反応があったのは、北西の方向で合ってるよな？」

「ん、うん。そうだよ」

「よっしゃ。それじゃ早く行こう。まぁ、一応警戒しながらな～」

「……無視しないでよ～」

うっせって思ったのは多分言わなくても分かると思う。
まぁ、アレから飛んで移動してるわけなんだけど、訳なんだけど。
やっぱり暑いもんは暑いわけで。

「……響～死にそ～」

「うっせぇ……。奏、まだ？」

「……え？あぁ、うん。あの岩山付近だからもう少し」

「……そう、ありがとう」

再び無音。理由は単純に暑いから。いや、暑けりゃ暑いで別にいいんだ。問題はそこじゃない。問題は俺の隣を飛んでいる流が問題なんだ。その理由が……。

「流ー、こういう暑い時ってどうしたら良いー？」

「……はぃ？」

「……ごめん何でもない」

うん、俺と奏、震離の三人のバリアジャケットは基本的に暗い感じだけど、真っ黒とかそんな事はない。だけど流は違う。全身真っ黒の上に、黒いコートを羽織ってるもんだから、多分凄く暑いんだと思う。現に何となくだけど朦朧としてるっぽいしね。

だけど、本当に。暑い……というか死ねる。

って、ここまでは普通に面倒で暑いだけの任務だと思ってた自分を殴り飛ばしたくなりました。

第五十三話　イベントって多けりゃいいってわけじゃない（後書き）

はい、前回の後書きにて「次回からは多分予想がつくと思いますけどねw」とか言いつつ、即効でオリジナル展開に持っていった駄目作者です。あ、ごめんなさい、調子に乗りました。いえ、このイベントをこなすと、流の称号が一つと、イベントが一つ解禁されるんですって、ゲーム風に……あ、ごめんなさい調子に乗りました。

それでは、次回も読んでいただけると幸いです。

第五十四話　遺跡の中へ……Ｇｏ　Ｔｏ　Ｈｅｌｌ！？

はい、アレから数分。流も限界突破しかけてたけど、なんとかそれまでに目標地点である、岩山付近に到着して、この周辺にガジェットがいたって言う場所を発見したんだけど。

「……あからさま過ぎない？」

「……いいんじゃない？一応ここって、安全面上危険だってことで立ち入り禁止になったままだし」

「……そうか」

もう一度岩山を……いや、この遺跡を見上げる。遠くから見たらただの岩山だけど、近くから見れば石窟寺院のような遺跡がここにはあった。岩の陰に隠れてたけど近くから見れば、何に百年くらいか前まで人が住んでたっぽい感じだ。まぁ、素人の俺が言っても説得力はないんだけどねー。

さて、と。

「おーい、そろそろ休憩終わりでいいか～？」

「……えー」

「えー、じゃねぇよ。アレから十分影で休んだんだ十分だろう？」

「……うん、分かった」

「流は行けるか……って、大丈夫か？」

震離の近くで座り込んでいる流に声を掛けるけど、本気で死んでるんじゃないかってくらい静かだ。

マジで大丈夫かな……最悪ここに置いていくのも一つの手だけどな、一応病み上がりなんだし。

「……流？ここで待っとくか？」

「……え、あぁ、大丈夫ですよ。問題ないです」

「……そっか、本当に大丈夫なんだな？」

「えぇ、行けます」

一応最終確認するけど……逆に無理させたかこりゃ？

まぁ、いいや。とりあえず最終確認。

「はい、一応作戦の最終確認な。この遺跡ん中にガジェットが入っていったのを管理局が確認し、俺らはその調査。可能ならばロスト・ロギアの回収で、困難な場合は撤退。っていうのが作戦だ」

「了解」

「あっとは、一応隊長陣とか部隊ぐるみで来てたら二手に分かれるとかそういう事したけど、今回は俺ら四人だけ。だから一応四人で一緒に動く。万が一離れた場合、今いるこの場所に集合。出来なかったら何らかの手段で連絡。それも出来なかったら大人しく待機。その時は時間掛けてでも救援呼ぶし、呼んでくれ。以上、何か質問は？」

「ハイ！」

「はい、震離」

「はやてさんに面倒事を押し付けられた気がするんだけど！」

「はい、これ以外に何か質問はー？」

「無視しないでよー！？」

うるせぇ分かってんよそんな事くらい。一応信頼されてると思って受けたんだから。というか厄介払いとか……いやいやそんな事は無いと思う。多分。さて、と！

「よし、行くか」

「了解」「はいはい」「無視しないでよー！」

兎にも角にも、めんどうだからって報告書偽るわけにもいかないしな。

ただ、まぁ……なんて言えばいいんだろうか？

――すっごく嫌な感じがする。

なんかこう、鳥肌がたつっていうか、肌が焼けるような、寒いような、なんかこう……。

ものすごく嫌な感じが。なんだろう。いやこの感じ何かに似てる。

うん、これは――

「響？」

「……え、あ、何？」

いつの間にか目の前に奏が居て、心配そうな顔で俺の顔を覗き込んでいた。

「どうしたの、凄く怖い顔してたけど？」

「いや、別に……」

なんでもない、と言う前に、奏に目で言われる。嘘を付くなって。いや、正確にはもうちょい優しい言葉だったかもしれないけど、俺にはそう感じ取れたんだ。

「……二人は？」

「先に行ったよ」

「……わかった、じゃあ言うよ、なんか嫌な感じが……いや、よく分からないけどなんか、ね？」

「そう……でも、さ？」

「分かってる。今回のは撤退ありだからな、やばくなったら直ぐに撤退するさ。それよりも行こう」

「うん、分かった。響も無理しないでね」

「もちろん」

嫌な予感を背に、足を進める。正直二つ返事で、軽い気持ちで受けるんじゃなかったって軽く後悔してる。一応嫌な予感もちゃんと理由がある。転移する前にこの遺跡っぽいものを上空から画像を撮った際には、ガジェットが数機存在してた。俺らが来るほんの数時間前の画像ではね。

だけど、実際はどうだ？ガジェットはおろか、ここに来てから俺は生物を、動くものを見ていない。

砂漠だからって言うことを考慮しても、それはおかしい。もしかすると罠って可能性もある。敵さんが六課を引き出すためにわざとガジェットを配備した可能性もあるしね。まぁ、考えても仕方ないか。

「まぁ、兎にも角にも。皆、怪我だけはしないよーに、っと」

「何それ？」

「んー願掛け」

「本当にそうだね」

軽く願掛けしてたら奏に笑われた。クソゥ。何となく悔しい。というか負けた気分が凄い……っていうか。

「マジでアイツらは？」

「もう遺跡の入り口付近まで行ってる」

「早いな！？」

「響がボケっとしてるからだよ。多分もう中に入ってるから急ごう？」

「……ごめん」

とにかく、急いで二人の跡を追う。というか、結構進んでてびっくりしたわ！

だって、普通に遺跡の入り口空けて既に中で遺跡の見物してたし。

流は普通に色々見てるけど……震離は、なんか壁の装飾を見てるし。

「何してるの震離？」

「ん、いや別にーただ、ガジェがいるって聞いたから、その割に居ないなーって思って色々見てた」

「ガジェって……まぁ、だけどさ。何もなければいいんじゃない？」

「ま、そうだけどねー」

ん、全くだ。なんて思ってると同時に、震離が遺跡の壁から離れた瞬間。

真上より鈍く、重い音が聞こえた。

「奏！？」「え、きゃっ！？」

「流！」「え、うわっ！？」

鈍い音が聞こえたとほぼ同時に、真上から石で出来た天井が落ちてきた。反射的に、俺が奏を抱いて壁際の方へ移動、流と震離も、俺

達の反対側へ移動した。けど。

「え、な！？」

「震離、流！？」

流を抱いた震離の足元が崩れ、その連鎖で二人の居た付近の天井が崩れる。慌てて二人を助けに行こうとしたけど、天井の瓦礫に防がれて、ただ二人が落ちて行くのを見てるしか無かった。しかも同時に。

「っ！？響！！」

「え、おぉ！？奏！？」

奏を降ろした場所の壁が突然反転して、奏が壁に吸い込まれた。隠し扉っぽかったから慌てて俺も奏を追って中に入る。正直な話、本気でミスったって後悔してるよ。

だって、俺が隠し扉に入った瞬間、遺跡の入り口が大きな音を立てて崩落したんだ。

しかも隠し扉っつっても、その先はただの穴。つまり、現在の状況はただ落ちてるだけです。

別にそれは良い、空飛べばいいんだもん。だけど問題が一つ。ついさっき、入り口が崩落したって言ったけど、そのせいで。俺の後方がやばいことになってる。

理由は単純で。入り口が崩落して、その余波で、こっちの天井もぶっ壊れたらしく、落ちながら瓦礫に追われるっていう一生に一度あるかないかの貴重な体験を絶賛しています。

うん、スッゲェ怖い。しかも結構この穴ってか、落とし穴？は深いしね！？

しかも少しずつ加速してようやっと奏を見つけたけどさ。なんかこっちに銃口向けてるから死ぬほど怖いしね！

「響！後ろの瓦礫どうにかするからかわしてね！」

「あ～、多分質量半端ないと思うから打つなよ？逆にややこしくなるから」

「え、はぁ！？じゃあどうするの！？」

「あーとにかくそのままでいろよー」

そう言いながら少し加速して、奏の側まで移動。うん、このまま着地したら死ぬだろうから、とにかく奏を抱く。うん、死ぬかもしれないから仕方なくだ。一応言っとく、故意はない。

「少し本気で飛ぶから、しっかり捕まってて」

「え、あ、うん」

魔力を使って体を強化する。同時に五感も、特に視覚と聴覚、触覚の３つを。出来るだけ強く強化した瞬間。

「行くぞ」

自由落下の途中で、一気に加速。同時に、地面へ向けて急速落下。それでも一部の瓦礫は追い抜けず、地面へ着地した瞬間、瓦礫が落

ちてくる。真上を見上げると、見渡し限り瓦礫が降り注いでくるけど。今の俺にはゆっくりにしか見えない。そのまま周囲を確認して、扉らしきものを見つけ、急いでそこへと向かう。途中瓦礫が上から降ってくるけど、寸のところで回避、それを繰り返しながら扉の前まで移動して、そのまま！

「おぅらぁあああ！」

目の前の扉を蹴り破る。石で出来てたらしく、扉全体が砕け散ったけど気にしない。だって、命掛かってたしね。あとはそのまま着地……ゑ？

「嘘ぉ！？」

着地したと同時に、砕いた岩を踏んで、滑る。反射的に、怪我させちゃいけないって、奏を抱いた腕をあげるけど……これ、俺が危ないよね？って思ったけど、時すでに遅し。だって、五感強化したせいで、いろいろゆっくりに見えるせいで、少しずつ地面が俺の目の前に迫ってきて、そして。

「あだだだだだだ！？」

「ちょ、響、大丈夫！？」

「……ぁ、ぅ」

顔面ダイブって死ぬほど痛いねーとか思ってたら、意識が遠くなって、そこで途切れた。

第五十四話　遺跡の中へ……Ｇｏ　Ｔｏ　Ｈｅｌｌ！？（後書き）

さて、次回から視点変更が忙しくなっていきます。

はい、もうリリカルなのはじゃないじゃん！って言われても反論できません。ごめんなさい本当に、原作を置き去りにしてしまって！ただ、寸のところまで来たんですがオリキャラをまた出すか否か真剣に悩んでいます。ただ、敵だけど、いれば面白くなるし、居なくても最悪どうにかなるっていう……ね、決められないというダメな人です、私は！

さて、次回も楽しみにしていただければ幸いです。

ちなみに前回の更新、あれ、予約すんの忘れてそのままダイレクトにやっちゃったっていうね、凄い悲しいミスを犯したっていうね！

第五十五話　戦力分散と違和感、そして、歴史をちょっとだけ（前書き）

はい、お久しぶりです皆様方。更新が渋ってしまい本当に申し訳ありません。活動報告を見ていただければある程度分かると思いますが……一応ここでも説明を、熱中症でぶっ倒れて、病院に運ばれて、入院しておりました……。本当にゴメンナサイ。

そして、今回はオリジナル設定が暴走しております！はい、名前だけではかなり行きますが多分本編じゃでてこない方々です！ですが、そういうのが逃げてという方は本当にごめんなさい！

それでも構わないんだぜ！という方のみお進み下さい！では、どうぞ。

第五十五話　戦力分散と違和感、そして、歴史をちょっとだけ

――ｓｉｄｅ流――

とりあえず、簡潔に今の状況を。
私と叶望さんがいる場所は、最初の遺跡の入り口の先辺りに今現在居ます。
辺りっていう理由は、ついさっき穴に落ちた時、私達の方が簡単な落とし穴で、うまい具合に天井が蓋になってあんまり被害が無いからです。
まぁ、そこを撃ちぬいて抜けようとも思ったんですが、叶望さん曰く、連鎖でまた崩壊するかも、と言っていたので撃ち抜くのはやめて、落とし穴にあった隠し通路的なのを使って上に戻ったんですが、おそらく場所的に先ほどまでいた場所の反対側、つまり、扉の向こう側にいるんじゃないかというのが叶望さんの予想です。
でも、正直に言うと。

「完全に分散しましたね」

「うん、そだね。まさか私達が簡単な罠で、響さん達が面倒なものだとは思わなかったよ」

うん、その通りなんです。だけど、正直に思うと。このトラップが意図的なものなのかどうか判断しづらいんです。それにまだ不安要素はたくさんありますしね。

「……緋凰さん達が何処へ落ちたかはわかりませんが、先に進めば一応分かるとは思いますが……」

「……まぁ、敵がいるかも知れないってことでしょ？」

「えぇ、そうなります。どうしますか？」

「もちろん、いくよ」

……いえ、まぁ、行くのはほぼ確定してるんですけども……。まぁ、私の言い方が悪かったんだろうし……。

「……それは当然なことなんですが、一応救援を呼びますかって意味だったんですが……」

「ぁ、そういう事ね。んー、救援は……いいんじゃない？多分行けるよ」

「そうですか。では」

「うん、参ろうか！」

……やっぱり、叶望さんは、いつも元気な人だな……。ただ、ただ。

――何かおかしい……？

いや、私の考え過ぎか？だけど、話をしててさっきから違和感が出てくる。なんだろう？

叶望さんはいつも話をする時、目を見てくる。私が、少し気恥ずかしくても「目を見て話してよー」とか笑いながら言う方だ。だけど、さっきから話をしてて、目が合っても。何かおかしいんだ。

私の目を見て話をしてるというより、それ以外を見て話をしている

ように感じる。

……いや、でも……。

「ん、流ー行かないのー？」

「今行きます」

いや、考え過ぎか。

とにかく、今は、緋凰さん達の捜索をしないと……って。目の前に光る円盤のようなものが腰辺りに浮遊していた。つまり、これは。

「……この遺跡……ワープ装置付きですか……」

「ありゃ、そうだったねー。でもまだ生きてるし、行けるんじゃない？」

「そうですね。では、行きましょう」

二人一緒にその円盤に触れると、別の広間らしき場所に転移した。同時に光る円盤は消えて、帰りは別ルートになったけど……。とにかく現状を確認。少し大広間の真ん中に私達は居て、広間の左右の端には、下と上へと繋がる階段と、私達の正面には、人の何倍もある大きな扉がある。だけど、扉の前には壁や天井の瓦礫で塞がれているから、入るのは無理そうで、階段については問題なさそう。

「やっぱりボロボロだねー」

「そうですね。でも、この世界には人がいなくなって、もう数百年と経っています。あ、ちなみに一説には、聖王も関わっていた可能

性もあるそうですよ」

「へぇ、そうなんだ……って、そんな感じの本を見たこと有るよー」

「えぇ、ただ、真偽は定かではないですけどね」

実際その通りで。私もいつか見たことがある。ただ、一つ問題があって。有名どころである、最後の聖王である、「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」ではなく、その母である「ヴィヴィアン・ゼーゲブレヒト」が関わったって記述されているんですよね……。

ちなみにその話は、その聖王……つまり「ヴィヴィアン」の方の腹心である家臣と、その家臣を慕っていた騎士が、ある時反旗を翻したそうで、未だに原因は分かっていないとの事、そして、この遺跡でその家臣を打ちとったと記録されているんですが、面白い記述も有るんですよね。

その家臣と、その騎士達は、聖王軍を誰一人殺さなかった。そして、聖王軍を何度も退けた。

という記述が書かれているんです。もちろん数百年前の話ですし、本当かどうかもわかりません。更にその家臣についての一説には、かつての「闇の書」と対等に渡り合えたとも書かれています。そして、付いた二つ名が「頂点に君臨する者」や、「灰色の堕天使」、「魔神」「戦王」等々いろいろ書かれています。ただ、この人には謎が多くて、その姿が子供にしか見えなかったと言われたり、２０代前半と言われたり外見も、年齢もバラバラ。それに名前も二つ合って、一つは「ヴァレン・Ａ・Ｆ・シュタイン」、もう一つが「アッシュ・ファルベ」と二つ存在し、何方が本名か分からないと言われています。ただ、後者の名前のイニシャルを取ると、「Ａ・Ｆ」

になるので、前者が本当の名前とも呼ばれているんですが実際のところは分かりません。

しかも、その家臣を慕っていた人達の名前も面白いもので、「ヒビキ・アマカワ」「テイル・フォルモント」「ユーリア・フルユーリング」「ライナー・ネージュ」「アクセル・Ｎ・アルトゥール」「ルメルシェ・ヴァルキュリア」と、最初の人物以外ミッドに居そうな方々なんですが、「ユーリア」という方以外、詳細が不明なんです。この方のみ分かっているのは、「フルユーリング」という名は、かつての古代ベルカ時代に栄えた王家の名前で、聖王家と同盟を結んだ人らしいんです。真偽はわかりませんけどね。

ただ、これ以上の情報となると、真偽が分からなくて……もう調べてないんですけどね。時間もありませんし、今知ってる情報も本当かどうかわかりませんし。

それでも一つ言えるのは、「魔神」と書かれたときには、物語とかで「聖王」の敵として書かれるのに対して、「戦王」と書かれたときには「聖王」や「覇王」と共に戦ったとも書かれていたりします。個人的にはこの事はおそらく、相当密接な関係なんだったと思います。だって、ただの王と名乗っているなら、おそらくこんな物語書かれませんしね。

さて。

「……これからどうします？」

「そうだねー、多分まだこの遺跡の罠が生きてるかもしてないから、左右の階段から別れて探せば早いけど。危ないから、一緒に探そうか？」

「わかりました。とりあえず下りましょう」

隣で笑みを浮かべている、叶望さんに返事をしてから、足を進めた。

その瞬間。

「……目標確認」

「ッ！？」「危なっ！」

突然真上より、砲撃が撃ち落とされた、とっさのことで私と叶望さんは、別々の方向に飛んで回避する。そして、叶望さんの体勢を立て直した瞬間。

「なっ！？」

「っ！叶望さん！」

「余所見をするなぁあああ！！！」

声を聞いた瞬間に分かった。いつだったか私を落とした、あの黒い侍の声が響いたと同時に、叶望さんの居た場所の床が粉砕し、そのまま叶望さんは落ちていった。本当なら直ぐにでも追いかけたかったけど、先程からこちらに向かって攻撃を放つ黒いローブを纏った敵がそれを許してくれない。

（ギル、アーク）

（何でしょうか？）（何マスター？）

（真面目にやる。力を貸してくれる？）

（（もちろん！））

（……ありがとう、じゃあ！）

念話で二機から……ううん、二人とも言えるデバイスから心強い返事をもらってから、もう一度黒いローブの敵を睨む。顔から覗く銀髪、多分結構長い。ローブを纏っているから体型はわかりにくいけど、さっきの声からして多分女性、とにかく、今はあの敵をどうにかしないと！

第五十五話　戦力分散と違和感、そして、歴史をちょっとだけ（後書き）

さて、違和感をいくつか仕込みましたが多分分かると思いますし、わかりやすいわ！と鼻で笑ってもかまいませんよｗ

そして、オリジナル設定目白押しなんですが、名前のその内の一つは、結構前に出ていますｗ

……もう、本当にリリカルなのはじゃないじゃんって突っ込まれても何も言い返せない……ｏｒｚ

それでは、次回も読んでいただけると幸いです！

第五十六話　相対と提案

――ｓｉｄｅ奏――

やぁ……正直なところ、なんか最近こうやってゆっくりしたこと無かったなぁ。

あ、私の今の状態はね、さっき私を庇って意識を失った響を膝枕してるって状況なんだ。ちなみに私の背後には大きな扉、瓦礫を挟んで反対側にはさっき私達が落ちてきた部屋へと繋がる扉が有るんだけど今は動けないんだ。

本当にここ最近は……ってか、昨日は忙しかった。女の子を保護してから、あの人が裏切って、動けないはずの煌達もやってきて、そして私達の過去を明かして。そして今日は遺跡探索でって……。

本当に忙しいなぁ。でも、楽しいんだよね。たった数年しか動いてないけど艦でみんなでいた時みたいに、本当に楽しい。

なんて思っていたら。真上より、轟音が響き渡るけど、音は少し遠く。感覚的に別の階での音だと思う。これってひょっとすると……。

「震離と流……？」

轟音と共に、いくつか魔力反応もキャッチする。これらの状況を考えるにさ。もしかしてあの二人……襲われてる？だとしたら……まずいね。

「響、ちょっと起きて」

「……ぅぉ？」

とりあえず、気を失ってるところ申し訳ないなとか思いつつ、響を起こす。

「起きた？」

「おぅ」

「とりあえず、上に行かないと」

「……いや、行くのは少し後だ」

「は！？」

目の前で寝ぼけ顔で、頭を掻いてる響。どうも上で戦闘が起こってるかもしれないのに何を呑気な！

なんて思っていたら。私達が落ちた部屋からコツコツと足音が聞こえる。同時に心が淀む。この感じは、いやこの気持ち悪い気配はただ一つで。

「あら、こんな所で何をしているのお二人さん？」

腰まで伸ばしていた髪を、首元まで切り、メガネを外して、気持ち悪い笑を浮かべ、その本性がにじみ出ている。あんまりこの人の名前を言いたくないけど、私と響の前に居るのは。

「あれ、そっちこそどうしたんです。アヤ・アースライト・クラン

ベル三佐？」

こっちも響が声を返すけども。その返事は嫌味をふんだんに込めてる。まぁ、昨日響は別のところにいて相対してなかったもんね。私たちは一撃入れられたからそうでもないけど。

「いえ、ただ探しものに来ただけですよ」

「そうですか。暇人なんですねー」

響はケラケラ笑いながら、あっちはオホホと笑いながら話してるけども……うん。両者の間でものすごく火花が散ってるように見える。

正直に言うね。ものすごく怖い。だって互いに目が笑ってなんだもん。しかもあの人は私なんか眼中に無いって言わんばかりにこっち見ないで、響を見てるし、響もずっとあの人を見てるし。

「……奏！」

「うひゃぃ！？」

「……とりあえず、後ろの扉開けてさ、多分上に行けると思うから震離達の援護に行ってくれ」

「え、あ、うん。了解。響は？」

「あぁ、ここに居るよ」

……別に指示に文句つける気無いけどさ。正直なところ響の考えがよく分かんない。だってさ、一応あの人ニアSなんだよ？一応響の

実力に文句つける気無いけど……大丈夫なのかな？

「……奏、とりあえず簡単に言っとくけど、あの人昨日の怪我が響いてるっぽいぞ」

「へ？」

「フフフ、何を根拠に言ってるんですか？」

実際その通りだけど……二人とも、たまにでいいから私を見てよ。なんか寂しいじゃん。

「あっはっは、それはあんたが一番分かってる事だろう。いちいち言わせんなよ恥ずかしい」

「……」

どうも私は気づかないけど、あの人はなんか攻撃が出来ないみたいだけど……信じていいのかな？

「とにかくだ。早く行って来てくれ奏？」

「……本当に大丈夫？」

「もちろん、ただ、なるべく早くな。こいつら多分変なやつ連れてきてると思うから」

「え、あ、うん。じゃあ、またね」

「おう」

軽く手を振るけど、やっぱり見てくれない。攻撃してこないって言っても、やっぱり警戒するよね。でも少しくらい見てくれると色々安心するんだけどね。さて、石で出来た扉を開けると、上と下へと向かう、螺旋階段があるけど……遥か上まで伸びてるからかなり時間が掛かりそう。いやまぁ、ホバリングっぽい感じで移動するからそうでもないんだけどね。

さて、それじゃあ。

「行こうかな！」

――ｓｉｄｅ響――

「え、あ、うん。じゃあ、またね」

「おう」

後ろにいる奏に返事を返して上にいる二人の援護に送る。本音を言えばちゃんと顔見てさ、怪我するなよーとか言ってあげたかったんだけど、一応敵が居るから目を離せないんだよなー。

さて、と。

「とりあえず、一つ質問を。あんたら今回何連れてきた？」

「急にどうしました？」

とりあえず、この遺跡に入る前の気配の元について質問を投げとく。

いやだって初めてだぜ？

遺跡に入る前に、俺が何かに怯えたのは。

「……一つ勘違いしているので言いますが。私達は貴方より後にこの遺跡に足を踏み入れましたよ」

「……ぁ？」

何戯けてんだろうか？この世界は無人世界、今はお前達と俺達四人しかいないんだぜ？

「ただ、この遺跡。ドクターからの指示で何かが残っているかもしれないから見てきてくれないか？と頼まれて今回ここに来たんです。現にあなた達はガジェットを見つけてきたみたいだけど。かなり前からガジェットはこの遺跡を調査しています。ですが、今日まで何も収穫がありませんでしたので、これが最後という意味で今回私達がここに来たんですよ？」

長い説明ご苦労様だ。まぁ、仮にそれが本当だとしよう。それじゃあ……。

――俺が感じたアレは何だ？

遺跡に入る前からずっと感じてた嫌な気配。いや、正確には……認めたくないけど本能的に勝てない相手と出会った時みたいな嫌な感じがずっとしてるのに、こいつらのうちの誰かじゃない。だとしたら本当になんだ？

ただ、ただまぁ。あいつの言うことを全部を鵜呑みにするわけじゃないが……どうも、嫌な感じがするな真面目に。

「もう一つ質問。この遺跡……何があるんだ？」

「……言うと思って？」

「そうか……それじゃあ、いいや」

まぁ、流石に言わんよな。ただまぁ、一応俺も管理局っていう看板を背負ってるわけで、一応犯罪者になったあいつを捕まえなきゃならんけど……。

「そうですね。それならば緋凰響さん。一つ提案をよろしいかしら？」

「……何だ？」

「私達のもとへ来ませんか？」

「……はぁ？何を戯けたことを」

「もちろん見返りはありますよ。そうですね。あなたの場合、7年前に別れたお母様とお会いできますよ。緋凰魂歌（ひおうこんか）さん、またの名を――」

「黙れ」

あいつが言い切るよりも先に、あいつの懐へ踏み込む。それはあいつも読んでたみたいで、俺の顔を見て気持ち悪い笑みを浮かべる。それでも、届かないと分かっていても、拳に魔力を込めて、それを！

「翔舞激閃」

あいつに打ち込む！

「流石に重い一撃ですね。とてもとてもＡランクとは思えませんよ」

だけど、その拳はあいつの手で遮られる。何が重い一撃だ。余裕じゃないか。

「嘘つけ」

「いえいえ、嘘ではありませんが……これが今の回答だと、とっておきましょうか」

「……今のじゃなくて未来永劫アンタと俺が共闘するなんてありえないよ」

「……今回のところは、私は引きます。まぁ、後二人はどうかは知りませんけどね」

「……後二人？」

……って言うと、一人はあの侍だとして……もう一人いるのか？だとしたら昨日の全身ボディスーツの人の内の一人か？

「まぁ、今回はこれで、それではまた。近いうちに……」

「うるせぇ」

転移する最後まで、人の拳を掴んだまま転移していった。転移する最後の瞬間まで俺の顔見てから行きやがった。正直言うよ。気持ち悪かったし、ムカツクだけだった。

何が、母さんと合わせてやるだ。もう母さんとはもう逢えないんだ。何を言ってるんだか……。ただ、ただ、それ以上に母さんのまたの名?何言ってやがる。俺かて知らんわ。ただ、母さんのことは昔から謎な点が多すぎるんだよな。親類にあったことなんて一度もないし。お陰でお年玉なんてあんまりもらえなかったしな……。

「ととっ」

なんて考えていると。上から轟音が響き、震動が伝わる。距離的には少し遠くの感じだけど、俺らのいる場所は地下なため、連鎖で崩れてきたら正直不味いし、それにこの轟音。流と震離達か?

まぁ、とにかく。急いでアイツらの元へと行こう。

第五十六話　相対と提案（後書き）

相変わらずオリジナル展開目白押しですよー。

ただ、もうしばらく……後１０話位は余裕で続くと思ってください

……あ、遺跡から戻るのも含めてですよｗ

さぁ、今度は前回の小説の続きを書かねばぁあああ……さぁ、がんばろう。

それでは、次回も読んでいただけると幸いです。

ｋｙｏｎｓｉでした。

第五十七話　追いついて、掃討戦を！

――ｓｉｄｅ響――

「あー面倒だー」

螺旋階段を登りながら自然と口から溢れる。いやまぁ、別に空飛ぶ要領でホバリングっぽく移動することは可能だけどさ。正直それはそれで面倒なもので。というか健康な足が二本生えてるんだし、階段くらい登れなくてどうするよ。

正直な所、見た目以上に螺旋階段が長いことに正直イライラし始めてるんだよな。

いや、イラつく要因は別にもあるよ。もちろん。ついさっきのあんのババァの事もあるしね。

何が私達の元へ来ないかだ。誰が行くか馬鹿野郎。しかも見返りが母さんと合わせてやるだ？戯けんなよクソが。死んだ人が生き返るわけねぇだろうが。

あぁ……、思い出したら余計にイライラしてきた……。

えぇい。落ち着け俺。今のやるべき事は上で戦ってるであろう、流と震離の援護だ。多分あの侍も来てるだろうしな。問題がアイツが言っていた後二人のうちのもう一人。そいつが問題だ。

いやまぁ、アイツらが負けるとは思えんよ。だって俺よりランク上だもん。俺がＡで、アイツらＡＡだったり、総合ＡＡＡなんだし。まぁ純粋に戦闘すりゃ負けるとは思えんよ。リミット付いていなけ

ればね。そして、流は病み上がりだし不安要素は上げればきりがない。実際今回の任務って本当は流は含まれてないしねー。

まぁ、文句言われたら、軽い気持ちで見たあんたらが悪いって言い返せばいいか。つっても、お前一応指揮官（笑）だろって言われたら言い返せないんだけどねー。

あぁ……。なんか精神的に凹んできたよ？なんで俺こういう事が多いんだ？特殊部隊にスカウトされた時だって、正直俺なんかよりも、普通に指揮できる雪奈や、才能の塊の震離達の方が圧倒的に魅力的なのに、なんで俺みたいな残念性能なのをスカウトしたんだろう……。

他の面々……それどころか、俺は念話とか、身体強化、魔力付与、飛行魔法のこれら以外扱えないのに。うん、ぶっちゃけるとスフィア作れないからね、俺。というか作ったら暴発するし。それ以外にも探索魔法とか、魔力放出系も苦手すぎるし、収束魔法だってさ、拳や刀を媒体にすれば可能だけど、なのはさんみたく、砲撃で打つ要領でなんてとても無理。そもそも、俺魔力が少ないから砲撃なんて打てないんだけどね。

……いかん、なんか色々精神的に折れそうになって来た。なーんで、俺この世界に来たんだろ……。

あ。

「落、ち、着、け、俺！」

何やってんだ俺は、何余裕ぶっこいて、自分の事を考えてんだよ！とにかく、さっさとこの螺旋階段を登り切ろう。こんな暗くてじめ

じめした場所に居ると、俺の精神が折れるし！

「よっし、光が見えて来た！」

糞長い螺旋階段をようやっと登り切って、出た先の部屋には。

「アブねッ！？」

いきなり目の前からレーザーが飛んできて、慌てて状態を後ろに逸らして回避。俗に言うブリッジの体勢に近い。うん、この体勢いつか見た映画？のワンシーンみたいだなー。なんて考える辺り結構余裕あるな俺。

「何事！？」

慌てて周囲を見渡すと、部屋を覆い尽くすかのごとくガジェットＩＩＩ型が大量に居る。しかも稀にＩＩＩ型もいるし。そして、なんかガジェットの動きを見るに、何かを取り囲んでいるように……って。

「え、奏！？」

「え、響！？もう終わったの！？」

「あぁ！まぁ、細かいのは後で話すとして、援護するぞ！」

「うん！」

腰に携えた刀を二本抜く。今日はまだ戦闘してないから珍しくまだ罅とか入ってない。毎回こんなんだったらいいのになー、いちいち気なんか使わなくて済むしね。とりあえず、さっき一瞬凹んだけど、

その前の鬱憤を晴らす意味を込めて！

「なんだよド畜生ぉおおおお！！！！」

いろんなことに対して！とりあえず心のままに叫んでみる！

「叫んでないで、さっさと撃墜するよ！」

「あぁ、分かってる！」

目の前のガジェットを蹴散らしながら、部屋の中央でガジェットを撃ち抜く奏の元へと向かう。というか本当に奏も凄いよなー。抜き打ちで多重弾殻生成して撃ってるんだもん。本当に凄いよなー。

「っと！」

前後左右からガジェットのアームと、レーザーがそれぞれ飛来してきたのを回避して、とりあえず進路上のガジェットを切り刻む。

まぁ、そんなこんなで、奏の元までたどり着いて、そこで、背中を合わせる。

「アイツらの元に行くんじゃなかったのか？」

「これから行くところだったよ。というか響、早すぎない？」

「あぁ、さっさと撤退してくれたんでね。そういう奏こそ、あんまり減ってない気がするぜ？」

「あはは、Ｉ型なら幾ら来ても負ける気はしないけど、流石にＩＩ

Ｉ型も居ると少し大変でね」

「そっか、まぁ、とりあえず。俺がＩＩＩ型を優先して撃破するから、奏は」

「分かってるよ。Ｉ型をさっさと落としてってことでしょ？」

「あぁ、そういう事。それじゃあ」

「うん」

「参ろうか？」

「はいっ」

背中合わせで会話するけど、そんな中でも寄ってくるガジェットは俺が斬って、レーザーを打とうとするガジェットは奏が撃ち抜く。

あぁ、本当に、奏と一緒にいると楽だし、落ち着く。さぁ、アイツらの援護に行くためにこいつらを片付けようかッ！

――ｓｉｄｅ――

響が奏と合流したその頃。その部屋よりも更に上の階では。

流達が来た当初は、瓦礫で埋め尽くされていたが、今は先程よりも天井や壁の瓦礫で埋め尽くされ、床には下の階がところどころ顔をのぞかせていたが、その中でも異彩を放つ、二つの影が。

一つは、瓦礫に背を預けるように目を瞑る人物が。

もう一つは、黒いローブを纏い、顔を隠している人物が。そして、小さく、ポツリと。

「戦闘終了。検体名、Ｆの無力化に成功致しました。同時に、遺跡内の対象物の確保は不可能と断定、これより帰還致します」

誰に言うわけでもなく、ただ作業的な口調でそう呟いた後、黒いローブの人物は転移魔法を発動させ、何処かへ転移した。

そして、残された人物の周辺は血濡れで、その血の主の体も紅く染まっていた。

第五十七話　追いついて、掃討戦を！（後書き）

はい、もうしばらく響ｓｉｄｅが続きますよー。

すいません、本当にオリジナル展開続きで……。

そして、今回響の悩みを、彼の基礎能力を少し出してみました。はい、一応響は凡人よりも駄目な、落ちこぼれのレベルです。まぁ、この話はまたいつかちゃんと書くと思いますけど。

それでは、次回も読んでいただけると幸いです！ｋｙｏｎｓｉでした！

あぁぁ……この前の続きも書かねば……。そして、今日は就活だ…投稿する頃には帰ってると思いますけどもｗ

それでは今度こそ失礼します。

第五十八話　記憶の夢を

――ｓｉｄｅ？？――

（名前はなんて言うんだ？）

頭の中に言葉が響く。私のものではない、誰かの声が。だけど、そんな事よりも体が重い。眠い。薄く入る光と共に目の前を黄味を帯びた液体が埋め尽くしている。

（……聞こえてない？もしくは……Ｉｃｈ　ｓａｇｅ　ｄｅｎ　Ｎａｍｅｎ　Ｎａｎｔｅｓ？）

それでも頭の中に語りかけてくる言葉は止まらない。私は眠いのに、言葉は止まらない。

（あ！？そうか、そうだよな。先に名乗らないといけないよな！俺の名前はリュウキ、リュウキ・ソウリュウっていうんだ……って、言葉通じてんのかな……？）

うるさい。そう思ったけど、私の意識はそこで一度途切れた。

――――――――――――

遠くから何かが聞こえる。何だろう。

（それでさ、俺の友人……ヒビキってやつなんだけど、そいつがまた面白いやつでさ。男の癖に髪は長い、女の子の裸に興味ないわで色々面白おかしい奴だったんだ）

朦朧とする意識の中で、また何か言っている。分からない、本当に。

（そしてさ、そいつの親友二人もこれまた面白くて……っと、魔力が切れそうだ……。今日はここまでだ。また起きたら続きを話すよ。お休み～）

そんな声が聞こえてから頭に声が響かなくなった。だけど、それでも体は重く、眠い。またそこで意識は途切れた。

――――――――――

（おはよう！今日は、前回話したヒビキってやつの親友、コウとユウヤの話をしたから、今度はその三人の幼なじみの女の子の話をするぞ～）

今日も声が響く。この様子だとこの声の主は私に毎日話しかけているのだろう。

（まぁ、前に言った俺の家族もなかなか曲者ぞろいだけど、こっちも凄くくせのある子が多くてな。その中でもシンリって言う女の子は凄いぜ～。なんて言ったって、一度教えりゃ直ぐに応用に入る凄いやつなんだ！なんてったって、相手のマホウを無力化したりするほどなんだぜ！）

何を言っているのか分からない。だけど、私はこの人の声を聞いて思う。感じる。

楽しいっていう気持ちが伝わってくると。

だけど、私は楽しいって気持ちがなんなのか分からない。私の中に浮かぶ言葉を上げているけど分からない。そこでまた意識が途切れた。

そして――

――ｓｉｄｅ流――

「……だから私はあの人達の事が気になってたんだ」

朦朧とする意識の中で目が覚める。

とぎれとぎれにだけど、昔のことを、大凡二年前のことを思い出す。

そこでの私は、本当に何もなかった。記憶も何も。リュウキ・ソウリュウ、いいえ、リュウキさんの手によって、とある研究所から抜けだした後、私は特殊鎮圧部隊に保護されて。

「……ッ」

いや、今はそんな事思い出してる場合じゃない。さっきまで私は黒いローブの人と戦って……、そう。傷ひとつ与えることが出来なかったんだ。それどころかいろんな所を斬られて、返り討ちにあって。

「……怪我は……」

天井へ向いていた視線を下へとずらして、自分の体の状態を確認する。

黒を中心とした防護服のお陰で血は目立たない。だけど、私の周りの床や瓦礫には私の血らしきものが所々に付いて、周囲を紅く染め上げていた。

だけど。

「……いつも通りあんまり無いな」

いや、正確にはもう完治した（・・・・）が正しい。昔から……いや、二年前から私の体はおかしいらしいのだ。軽い切り傷程度ならば、数秒あればすぐに治り、深く斬られても常人の数倍程怪我の治りが早いらしい。だから、ホテル・アグスタの後、すぐ怪我が治ったにもかかわらず仕事が出来なくて、迷惑をかけて申し訳なかったんだっけ。

多分、周囲の状況を見るからに、結構な怪我を負ったみたいだけど、少しの痛みを除いて私の体はほぼ完治している。

だけど、どうして？

忘れていた研究所のことを思い出したんだろう？

そして、どうして私はこんなにも大切な事を忘れていたのだろう？

［マスター！ご無事で何よりです！］［起きないから心配しましたよマスタ～！］

「……うん、ありがとう。そして、ゴメンね」

私の手の中と、胸にかかっている待機状態のデバイス。ギルとアークに返事をする。

この様子だと、また二機に……いや、二人に心配を掛けたようだ。

「とりあえず、相手は何か言ってた？」

［……］［な、何も言ってませんよ？］

ギルはだんまり、アークはぎこちない返事で。うん、あの黒いローブの人が何か言ったか、何かあったか。まぁ、とにかく。

「……正直に」

［……］［……分かりました。あの黒いのが、「戦闘終了。検体名、Ｆの無力化に成功致しました。同時に、遺跡内の対象物の確保は不可能と断定、これより帰還致します」って……、ただ、マスターは昔のことを覚えていないから……］

「……そう」

……Ｆか。そう言えば、研究所でそう言われてたらしいんだよね。私は。そして、流って名前を得たのはリュウキさんのお陰だっけ。私の名前が……いや、私の入っていた「生体ポッド」に名前が書かれてたらしいんだよね。「Ｆｌｏｗ・Ｗｉｎｄｂｅｌｌ」って。そして、リュウキさんがそのまま直訳したお陰で、今の名前になったんだよね。

あぁ、どうして私は。こんな大切な事を今まで忘れてたんだろう……。

いや、原因はあるんだ。ただ思い出したくない、思い出したくもないことだけど、ね。

なんて、考えてたら。

「やっと上に……って、流ぇぇぇえええ！？」

「どうしたの……って、な！？え！？」

下へ続く階から、緋凰さんと、天雅さんが登ってきて、私の姿を見つけて絶叫。うん、こんな状態だと心配されるよね。

でも、完治しても痛いものは痛くて、動けないですけどね。

第五十八話　記憶の夢を（後書き）

しばらく実家に帰郷等々いろいろイベントをこなしていたら、更新が遅れてしまい申し訳ありません。

本当はこんな感じの話はもっと後にする予定でしたが、後にしたらまた、流が戦闘できなくなるという事になってしまうため、先に持ってきてイベントをこなしましたw

それでは、今回はこれでー、次回も読んでいただけると幸いです！

第五十九話　違和感からの。（前書き）

まず、最初に二週間くらい更新せずに本当に申し訳ありません。
ここ最近、というより本当に心がへし折れる寸前までいってしまったので……。これ以上は言い訳になってしまいますね。本当に申し訳ありません。詳しい点は、活動報告を参照していただければ幸いです。では、どうぞ。

第五十九話　違和感からの。

――ｓｉｄｅ響――

「……本当に大丈夫なんだな？」

「えぇ、大丈夫です。外見以上にダメージは少ないので」

「そっか」

奏と二人で階段を上り切った瞬間、瓦礫にもたれ掛かってる流の姿を見て死ぬほど驚いた。

というか心臓に悪すぎる。だってさ、戦闘はもう終わったものだと思ってたけどさ、階段上って見渡したら、周りが血で赤くなってて、そのド真ん中で流が座ってたら心配するに決まってるだろうよ。

まぁ、流がなんか隠してるのは目に見えてるけど。それは後でいい。問題は……。

「流。震離は何処に行ったの？さっきから姿が見えないけど」

「叶望さんは、この下の階に黒い侍と共に落ちました」

「ん～震離はまぁ、大丈夫……かな」

流と奏が会話してる間に、床が抜けてる場所から下を見ると確かに震離は底にいた。ただ、一つ違和感が。

なんでアイツ、まだ登ってこないんだ？

いやまぁ、原因は別にあるかもよ。ガジェットが居て、ＡＭＦがキツイとかね。もしくは侍に傷つけられたとかさ。原因はあるかもしれない。

だけど、上から見るに、怪我はない。ガジェットも居ない。其処かほぼアイツ無傷だし。

まぁ、震離の実力知ってるから心配はないけどさ。それでも、それでもさ。アイツの性格からすれば、直ぐにでも流の元に行くだろうしな。震離は流のこと好きだしなー。だからおかしいと思うのか？

まぁ、何にせよ。

「震離ー、上がってこーい」

とりあえず、降りるの面倒だから呼び掛ける。まぁ、怪我ないか一応確認するために降りるのも一つの手だけどさ。流が怪我してるっぽいし、それに震離がこっちに来てくれたら俺らの昔の事を流に話せるしな。

って、聞こえてないし……。

「震離ー！上がってこーい！」

「へ、あ、響さん！」

……今、何つった？

え、俺の聞き間違いじゃなければ、今震離は俺のこと「さん」付けで返事したよね？

なんかしたかな俺？心辺りは……無いしな。むしろ俺がブチギレてもいいような事ばかりだし。

いやまぁ、怒ってないよ?別に映画のチケット奪われようが、ケーキバイキングの無料券奪われようが、別に俺は気にしないよ。後々奏に怒られたこと以外は……「私にくれてよ」って、昔ケーキバイキングの券あげて、二日後くらいに体重がって叫んで、人にいちゃもんつけたじゃん……。響のせいだかんね!って……。

……今はそんな事はどうでもいいわ。

「どったの震離?」

「ん、ううん、何でもないよ。どうしたの響さん?」

「ん~いや、別に」

……あれ?ヤバイな違和感半端ない。どれくらい違和感かというとさ。最近出た東の方の新作で、一面のボスに、6面ボスクラスの人が出てきたことくらいの違和感だ。お前のような一面ボスがいるかってくらいのね。

……ごめん、いい例えが浮かばなくて。すいません。

「え、流、大丈夫?」

「えぇ、大丈夫ですよ。叶望さんは?」

「問題ないよ~、相手弱かったしね」

ん~、やっぱり違和感しか無いな。何時ものコイツならかなり取り乱すだろうに。

そう思って奏の方を見ると、あっちも違和感に気づいたっぽく。首

をかしげてる。そんで持って久しぶりのアイコンを。

――アレ、どう思う？

――分かんない。けどおかしいよね。あれ、本当に震離？

――だと思うけど。とりあえず話振ってみるからフォローしてくんない？下手すると嫌われるし。

――……了解。まぁ、お願いね。

で、終了。奏の援護を取り付けられるし、まぁ大丈夫だろう。でも嫌だなぁ。今から振る話題のリアクション次第では対応変わるしなぁ。というか本当に震離だったら1週間は口聞いてもらえないくらいのレベルだし。まぁ、腹括るかな。

「なぁ、震離？」

「ん、何？」

振り返って何時もの震離の笑顔を見ると。正直心苦しいってか言いたくないな。でもまぁ。

「……お前のお母さんと連絡取れたか？」

「え、あぁ、最近とってない――何？」

開口一番、嫌がるってか、嫌悪の表情を出せば。直ぐにでも俺は謝った。むしろ土下座するくらいのね。でも、震離は違った。笑いながら話を続けた。だから、直ぐに刀を抜いて、震離に向ける。

普通の人なら、これが普通の反応だ。でも震離は違うし、俺は震離を産んだ人を知っている。それがどれだけ最低な人間かを。そして、震離が全力で嫌悪してることも知ってる。

「な、緋凰さん!?」

「流、ストップ」

奏も動けない流をいつでも守れるように、その背に隠すように震離と流の間に割って入っている。そして、震離に銃口を向けている。

「え、あ、何?二人とも何?」

「……震離。いや、震離に化けたどちら様。言っても聞かないだろうけど、さ。とりあえず、さ。今黙って震離を返すってんなら何もしない。そして謝罪を一言言ったら、黙って見逃すよ」

とりあえず、さ。テンプレ（俺ｖｅｒ）でも言って反応を見ようかな。

「……で?どうする?個人的には震離の姿を模したやつを攻撃したくはないんだけど」

「……」

目の前で震離の姿をした奴に話しかける。正直まだよく分かってないんだよな。震離じゃないといえば震離ではない。だけど、変身魔法でもない気がする。いくら何でも震離と同じ体になるわけ無いしな。アイツ胸張って……というか、はっきり胸のサイズがＢって言

えないらしいし。

「で？どうする？最終通告だけども？」

「……」

まぁ、これで「はい、わかりました」なんて言ってくれたら万々歳なんだけどねー。でも、無いんだろうな。よくある展開じゃ、よく見破ったな。とかそんなノリだろうし。

「……ほ」

「ほ？」

「本当にすいませんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「いいっ！？」

フラっと震離が倒れる瞬間、慌てて傍に駆け寄ってゆっくり横に寝かせる。そして、震離が気を失ってるのを確認してから、上を見上げる。そこにいたのは……。

「ほ、本当にごめんなさい！」

「え……えぇ？」

薄い緑の和服に、黒髪のツインテールの女の子が居るんだけど。うん、見上げるって言った段階で気づいてると思うけど。その子、小さいんだ。それこそ昨日の赤い髪のチビ子と同じように、リインさんと同じようにね。で、そんな子がペコペコ頭を下げてるし、いき

なりこの展開のせいで、正直なところ、結構パニクってるよ。

第五十九話　違和感からの。（後書き）

元々書きかけだったものを出したのですが、また日が空きそうです。
一応スピードを上げますが……次は何時になるやら……本当に亀で申し訳ありません！

では、次回も読んでいただけると幸いです。

第六十話　一時撤退を

――ｓｉｄｅ響――

「いやまぁ、うん、まぁ。とりあえず状況は分かった。うん」

「あ、ありがとうございます！」

とりあえず、目の前の少女から話を聞く。というか聞いたんだけど。まぁ、要約するとこの少女。正確にはユニゾンデバイスの咲（サキ）は、つい最近までこの遺跡の中で寝てたとの事。でも、なんかガジェットがここに来て、なんか自分の事を追って来るもんだからずっと遺跡内部で逃げまわってたらしい。それで、遺跡の中で逃げてたらきりがないと思ったらしく、外に逃げようとした時に、俺らと遭遇。天井付近で、隠れて様子を見ていたら、小さい柱を倒したらしい、そしたら天井が崩落して、俺らを分断させてしまった挙句、流を庇った震離が気を失っちゃったもんだから、慌ててユニゾンしたとのこと。

でも、気になる点がいくつか。

「でも、サキ……ちゃん？」

「あ、よ、呼び捨てでいいですよ」

「そうか、ならばサキ。なんで俺らの名前知ってたの？」

実際その通りだ。ユニゾンなんてしたこともないから分かんないけど、人の事知ってるのは少し頂けない。いやまぁ、遺跡の前で話し

てたの聞いたって回答なんだろうけども。

「へ、あ、その、ですね……。叶望様の記憶を……少しだけ覗きまして……それで」

空中でモジモジしながら話すサキ。というか若干俯いて、顔が赤いのはなんでだろう？

というかユニゾンデバイスって凄いんだねぇ。記憶も覗けるって。

「……そんな事出来るもんなんだね」

「は、はい」

「で、なんでここにいたの？」

「……え？」

とりあえず、一番聞きたかったことを聞いておく。震離の様子を見てる奏と流も同じようで、ジッとサキを見つめている。正直、一番それが気になっていた。だって、さっき俺が下でアイツに出会った時、こう言っていた。「ドクターからの指示で何かが残っているかもしれないから見てきてくれないか？」と。この言葉が、サキを差すものであれば、ある程度納得できる。

最初は、アイツ、スカリエッティ側での地位は低いものだと思ってたけど。サキを手に入れるためにここに送られたと、考えれば納得できる。現に偽侍と、後一人、流に怪我を負わせた「何か」が居たからな。

それほどまでして、手に入れたいものがサキならば。絶対に、何か

有るはずだ。

って言っても、これは全部仮定の話なんだけどねー。この遺跡、まだなんかありそうだし。ヤバそうな気配はまだ有るし。

「え、えと、その、あの……」

「ん、どうした？」

「い、いえ。その……私、さっき、この遺跡の中で起きたって言ったじゃないですか」

「あぁ、言ってたね……って、もしかして？」

あっれー、なんかイヤーな予感がしてきたよー。

「……は、はい。その、もしかしてです。起きた段階で、過去のデータの大半が破損してて……自分の名前と、融合機って事しか覚えてなくて……分からないんです。自分がどんな能力を持っているのかすら……」

「……そっか」

嫌な予感が的中した……。クソゥ。まだなんか有るかと思ってたのになぁ。というか大切な情報源が……。

えぇい。仕方ない。過ぎたことはもう忘れよう。流そうじゃないか。まぁ、とりあえず、だ。

「……なぁ、サキ？」

「は、はい？何ですか緋凰様？」

「俺ら一旦引き上げるけど。ついてくる？」

「え、えぇ！？い、いや、でも、その」

「とりあえず、身の安全等は保証するよ」

「……でも、お仕事中では」

「……こんな状況だもん。一旦下がるよ」

実際そうだし。俺がアイツと接触した事。震離が意識を失ってること。流が多分怪我したこと（本人は大丈夫っていてるけどね）。流の言葉から新しい敵が出てきたこと。そして、サキの事と一旦下がるには十分すぎる条件だ。つっても、また明日も来なくちゃならんが、この様じゃ、ね。

「……それでは……その、よろしくお願いします」

顔を赤くしながら、空中で頭を深く下げるのを見て一つ思う。この子をみた優夜が暴走……ってか、変な方向に行きそうだなぁって。まぁ、何にせよだ。

「あいわかった。よろしく」

「……はい」

とりあえず、この子を保護して今回は一度撤退することにした。そ

して、俺が震離をおぶって帰ることになったんだけど。だけど、ね。失礼しなことを言うかもしれないけどね！

「なぁ奏」

「なに響？」

「……震離ってもう成長してないの？」

「……なんで？」

「いや、その、まぁ、うん」

「……多分成長してないと思う。毎日牛乳とか飲んでるらしいけど、ね」

「……そっか」

サキの案内で、空を飛びながら奏とこんな会話をする。後ろを飛んでる流は首をかしげて、俺の頭の上に乗ってるサキも首をかしげてるけど。奏にはちゃんと伝わった。すっごく微妙そうな顔してるけど。

いやまぁ、うん。オブラートに包んだけど、正直に言うよ。震離をおぶった時にさ。何も感じなくてね……。いつか奏をおんぶした時は、そのまぁ、うん。あれが……っていうか、なんていうか、スッゲェ柔らかいものが背中にあたって緊張したんだけど。震離の場合……何も……何も感じなくてね……。

第六十話　一時撤退を（後書き）

はい、どんだけお前はオリキャラを出せば気がすむんだと叩かれそうです。そして、なんだかんだしたらもう一度遺跡に行きます。それが済んだら今度こそ、日常編に戻ります。その頃には流も含んだキャラ紹介も出せると思います。

本当に長くなってしまってすいません……。

それでは、次回も読んでいただけると幸いです。

第六十一話　ちょっと道草を

――side響――

「で、とりあえず。遺跡でそんな事があったわけなんよ」

「……そうか、それは大変だったな。でも、一つ良いか？」

「ん、どうした？」

「早く六課に帰れよ」

ちょっとした報告を、優夜に報告してたら文句を言われました。
ちなみに、流は一応体を観てもらって、震離は雪奈が様子を見てて、奏は今、正式にリミッターを解除してる煌と瑞希の様子を見に行ってて、サキは俺の頭の上で寝てる。
いやまぁ、うん。とりあえず俺らも悪いと思うよ。六課に真っ直ぐ帰らないで、本局寄って、優夜達のいる場所に来てるからね。で、俺と優夜は待合室っぽい場所の長椅子に座ってるわけで。別に、帰って仕事するのが面倒とかそんなつもりは無いよ。一応。

「面倒だからこっちにきたんだろうが」

「……人の考えに突っ込むなや。まぁいいや。とりあえず、アイツに関する情報はなんか有る？」

「あー？あー、今本局凄いことになってんよー、お姉さまがスカリエッティに誑かさせたーやら、洗脳やら、色々な。でも一つ面白い情報を手に入れたんだ」

優夜が、隣で面倒そうに話してるけど、徐々に悪い顔になってくる。
正直コイツの情報網って異常に広いし、結構正確で助かる。

「で、どんな情報だ？」

「あの人さ、８年前に旦那を不治の病で亡くしてるらしい。エリックって人を。まぁ、これだけだと大した情報じゃないが、あの人の側に居た人が言っていたんだが、ここ最近までこう言ってたらしい「近いうちに大切な人に会える」って、な」

「へぇー」

なるほど。だから遺跡で俺を誘ったのか。似たような境遇だから。
でもまぁ、俺なんか誘ってもメリットなんて皆無なんだけどなぁ。

「だから響を誘ったんだと思うぜ。お前がいれば色々楽できるだろうし」

「冗談。俺なんか誘っても何のメリットもないよ。それよかお前や雪奈、煌に瑞希に、震離に奏を誘ったほうが、まだマシだろうよ」

「……お前、謙遜は……してないか。響、それお前の悪い癖だぜ、自分のことを過小評価しすぎるのは」

「してねぇよ。実際俺は弱いんだ。魔法だって、身体強化、念話、魔力付与、防御魔法、飛行しか使えなんだからな」

「……お前は……いいよもう、俺が言っても聞かないし」

盛大なため息を吐きながら椅子の体を預ける。実際その通りなんだから仕方ないだろうが。

「……で、その子、どうするんだ？」

「ん、サキの事か？」

「あぁ」

「一応六課に連れてって保みたいな扱いになると思う。一応危害とか加えるつもり無いし、六課ならリインさんが居るからサキも気が楽だと思うし」

「なるほど」

「……さすが、和服フェチ。食いつくなぁ」

「な！違う！」

「照れるなよーそして、大きな声出すなよー起きるだろー」

隣で顔を赤くしながらなんか言ってるけど、あんまり俺の心には響かんなぁ。

いやまぁ、優夜がどんなタイプの子が好きは知ってるから、ただ単にからかってるだけなんだけどねー。コイツからかうの楽しいし。

「……一応言っとくけど、ロリの気は無いよ。それにその子の来てる奴、完全な和服じゃないし、あんまり和服としては好きなタイプじゃない。服としてはいいけど」

「またまたー、浴衣を下着って認識してるお前がそんなんで済む訳ないじゃーん」

「うるせぇ、お前が女性もの着てる写真をばら蒔くぞ」

「……ごめん」

「おう」

即土下座くらいの勢いで、すぐに謝る。頭下げたらサキが落ちるから出来ないけどね。ちくしょう、からかい過ぎた。くっそー、幼なじみの欠点って、これだよなぁ。

「あー、そうだ響、一つ分かったことがあるんだが」

「何よ？」

「流の事なんだけど、さ。まぁ、この情報はまだ誰にも言ってないけど……聞く？」

「……ぁ～、何処から来たかってのが分かったの？」

「……あぁ」

どことなく暗い顔で、ポツリと返事をする。多分、これを聞いたらどっちにしろ状況が変わるかもしれないな。

多分、今聞いておくのも正しいかもしれないけど。だけど。

「いや、もうちょい待ってみる。今晩はエリオ達に俺らのこと話すつもりだし」

「そっか、分かった。そうだ、もう一つ」

「あんだよ、まだあんのかよ」

「いや、ついさっき連絡貰ったんだけど、さ。驚くなよ？」

「あぁ、ここ最近色々合ったからな、並大抵のことじゃ驚かんよ」

「そうか、なら言うわ。妹が出来た」

「……」

「……」

「画面の向こうで？」

「残念。本気ものだ」

「……ぁ～」

「……」

「前言撤回、驚いた」

「だろうな」

……ちょっと、衝撃が強すぎてちょっと整理が追いつかない。え、統夜さんが、今４２で、優さんが、４０だろ？優さんはとても４０には見えないけども。

え、え、あれ？

「本気で？」

「本気で。ちなみに名前は、夏に輝くと書いて、夏輝（なつき）だって」

……えー？えー？本気で？ヤバイな、出産祝いを送らないとなぁ。っていうか。

「妹よりも、娘に近くない？」

「……あぁ、母さんから私ら死んだらお前が育てるんだよって言われた」

ハハハって、乾いた笑いを出してるけど。死んだ魚みたいな目で、はるか遠くを見てる。うん、俺も母さんが生きてたら多分お前みたいな状況になるんだろうなぁ。

というか、優夜達が気づかなかったってことは、相当だったんだろうなぁ。わぁー。なんか、凄いことになってる。あれ、そうなると……。

「俺らの中じゃ初めてなんじゃないの、兄妹もちって」

「あ？あー、そうなるのかね……いや、違う、煌の所に姉が居たらしい」

「え、あ、あぁ。そうか。やべ、今のは失言だった」

「んー、まぁ、仕方ないんじゃないか。煌の場合特殊な事情なんだし」

「まぁ、うん。だけど、失言だしな……後で飲み物でも奢るかね」

「律儀だねぇ」

「うるせぇ」

あー、やっぱこいつらと話ししてると楽だなぁ。いちいち気とか使わなくていいし。本当に楽だなぁ。

……だからか、あの人がスカリエッティ側に行ったのは。まぁ、関係ないからいいか。

なんて、考えていたら、局員見たいな人がこっちを見て、優夜を呼んでる。

そろそろ時間か。

「それじゃあ、俺は行くよ」

「あぁ、時間取らせて悪かったな」

「気にすんな。じゃ」

「おぅ」

軽く手を振って優夜を見送る。後は奏と流が帰ってきて、震離の様子を見て、一緒に行けるかどうか見てから六課に戻るかな。

そして、夜にはエリオ達に俺らの話をして、明日にはまたあの遺跡に行って……。

ただ、あんまりあの遺跡行きたくないんだよなぁ。アイツが言って

たのが正しかったら、あの遺跡になんかヤバそうなのが居るみたいだし。

ヤダなぁ。なんて、考えてたら、奏と流が一緒に戻ってきた。

よし、いい加減動こうかな。

第六十一話　ちょっと道草を（後書き）

はい、今回はあんまり出番のない人をｗ　すいません。直接六課に帰るのが、帰らせるのが面倒だと思ったので。すいません。

一応次回は六課でなんやかんや、色々して、そして、その夜にはＦＷの面々に響達の過去を話します。長くなるので省きますけどね。そして、次の日にはもう一度遺跡に行きます。スケジュールいっぱいだなぁ。本当にｗ

それでは、今回はこれで失礼しますー。

次回も読んでいただけると幸いです。ｋｙｏｎｓｉでした！

第六十二話　報告。そして、彼の強さの理由を。

――ｓｉｄｅ響――

「とりあえず、経緯はそんな感じですので。あの子の処遇を決めてください」

「了解や～って、言っても、別にどうこうする気はあらへんよ。デバイスと言っても意思があるんやし」

「了解ですって、言いたいんですけど、どうも本人、過去のデータが破損しているらしくて。覚えてないみたいです」

「そうか～、でも、本人……サキちゃんは、どうしたいとか言ったった？」

「あ～、それはまだ聞いてないですね。後で聞いておきますね」

「うん、お願いするよ。それよりも……」

俺の目の前で、大きなため息を吐き出す八神部隊長もとい、はやてさん。一応任務の途中結果等の報告中だから、一応真面目にしておく。別にはやてさんだし、普段のノリで言っても多めに見てもらえそうだけど、ちゃんとする時はちゃんとしておきたいし。普段は不真面目じゃないかって？

一応、こう見えても元次元艦の艦長だったから、真面目にする時としない時のメリハリはちゃんとしてるよ。

まぁ、俺のことはどうでもいいや。些細な事だし。問題ははやてさ

んのため息だ。なんかスゲェ疲れてるっぽい。まぁ、現在の時刻ってか、大凡夕方だし疲れてんのは皆同じだけどはやてさんは特に疲れてるらしい。

あ、ちなみに他の面子ってか、流と奏は、デスクで仕事中で、震離は一応起きてるけど、調子悪そうだったから、そのままシャマルさんの所に送って、サキは連れて帰ったら、リインさんに捕まった。そして、そのまま任せたんだけどね。本人もうれしそうだったし。

「思ってた以上に、アヤさんが抜けたのが響いてるね」

「あー、表と裏どっちでですか？」

「……裏のほうやね。響達のことは勿論。聖王教会の方でもてんてこ舞いやった。あの事件の関連性が疑われたりね」

「……そうですか」

あの事件っていうのは、多分、反聖王教会団体幹部殺害事件の事だろうな。正直……正直あの事件は驚いた。まぁ、昔のことだし殆ど終わったことだし、もういいけどね。

「まぁ、それよりも今日はお疲れ様や」

「いえ、まだ完全に調べたわけじゃないんで、明日もう一度行ってきます」

「了解や。まぁ、私も後でサキちゃんと話してみるよ」

「はい、分かりました。それでは、失礼します」

一応ピシッと敬礼してから、回れ右。あー、このあと飯食って、夜にはエリオ達に話をしないとなぁ。

「あ、そや響。もう一つ有るんやけど、いい？」

「え、あぁ、何ですか？」

普通に帰ろうとしてたから、もう一度はやてさんの前まで戻るけど。態度ってか対応が普段に近い感じだから、もう敬礼とかそういうのはいらないと判断してもいいかもな。

「……流の事なんやけど。響はどう思う？」

「さぁ、どうでしょう。一応今日エリオや流達に話すので、それ次第で話してくれるかどうかですね」

「……そっか。ゴメンな呼び止めて、言ってええよ」

「はい、では失礼しますね」

軽く頭を下げて、今度こそ隊長室から退室する。正直な話、流の正体はだいたい目星は付いてる。本人は武装隊出身って言ってるけど、武装隊の割にスタンドプレーが得意だし、何よりも流みたいなタイプの人間が目立たないわけがない。それでも、今まで風のうわさにすらならなかったことを考えると、普通の部隊には居ないよなぁ。多分優夜もそれに気づいて、調べたんだろう。管理局の影の部分を、表には出されない部隊のことを。そして、そこであたりを引いたんだろうきっと。

ま、初めて合った日から、それ程経ってないから、本当に信用はされてないだろうから、今までガードが硬かったんだろう。こっちも、言えなかったこともあるしね。

まぁ、何にせよだ。夜から勝負だな。

……あ、俺もデスクしなきゃ。あー、メンドクセェ。

――side優夜――

「あー、やっと終わったー、なんでリミット外すのにこんなに時間食うんだよー。なんでよ優夜？」

「面倒なもんを振るなよ。そりゃまぁ、非正規リミットだしな、害があるかどうかの検査も兼ねてんだよ。一応魔導師の命みたいな物だし」

「でも、皆異常なかったんだし、良かったんじゃない？」

「瑞希ー、色々細工されてる可能性もあるからまだ安心は出来ないよ。とはいってもちゃんと調べたし、殆ど問題はないけどね」

待合室で四人で座ってとりあえず、結果？待ちをしてる途中だ。正直、長すぎていい加減飽きてきた。いやまぁ、長くなった原因はこっちにも有るさ。昨日の戦闘の時、無理矢理自分らで外したんだしねー。その上突貫工事過ぎて、全部までちゃんと外せなかったんだよな。

まぁ、あの時別に俺らはでなくても良かったんだ。別にね。あのまま黙って響達の支援に回ればよかったけど、さすがにね、個人的な

恨みなんて無いけど、親友とその想い人を長いこと縛ってたやつを前にするとどうにも抑えられなくなって、結局皆で突っ込んだっていうね。

「で、響とは何話してたの？」

「あ？」

隣に座る雪奈が、ニコニコ笑いながら、人の目を覗き込んでくる。椅子の端に座る煌と、雪奈と煌の間に座る瑞希も同じようで、笑ってる。二人は兎も角として。

「煌、その顔ウザイ」

「うわひでぇ。で、何話してたんだ？」

「あー、とりあえず色々。アイツが裏切ったかもしれない理由とかね」

って、一通り、皆に響との会話の内容を話す。もちろん実家の方で妹が生まれた話もして、普通に驚いてた。だけど、一番皆が食いついたところは。

「あー、まーだ響はそんな事言ってんだなー」

「んー、メンドクサいったらありゃしない」

めちゃくちゃ深い溜息が出てくる。いやまぁ、俺も煌も昔からそんな事言われ続けてるから正直もう聞き飽きてるんだよなぁ。

「「え、響ってそんな事言ってるの？」」

「え、あぁ、そういや雪奈には初めてか。瑞希は煌とかから聞いてないの？」

「ううん、今が初めてかな」

「あー、そっか」

……よくよく考えればそうなるか。俺と煌はよくあいつの愚痴を聞くけども、響が奏以外にそんな事言いそうにないし。才能の塊の震離には絶対に言わないだろうし……。

「まぁ、言ってないならいい機会だし言うけど、聞く？」

「勿論」

「了解。とりあえずまぁ、何だ。説明する前に響の魔力保有量ってどれくらいか知ってる？」

「……えっと、B位？」

「いや、そんなには無い。D位だ」

って、説明したら二人揃って驚いた。まぁ、そうだよな。この世界、魔力保有量で、魔力ランクがほぼ決まるようなもんだし。だけど、響は根本的に違うんだ。確かに、響の「魔法」の才能はお世辞にもあるって言えない。むしろほぼ無いようなもんだし。現に、響は他の人が出来るような魔法。探知魔法や、簡単な射撃、其処かスフィア一つ作ることは出来無い。

そりゃあ、魔力が少ないことも関係してるだろうよ。砲撃なんて撃ったら殆ど空になるようなもんだし。それが原因で、一度かなり悩んでたしね。

まぁ、これがあいつの欠点だ。そして、アイツの強みは響の拳術や刀術じゃない。確かにアイツは強い。でも、技術がいくらあっても、相手が馬鹿みたいな魔力を持ってて、力押しするような奴には、負けはなくとも、勝つことは叶わない。

それじゃあ、なんでアイツが勝てるかって、話になる。それは単純に、アイツが身体強化、魔力付与の二つを徹底的に極めたからだ。正直、俺や煌は、色々魔法は使える。普通に射撃魔法系統もやろうと思えば出来るし、探索魔法も簡単だ。封印処理も可能だしね。

だけど、アイツは、響は違う。魔法はほとんど使えない。実際身体強化、魔力付与の二つはただ、魔力を体や武器に流すだけで、大まかに言うと魔法とは言えないかもしれないし、ある意味同種の魔法だ。

一部の魔導師はたかが身体強化、魔力付与と笑うけど、響の使うそれは全く違う。普通の魔導師……いや、俺や煌が身体強化を使えば、ただ筋肉とかしか強化しないのに対して、アイツの場合、「五感」や、「動体視力」とか「感覚」を徹底的に、場合によっては限界ギリギリまで強化する。実際、アイツが見てるもの……いや、感じる世界は、俺らの知ってるものじゃない。眼に入るものは殆どゆっくりに見えるし、耳に聞こえてくるものは自分の呼吸や、心音、更には相手の呼吸も聞こえる。その上、温度の変化にも敏感に対応できるだけじゃなく、些細な音の震動すらも認知できるようになる。更にあの馬鹿、強化が出来るなら、退化も、遮断も出来るだろうって、

痛覚を遮断することも可能だし。

これだけ言えば、身体強化って簡単で、良い事尽くめだと思われるけど。実際はそうじゃない。というかそんなに単純なものなら、俺も煌も使ってる。でも、俺や煌は使わない。否、使いたくない。

確かにやろうと思えば誰でも出来る。でも、五感を、感覚を、動体視力を強化するっていうことは、一種の超人になるってことを意味する。俺や煌も響と同じようにやってみた。そして、一瞬だけ見えた世界は、本当に危なかった。目の前で動く人が亀よりもゆっくりで、人の声は何を言っているのか全然分からない上に、自分の心音が耳元で聞こえてくるみたいに煩くて、様々な音の震動が感じ取れる。本当なら、そんな情報量を受ければ、頭がスゲェ痛くなるけど。響はその痛覚を遮断してる。

最も、それは最初の頃で、今はもう。自由に発動可能らしいし、発動中でも人の言葉を理解することも可能っぽい。

まぁ、それのお陰で今のアイツは馬鹿みたいに強い。いや、そもそも強いんだ響は。現に、魔法抜きなら、刀術と拳術だけでも普通に渡り合える。というかぶっちゃけるとかなり強い部類に入るし、アイツの本当の刀術は見たこと無いけど、多分その道の究極にいたろうとしているだろうし。だけど、この世界では魔力を使って戦闘の方が多い。そのせいで響は落ちこぼれって、訓練校時代に言われてた。俺はアイツじゃないから、どれほど辛いのか分からない。けど、見ていて痛々しいほどだったのは覚えてる。そして、自力でこれを作った響は本当に強くなった。

訓練校の教官達からは、響は良くて空戦C位が限界だろうとか言われてたのに、今じゃ空戦A。しかも、これ以上は面倒だからって受

けていないから、実際はどれくらいか分からない。多分軽く見積もってもニアSは有ると思う。それに面倒だって言ってる理由も、リミッターがつくからだけど、響の魔力保有量だと、リミッターが掛かることはまず無い。実際、掛けたら翔ぶことすら儘ならないだろうし。

昔から響がこれだけ努力して、それをはっきり形にしてる事を知ってるから。アイツが弱いはずがないって分かってるし、皆も情報は違えど響が強いって言うことは知っている。だから、アイツが弱いはずがないんだ。

「……そう、なんだ」

「……長くなったな。すまん。俺らは魔法を扱うのが少しうまくて、魔力もそのへんの人よりも多いって自覚もあるけど、響は違うんだ。だから、強いし、リミッターが掛からないから、何時でも全力を出すことが出来る」

「その上、自分が攻めるタイプの戦闘スタイルじゃないのも知ってるから、待ちに入れば、俺も優夜もタイマンで戦おうとはあまり思わないしな」

「そう言えば、優夜も煌も、自分からはあんまり攻めないで、響から動くの待つよねー」

実際その通りで、アイツは自分からあんまり攻めてこない。いやまぁ、アイツも攻めるときはあるけど、それは相手が攻撃してくる理由を与えてるだけにすぎないし、不意打ちをかけてるだけだし。現に敵が動かなかったら、自分で動いて相手を動かして、攻めさせるしね。

「まぁ、そんな感じでアイツにはちゃんと強い理由があるんだよ」

まー、そんな感じで説明が終わったんだけど。まず思わせてね。

死ぬほど疲れた。というか途中から煌と代わってもらえば良かった。

まぁ、ぶっちゃけると、あの馬鹿が自分の事過小評価しすぎるから、いけないんだ。何処の世界に、Sランク相当の犯罪者を単独で捕まえられるんだよ。しかもその手柄を別のやつにあげるとか、アホすぎる。……いかん、なんか腹立ってきた。今度アイツに飯でもおごらせよう。本気で。

なんて、考えてたら、局員の方に呼ばれた。あー、さっさと帰りたいなぁ。そして寝たい。

第六十二話　報告。そして、彼の強さの理由を。（後書き）

独自設定をふんだんに使いました。一応、響は、戦術、体術系では、間違いなく強い部類に入ります。しかし、魔法の才能はほとんど皆無です。仮に響に魔力があっても、今とは少し違って戦闘の仕方をするぐらいで、根本的には何も変わりません。昔書いてた作品の響は魔力があるんですが、今と殆ど変わってませんしね。

一応、矛盾の無いように頑張ってみましたが……矛盾だらけで申し訳ありません。

さて、次回は、一応ＦＷ陣に話します。どうなるかは大体予想が付きそうですがｗ

それでは、失礼します。次回も読んでいただけると幸いです。

第六十三話　出会いのことを少しだけ。

――ｓｉｄｅ奏――

「……え、私と響の出会い？」

「うんうん！教えてよ！」

「え、えー……」

デスクを終わらせて、食堂で女子一同……正確には、スバルにティアナ、キャロに、アルトとルキノって、いう若手組と話をしてるんだけどさ。なんかスバルとティアナの訓練校時代の昔話に入って、そこから色々とまぁ。うん。話をしてたんだけど。なんで、アルト達に対して、そんな事言われないといけないんだろう？

「いいじゃん、減るもんじゃないしさ。いいなよー」

「えー、訓練校時代の話の方が……」

「「そんなのには興味はない！」」

「……ぅ」

話をそらそうとしたら、アルトとルキノの二人に止められた……。しかも、ティアナも興味アリみたいで、期待の目を向けてるし、キャロなんて、小さな声で「どんな出会い方したんでしょうね？」って、スバルと話してるし……。

これはもう逃げ切れない……かな。

「……別に面白く無いと思うよ？」

「やったー！」

「……ぅぅ」

……分かってた事だけど、いざ話をしようとするとなんかこう、気恥ずかしい。正直震離がいたら……って、あの子の性格的には昔話は好きじゃないか。嫌な思い出のほうが強いらしいし。でも、あぁ……。皆はなんかロマンチックな出会いをしたみたいに思ってるらしいけど、正直そうでもないんだよね。

「……とりあえず、私が響に……正確には、男三人とちゃんと出会ったのは、小3の……8歳の頃に会ったの」

「ん、そうすると奏は、響達と出会う前に響達の事は知ってたの？」

小さく手を上げながらルキノが質問をしてくる。まぁ、正直普通に声を掛けてくれたほうが楽なんだけどね。授業ってわけでもないし。それに、なんか気恥ずいし。

「うん、そうなるよ。8歳の頃……6歳になる頃に瑞希と雪奈に出会ったけど、ちょっと昔はいろいろあってさ。男三人はちょっと有名だったの」

「へぇ、やっぱり男の子だねー。やんちゃとかそんな感じで私の回りにもそんな子居たなぁ」

「フフ、アルトの思ってるタイプじゃないんだこれがね。男三人は、響が化け物屋敷の子って言われてて、優夜が病気を持った子。煌が親なしの変な子って言われてたんだ」

「えぇ!?」

私がそんな風に話すと、そこに居た5人全員が驚きの声をあげた。でも、分からなくはないかな。当時の私も……いや、私達も馬鹿で、そんな噂を真に受けて。響達を避けてたんだよね。

「まぁ、そんなこんなで男三人性格は凄くいいのに人が寄り付かない上に、本当に最初の頃は優夜と煌の仲が悪くて何時も喧嘩ばっかりしてた事もあって、更に人がってね」

「……本当なんですか?」

「そうだよキャロ。でも、男三人は強かった。それぞれ我が道を往くって言わんばかりに、学校でもずっと同じように過ごしてたらしいし。けどまぁ、私は当人じゃないからどれだけキツイのかは分からないよ」

あの三人の内、誰もそんな事を一言も話してくれないし。ただ、裏を返せばほんとうに気にしてないってことでもあるかもしれないけどね。

でもまぁ、そのせいなのか、三人揃って本当に辛くなったその時まで、弱音一つ吐かないけどさ。冗談でキツイとか言っても、別にそこまでキツクなくて、本当に大変な時は何時も笑って、皆を安心させようとする。確かに、私も安心するけど、同時に凄く心配なんだけどさ。

「さて、まぁ、あの三人のことはまぁ、これくらいにしておいて。私が響達と出会ったのは、ある時私に電話が掛かってきたことがきっかけなんだ」

「おぉ、ラブコール!?」

んー、そんなロマンチックなものじゃないんだよね……本当に。泣きたくなるくらいに。

「……いや、知らない人?か、何かでさ、内容が「私メリー、今から貴女のお家に向かってるの」ってね……」

正直、皆頭の上に?(クエッションマーク)を浮かべてるけど。日本人ってか、地球出身の人にとっては、死ぬほど怖い話だよ?

「まぁ、その事件がきっかけで……というより、それが来る本当に寸前の所で響達と出会ったんだ」

「えと……そのメリーさんはどうなったの?」

「うん?あぁ、まぁ、色々やったけど。一応メリーさんって、人形だからね?」

って、言ったら皆固まっちゃったよ。いやまぁ、驚くよねぇ普通は。本当にあれは怖かった。私人形なんて持ってなかったから、なんであの時電話が掛かってきたのか分かんなかったし。

……よくよく考えれば、メリーさんってロスト・ロギアだったのかな?ま、昔のことだし、いいか。

「まぁ、その事件がきっかけで響達と震離とも仲良くなってね。それで今まで仲良くしてるの」

「……凄い出会い方だね」

「……私もそう思うよ」

んー、ここは嘘でも、ロマンチックな出会いをしたとでも言うべきだったかな……。

だけど……男共の性格を考えると、そんな出会い方って想像できないんだよね。

なんて、考えてたら……。

「お、何だ皆揃ってんじゃん。探す手間が省けたよ……って、なんでこんなに暗い雰囲気なの？」

上着を片手に、ついさっきまで仕事やってましたーって感じの響が歩いてきたんだけども……。

「響のせいだからね！」

「そーだそーだ！」

「もうちょっと方法があったんじゃないの！」

「はぁ！？」

上から順に、スバル、アルト、ルキノって順なんだけど。なんていうか……ご愁傷さまです。

第六十三話　出会いのことを少しだけ。（後書き）

いきなりＦＷ陣に話すのはどうよ？と思ったので、少し脇にそれてみました……はい。こんな事してるから何時迄経っても話が前に進まないのかな……ｏｒｚ　中身も伴っていないのに。

それでは、今度こそ次回にＦＷ陣＋αに話をします。ただ、内容をすっ飛ばしますけどね。長くなりますしねｗ

では、次回も読んでいただけると幸いです！

第六十四話　説明と。その他いろいろを

――ｓｉｄｅ響――

「さて、今度こそ全員……じゃないけど、揃ったな！」

「「「「「「はーい」」」」」」

「ん、揃ったよ」

と、食堂ではなくて、屋上に居るんだ。理由としては、俺らの事を話そうと思ったけど、何ていうかまぁ、食堂で話すことじゃないからって、屋上に場所を移動したんだ。
ちなみに今いる面子は、ティアナにスバル、キャロにアルト、ルキノ、奏と、さっきの面子がそのまま居て、ついさっきまで居なかったエリオを呼び出したんだ。

正直、流もいたら良かったんだけど。流は震離の分の仕事も片付けてるから無理って言われたんだ。

まぁ、それはさておき。

「とりあえずまぁ、何だ。これから話すことは別に機密情報ってわけでもないから気負わなくていいよ」

「え、そんな大事な事私や、ルキノに言ってもいいの？」

「ん、言ったろ。機密ってわけじゃないし気負わなくていいよって」

本当の所、その通りなんだけどね。別に隠すほどのことでもないし、今まで隠してたのも、アイツのせいだったし。特殊部隊っつっても、やることはある組織の追っかけだけだったしねー。

「ま、そんな感じで、軽い気持ちで聞いてくれたらこちらとしても楽だよ。さて、話っていうのはな――」

――――

「――とまぁ、そんなこんなで、昨日事務員である四人が空で戦闘してたんだ」

「一応階級が、私と響が元佐官で、他の五人が元尉官だったの」

と、一通り俺らの事を話したんだけど……。ここに居る全員が暗い表情になっちまった。

正直そこまで重くしたくなかったんだけどね。

「まぁ、俺らの経歴はこれで全部だ。さて、質問とかってある？」

「じゃあ、一つ聞いていい？」

「ん、いいよ。どうしたティアナ？」

小さく手をあげるティアナに、皆の視線が集中する。

「……どうして、今話したの？別に言わなくても問題なかったはずなのに」

「……あぁ、そうだね。確かにいわなくても良かったかもしれない。

むしろ言わないほうが正解だったかもしれないな」

「じゃあ、どうして？」

「……ティアナ。俺さ、ティアナが暴走した時辺りから……いや、ホテル警備の時辺りからか、隊長陣から信頼されてなかったんだよ」

「「「「「「え！」」」」」」

奏を除いたその場の全員が驚きの声をあげた。でも、理由は分からなくもない。一応俺も奏も、ＦＷの前じゃ普通に接する振りだけはしてたしね。だってねぇ。俺らは兎も角として、あの時って、ＦＷ組と隊長組で派閥出来てて、面倒だった時期でもあったしね！そして、俺だけなんかフリーだったし。

……まぁ、それは今どうでもいいんだ。昔のことだし。

「で、その結果。俺らも信用しなくてね。ただ、唯一良かった点は、俺らの不満と、隊長陣の疑惑が爆発する前に解決できたことだけどね」

「……なるほど」

……正直ちゃんと説明出来た気がしないけども、ティアナが納得してくれて良かったよ。だけど、本当にあっちもこっちも、爆発する前に片付いて良かった。下手すると本気でブチギレてたかもしれないし……。いやまぁ、所詮は「もしも」の話だ。考えるのはよそう。

「ただまぁ、話したのは隠し事とかしたくなかったからっていうのもあるし、まぁ、今となっちゃ昔取った杵柄だしね」

「だけど、これで納得したわ。階級の割には響は人の指揮が上手いし、奏達も強かったわけが分かったし」

「あっはっは、俺は兎も角として、他の面子は普通に強いからなー」

実際にその通りで、正直俺の口からは乾いた笑いしか出てこない…んだけど、なんだけどさ。

俺がそんな事言ったら、アルトとルキノ以外の面々が俺の方を呆れたような、憐れむような目で見てきてんだけど。

「……何だよ？」

「……響、あんたも普通に強い部類に入るのよ？分かってる？」

……なんて、ティアナが呆れたような口調で言うと、周りも首を縦に振りやがりやがったよコンチクショウ。

。……これは言いにくいから二度と使わないな。うん。

「バカ言え……っても、ぶっちゃけると、魔力なしの戦闘だったら自分が結構な場所にいるっていうのは自覚してる。それは本当だ。だけど、魔力ありだったら、俺は弱い部類に入るぜ？実際、俺はスバルのディバインをまともに受けようと思わんし、ティアナのクロスファイヤも全部切り落とすか、捌くかだし、エリオはまだ発展途中だから対応できて、キャロにだって、ちゃんとフリードや、召喚技を使われたら、俺じゃ敵わんもん」

「で、でも、私達はお兄ちゃんに勝ったこと無いよ？」

「あっはっは、そりゃ俺だって負けるのは嫌だもん。負けないよう

に立ち回るさ。さっきも言ったろ、キャロ達の対策を、未熟な部分を知ってるから負けてないだけだしな」

実際のところ、今はまだ俺のほうが強い。技術……と言うより、刀術、拳術じゃまだ俺のほうが上だ。だけど、拳術はスバルに負けるだろうし、その内ティアナの幻術と射撃を組み合わせた奴にも対応できなくなるだろう。その上、エリオはまだ小さいから対応できてるだけで、エリオが大きくなった時には多分ほぼ対応できんだろうし、キャロなんて、いろんなもん召喚してから、フリードで攻撃してきたり、自身でも射撃を打ってきたら多分対応できなくなるだろうな。

ただ、負けたくないから意地でも勝ちに行くけど。問題はエリオだよなー。今はまだどんなタイプの槍騎士になるかわからんし……って、ちょうどいいのがいたな。

「あ、そうだ。エリオ？」

「どうしたの？」

「一応さっき俺らと同じ特殊部隊に居たやつでさ。楠舞煌ってやつと、有栖優夜ってやつが事務員で居るんだけどさ」

「うん。その人達がどうしたの？」

「今度話しを聞いて、模擬戦やってもらってみ？損はないだろうからさ」

「え、え？なんで？」

……あれ？模擬戦って単語が出た瞬間、一瞬喜んだのに、直ぐに疑問に戻りやがった。ちくしょう。今度あってみって話で今日はもう解散しようと思ってたのになぁ……。だって、スバルが眠そうに船こいでるし。
まぁ、いいか。

「まぁ、いきなり過ぎたな。とりあえずさ、エリオは槍騎士だよな？」

「うん、そうだよ。と言うか何時も見てるよね」

「まぁな。じゃあ、エリオはどんなタイプの槍使いを……騎士を目指してるんだ？」

「……え？」

「例えば。俺みたいな、魔力攻撃にあんまり頼らないで、技術だけで勝負するとかそんな感じでさ。なんか目指してるものはある？」

「……」

てな感じで、エリオに説明してると、少し俯きながら顎に手を当てて、本気で考えてる。うんうん、悩め悩め。そうしてどんなタイプを目指してるかで、優夜と煌のどちらか紹介するから。

でも、さっきまで船こいでたスバルや、ティアナ、キャロまで考えてるのはなんでだろう？

そして、奏とアルト、ルキノは少し離れた所でなんか話して盛り上がってるし。

なんて、思ってると。ついさっきまで、俯いてたエリオが顔を上げて、小さく首を横に振った。まぁ、まだ小さい……つっても１０歳だけど、そんなもんだろうな。

「まぁ、最初はそういうもんさ。まぁ、俺が二人を紹介したのはちゃんと理由があってな。優夜は回避を重視してて、その上全体的に早いタイプの槍使い。そして、煌は、攻撃と防御を重視してて、正面突破が可能で、何時も前にいるタイプの人。更に、煌に限っては真っ直ぐだけならフェイトさんと五分だと思う。ちなみに優夜が正統派の槍使いで、煌が少し亜流の棒術使いに分類されるんだ」

「そ、そうなんですか？」

うぉぅ。説明してたらどんどんエリオの顔が明るくなってきたよ。まぁ、わからんでもないなぁ。うちの副隊長陣は、騎士っつっても、剣とハンマーで、槍じゃないし。そして、俺は刀だしなぁ。今はシグナムさんが稽古してるみたいだけど、形は違うからちょっとエリオが苦戦してるみたいだし。

「まぁ、わかりやすく言えば、煌が力を、優夜が技術を、ってな感じだ」

「こ、今度話して見るね！」

「おぉ、話聞いてこい」

おぉ……すっげぇ笑顔だ。久しぶりに見た。最近訓練ばっかであんまり相手を……ハッ！

「ッ！」

慌てて振り返ると、ちゃんと閉じたはずの屋上の扉が半開きになってて、その隙間から……何ていうか、その。金色に光る夜叉が……こっちを。と言うより、俺をガン見してた。しかもその夜叉の背景からは「恨めしい」って単語が見えるし。何？あの人、ついに人間辞めたの？

……まぁ、冗談は置いといて。正直、何時ものパターンならば。離れたら殺られる。と言うか隙を見せたら殺られる。しかし！今日はエリキャロが側に居るから危険は少ない！と思ってるだろから説明するね。あの人さ。エリキャロが傍にいようがいまいが、関係ないんだ。

現に、バルディッシュさん片手に持ってるし。バリアジャケット着てるし。目には殺の文字が見えるし。

ちくしょう。半死の状態になるのそろそろ三桁に行くぞ？本気で。しかも、人を半殺しにした後、どうしたら仲良く慣れるの？とか聞いてくるから始末におえんし。

えぇい。こうなれば。

「とりあえず、今日はもう、お開きでいいか？」

「うん、お兄ちゃん、ありがとう」

「お兄ちゃん、ありがとう！」

「……そうか、ならよかった」

……はい、エリオとキャロの発言で、殺気が４割り増しになりました。別に気にしてないよ？もう慣れたし。

いいさ、俺が犠牲になって、この子たちが笑っていられるのなら……安いものさ。うん、命なんて安いものさ、特に俺のわな。

「じゃ、とりあえず。お休み！」

「「「え、ちょ！」」」

一言そう言ってから、屋上から飛び降りる。そして、チラリと横に目をやると。

「どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして」

「ちぃっ！」

夜叉が鎌持って迫ってきてました！

何の！今日こそ半死しないで、ベットに入るんだ！

……なんて思っていたら、六課の外のベンチで朝を迎えてました。

要するにいつも通り半殺しに遭いましたとさ。ちくしょう。

第六十四話　説明と。その他いろいろを（後書き）

さて、ＦＷ陣にも響達の事を話しました。残るは流ただ一人ですが……どうなるか、楽しみにしていただけると幸い……かな？

次回から（といっても、また一話二話、間に挟みそうですがｗ）また遺跡に行きます。メンバーも固定で響、奏、震離、流の四名です。ただし問題が一つ。あんまりバトりません。と言うかほぼ無いです。

それでは、次回も読んでいただけると幸いです。

第六十五話　戻ってからの！

――ｓｉｄｅ響――

はい、今俺達は昨日の遺跡の前に戻ってきておりますがっ！

「さて、だんだかんだで、ここに戻ってきましたが、なにか質問は！？」

「ハイ！」

「はい、震離！」

「なんで、だんだって噛んだの！？」

「無いみたいなんで、とりあえず作戦その他もろもろは昨日と同じです！」

「無視しないでよ！？」

うるせぇ、と心のなかで思う。だって仕事だしね。ちなみに現在の時刻は午前中。

本当ならば、昼からこの仕事を再開する予定だったんだけど。なんか午後から模擬戦やるっつって、この仕事があるって言ったら、今から行って来いとのこと。

正直……ていうか、本音言うとすっげぇ体が辛い。だって、今朝まで俺外のベンチで寝てたのよ？寝てた理由も、夜叉に……フェイトさんにボコられて、気を失った結果そこで寝てただけだし。

模擬戦の理由だって、煌達四人のレベル見たいからって理由と、俺らの本当の実力みたいって言うことだし。
前者はいいよ、普通に戦っとけばいいんだから、でも後者はどうよ？他二人はまだ隠し玉とか持ってそうだけど、俺はもう無いよ？凡人に何期待してんの？

「でもまぁ、今日は殆ど何も無いと思うしさ。気楽に行こうよ？ね、響も震離も？」

「えー、でも今日は午後からとか言ってたじゃない。午前の間にサキと少し話ししておきたかったのにさ」

「あ？まだ話して無かったのか？」

「うん、昨日はずっと寝てたしね。で、起きたら朝で、仕事に連れ出されたしね！」

「あー、それはスマンな。こっちも一杯一杯なんだよ」

実際その通りだしねー。震離も大変……じゃないなコイツ。よく考えれば昨日帰ってきてから震離はずっと寝てたし、デスクも流が片してくれたし、コイツほとんど休んでたんじゃないか？

……いやまぁ、それはいいや。今回はそれは大した問題じゃない。
今回の問題は別。

そんな事を考えながら、遺跡を見て何か考え事をしてるんであろう流の姿を見る。
今回は流に俺らの話をしないといけない。幸い時間はあるんだ。な

んとかなる。情報によっちゃはやてさん達にも話すけど。俺としては自発的に話してくれると嬉しい。

何だかんだで、結構一緒にいるけど未だに流のことはよく分かんないしね。飯を食う時もあんまり一緒に居ないし、シャワー浴びてる時も時間ずらすし、自由待機（オフシフト）の時も部屋でなんかやってるらしいしな。まぁ、それでも分隊の間じゃ、ちゃんと仕事はしてるらしいけど、ティアナやスバル達も嘆くほどあんまり話したこと無いって言ってたしな。震離はどうか分かんないけど。

「響ー、とりあえず行こうー」

「あー、はいはい。一応この前脱出した所から行くぞー。一応気をつけろーって聞けよ」

人に行こうなんて言っておきながら、震離のやつ。流を連れて先に行きやがった。とりあえず最後まで人の話を聞けよ。まぁ、頭のいいアイツだ。言わなくても別に問題ないとは思うけどね。

「気を取りなおして行こう？」

「あいあい」

隣で苦笑いを浮かべてる奏を見ると、本気で安心する。殆ど言わなくてもだいたい伝わってるし、本当に助かる。

よくよく考えれば、奏とはもう数年来の付き合いなんだよなぁ。早いもんだ。本当に。

さぁ、とりあえず目先の問題を片付けようか。

相変わらずこの遺跡からはなんか嫌な気配っていうか、怖い感じがするけどね。

――side瑞希――

「え、あ、煌と優夜……ですか？」

「あぁ」

「さぁ……私は朝から仕事場で雪奈と一緒に仕事してますけど……今日は二人とも昼からだったと思いますよ？」

「……そうなのか？」

食堂で私の前に珍しい方が座ってて、今私と話をしてるんですけど。ちなみにその人はライトニング分隊の副隊長のシグナムさん。私は事務員として登録されてるので、あんまりシグナムさんとは合わないんです。あちらは前線の人。こっちは、事務員ですしね。

まぁ、それは置いときまして。何やら今日は煌と優夜に要件が合ったみたいです。今日はあの二人昼からで、今は何処かへ行ったみたい。多分、この前煌が、色々足りなくなったとか言ってたから、多分家に戻って荷物を取りに行ったんだと思うけど、実際のところは分かりません。何も言わずに行っちゃいましたし。

「今日はどうされたんですか？」

「あぁ、私と戦ってもらえないかと思ってな。海藍もどうだ？」

「いえいえ、私は遠慮しておきます。私はどちらかと言うと。中距

離支援型ですから」

「連れないことを言うな。これからどうだ？食堂（ここ）に居るということは、仕事もあらかた済んだのだろう？」

何時もはクールなシグナムさんの瞳がキラキラしてます。それこそ、おもちゃを買って貰う前の子供みたいにキラキラと。そして、思うんですけど。私、今ものすごくピンチですよね？

さっきも言ったように私は中距離支援型ですが、一応接近戦も出来なくはありません。一応、煌や、優夜、震離から槍術、棒術、剣術の手ほどきを受けてるんですけど、正直、素人の付け焼刃くらいの物ですし。特に煌から習ってるおかげで何とかなっているんですけど、それでも……不安要素は沢山あります。

「いえいえ、私は弱いですよ。なんて言ったって、何時でも前に入れる煌に、自由に動けて前にもいける優夜と震離。皆をまとめられて必要と有らば自分も前に出られる響に、支援射撃が出来て優秀な奏、後方支援の出来る雪奈と、私なんかが動かなくても動ける人達が揃ってますから」

「ふむ、そうか」

と言ってから、顎に手を当てて、考えるポーズっぽい格好になるシグナムさん。

個人的には、これで流れてくれると有難いんですけどね。私自身あんまり肉弾戦は得意じゃないですし、どちらかと言うと、魔法戦が得意なんです。こう見えても魔力変換が氷で、一応二つ名も持ってるんですよ。「氷華」っていうのを。と言っても、私が二つ名で呼ばれるようになったのはだいぶ最後のほうで、基本的には響達の方

が……って。今はどうでもいい話ですね。ごめんなさい。

「……それなら、今から鍛えないか？」

「……え？」

……心なしか、今ものすっごい怖いことが聞こえたのですが。私の気のせいでしょうか？

「い……いま、なんと？」

「うむ。本当に弱いというのなら、私が鍛えようかと言っているのだが？」

「……い、いえ……大丈夫ですよ」

「遠慮をするな。これからどうだ？」

……凄く危険な状態になって来ましたよ？しかもどんどんシグナムさんの目の輝きが増して来ましたし……。

これはもうだめかなって思ったその瞬間。

「あ、瑞希ー」

「あ、煌！」

ナイスタイミングって言わんばかりのタイミングで、煌がやって来ました！

と言っても肝心の煌は首をかしげてたんですけどね。

――ｓｉｄｅ響――

「ば、番号……確認……するぞ……一番、響」

「二番、奏……」

「さ、三番……風鈴……です」

「よ……ん……震離」

と現在の俺の状況は、真っ暗な部屋で、真っ逆さまの状態になってるんだ。

しかも瓦礫に揉まれたせいで、死ぬほど体は痛いしね！

第六十五話　戻ってからの！（後書き）

はい、何だかんだで、またよく分からないことを思いついて、色々やっております。今回は同時進行を目指しておりますよ！

影の薄い事務組にｗスポットを！

さて、今回はこれで失礼します。次回も読んでいただけると幸いです！

第六十六話　流の過去を

――ｓｉｄｅ響――

「ば、番号……確認……するぞ……一番」

「二番、奏……」

「さ、三番……風鈴……です」

「よ……ん……震離」

と現在の俺の状況は、真っ暗な部屋で、真っ逆さまの状態になってるんだ。
しかも瓦礫に揉まれたせいで、死ぬほど体は痛いしね！

――数分前――

「相変わらず、凄くボロ……古いな」

「はっきりボロって言ったら？」

「んー、気分だよー」

実際その通りだしね。朝っぱらからここに来て、とりあえずなんか無いかの確認して、その上で少し時間が出来たら流れと話をするんだけども。だけど、だけどね？

「サキがアイツらの探してたものなんだし、もうこれ以上は無いと

思うんだよなぁ。変な気配以外は」

「あぁ、そういえばこの遺跡ってホント変な感じなんだよね。ずっと誰かに見られてる感じがするし」

珍しく震離が、真面目な顔で辺りを見渡してる。そういえば前回サキとユニゾン？してたせいで、この遺跡のこと全然分かんないんだったね。貴女は。ちなみに今、俺らのいる場所は、前回震離がいた場所で、早い話が流が怪我した部屋の真下だ。

まぁ、それはさておき。本題に入るか。そう思って、二人に目で確認を取るけど、答えはもう出てる。任せるよって言ってくれてるし、甘えてさっさと話すかな。

「流。少しいいか？」

「何でしょうか？」

遺跡の壁画とかを見て調査をしていた流に声をかける。

そして、振り返った時の流の顔は、何時もみたいな真面目な面じゃなくて、少し優しそうな顔だったんだ。

「正直に話してくれないか？流は俺達の事をどこまで知っている？」

「……何のことでしょうか？」

少し目が鋭くなった……と言うより、少し目を細めた？いやまぁ、どちらにしろ、おそらくすでに予想してるんだろう。俺が此処から先何を言うのかを。

「……多分知ってると思うけど、俺は……いや、俺と、奏、優夜に雪奈、煌に瑞希、震離の七人の正体を」

「……えぇ。知っております。とても」

本音を言うと、流が俺達の事を知っているんだろうなというのは予想してた。流自身普通の部隊出身じゃないって事はよそうしてたから。だけど、正直に言うと俺は、いや、この場にいる俺、奏、震離の三人は本当に驚いたんだ。

俺達の事を知っていると言った、目の前の少年は、嬉しそうに懐かしむような笑顔で知っていると話したんだから。

「私の名前は風鈴流、直訳すると「Ｆｌｏｗ・Ｗｉｎｄｂｅｌｌ」。これが私の名前です。そして、直訳した人物が、貴方がたも知っている人。「リュウキ・ソウリュウ」です」

「え、な!?」

正直、流の言っていることは凄く驚くことばかりだ。確かにリュウキは俺の親友の一人だ。俺の訓練校時代の相方でもあるしな。だけど、行方不明だけど、なんでアイツが流を?

「そうですね。最初から全てお話致します」

目の前でそう話す少年の言葉に、俺はただ首を縦に振るだけだったんだ。

――ｓｉｄｅ流――

「そうですね。最初から全てお話致します」

私がそう言うと、緋凰さんや、叶望さん、天雅さんの三名が驚いた顔で首を縦に振る。だけど、分からなくもない。この人達にとっては、それほど大切な人物なのだから。

私は二年から前の記憶がありません。と言うか存在していたのかさえ分かりません。

こういうのは、私は二年ほど前までは、とある研究所の人体ポッドの中にいたからですね。

あの時の私は、正直自分の事さえもわかりませんでした、眼に入るものはただの映像のようで、感じるものはただ冷たくて、暗いとしか感じませんでした。

何時から私はそうしていたのかさえもわかりませんし、おそらく一生わからないことかもしれません。ただ、ある日突然私の頭の中に声が響きました。

「名前はなんて言うんだ?」

と。当時の私はただ、うるさいと思っていました。実際、それまで声なんて聞いたこともありませんでしたしね。そして、その声の主の名前は「リュウキ・ソウリュウ」という名前で、私の名付け人に近い人です。実際、私にいろんな事を念話で教えてくれた方ですしね。

親友のヒビキが、そのまた親友のコウとユウヤが、いつも一緒に居る女の子達が、と。毎日毎日楽しそうに、嬉しそうに、そして寂しそうに話してくれました。その時に同時に聞かされましたね。「特

殊部隊にいたんだ」ということを。そして、日本という世界には、桜というものがあったり、紅葉というものがあったりして楽しい世界だということも。

そして、ある時。私の入っていた研究ポッドが割れたんです。突然急に。勿論それを開けたのはリュウキさんで、あの人がポッドを割って、意識が朦朧としている私に向かってはっきりとこう言いました。

「改めて、初めまして。リュウキ・ソウリュウだ」

一瞬だけ見えたその人の顔は、藍色の髪に、青い瞳で、眩しいほどの笑顔を浮かべていたんです。ただ、その後私自身意識を失ってしまったので、どうなったかは分かりません。

そして、雪の降る中、洞窟の中で白衣に包まれて、ギルとアークと共に私は居たそうです。そして、先日襲われた時にこの時のことを思い出しましたけどね。正直、こんな大切なことを忘れていた自分が恥ずかしいですが。

ここまでを御三方に話して、反応を伺って見ましたが、ただ静かに続きをと言って下さりました。
なので、続きを言いますね。

白衣に包まれていた私を保護したのは、おそらく緋凰さん達も聞いたことがあるかもしれない部隊。「管理局特殊鎮圧部隊」……早い話が管理局の影です。
この部隊がどのような部隊かは知っていると思いますが、一応説明を。

管理局特殊鎮圧部隊というのは、名前こそ管理局と名が付いていますが、その実態は時空管理局を監視するための第三勢力のような扱いです。実際、この部隊に在籍している人の殆どが、名前等が極秘情報として扱われていますし。そして、この部隊の存在を知っているのは、一定の階級以上の人達のみです。

まぁ、この際これの説明はまた後日します。

とにかく、私はこの部隊の部隊長である、「ハルキ・フウリン」に拾われました。それが大凡二年ほど前になります。ちなみに、姓が同じなのはただの偶然とのことです。

それから私は特殊鎮圧部隊として、働くこととなったのですが、正直私自身自我が合ったとはいえ、殆ど無いようなもので、何も分かっていなかったんです。実際、言葉を聞いても何もわかりませんでしたしね。そして、それから二週間ほど言語等の基礎知識の学習をした後、更に二週間無限書庫に放り出されました。何でも、いろんな知識をつけなさいということで。その時にいろんな人と出会いましたね。それもまた、後日お話しいたします。

その後は、しばらく特殊鎮圧部隊所属の隊員ということで、前戦にも出るようになりましたし、私の面倒を見てくれた方々とも出会いました。ただ、特殊鎮圧部隊の中でも凄い人達だったらしく、私は彼らのコードしか知らなくて、教えてくださいとお願いしても、教えてくれなかったんです。

理由は未だに分かっていませんが、あの人達曰く、「私達は重犯罪者。私達と関わるのはあんまり良くないから」と言って教えてくれなかったんです。ただ、日常の会話等はして下さって、いろんな話を聞かせてくれました。料理や家事といった事も教えてくれましたしね。

そして、あの日。私と共に、その人達と一緒に行ったとある任務でそれは起こりました。

数あるロスト・ロギアの中の一つ。「レリック」の回収。たまたま管理局が手を出せない組織が持っていて、たまたま私達が受け持った仕事で、普通に殲滅して、普通に封印するただ、それだけだったのに。

私達が、組織を壊滅させて、事後処理をしている時にそれは起こりました。

私達がいた、辺り一帯を様々な形をした機械……早い話がプロトタイプのガジェットや、今現存するガジェットⅠ型が私達を取り囲みました。勿論ＡＭＦを最大濃度で展開して。しかも、辺り一帯に居るとはいえ、たかだかガジェットだと、皆そう思っていました、勿論私も。

だけど、実際は違いました。私たちの周囲を取り囲んだガジェットの数は、肉眼で確認するだけで数十機を超え、レーダーで確認したときには、数百を超えていました。

あり得ないはずです。壊滅させた直後にこれだけのガジェットの数の接近を許すなんてことは。ですが、数が多い理由はすぐに判りました。ある人物の幻術系の何かだということ。今でもはっきり覚えています。

月明かりの綺麗な晩に、気持ち悪い笑みを浮かべ、メガネを掛けた人物の顔を。そして、皆が私をかばって死んで行ったことを。

まぁ、その後私は、奇跡的に生きて、自力で部隊のある場所まで帰ることが出来ましたが。それから、約一年後が、六課へと来た、今

なんです。

――ｓｉｄｅ響――

「以上です」

軽く頭を下げて、流が自分の話を終わらせたわけなんだけど。正直な感想を言おう。

正直、ここまで重いとは思わなかった。

たしかに、流はなんかあったんだろうというのが見て取れたけど、まさか。まさか、今の性格を形成したのが、そんな大変なことが原因だったとは思っても居なかった。それに、ガジェットを操っただろう人物で、メガネを掛けて、その上幻術系を扱う奴って、この前の全身スーツをきた、四番だよな。多分。

まぁ、それは後にしよう。リュウキの事も後にしよう。問題が一つ。

俺や奏達は特殊部隊だったけど、表か裏かと問われれば、限りなく表に近い裏だったんだ。現に法廷に俺出たしね。だけど、流のいた……いや、所属している部隊は根本的に違う。特殊鎮圧部隊は、管理局の名を持ちつつも、管理局の抑止力的な存在にあたるんだ。

俺も噂だけでしか聞いたこと無い。俺らがまだ特殊部隊だったころ、俺の先代の艦長から何時も注意しろと言われてた。管理局の「裏」の部隊には気を付けろって。

部隊の面子は俺たちと同等かそれ以上だけど、その部隊を仕切っている部隊長が本物以上のバケモノだと言われてるらしい。三提督ともつながりがあって、現在でも教導隊をまとめて相手にしても負け

ないとまで言われてたらしいし。とはいっても二年前の情報だけどね。

まぁ、なんにせよ。それほどすごい部隊から流は来ているんだ。

でも、正直コレで納得言った。俺でさえも気づくほどの単独での戦闘の慣れ。そして、スタンドプレーが得意なのは、この部隊にいたからなんだと。

そして、ここで一つ疑問が。

「……ここまで聞いてから言うのも何だけど、さ」

「はい、何でしょう？」

「正直、流がここまで話してくれるとは思わなかった。正直なところ。俺らが自分の事言わないと話してもらえないと思ってたし」

とりあえず、奏と震離の二人も思っているであろうことを代弁するかのように、流に言う。正直その通りなんだ。流のガードは硬そうだから、俺らの方から接しないとと思ってたし。

だけど、流が俺らのことを信頼して話してくれたんなら、正直嬉しい。だけど、だけどそれでも。この子は……なんて考えていたら。

「……え、駄目でした……か？」

「え、あ、いや」

あぁぁぁああ……なんか見るからに落ち込んだ顔した。でも、妙だな。確かに普段の流だったら、正直な話言わないよな。なんだ？昨

日もなんとなく思ったけど、この遺跡に居ると流の雰囲気が変わるんだよな。なんて言うか、安心する見たいな感じでさ。

「でもまぁ……ん？」

少し考え事にふけっていたら、流が不思議そうな顔で真上を。天井を見上げている。いや、正確には穴の開いた天井の更に上を見ている。

「どうした？」

「いえ、気のせいかと思うんですが、乾いた音が聞こえたような気がしまして」

「ん？」

なんとなく聴力を強化して、周囲の音を探る。そして、聞こえた。

よくアニメとかであるような、崖から小石が落ちるみたいな、石が転がるような音と、ヒビが入るような音が微かに聞こえてきた。そして、一瞬で嫌な予想にたどり着く。

「震離。この遺跡……いや、基本的に遺跡って、脆いのか？」

「……うん、この遺跡は外が砂漠で、ずっと風に吹きさらされてるし、加えて昨日の戦闘とかで、余計にね」

「奏。リミット外したとして、ここから全部打ち抜ける？」

「……冗談言わないでよ」

三人で軽口を叩いてるけど、その間にも音が聞こえる。むしろさっきよりも、確実に音が大きくなってきている。正直に言おう。これは詰んだと。

「全員、全力で外へ」

「へ、あ、了解」「了解」「昨日のガジェット戦かな……原因は」

左から順に、流、震離、奏の順だけど、奏よ。言うな。俺もなんとなく原因それっぽい気がするけど、違うと思ってんだから。

そして、全員揃って宙に浮いた瞬間。

轟音を上げて、天井が崩れ落ちてきた。

正直、落ちてくるその質量は、昨日の俺と奏が見たものとはケタ違いで、直ぐに悟る。このままだと死ぬと。

「響、多分、この壁の向こう側って、別の部屋かも！」

「了解！ありがとう、奏！それから、震離！」

「もち！」

直ぐに刀を取り出して、抜刀。同時に震離も杖に魔力刃を展開して、同時に壁に切込みを入れる。

そして、壁の一部に人が入れる穴が空いて、慌てて奏と、震離と、流を中に入れて、俺も中に入る。

だけど。

「「「「っ！！！」」」」

入ったと同時に、瓦礫が床へと衝突し、激しい衝撃が俺らを襲った上に、俺らのいた部屋の床も砕け落ちたんだ。

第六十六話　流の過去を（後書き）

ちょっと、無理矢理感が半端ないですが……。

いつか、ちゃんと。この時の流の描写等をしますので、現在はこれで納得していただけると幸いです……。

さて、個人的には問題が次回以降です。色々大変ですね……本当に……。

そして、更新が止まってしまい申し訳ないです。本当にすいません。実生活上で、色々問題が起こってしまったもので……ｏｒｚ

それでは、次回も読んでいただけると幸いです！

第六十七話　無事な件と、感じていた違和感と。

訓練校の最初の時、俺は自分の部屋番を確認していたんだ。
本音を言うと、優夜と煌がペアで同室に対して、俺はあぶれた人として最初は一人だったんだ。
最も、二人……いや、奏達からも心配されたんだけど、何時も俺はこう言ってた、別に大丈夫だと。

だけど、本音を言うと、正直きついものがあった。けど。

――だーれだ!?――

急に後ろから、人の目を抑えて、俺にそんな事を言う奴がいた。正直、桜庭を離れてから知り合いなんて居るわけもないから、普通に驚いたんだ。
そして、俺から手が離れて、振り返ってその主を見てみると。

――よぅ、俺だよ!――

って、サムズアップしながら、馬鹿みたいにニコニコ笑っていて、騒がしそうな奴がそこにいて。
それが、俺とリュウキの最初の……

――ｓｉｄｅ響――

「はっ!?」

ア、アブねぇ!?一瞬走馬灯みたいなもんが見えた!?え、普通走馬灯って、幼少時代のこと振り返ったりするもんだろうがっ!?

……いや、違うな。多分、さっきの流の話を聞いて、それで……。いや待て、それは後だ。今は……。

「ば、番号……確認……するぞ……一番」

自分の手さえ見えないほど、真っ暗な室内？で、声を出す。少し途切れ途切れなのは、さっき上の階からおちた時、三人を庇って瓦礫が体にあたったから、そのダメージでなんだ。最もアイツら何処におちたのか分かんないんだけどね！？

「二番、奏……」

「さ、三番……風鈴……です」

「よ……ん……震離」

なんか、奏と震離の声は結構側から聞こえるから、近くにいるのは分かったけど……。なんか流の声が思ってた以上に小さく聞こえたのは、どうしてだ？

「……とにかく、奏。スフィアで、明かりを作ってくんない？」

「ん、了解」

そう言ってから、俺の左方が明るくなったと同時に、少し埃をかぶって、瓦礫を椅子のようにして座る奏が現れた。そして、右方には震離が居るわけなんだけど……。

「なんでひっくり返ってんだお前は？」

「……色々と」

なんか、上下逆さまになった震離がそこに居るわけなんだけど、どういうわけなのだろうか？

正直言うとさ、俺と奏、震離の防護服は武装隊カスタムなんだ。早い話、三人ともズボンなんだよ。

何が言いたいかというとね、震離の今の状態って、スカート系で来てたら、見えるものがあるわけですよ。

「……恥ずかしがれよ。そして、早く戻れ」

「いまさら恥ずかしがること無いじゃん。二桁になるまで一緒に風呂はいってたのに……って、流は？」

「今話してたから、直ぐそばにいると思うんだけど……って、あれ？」

スフィアの明かりを頼りに、辺りを見渡すんだけど、何処にも流の姿は見えない。そして、気づく。流も気づいた見たいで、ため息を吐きながら。

「……どうやら、こっちは瓦礫の所為で分断されたみたいですね。こっちはずっと真っ暗ですし」

「あぁ、そうか……一瞬だけど焦った。瓦礫の下敷きになってたかと思った」

実際、その通りで。居ない＝実は、危ない状況でしたとか、いやすぎるしね。

さー、どうやって、合流しようかなー。なんて思っていたら。

一瞬だけ、空気が震えたような気がしたんだ。

何だ？と思っている間に。

「えっと、流は怪我してない？」

「はい、一応埃を少しかぶった程度で、損傷は無いです。ただ、こちら側が真っ暗で、今何方にいるのか分からないといった程度です」

「そっか、良かった」

瓦礫越しでそんな会話をする、流と震離を見てると。なんとなく和むなーと思ってしまう。奏なんて、可愛い物見るみたいな顔してるしね。正直、ソッチの方が可愛いんだけどさ。

……恥ずかしいな。

「……さすがに、コチラだけ真っ暗なのも、正直嫌なのでこちらも、こちらも明るくして、そちら側へ繋がる道でも探しますね」

「はーい。こっちも、そっちに繋がる道を探すねー。気をつけてね？」

「了解です」

なんて、話しているともう一度、空気が震えたような感じがしたと同時に、悪寒が走った。

同時に、震離と奏もそれに気づいたようで、デバイスを展開して、臨戦態勢に入る。

そして、気づく。昨日と今日、遺跡に入る前に感じてた、違和感の正体が近くにいるということを。

「流！？一旦、索敵を中止、警戒態勢に！」

慌てて流に指示を飛ばすけど、さっきまで直ぐに答えていたのに、今は答えてくれない。
そして、直ぐに悟る。一番最初に遭遇したのは流ということに。

「奏、一旦スフィアを消して！」

「了解」

そう言って、奏の手にあったスフィアの光を一旦消して、俺らのいる場所を真っ暗にする。
そして、視力を強化して、辺りを見渡して、少し赤黒い光が漏れている場所を見つけて。

「震離！」

「ハイ！」

ここに落ちる前にもやったように、瓦礫を二人で切り刻み、流が居るであろう場所に道を作る。
そして、そこに三人で突撃を掛ける。

「大丈夫！？」「流、無事！？」

と、先程の奏と同じように、瓦礫に腰掛ける流を見つける。無事だ

ったと安心したと同時に、違和感に気づいた。流がさっきからこっちを見ない。いや、正確には何かをずっと見つめている。なんだと思いながら、俺も流の視線の先を辿って行くと。

「え、な!?」

流から、少し離れた場所に。こちらを見ている「人」がいた。
いや、纏っている服が違うだけで、その姿はそのまま「流」と同じだった。
同じ髪の色、肌の色、そして、なかなか居ない、同じ色の赤と蒼のオッドアイと全てがほぼ同じの。
確かに、髪の色と瞳の色が違うだけで、そっくりな人を俺は知っている。
だけど、そんなものの比じゃない、明らかに、別物の雰囲気を纏っているのだ。
前に主張で行った、海鳴で感じたヤバい雰囲気とはぜんぜん違う。
あの時は、まだ頑張れば戦えるってくらいだったけど、正直今は違う。

目の前のこの人と戦っても、絶対に勝てないと。いや、戦おうとすることが間違いなのだと。いやでも気付かされる。

そして。

（奏、流を連れて、震離。上の瓦礫が薄いところを見つけて、ぶち抜いて、一旦引くぞ。殿は俺がやる）

（え、あ、わ、わた、私は自分で動けます！）

（了解！なら、一旦砲撃撃ちこんでくれ！）

（了解です）

「へ、あ」

目の前の人が何か言おうとするけど、気にしないで一気に振りかぶって、地面をぶん殴り煙幕を発生させる。

同時に流が砲撃を準備し、銃口の前に赤黒く輝くスフィアが展開される。薄暗い室内に、赤黒い魔力光が輝くその様は、正直、不気味に見えたけど、それよりも気になったのは、これを見た、その人はあごに手をあて、考えるようなポーズをとっていた。

「……赤黒（シュヴァルツ・ロォト）。……あぁ、そういう事か」

と、なんか一人でブツブツ言ってるけど、直ぐに。

「流！」

「はい！撃ってアーク！」

［了解！Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ！］

「お？」

瞬間、その人のいる場所めがけて、真っ直ぐ砲撃が走り、土煙が上がる。同時に、奏も相手に向けて数発砲撃を打ち込んだ。

「え！？ちょ、ぉぉおお！？」

「一気に下がるぞ！」

確実に当たったんだろうなと感じながら、支持を出して、一気にその場から離れる。

正直、報復がとかなければいいなと切に思う。まぁ、それよりも、今は逃げないと！

――ｓｉｄｅ？――

「……ビックリしたな、別に煙吸っても咳き込まねぇからいいケド。……ただまぁ、流石にいきなり攻撃されるとは思わなかった。でも、あの魔力光……元々の魔力光の筈はないし、誰かのコアか……それが適合していないのか、はたまた別の理由か……？まぁ、なんにせよ追いかけよう。多分、理由を話したら敵対はしない……いや、するか。面倒だけど、まぁ、いいか」

と一人呟きながら、水にでも溶けるかのようにその場から消え、残ったのは深い闇だけであった。

第六十七話　無事な件と、感じていた違和感と。（後書き）

はい、オリジナル展開が凄いです。リメイク元でもここは凄いことになっていました。ただ、もうしばらくお付き合い下さい。そしたら、ヴィヴィオ等が出てきますので！

これで流にあだ名が付く。そして、親しみやすくなったらいいなと、切に思っています。

ちょっと、調整中なのですが、もしかすると。他の先生方のキャラクターを出すことが可能かもしれません。（時間軸とか、流さんの記憶云々で、覚えてないとかそういう事になりそうですが……）

実は前回、流の回想の中で「二週間無限書庫に放り出されました。」と書いているんです。（暇があったら確認とかしてくださいなｗ）つまり、この間になら、他の先生のキャラと無限書庫内で出会うことが可能なんじゃないかと思いまして……。

あわよくば、その後の、本部襲撃までに、登場したキャラが、六課に遊びに来た時。「あ、いつかの無限書庫の女の子だー」、「え、あ、え？」みたいなノリになったらいいなとｗ

一応近日中に、まとめみたいなものを、活動報告に載せますので、詳細はそれで。

それでは、次回も読んでいただけると、幸いです。ｋｙｏｎｓｉでした！

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　昼ドラみたいな展開は、正直無いと思ってた。

――ｓｉｄｅ響――

「ほ、本当に、本当に大丈夫？」

「あー、大丈夫だって、心配しすぎだよ」

隣で涙目の震離を落ち着かせる。正直、気を抜いたら俺も涙が出そうだけど、泣くのはかっこ悪いから絶対に泣かない。歯が抜けたっていうのを考えたのだって、殴られたってことを考えると、泣きそうだから。

「震離、こっちに来なさい」

「や、やだ！」

あのババァ、まだ言ってやがる。

なんて考えながら、もう一度震離を背中に隠すように移動させる。正直、また殴られたらどうしようとか思ってるけど、そんな事はどうでもいい。というか知らん。

「響君とか言ったわね？次は無いわよ」

「うっさいババァ。そうやって口で勝てないからって、直ぐに手を出す奴なんて大概腐ってる奴なんだよ！」

って、母さんが言ってたって言うよりも先に。この言葉でブチギレたのか、今度は大きく振りかぶって、しかも手は握って、拳を作って俺に殴り掛かってきた。

あー、これは泣けるなぁ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「……ねぇ、響？」

「何ですか？って言っても大体言いたいことは分かるんで言いますね。十分犯罪ですよ」

「……だよね」

若干暗い雰囲気を醸し出しながら、フェイトさんが、俺に質問を投げかけてきた。

いやまぁ、当時は何とも思ってなかったけど、今思えば、十分、犯罪だったよなぁ。普通ないよね。子供相手に、本気の平手打ちとかね。歯も抜けたし。

「と言うか、響も当時から結構凄かったんやね」

「全然、俺はまだ親がいたけど、瑞希なんて両親が共働きで、４歳くらいの段階である程度の家事ができるようになってたみたいですよ」

「まぁ、女の子やし」

「うん」

目の前で頷くはやてさんと、フェイトさんを見て、ふと思う。女の子ってそんなもんなんだろうか？一番付き合いの長い子は、掃除は不得意だし、料理は不味いしって、かなりアウトな部類だと思うんだけど。結構本気で。……一応、俺はそこそこ料理できるからね？流と比べると笑っちゃうくらいのレベルだけど。

「でも、響はそれも受けたの？」

「それって……あぁ、鉄拳ですか？」

「うん、流石に避け切れないと思ったけど？」

「えぇ、避けられないコースでしたよ。まぁ、それも含めて続きを言いますね」

――――――――――――――――――――――――――――――――

あのババァの拳が俺の顔面に近づいてくる。母さんにちょっと鍛えられてるせいで、よく見えて、かわせ無くは無いんだけど、かわしたら今度は震離が危なくなるからかわせないんだよね。

あー、当たったら痛そうだなー。とか何とか考えた瞬間。

急に視点が真横に動いた。いや、感覚的には真横に引っ張られたといったほうが正しいかな。

「え、あれ！？」

と、あのババァが驚きの声を上げてるけど、正直俺も驚いてる。だ

って、真横に引っ張られたのは、そこに人がいて、その人が引っ張ったわけで、その俺と震離を引っ張った人が。

「え、母さん何してんの？」

「ん、あぁ、気にしちゃ駄目だよん」

あいも変わらず笑顔の俺のお母さんだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「え、響のお母さんが来たの！？」

「えー、人が喋ってるのに急に割りこまないでくださいよー」

実際、その通りで、ここから良い感じに盛り上がるって時に割り込まれたもんだから、若干どころか、かなりテンションが下がった。

「だけど、響のお母さんって、どうしてそこに？」

「いやまぁ、それも含めて話そうと思ってたんですが……いいやもう。なんか、うちの母さん曰く、その時の俺が最近楽しく家を飛び出してくもんだから、何だろうと思って付いてきたって、そんとき言ってましたね」

「ストーカーじゃない？」

「あっはっは、ねぇ。フェイトさん？エリキャロの事や、ヴィヴィオの事で夜叉化するフェイトさんに比べたら可愛いものでしっ！！！」

って、言ったら、黄色いスフィアが俺の頭に直撃して、続きを言うことが出来なかった。しかもかなり、痛い。忘れられてると思うから言っておくけど、今の俺って、椅子にバインドで、縛られてるからね？だから、避け切れないからね。流石に。

「あはは……まぁ、とりあえず続きをお願いできるか。響？」

「……えぇ、まぁ。なんとか」

正直、結構痛いし、理不尽だなって本気で思ってますけどね。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「え、な、お母さんなんでここに？」

「ん？あぁ、まぁまぁそれは後で説明するとして……ねぇ、そこの人？人ん家の子に手を挙げるなんて何考えてんの？」

俺と震離を背に隠すように、あのババァと俺たちの間に立ってる俺のお母さんなんだけど、俺と話してる時は優しそうに笑っていたのに、ババァと話をしてる時は顔は笑ってるけど、目は笑ってない。正直、そんなお母さんの顔なんて、今まで見たことなかったから、少し怖いと思った。

「あら、それはごめんなさい。だけどそれはそちらの子が」

「理由は結構。こちらに非があるというなら謝罪します。ですが、少しばかり話を聞かせて頂きましたが……巫山戯ているのですか？」

ババァの言葉を遮って、お母さんが口を開く。普段と打って変わって真面目な口調で。何時もはお母さんって言うより、姉ちゃんみたいな感じなんだよね。うちのお母さん。

「別に私は巫山戯てなど」

「なら、どうして貴女は貴女の娘さんの意思を無碍に扱うんですか？」

「それは、震離は私と一緒に来たら」

「……それがどのような結果を招く事になってもですか？」

「私と震離のことなんて知らないくせに！」

「えぇ、知りませんよ。ただ、この子がすごく頭が良くて、物事を理解する子だと言うのはよく分かります。ただ、意思を尊重せずに連れて行ったら……二、三年後には、最悪な結果を招くでしょうね」

次々と話をすすめる二人なんだけど……正直良くわからん。震離もそんな感じらしく少し首をかしげてる。

と言うか、そもそもお母さんとババァの話が噛み合ってる気がしないのは気のせいか？

ババァは自分の事が正しいって、言ってるように聞こえるけど。お母さんの場合は、なんか先のことを見過ぎてるような気がする。と言うか、ババァはお母さんの登場にやっと落ち着いてきたみたいだけど、お母さんはお母さんで、どんどん笑顔になってく。怖い意味で。

「あなたに、あなたに何がわかるの！」

「貴女のことは分からないけど、この子が嫌がってるのはよく分かる！」

「もう黙って！」

そう言って、もう一度ババァが手を振りあげる。お母さんは避ける気が無いみたいで、その手をただ見てた。
振り下ろされると思った瞬間。

「離菜！！」

「っ、震樹さん！？」

これでもか、って言うくらいタイミングよく、肩で息をしてる震樹さんがそこに居た。
そして、思う。昼間でやってるドラマみたいな展開だなと本気で思う。多分二度とこんな場面と出会うことはないんだろうなー。うん。

ＢｅｆｏｒｅＳｔｏｒｙ　昼ドラみたいな展開は、正直無いと思ってた。（後書

はい、何だかんだで過去話も四弾目に突入致しました。

進みが遅くて申し訳ないです。

一人辺り、６話くらいで……めんどくさいくらいの話数になりそうです。

その上、訓練校時代も含めたら……予想以上の話数になりそうです。

それでは、今回はこれで。次回も読んでいただけると幸いです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5167s/

魔法少女リリカルなのは　UnlimitedStrikers

2011年10月12日12時55分発行